
終わった世界のプロタゲニスト

サドル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わつた世界のプロタゲニスト

【Nコード】

N6603V

【作者名】

サドル

【あらすじ】

高校生八伏恭介は、ある日突然「ロスト」と呼ばれる謎の世界に飛ばされる。

ひたすら無人でエリアに区切られたその世界

そこで出会ったのは4人の仲間、異形の怪物ルーザー、そして「削除人」

謎の物質、プレートを使用することによって特殊な能力を得られるプレイヤーとなった八伏恭介はプレートを使い、確実に非日常へと引き込まれてゆく

無限に湧き出る怪人ルーザーやプレイヤー、更にはロストの秘密を握る「削除人」との死闘の数々、崩れゆく世界に一人佇む少女、そして理想郷
戦いを繰り返し、仲間を増やす内に徐々に明らかになっていくロストの真相
数々の思いが交錯する中、果たして恭介たちをどのような結末が待っているのか

異世界異能力バトルファンタジー、ここに開幕

学園サーバー編 第三章完

登場人物紹介兼イラスト置場 (44話時点のネタバレあり) (前書き)

キャラ紹介は物語の進行に従って随時更新予定、なのでネタバレ多し、増えてきたキャラの確認・整理などにお使いください

登場人物紹介兼イラスト置場 (44話時点のネタバレあり)

第一章 学園サーバー編

> i 3 3 7 0 8 — 4 1 6 3 <

因幡兔亜 (@wooa_inaba) さんからいただきました、
終わプロ挿絵

右から舞、美波、千尋だそうです

圧倒的感謝っ……！

第一章 学園サーバー編

ハチブセ キヨウスケ
八伏 恭介 male

至って普通な男子高生

ある日突然ロストへと飛ばされ、そこで生きていくことになる。
運動能力、学力、全てが平均の男子高校生並であり、特筆する点
はない

ただ敬語を使うのがあまり得意ではないらしく、初対面の相手に
でも普通に話しかける。

一時的だが急激なレベルアップ、一度はルーザー化した人間を元
に戻したことから削除人にマークされている。

所持プレートは分解者？デイ・コンポーザー？レベルは1で左手の甲

手に触れたあらゆる無生物を分解して玉の形に固定することができ、それを再び再構築して別の物質を創る事も可能

初登場はイベント？1 「ロゲイン」

- - - - -

- - - - -

水ヶ沢ミナカサワミナミ 美波 female

- - - - -

髪はショートカットで軽く茶髪がかつている少しキツめな性格の女子高生

天才であり秀才、運動能力や学力はかなり高いレベルで、特に身体能力が秀でており、戦闘では身軽な動きによる蹴り技を多用する……が、本当にキレてる時や必死な時はプロレス技を使いたい
恭介曰く容姿はそこそこいいが、いつも不機嫌そうな顔をしているせいでマイナスだという

しかしその実結構な世話焼き、典型的なツンデレである。

料理がそこそこ上手いが、何故か本人はそれをあまり知られてく
ないらしい

所持プレートは発火？イグニッション？

詳細は不明だが、火を操るプレートらしい、レベルは2で胸
今のレベルでも最大3000 くらいの炎が出せる。

初登場はイベント？1 「ロゲイン」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ウネハタ 舞 female

ロングで淡い金髪が特徴的な女性
かなりマイペースな性格で特技はスマイル、容姿のポイントはか
なり高い

メンバーの中では最も昔からロストにいたらしく、メンバー全員
を仕切っているお姉さんのポジション

極度の紅茶好きであり、自前のティーセットで暇さえあれば、と
いうか常に紅茶を飲んでいる。

プレートは迷子？ストレイ・チャイルド？レベルは2で右脇腹
詳細は不明だが、周囲に出現させた爆発性のある6つの白い球体
を操って攻撃をするプレートらしい

初登場はイベント？3 「プレート」

イセ 圭吾 male

恭介と同じく至って普通の男子高生、ただしかなりテンションが
高い

ゲームが趣味ならしくいつも携帯ゲーム機をいじって暇を潰して
いる。

第三者の手によりゲームのデータが消えるのが日常茶飯事という
色々不幸な男

しかしそれゆえか打たれ強さは人一倍強い
プレートは圧縮と解凍？Z・I・P？レベルは1

使用中圭吾が触れた物体はあらゆる衝撃を吸収するようになり、

好きなタイミングでその衝撃を解凍できるというプレート

ただしレベル1ゆえか衝撃を吸収できる物体は一度に一個までしか作れず、解凍の際媒体となった物質は崩壊してしまう

初登場はイベント？3 「プレート」

高島 千尋 female

ショートボブカットで活発な女子高生

圭吾に負けず劣らずテンションが高く、趣味は「地味に使える物」

集め

体つきは中学生または発育の良い小学生のごとく幼いが、れっきとした女子高生である。

プレートは龍？ドラゴン？レベル2で左肩

詳細は不明だが、全身の皮膚を鱗のように硬質化させることで攻撃力と耐久力を上昇させるプレートらしい

ただ発動時に見た目が爬虫類っぽくなるので本人はあまり気に入っていない

プレート自体はかなり強力だが、他のプレートに比べて燃費が悪いためすぐに動けなくなってしまう

初登場はイベント？11 「レスト」

土倉 連 male

いつも余裕の表情と不敵な笑みを浮かべている男性

乱れた制服を着ているところを見るとどうやら高校生らしい

プレートは超重量？ヘヴィ・ボンバー？レベルは2で右足の甲

最後に触れた物体を好きなタイミングで重くできるプレート

初登場はイベント？23 「ジ・エンド・オブ・レスト」

尾羽梨 オハナシ 真紀 マキ female

乱暴な口調の女性

乱れた制服を着ているところを見るとどうやら高校生らしい

よく紙パツクの林檎ジュースを片手にしているところが目撃される。

意外と義理堅く、そしていじられ気質

胸はあるかないかと言われれば、ない

プレートは青の大地？ブルー・グラウンド？レベルは2で右頬

人体に有毒な黴を発生させ、相手が気付かない内にその毒を全身に回らせる。

プレート発動時には繁殖させた黴が青く光る。

湿度の高い場所や、狭い場所ほど黴の有毒さは増し、また多少威力は落ちるがプレート未使用時にも黴を残しておくことが出来る。

初登場はイベント？23 「ジ・エンド・オブ・レスト」

梶尾 涼太 ヒノキオリョウウタ male

くたびれたスーツを身に纏った青年

やたらハイなのはプレート使用時のみで、普段は好青年である。

プレート名は歪な歯車？デイストートッド・ギア？レベルは1で

首元

視界に入った物体が一回転した際に発動

その物体を歯車の形に変えて自由自在に操ることが出来、歯車の大きさは元の物体の大きさに比例する。

更にプレートの支配下にある歯車に触れたモノは、初めに触れた物に接着されるといふ特殊能力もある。

初登場はイベント？36 「デイストートッド・ギア【前編】」

内ヶ谷 ウチガタニサク 陸 male

プレイヤーでありながら戦う事を拒み、ひたすら無人なこの世界で一人ラーメン屋を切り盛りしている少年

普段から黒いバンドナに黒い前掛けを着用している。

所持プレートの詳細は不明だが、舞曰く戦闘向きのプレートではないらしい

カチューシャ female

- - - - -
- - - - -

?インペリア?メンバー総司令、階級は少佐
冷徹な性格で、自らの目的を果たすためなら障害は自ら排除し、
気に入らない相手は問答無用で殺害する。

腰まで伸びた白銀の頭髮が特徴的で、歳は20代後半から30代
前半、常にロシア帽を被り軍服の上には毛皮のコートを羽織ってい
る。葉巻とウオッカを好む

プレートは能力及びレベルも不明
初登場はイベント?39 「ブルー・オブ・リユニオン」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
アリシア・ハリソン female
- - - - -
- - - - -

?インペリア?メンバー狙撃手、階級は曹長
作戦時には無線機を介して喋ることが多く滅多に人前には出ない
ので、その容姿を知る者は意外と少ない
メンバーの中で一番若く、歳は16~18歳
ショートカットで髪色は若葉色、スレンダーな体には常に軍服を
纏っており、右目には眼帯をつけている。しかし決して目が見えな
いというわけではない
カチューシャの命令には非常に忠実で普段は寡黙、料理がそこそ
こできるらしい

プレートは透過殺害?スルースキル?
能力やレベルは不明
初登場はイベント?39 「ブルー・オブ・リユニオン」

フナサカ
船坂 くるみ(クルミ) female

?インペリア?メンバー肉弾戦担当、階級は軍曹

銃やナイフ、その他一切の武器を使わず、技を使わず、自前の怪力や常人離れた頑丈さを活かし真正面から相手と殴り合うような戦いを好む

この戦闘スタイルゆえ生半可なプレート能力では歯が立たない

歳は20歳前後で頭頂部から飛び出た二本のアホ毛が特徴的、細かいことは気にしない豪快なタイプ、胸が大きい

普段はTシャツにホットパンツなどとラフな格好でいることが多く、お洒落とは程遠い

プレートは、皇帝の拳?カイザー・ナックル?レベル3で右太腿使用開始直後に50%、以降99秒毎に身体能力が50%上昇するというシンプルなプレート

初登場はイベント?39 「ブルー・オブ・リユニオン」

エル||ツヴァイ||フルンク female

削除人と呼ばれる謎の少女

腰まで伸ばした艶のある黒髪と黒を基調とした制服、そして鷹のように鋭い眼光が特徴

ひたすら無感情で表情にほとんど変化はない

何も無い空間に太刀を出現させることができ、アスファルトの地面くらいならそれで軽く切り裂ける。

3階建てデパートの屋上から飛び降りても平気であり、常人を並外れた身体能力を持っている。

本人曰く、この世界で知らないことはないし、私にできないこともない

舞曰く人間ではないらしいが、詳細は謎

プレートは能力、レベルともに不明

初登場はイベント？9 「デリート」

アウラト female

ツヴァイの？親友？を名乗る謎の少女

柔らかい印象を持たせるふわりとしたスカートに、上着は一枚のワイシャツに加えて首に巻いた赤いネクタイだけというシンプルな服装、鼠色の髪とコバルトブルーの瞳が特徴で、表情はツヴァイ以上に変化がなく、喋り方にも区切りや抑揚は一切ない

プレートの有無や当人の詳細は一切不明

初登場はイベント？21 「デート・オア・デリート【後編】」

イベント？ 0 「キャラメイク」

ここは……どこだろう……？

目を覚ますと、俺は見たこともない場所にいた。

360度どこを見回しても真っ暗な闇が続く不思議な世界……

上下左右、距離感や位置関係すらも掴めないそんな不思議な空間に俺はいる。

これが俗に言う死後の世界だろうか、とも思ったが生憎俺は死んだ覚えがない

では夢の世界だろうか、試しに頬を抓ってみる。普通に痛い

念のため一発殴ってみたが、むしろはつきりと目が覚めてしまった

……ではここは何なのだろうか？

そんな事をひたすら考えていると不意に下から（どっちが下なのかはよく分からないが）文字が流れてきた。

ほら、よくあるRPGのプロローグみたいなヤツだ

俺はそこに記された文に意識を集中し、目を凝らす。

.....
.....
.....

数年前、この世界に魔王が現れました。

出生、起源、その一切が不明である魔王は、ほどなくして魔王軍

を率いり、人間の住む世界への侵攻を開始

魔王軍の侵攻に、無能な王は国民を何人も何人も犠牲にしました。

しかしそれでも魔王の勢力は留まる事を知らず、魔王は一つ、また一つと国を滅ぼしていき、最後には魔王によって世界は滅ぼされてしまったのです。

勿論、勇者や魔法使いなども現れません

生きていた人間たちは全て魔王の手によって異形の怪物へと変貌し魔王の配下となり、刃向う人間は根絶やしにされ、ついには世界から人間と言う種族そのものが消滅、晴れて世界は魔王の手に堕ちました。

しかしそれでもまだ希望は消えていなかったのです。

さあ、この魔王に支配された世界を救うため旅立ちましょう

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

流れてきた文字には大体そんな感じの事が書いてあった、なるほど確かにプロローグだ

一昔前の王道RPG、又は人気のないオンラインRPGを彷彿させる。

……ということとはさしずめその文を読んでる俺はプレイヤーか

とかそんな事を考えていると、目の前の空間に突如小さなウィンドウが現れた。

.....
名前を決めてください

.....どうやら本格的にRPGなようだ

それにしても名前、ねえ.....

ちなみに俺はいつもRPGをプレイする時、主人公の名前には絶対に自分の名前をつけないタイプだ

なぜなら、囚われの姫様や村人たちに感謝されるプレイヤーを見ると、どうしても自分と重ならなくて納得いかないからという至極単純な理由

だからいつもRPGのこの場面になるとランダムで名前を決めるか、手元にある漫画の主人公から取ってつけてしまうのだが.....

H a c h i b u s e K y o u s u k e

何故か俺は、小さなウィンドウの中に、ローマ字で自分のフルネームを入力していた。

すると瞬く間にウィンドウは消え、次のウィンドウが現れる。

- - - - -
性別を選んでください

今度は性別か……

ここはなんの迷いもない、性別は男だ

先程とは違った入力式のウインドウではなく選択式のウインドウから俺は片方を選ぶ

male

再びウインドウが消え、新しいウインドウが俺の前に現れた。

- - - - -
職業を選んでください

次はジョブか、なかなか本格的になってきたな

俺は先程の二択の選択肢とは違い、選択肢がずらりと並んだ巨大なウインドウを見つめる。

全部英語なので読み取りづらい、が高校生の英語力でもなんとか

などと疑問を口に出す間もなく、目の前に巨大なウィンドウが出現する。

選択肢の数は先ほどのジョブとは比較にならないほど多い、まるで暗号のようにずらりと並べられた英単語に俺は思わず眉間を抓む

しかし、いつまでもこうしては仕方ないので、俺は上から順に名前を読み上げていく

Yellow Jacket、Puppet Master、Typhoon……

いまいちパツとこないな……

しかも単語が羅列しているだけで、その単語の詳細等は一切表示されないようだ

どうやら直感で選べという事らしい……

多少の煩わしさを感じながらも、俺はその英単語を一つ一つ読み上げていく

するとちょうどそれらの選択肢の中間あたりだろうか、そこで俺の二つの眼球は動きを止めた

Decomposer

ただひたすら無機質に並ぶ英単語の羅列の中で、何故かこの単語が一際俺の目を引いた

……この単語は確か習ったことがある。

確か読みは……デイ・コンポーザー、だったか？意味は忘れたけど

念のためその下にある英単語も流し読みしてみよう。
が、特に気になるような物はない

……なら自分の直感に頼ってみるのもいいだろう

俺は迷わず、ソレを選択した

Decomposer

俺がソレを選択したと同時に巨大なウィンドウが消え、今までとは一風変わった雰囲気ウィンドウが現れる。

- - -
- - -
- - -

Decomposer 分解者のプレート

分解者の力を習得する事により、生物以外のあらゆる物体の分解が可能、中級者向け

- - -
- - -
- - -

……どうやら先程のプレートとかいう物の説明のようだ、説明が
ら察するにどうやらスキルのような物らしい

と、説明を二度ほど見直したところでウインドウは消え、次のウ
インドウが現れる。

- - - - -
- - - - -
これでキャラメイクは終了です

- - - - -
- - - - -
さあ魔王を倒すため、新たな冒険へ出発しましょう
- - - - -
- - - - -

その言葉の直後、俺の全身を眩い光が包み込んだ

G A M E S T A R T

イベント？1 「ログイン」

……昔から思っていたことがある。

ほら、よく友達とかに「RPGの世界に行きたい」とか言ってる奴が一人はいるだろ？

俺はその話を聞く度、表面上では軽く流しているが内心ソイツをあざけ笑っている。

まあ、ソイツらの言いたいことは分かる。

毎日何も気にせず仲間と旅ができ、金が無くなったらモンスターを倒して小遣い稼ぎ、更には一般人より優れたその力で人を助け感謝される。

なんとも羨ましい事だ

しかしよく考えてみるといい

例えばプレイヤーがフィールドを1マス進む時、ゲームの中のキャラクターは汗だくになりながら何？歩いているのか

例えばプレイヤーがゲームクリアにかかった時間が30時間ちよいだとして、ゲームの中のキャラクターは一体何年旅を続けているのか

例えばプレイヤーが小遣い稼ぎや経験値目的に何の気なしに倒しているモンスターたちと戦っているキャラクターたちはどれだけ生死をかけた壮絶な戦いを繰り返しているか

……とまあ、この辺にしておくか

俺から言わせてもらえば家でゴロゴロしながらゲームをしているお前らの方がずっと幸せ者だ

そしてだからこそ断言できる。

？俺がもしRPGの主人公になれたとして、俺は絶対にその誘いを断る？

俺は再び闇の中にいた

体はまるで徹夜した翌日のように重く気だるげだ……

またか……と内心うんざりしつつ、全身の感覚を集中

右頬には冷たくて固い板のような感触、腰のあたりが痛い……どうやら俺は椅子に座っているようだ、するとこの右頬の感触は机だろっか

肌を撫でる涼しげな風が心地よい……

この際二度寝してしまおうか、などという考えが浮かんでくるが当然却下

俺は節々が痛む体に鞭を打ち、重たい瞼を押し上げ上体を起こす。まだ寝起きなせいで頭がボーっとしているが、何度も瞬きを繰り返す内、徐々に視界に映る映像が鮮明になっていく

俺はとりあえず辺りを見回してみる。

周りには不気味なほどにキツチリと揃えられた机が並んでいた。

……どうやらここは教室のようだ

今度は真正面を見据えてみる。

そこには案の定教室にはつきものの長方形の板、黒板があった
まだ若干ぼやける目をこすって見てみると、黒板には赤のチョー
クで「永久自習」の殴り書き

少し視線をずらすと教卓の上に置かれた花瓶と、名前は知らない
が紫色の花が視界に入る。

その様子から見るとよく手入れされているようだ……

次は少し上の方に視線をずらしてみる。

そこではシンプルな壁掛け時計が時間を刻んでいた。

今の時刻は……1時を回っている。辺りの暗さから察するに深夜
の1時と見るのが妥当だろう……

ここらで状況確認は終了にして、俺は大きな欠伸を一つついてそ
の場から立ち上がった。

椅子の足がタイルの床にこすれて不快な音を奏でる、が、この際
気にしない

「……どこだ、ここ？」

誰もいない教室の中を俺の呟きが木霊する。

辺りには人の気配は全くと言っていいほど感じない

そりゃ深夜の学校なら当たり前なのかもしれないが……それ以前
にここはどここの学校だ？

少なくとも俺が通っている学校じゃないのは間違いないが……

俺は窓から差し込む月明かりを頼りに歩み出すと、教室から出て
廊下に一歩踏み出す。

廊下ではたった一つの非常口の誘導灯が妖しく光を放っていた。

……うん、間違いない、ここは俺の知っている場所じゃない

そして今気づいたのだが、良く見てみると俺の服が高校の制服らしきものになってた。

しかしこれも俺の知っている制服ではない、胸の校章には「TLW」の文字

とりあえず俺は堅苦しいのでぴっちりと整えられたワイシャツの第一ボタンを外す。

これで幾分かは楽になった、が肝心の問題は全く解決していない。ここは一体どこなのか、何故俺がこんなところにいるのか、いつの間にかこんな制服を着せられているのか……課題は山積みだ

「とりあえずこの学校を出てみるか……」

俺は一人そう決心し、再び一歩踏み出す

これまたいつの間にか履かされていたスニーカーが床にこすれて耳障りな音を立てた。

……ここまでくると俺は知らない学校で初めて見る制服を着て人居眠りをしていただけじゃないか、と信じそうになる。

が勿論そんな事があるはずはないので、俺は歩みを止めない

とりあえず同じ階の教室を全て覗いてみた。

しかしどの教室も俺がいた教室と同じく不自然なほどきっちりとは並べられた机が並ぶだけで、他に人の気配はない

「本当にここにいるのは俺だけみたいだな……」

誰に言う訳でもなく、俺はそう呟く

まずはこの学校を出るのが先決か……

俺は再度辺りを見回して誰もいない事を確認すると、一つ大きなため息をついて階段の前に立つ

昇り階段がないところを見るとどうやらここが最上階らしい

……急に足が重くなったので、一休みしたい衝動に駆られたが当然却下

俺はゆっくりと階段を降り始める。

幸い、窓から差し込む月明かりと非常口の誘導灯のおかげで階段を踏み外すという事はない、ないが……

元々夜の学校ってだけでかなり不気味なのに、その二種類の照明による気の利いた演出で不気味さは3割増しだ

おまけに辺りが怖いくらい静まり返っている事も相まって自然と俺は足早になり俺の軽快な足音が校内に木霊する。我ながら情けないと、そんな事をやっている内にいつのまにか俺は一階まで降りてきていた

「よし……あとは玄関から外に出るだけだな……」

自然と安堵の溜息が漏れる。

こんな閉鎖された空間ではなく、ひらけた外に出れば幾分か恐怖は和らぐだろう

俺はそう考え、多少リラックスした足取りで正面玄関を探す。

するとソレはすぐに見つかった、案の定ここにも人の気配はない

「なんか逆に拍子抜けだな……」

頬に流れる冷や汗など気にせず俺はそんな虚勢を張ってみる。

……ともあれ、これでやっと外に出られるのだ

俺は内心ガッツポーズを作りながら正面玄関への一歩を進めようとする。

ぺたん

「……ん？」

俺は踏み出した足を空中で止め、その場で固まった。
今確かに何か音が聞こえた気が……？

ぺたんぺたんぺたん

…… 今度のは聞き間違いじゃない

まるで水をたっぷりと詰め込んだゴム手袋を床に叩き付けるかの
ような、そんな音

俺は首だけをゆつくりとその音がする方向に向ける。

視線の先にあつたのはやけに長い廊下、あまりに長すぎて廊下の
奥の方が見えない……

俺は目を凝らして、廊下の奥の闇の一点だけを見つめる。

ぺたんぺたんぺたんぺたん

その謎の音は徐々に自分に向かって近づいてくる。

更に目を細めて集中……

すると視線の先、廊下の奥で何か蠢くものが目についた。

「なんだアレ……」

その？何か？の存在を認識すると、次第にソレの輪郭がはつきり
としてくる。

パツと見は人……しかし何かがおかしい

まるで骨格が無いかのような、それでいてぎこちない……不気味

な動き

「誰だ！」

堪えかねた俺の怒声が無駄に長い廊下に木霊する。

その声に反応したのかどうかは分からないが、暗闇の中で蠢く何かの動きがぴたりと止まった。

そして沈黙

嫌な汗が背中を伝う

先程まで盛んに蠢いていたその何かも今ではまるで置物のようにピクリとも動かずに固まっていた。

「……………」

額を伝う嫌な汗が目に入り、俺は反射的に目を閉じてしまう

それからすかさず目を見開き、俺は再び廊下の奥に目を凝らした。

そこに先程の影はない

「……………見間違いか？」

両目を擦ってもう一度凝視してみるが、やはりそこには誰もいない
恐怖の余り幻覚でも見たのだろうか……………だとしたらなんて情けない話だ……………

俺はほっと胸をなでおろす。

……………おっと、そうじゃなくて俺は外に出るところだったんだった、完全に忘れていた。

俺は廊下の奥の闇から視線を外し、正面玄関の方に視線を戻す。

瞬間、俺の思考は停止した。

何故なら、つい先程まで廊下の奥で蠢いていた何かが、今は自分の目の前に立っていたからだ

「ッ!？」

俺は声にならない叫びをあげ、その場で硬直する。

間近で見分けるソレの異常さ、不気味さ

ソイツはまるで真つ黒なゼラチン状の物体を人の形に押し固めたかのような異形の怪物

形こそ人の形を保ってはいるが、そこに生命感などは皆無

その余りの不気味さに、どうしようもない吐き気がこみあげてくる。

怪人が一步、生物離れした動きで俺との距離をつめた。

一步……また一步……

あと二、三步も進めば手の届く距離、なのに俺は動かない、否、動くことが出来ないのだ

得体の知れない恐怖に足が竦んで逃げる事ができない、体が震えて攻撃することもできない

……ああ、もう俺終わったな

眼前まで迫ったその怪物を前にして、俺は十数年の短い人生の終わりを悟る。

その時だった

「何やってんだか」

唐突にどこからか聞こえる女性の声

直後、怪人の動きが止まったかと思うと、見る見るうちに怪人の全身に細かい亀裂のようなものが走り、次の瞬間、怪人の全身に走った亀裂が 発火した

今まで全くの無反応だった怪人があつという間に火達磨になり、怪人はその場に倒れ込んで身を包む炎に苦しみ悶える。

そして俺は見た。

半開きになった正面玄関の扉の前で腕組みをする自分と全く同じ制服を着た少女の姿を

「なんか頼りなさそうな新規ね……」

今なんか失礼な事言われた気がする。

イベント？2 「ウェルカム・トゥ・ザ・ロスト」

静まり返った無人の校舎

窓から差し込む月明かりと、妖しげに光を放つ非常口の誘導灯の
みが頼りになるそんな空間

そこに彼女はいた。

髪はショートで軽く茶髪がかっており、身長は170ちょいの自
分より少し小さいくらい

満月をバックに腕組みをしながら仁王立ちをするその少女は、夜
風にスカートをなびかせながら何故か不機嫌そうな表情でこちらを
睨みつけている。

幻想的……に見えなくもないが、そのしかめっ面のせいでマイナ
ス50点だ

とかそんなくだらない事を考えていると、その少女はその場から
一歩も動かさず不愛想に口を開いた。

「あなた、新規でしょ？」

少女の放った言葉の意味が理解できずに、俺は言葉に詰まる。

するとそんな様子を見た少女はやれやれと言った様子で頭を抱え
ると一つ大きなため息をついて続けた。

「……言い換える、あなたがこの場所に来たのはついさっきでしょ
？」

先程の？新規？という単語に引っかかるが、彼女の言わんとして
いる事はなんとなく理解できた。

「……起きたら教室で寝ていた、来たのがついさっきかは分からんが気が付いたのはさっきだ」

俺はありのまま自分の身に起きたことを彼女に話してみる。

すると少女は自分で質問してきたにも関わらず、さして興味なさそうに「そう」と言っ、こちらに向かって歩み始めた。

その迷いのない足取りに俺は少し後ずさるが、少女は俺の事など眼中に入っていないといった様子で途中で方向転換すると、下駄箱の扉に手をかけ、中から一組の真っ白なスニーカーを取り出す。

少女の手に持ったスニーカーにはまるで新品のように汚れ一つない

「ちょっと危ないからしゃがんだ方がいいわよ」

少女は片手にスニーカーを持ったまま、こちらを見据えてそんな感じの事を言った。

俺はしばらくその言葉の意味が理解できずに疑問符を浮かべる。

「避けないなら避けないで別にいいけど……」

すると少女は何を思ったのか唐突に片手に持った一足のスニーカーを俺めがけて思い切り振りかぶった。

「お、おい！」

俺は両手を前に突き出して制止を試みるが、少女は今からやろうとしているその行為をやめようとする気配は一切なく

次の瞬間、少女は手に持ったスニーカーを俺の顔面めがけて全力投球した。

「ばっ

「！」

少女の手から放たれ高速で眼前に迫るスニーカー

俺は反射的に腰をかがめ、頭を下げる。

スニーカーは俺の頭上スレスレをかすめて、背後にあった何かにぶち当たった。

俺はかがんだ姿勢のまま後ろに振り返ってみる。

するとそこには、先程まで床の上で火達磨になりながら苦しみ悶えていたはずの異形の怪人の頭部が、まるで燃え尽きた木炭のように粉々に砕け散るといふなんと morphology がたい光景が広がっていた。

ボトボトと鈍い音を立て、怪人の頭部だったものの破片がタイルの床に降り注ぐ

そしてコンマ数秒のタイムラグを挟み、頭部のなくなった怪人がどきりとその場に崩れ落ちた。

いつの間にも後ろに回り込んでいたんだ……！？

「二回死んだわね」

少女はかがんだ俺を見下しながら、冷たい視線でそう言う

「……助かったよ」

少女のその物言いに少しカチンときたので、俺はわざとらしく不愛想にそう返して、その場から立ち上がった。

「……一応自己紹介しておいたほうがいいわよね、私は？水ヶ沢ミスガサワ美波？よろしく」

水ヶ沢美波と名乗ったその少女は、相変わらずの不愛想でそう自

己紹介する。

「……………？八伏ハチブセ 恭介キョウスケ？だ」

……どうもこの美波という少女は俺と悲しいぐらい相性が悪いらしい

今度何故初対面の相手にここまで不遜な態度を取れるのかレポ―トにまとめて提出して欲しいぐらいだ

しかしそんな事も言ってもらえない

なんだかんだ言っつて、この美波という少女は俺が目覚ましてから初めて出会ったマトモな人間なのだ

実際さっきはコイツのおかげで助かったのだし、なにより美波に会うことで少なからず安堵していた自分もいる。

それにコイツは何か色々俺の知らない事情を知っているようだし、聞きたいことも山ほど

「で、何か聞きたいことはないの？」

……こいつは驚いた、まさかあっちの方から話を持ちかけてくれるとは

あんな風に冷たく当たってはいるが、実は結構俺の事を心配してくれているのだろうか

「……………何？」

……いやいや、それはないな、絶対

と、自己解決したところで俺は気を取り直して美波の言葉に甘えさせてもらう事にする。

最初の質問は……………勿論決まっている。

「じゃあ一つ目の質問、……ここは何処だ？」

まず真っ先に俺の口について出たのはその質問
俺がああ教室で目を覚ました時からずっと疑問に思っていたことだ
さて、どんな答えが返ってくるのか……

「ここはロストの学園サーバー、1エリアよ」

……弱ったな、どうやら俺は難聴の気があるらしい

「すまない、もう一回頼む」

俺のリクエストに美波は一つ小さな溜息をもらすと
まるで村の入り口でひたすら旅人に村の名前を教え続ける村人A
のように「ロストの学園サーバー、1エリアよ」と、さっきと全く
同じフレーズを繰り返した。

「えーと……どこの国だつて？」

「強いて言うなら異世界ね」

早くも話についていけなくなった俺の自己防衛的ジョークも目の
前の少女は容赦なく叩き落とす。

いや、もしかしてこれも高度なジョークなのだろうか……？

「……別に嘘でもジョークでもないけど、これからのあなたの質問
にはあなたがソレを信じていることを前提に答えるからね、めんど
くさいし」

今度は心を読まれてしまった。

「あなたもここにいるって事はキャラメイクをしたんでしょ、覚えてないの？」

美波の発した？キャラメイク？という言葉に何か引っかけりを感じた俺は、必死に頭の中のハードディスクを漁ってみる。

心当たりは一つしかない、それは数分前自分がいたあの不思議な空間の事だ

「……もしかしてあの職業やら名前がどうたらってアレの事か？」

とりあえずそれを口に出してみる。

それはどうやらアタリだったらしく、美波は特に反論もせず話を続けた。

「そう、あなたはソレが終わった時点でここに飛ばされてるのよ、このロスト学園サーバーに」

「そのロストとか学園サーバーってのは何だ？」

「ロストっていうのはこの世界の名称で、学園サーバーは今私たちがいるこの学園を中心に広がったエリアの名称ね」

……うむ、聞いたいてなんだがさっぱり分からない

恐らく顔に出ていたんだろう、美波は俺の微妙な表情を見て本日3度目の溜息

「……じゃあ当て字アリアリ異世界ファンタジーが大好きな中二病現代っ子が退屈しないよう言い換えると……八伏恭介、あなたは自分がいた世界とは全く別の異世界に飛ばされたのよ」

ああ、なるほど異世界ね、要点を押さえていて大変分かり易い説明だ

……納得できるわけがないだろう

「冗談だろ？」

俺の問いかけに、美波はあからさまに不機嫌そうな顔をして言った。

「……冗談はあんまり得意じゃないの」

そう言っただけを思ったのか美波は制服越しに自分の胸元に手を当てる。

直後、美波の手を当てた部分が淡く光りだし、それがどういう原理なのかは分からないが、制服の胸元から真っ黒に塗りつぶされた金属製の板のようなものが飛び出した。

「これがプレートって言うんだけど……聞いたことあるでしょ？」

美波はその手に持った黒い板を俺の眼前に突き出して言った。

プレート………そういえば最初あの謎の空間で聞いた気がする。

確か初期所持プレートを選べとかなんとか……

「恭介も持つてるはずよ、例えば……制服の胸ポケットとかに」

美波にそう言われて、俺は慌てて制服の胸ポケットを探してみる。

手の平で軽く叩いてみると胸ポケットの中に何か固い感触、俺は胸ポケットの中に入った何かを指でつまんで取り出してみる。

出てきたのは美波の言った通り美波の物と全く同じ黒い板だった。

「それがさつき現れた？ルーザー？に対抗するために最も有効な武器よ……まあ、さつきのヤツはレベルも低かったし通常火器でも十分倒せたんだけどね」

「ルーザー……ってこいつの事か？」

俺は床に仰向けで倒れてブスブスと黒い煙をあげる謎の怪人を指さす。

美波は今までとは明らかに違う侮蔑を込めた視線で、その残骸を忌々しげに睨みつけながら言った。

「……そうよ」

美波の歯ぎしりをする音がこちらにまではっきりと聞こえてくる。

「そいつはプレートの所持者が近くにいればこの世界のどこにでも現れるNPC、プレートの所持者を見境なしに襲ってくるから今の内慣れておかないと殺されるわよ」

襲うだの殺すだのといった物騒な単語を口にしながら美波は表情一つ変えない

まるで感情を押し殺しているかのような冷たい表情で、美波はぴくりとも動かないルーザーと呼ばれた怪人から視線を外す。

「とりあえず一通りは教えただけど、……まあ信じてはいないんでしようね」

その問いかけに俺は無言で肯定

美波も俺がその反応をとることを大方予想していたらしく、大して残念がる様子もない

「ま、普通はそうでしょうね、私としてもすぐに人の話を信じる流されやすいヤツはどうかと思うし……それじゃ他に聞きたいことはある？」

彼女はいつも通りどこか機嫌悪そうに俺に向かって言う

それにしてもこの少女は何故こんなにも不愛想なのだろう、顔は悪くはないしスタイルも十分良い部類に入る。だからこそ勿体無い

「笑っていればそれなりに美人だろうに……ハッ!？」

しまったつい口に出て……!

「なっ」

今までほとんど無表情だった少女の動きがぴたりと止まった。

そして徐々に顔が青ざめていく俺とは対称的に、少女の顔はみるみる内に紅潮していく

「あ、いや、あの」

……ヤバい、これはヤバい

ここで何か面白い事の一つでも言わないと多分俺は迅速に始末されてしまう

俺は俯きながら肩を小刻みに震わせる少女の姿に自らの生命の危機を感じ、即座に脳をフル回転させて何とかこの状況を切り抜ける方法に思考を張り巡らせ……そして

「照れてる顔もかわい」

俺がなんとかひねり出したギャグを言い終える前に、少女の回し蹴りが側頭部にクリーンヒット

頭部全体に走る鈍い痛み、傾く景色

薄れる意識の中、俺は思った。

ファック、慣れないアメリカンジョークなんて真似するんじゃない
かった、と

イベント？3 「プレート」

窓から差し込む月明かりだけが道標となる深夜の学校

一直線に伸びた廊下はどこどころに闇が落ちており、なかなか不気味な雰囲気醸し出している。

そんな無駄に長い廊下を木霊する二つの足音

足音の一つは俺、八伏恭介のもの

そしてもう一つの足音は、俺の前を淡々とした足取りで先導する少女、水ヶ沢美波によるものだ

ちなみにこの無人の学校から脱出しようとしていた俺は、何故か今学校の最上階の一つ下の階、3階廊下で美波の後ろについて歩いていた。

「あんまり下手に動かないでよ、恭介は新規なんだからルーザーと間違われて攻撃されても文句言えないからね」

美波のその言葉で俺は正面玄関での惨状を思い出し、身震いをする。

……あ、俺が美波に蹴られた方じゃないぞ、ルーザーが美波の投げたスニーカーで頭を吹っ飛ばされた事の方だ、確かにあの回し蹴りでも軽く死にかけたが……まあその話はいいだろう

とにかく俺は緊張した足取りで美波の後ろについて歩く

視線だけを動かして辺りを見回してみる。

目につくのはプラスチック製の教室表示板、どうやらここは教室棟のようだ

一体どこへ案内しようと言うのだろうか……

などと考えていたところ、不意に先導の美波が足を止めた。

「着いたわよ」

美波が立ち止ったのは2・1と記された教室の前
他の教室と違ってこの教室は閉め切っており、更には中から照明
灯の明かりが漏れている。

そして教室の中には明らかに人の気配……

美波はなんの迷いもなく引き戸を二回ノックし、中の人物に向か
って言った。

「水ヶ沢美波よ、今戻ったわ」

それからコンマ数秒の間を空けて、教室の中から「はい」と若い
女性の声が聞こえてきた。

それを聞いて美波は何の躊躇もなく引き戸を開けると、部屋の中
に一步踏み出し、俺もそれに続く

そこに広がっていた光景は、他の教室と比べて明らかに異質
だった

まず初めに目についたのが教室のど真ん中を陣取る教室内の机を
並べ合わせて作った巨大な長机

そして教室内の各所には生け花や携帯ゲーム機、更にはよく分か
らない置物などの数々、最早それを教室と呼んでいいのかというこ
とも疑問を覚えるような不思議な空間になっている。

そしてその中で最も異彩を放つもの……

それは、長机の前で椅子に座りながらティーカップの紅茶を優雅
に啜る女性の存在だ

「おかえりなさい、水ヶ沢さん」

女性は飲みかけのティーカップをこれまた高級そうな受け皿に置
くと、まるで聖女のような微笑みで俺の前に立つ少女を出迎える。

女性の髪はロングで淡い金髪、容姿の方は俺が今まで見てきた女性の中でもかなり点数が高い部類に入る。

美波と同じデザインの薄グレー色の制服を着ているところを見ると、どうやら彼女もまた高校生らしい

などと勝手にその女性のポイント分析をしていると、ようやく女性はこちらに気づいたらしくこちらを見据えて首を傾げながら言った。

「あら？　もしかして新規さん？」

今日で何度目になるであろうその新規という単語に、俺は少し戸惑いながらも「はい、まあ……」とか適当な相槌を返す。すると女性はぱあ、っと明るい笑顔を見せて言った。

「嬉しいわ、新規さんがこんな短い間で二人も来るなんて」

女性は両手を合わせてにっこりと微笑む

その柔らかな物腰はジョークに回し蹴りで返すどこぞの女子とはまるで正反対だ

「そうだ、自己紹介しておくわね、私は？　^{ウネハタ}畝畑　^{マイ}舞？　よろしく」

畝畑舞と名乗った女性は深々とお辞儀をして自己紹介をする。

「あ、俺は八伏恭介、よろしく頼む」

それにつられて俺も軽く頭を下げた自己紹介

嗚呼……自己紹介一つでもこの違い

果たして何が彼女を変えたのだろうか、そんな事を頭の中で呟きながら隣で腰に手を当てて不機嫌そうな表情で仁王立ちをきめる少

女を一瞥してみる。

「……………何？」

「いやあ、別に」

あまり目を合わせているとまたエスパーばりの読心術で俺が今考えている失礼な事が読み取られそうなのですぐに目を逸らす。

そしてそれから俺は先程舞と名乗る女性が言っていた気になる言葉の意味について聞いてみることにした。

「それよりさっき言ってた二人って言うのは……………」

「……………いるのよ、今ここにはいないけど恭介がこっちに来る少し前にロストに入り込んだプレイヤーが」

俺が全てを言い終える前に相も変わらず不機嫌そうな声色でそう言ったのは美波

「うーん……………？伊勢^{イセ} 圭吾^{ケイゴ}？って言う私たちと同じ高校生の男の子
なんだけどね……………少し前に「ちょっと自販機まで飲み物を買に行
ってきます」って言って出て行っちゃって……………」

それに続けて舞が若干困った表情で言う

「多分そろそろ帰ってくる頃だと思っただけ……………」

舞がそう言って付け足した直後、不意に後ろの扉が音を立てて勢いよく開いた。

「おー！ ただいま！」

そのやたらハイテンションな声に反応して咄嗟に後ろを振り返る。するとそこには山積みになった缶ジュースを両手に抱えた男の姿があった。

「いやー、缶ジュースが何本買ってもタダって言うのはなんかスゲー得した気分だよな！」

後ろから美波の溜息が聞こえる。

多分彼が舞の言っていた伊勢圭吾だろう

その男はおぼつかない足取りで中央の長机のところまで歩いていくと、手に持った大量の缶ジュースを机の上にぶちまけた。

「それにしてもよ、いつ何処から敵が襲ってくるかも分からないってのは結構スリリングなもんだな、……まあ現れても俺のプレートで倒しちゃうけどさ！」

男はまるで一仕事終えた後のような満足げな表情で缶ジュースの山の中からコーラの缶を一つ拾い上げ、その蓋を開ける。

そこまでして男はやっと俺の存在に気付いたらしく、俺の方に振り向くと今にも口をつけようとしていた缶を口から離して足早にこちらに近づいてきた。

「おお！ お前新規か！」

男は？新規？という最早お馴染みのキーワードを口にしながら初対面とは思えない馴れ馴れしさで接してくる。

「俺、伊勢圭吾って言うんだ！ よろしくな！」

「あ、ああ、俺は八伏恭介、よろしく」

美波、舞に次いで圭吾の温度差に戸惑いながらも自己紹介

「いやさー、こっちでの生活には随分慣れてきたんだけどなんせ話の合う奴がいなくてなー、助かったわ！」

圭吾は聞いてもいないのに気さくに話しかけてくる。

何だ、結構いい奴そうじゃないか

と、心の中で呟いたのとはほぼ同じタイミングで俺はまるで背中に氷を突っ込まれたかのような悪寒に襲われた。

俺の動物的本能が警告を発し、俺はゆっくりと後ろに振り返る。

するとその謎の悪寒の発生源は、予想外にも椅子に腰をかけながらにこやかに微笑む畝畑舞だった。

舞は表情こそ笑っていても、その女神のような微笑みのところどころに見え隠れする殺気のようなものが押し殺せていない、俺はその得体の知れない恐怖に身震いした。

「八伏さん」

「は、はい！」

にっこりと微笑みを崩さずに、それでいて尋常ではない殺気を放つその女性に俺は思わず敬語になってしまう

「あなたってこっちに来たばかりでプレートの使い方もよく知らないんでしょっ？」

舞はまるで子供に質問をするかのような優しげな口調でそんな感

じの事を言っつてゆつくりと椅子から立ち上がった。

「重火器は普段から携帯する訳にもいかないし、それが通用するの
もレベルの低いレーザーだけ」

そう言いながら舞は制服の胸ポケットに手を突っ込むと、そこか
ら美波や俺が持っていたものと同じ黒い板を取り出す。

十中八九、プレートだ

「となるとこのコンパクトで持ち運びのしやすいプレートの存
在は必然的レーザーに対して最も有効な武器となるわ」

「ちょ、ちよつと畝畑さん!？」

美波がいち早く舞の考えを察知し、慌てて制止に入ろうとする。
が、舞はそんなのお構いなしと言った様子で手に持ったプレート
を押し付けるような形で制服越しに自らの脇腹にあてがった。

直後、舞の手に持ったプレートが淡く光りだし、プレートはまる
で液体のように舞の脇腹に溶け込んでいく

そして完全に手に持ったプレートが形を失った時、舞は呆然とし
た表情で立ち尽くす圭吾に向き直った。

「伊勢さん、あなたは私たちが何度も何度も注意したにも関わ
らず、扉を開ける際ノックをしませんでしたね……前にも言ったと
は思いますけどこの決まりを破った場合レーザーとして攻撃されて
も止む無し……と」

次の瞬間、舞の周囲に突如サッカーボール大の6つの球体が
出現した。

「お、おい、冗談だろ……?」

どういう原理なのか空中に浮いたまま舞の周りで不規則な動きを続ける白色の球体に圭吾の表情が一気に青ざめる。

「私のプレートは迷子、? ストレイ・チャイルド? ……ではでは、プレートによるルーザー退治の実演を始めます」

舞はそう言って両手を広げる。

するとそれに同調するように舞を取り囲む球体の不規則な動きが激しさを増し始めた。

「……マズイ! 恭介! これを被って!」

その様子を見て珍しく慌てた様子の美波は、何を思ったのか長机の上にあつたビニール袋を俺の頭に無理矢理被せた。

「何事!？」

突如暗くなつた視界に混乱する俺を余所に圭吾は手に持ったまだ口もつけていない缶ジュースを放り投げ、全力で駆けだす。

「ヤバイヤバイ! これガチでヤバイ!」

「れっつごう」

俺が視界を覆い隠すビニール袋を少しずらして状況を確認してみる。

するとそこには教室から飛び出して廊下を急カーブする圭吾の姿と、まるで意思を持っているかのように圭吾を追跡する白い球体と

いっなんと奇妙な画が視界に映り込んできた。

「ヤバイヤバイヤバ　！」

圭吾の後姿が見えなくなっってから数秒後、一瞬圭吾の向かった方向から激しい光が放たれ、直後、まるでダイナマイトでも爆破したかのようなとてつもない轟音に混じって、とある男子高生の断末魔が校舎内に響き渡った。

「あ、なんかデジャヴ……」

俺はビニール袋の端を指で摘んだまま、誰にも聞こえないようそっとう呟いた。

イベント？4 「テーブルトーク」

ここは校舎の3階、教室棟の2-1教室

時計はすでに深夜の二時を回っており、天井の照明灯で照らされたこの部屋以外は深い闇に包まれている。

俺たちは今、ここにいる俺を除いた全員の好き放題なアレンジが加えられ、最早教室と呼んでいいのかどうかも分からなくなったその空間で中央の長机を囲んでいた。

俺の向かいには先程とは打って変わって優雅にハーブティーを啜る女性、畝畑舞が

そしてその隣では、水ヶ沢美波が椅子に腰かけながらミステリー物の文庫本を黙々と読みふけている。

……最後にもう一人、俺の隣でボロボロになった制服を身に纏いながらもたれかかるように椅子に座る男、こいつが伊勢圭吾だ

「あー……死ぬかと思った……」

「いや……あれで死なないのもどうかと思うぞ……」

圭吾の呟きに俺は咄嗟にツッコミを入れる。

そりゃあ知っている顔とだけあって舞も多少は手加減したのかは分からんが、よくあの爆発で制服がボロボロになる程度で済んだな、と俺は素直に感心する。

そんな感じの事を言っていると、向かいに座った畝畑舞は飲みかけのティーカップを上品に受け皿に置き、にこやかに微笑んだ

「まあ私のプレートは本来明るい内に使うものですし……昼間だったら間違いない命中止させていましたので、伊勢さんは自らの幸運に

感謝してください、ね？」

「以後気をつけます……」

敵畑舞のまるで天使のようなスマイル、しかしその笑顔の裏に何が隠れているのかをよく知っている圭吾は、顔中に脂汗を滲ませながら決して舞とは目を合わせないように謝罪の言葉を述べる。

ちなみにその間俺の背中が変な汗でべっとりだったが、多分それはこの部屋の湿度が高いせいだろう、そうであってほしい

「恭介、そのクッキー取って頂戴」

美波が文庫本から目を離さずに、俺の後ろにある戸棚の上の袋を指さした。

袋の中には、どうやら手作りならしく一つ一つ大きさがまちまちのクッキーが入っている。

俺は渋々袋を手にとって、相変わらずミステリー小説に夢中な美波の前にぼんと置いてやった。

「ありがとう」

美波はページをめくりながら俺には一切目を向けようとせず、全く気持ちのこもっていない感謝の言葉を述べる。

少タイラツときたが、まあここは俺の寛容な精神で100歩ムーンウォークして許そう

しかし、だ

そんな事よりもまず先に突っ込みたい事がある。

それは

「何でこんなにグダグダなんだ？」

直後、俺の発言で不意にその場にいる全員が動きを止めた。

そして沈黙

そんな耐え難い沈黙が数秒ほど続いた頃だったろうか、しばらくの間を空けて圭吾が口を開く

「……………何が？」

質問に質問で返すんじゃない

「だ・か・ら・さ！　ここはルーザーとかいう化け物がうるうるしてる世界なんだから！？　にも関わらず何で皆してこんな場所にくつろいでるのかって聞いているんだよ！」

俺はつい熱くなって、机から身を乗り出してそう主張する。

すると机を挟んで向こう側にいる舞は困ったように首を傾げながら言った。

「…………と、言われましてもねえ、ルーザーなんて何匹倒そうがすぐに代わりが出てきますし、それに何より出現場所や行動パターンその他諸々が不規則ですから……………」

「でも倒さなきゃ増える一方だから、一日に一回外を見回ってルーザーを狩るのよ、それ以外はこうやってダラダラしてることの方が多いわね」

舞に続けて言うのは、相変わらず文庫本から目を離そうとしない美波である。

「じゃ、じゃあもしこの教室にあのルーザーとかいう奴らが奇襲を仕掛けてきたらどうするんだ？」

「レベルの高いルーザーなら分からないけど通常のルーザーにそこまでの知能はないわ、それに校内にはルーザーが侵入すれば分かるような色んな仕掛けがしてあるから一匹でも侵入すればすぐにここにいる誰かが始末しに行くしね、主にジャンケンで決めるわ」

美波はそれを言い終わると、手元の袋から一口サイズのクッキーを一つ取り出して口の中に放り込む

「ぐ……！」

言ってることは分からなくもないが、何か釈然としない
するとそんな様子を見ていた舞が、空になったティーカップを静かに受け皿に置いた。

「そうですね……じゃあそろそろ八伏さんにもこのロストの事について色々と教えて差し上げましょうか」

舞はそう言っ、懐から一枚の紙を取り出す。

「とりあえずこれがロスト学園サーバー、つまり私たちがいる場所の地図です」

舞は取り出した紙を机の上に広げ、俺は身を乗り出してその紙を凝視した。

地図は縦線と横線とで四等分にされており、それぞれの仕切られた空間に違う色が塗られている。

「これがエリアです。私たちが今いるのは学校なのでAエリアに分類されますね」

舞は地図のほぼ中心に描かれた学校の絵を指さす。

「ロスト学園サーバーはこの学校をほぼ中心に半径5?以内に広がっています。エリアの端まで行くとそれ以上は先に進めなくなるので注意してください」

「思ったよりも狭いな……」

「そうでもないですよ、学園サーバー内にはスーパーマーケット、洋服店、CDショップ、ついでにカラオケもありますしね、とりあえず退屈はしませんし、餓死する心配もありませんよ」

食糧問題より退屈しのぎの方が重要なのか、とツツコミそうになるが、ここはぐっと堪える。

「ちなみに、この世界にはプレートを持った私たちプレイヤーとルザー以外は誰もいませんからね」

「えっ!?! じゃ、じゃあその内食料とかも尽きるんじゃない……!」

「いえ、その点は心配ありませんよ」

舞はそう言って、再び地図に目をやった。

「この世界にはメンテナンスという制度があり、定期的に世界がリセットされますので」

「……どういうことだ？」

その言葉の真意が理解できずに、俺は思わず聞き返す。
すると舞は4つに色分けされたエリアを指さしながら続けた。

「この世界では4日周期で一エリアに一度メンテナンスが行われ
ます。メンテナンスが行われたエリアは壊れた物が直り、なくなった
物が再度出現し、移動した物が元の場所に戻ります。なのでいくら
物を消費しようが建造物を破壊しようがメンテナンスが行われれば
全て元通りなので気兼ねなく……あ、それとこの世界では全ての物
品がタダなので、お店に並んでいる物は遠慮なく持ち帰っちゃって
構いませんよ」

「なんでもアリだな……、で、そのメンテナンスとかいうものの期
間は？」

「一日一エリア、AエリアBエリアCエリア……といった順番で回
つていき、深夜0時から1時にかけてのきっかり1時間行われます。
……ちなみにメンテナンス中は早急に対象となったエリア外に移動
しないと大変な事になりますから……気を付けてください」

「大変な事？」

俺の質問に何故か舞は言葉に詰まる。

しばらくして、それを見兼ねた美波が文庫本を片手に口を開いた。

「恭介はまだ知らない方がいいと思うわよ、ただ一つ言っておくと
……確実に命を失うでしょうね」

美波はそんな物騒なことを言いながらも何食わぬ顔で文庫本のペ

ージをめくる。

「ま、まあ、メンテナンス時には早めにエリアの外に出て、あとは好きに時間を潰していればいいだけだから何も心配しなくてもいいですよ！」

そこで舞がフォローに入るような形でそう付け足した。

その大変な事の内容は確かに気になるが……これ以上舞を困らせるわけにもいかないだろう

「……まあ、とりあえずはこのロストとかいう場所の事も大体分かった」

その言葉に、舞は安堵の表情を見せる。

「しかし　だ」

そこで俺はその場にいる全員に向かって言う

「　理解はしたが納得はしていない、俺だってまだお前らの話については半信半疑なんだ」

　ミステリー小説を読みふけていた美波も含めてこの空間の中にいる全員が俺に視線を集める。

「……まあ、半信半疑つつても実際のところは七信三疑ぐらいで信じる寄りだ、正面玄関での件もあるしな……でも、だからこそ最後にもうひと押し何か欲しい」

俺がそこまで言って一旦区切り、本日二度目の沈黙が訪れる。

勘にさわる事でも言ってしまっただろうか……、などと心配していると、唐突に美波は小さく溜息を吐いて、手に持った文庫本に栞を挟むとページを閉じて言った。

「確かに、前も言ったと思うけど信じないのが賢明よね、……：少なくともこの話をした直後にはもう全部信じ切っていた誰かさんよりはずっと」

「失敬な！ 純真無垢と言ってくれ！」

圭吾……

「まあ要するに恭介が異世界に来たって事を実感すればいいんでしょ？」

美波はそう言って読みかけの小説を机の上に置くと、気だるげにその場から立ち上がり教室の出入り口へと向かって行った。

そして教室の扉の前で立ち止まり、こちらに振り向いて一言

「ホントはさっき私が行ってきたばっかりなんだけど……」

美波はもう一つ大きく溜息をついて、やれやれといった様子で続ける。

「行きましたようか、ルーザー狩り」

いつもの不機嫌そうな表情でそう言った彼女の表情は、どこか嬉しげに見えた。

イベント?5 「ルーザー」

崩れゆく世界の中、一人立ち続ける少女がいた。

空はまるで血のような紅に染まり、ガラスは一枚残らず割れ、まるで液体のようにどろりとした生暖かい空気が渦巻く、そんな世界少女はおもむろに腰を屈め、元は花壇だった場所の土を両手ですくってみる。

花壇の土はぱきつ、と乾いた音を立てて、少女の手の中に収まった。

すくい取った土の中には無数の細かい石が混じっており、花はすでに枯れ茶色く変色している。

しばらくして少女の手から乾ききった土がこぼれ落ち、少女は手についた土を払おうともせず、ゆっくりと空を見上げた。

視界に広がるのは雲一つなく、鳥一匹さえ飛んでいない紅の空不意に、少女の頬を一粒の滴が伝った。

「……紅い空でも雨は降るのか」

少女は一言そう呟いて、再び歩み出した。

暗く、先の見えない、その道を

「恭介、これもお願い」

不意に、目の前の少女、もとい水ヶ沢美波によって、俺の腕に提げられたカゴへまた一つ何か投げ込まれた。

ちらりとカゴの中に目をやってみる。

どうやら投げ込まれたのは小麦粉らしい、どうりで俺の腕が悲鳴をあげるわけだ

「あとは……バターね」

少女は手元のメモを覗き見ながら、そんな恐ろしい事をさらりと言っただけ。

「おい、その辺にしておけ、俺の腕が腐って落ちてR指定がかかるぞ」

「……そういえば卵もなかったわね」

無視である。

もうかかってるだろ、とかそういうツツコミをしてくれる優しさもないのか

どうやらこの女は肉体的にも精神的にも俺を殺そうとしているらしい

「とりあえずは先にバターね、恭介、ついてきて」

美波はそう言い残すと一人手ぶらのままスタスタと乳製品の並ぶコーナーへと向かっていく

何を言っても無駄だと悟った俺は、肩を落として大きく溜息をついた。

数十分前

ルーザーを狩りに行くと言い俺をあの手から連れ出した美波は、

何を思ったのか学校から歩いて十分ちよいのデパートの前で足を止めると、無言で自動ドアを潜り抜け、何も言わずに空っぽのカゴを俺に持たせた。

それからありったけのバニラエッセンスと一袋1?の砂糖をカゴに入れられたあたりでさすがにおかしいなと思った俺が問いただして見たところ、美波氏曰く

「ルーザーなんて探して見つかる物じゃないのよ、あいつらはプレート匂いにつられてやってくるから適当にブラブラしてればあっちから襲ってくるわ」とのこと

……なんか釈然としないが、もう突っ込むのも疲れたので、俺は黙って乳製品コーナーへと足を進める。

そこには腰をかがめてバターの品定めをする美波の姿があった。

「んー……この前作った時はどっちが美味しかったんだっけ……」

ちなみに敵畑舞の話によると、この世界での商品は全て無料なので勝手に持ち帰っていいらしい

となると品定めをする基準に値段などが入る余地はなく、その商品の質だけが購入の決め手となってくる。

もしそれが本当ならこの感覚には早めに慣れておかないといけな
いな

「……まあ、帰ってから比べればいいわよね」

直後、美波により俺が手に持ったカゴの中に二種類のバターが5セットほど放り込まれる。

なるほど、この世界にいると商品を選ぶという行為すら必要なくなるのか……どうでもいいけど腕が部分的に紫色になってきた。

「あとは卵ね……」

……鬼畜とは多分コイツの事を言うのだろう
そんな事を心の中で呟きながら、俺は何食わぬ顔で両手いっぱい
に卵のパックを抱える少女を恨めしそうに見つめる。

「……こんなに買つて、何を作るつもりですかね？」

とつとつ我慢できなくなった俺は、皮肉交じりにそう問いかけて
みた。

すると美波は卵のパックを抱えたままぴたりと動きを止め、何故
か顔を赤くする。

「……ホントに聞くの？」

美波のその意味不明な問いに、俺は頭の上に疑問符を浮かべる。

「いや、こつちが聞いているんだが」

俺がそう言い返すと、美波は更に顔を赤くして口ごもる。

……何をそんなに戸惑っているのだろうか

それから間もなくして、美波は何かを決心したかのように一つ大
きく息を吐き出すと

真っ赤に紅潮させた顔でしっかりとこちらを見据えながら言った。

「ク、クッキーを作るのよ」

「……え？」

俺は美波のその答えを聞いて呆然とする。

その反応を見て、美波はこれ以上ないくらいに顔を紅潮させ、自

らの額を手の平で押さえた。

えーと……なんでそんな反応をされるのかは分からないが、とりあえず

「……いいじゃん？ クッキー」

「え？」

俺の一言に美波は額を押さえる手から顔を離して、まるで鳩が豆鉄砲を食らったような表情でこちらを見つめる。

「私がクッキー作っても変じゃない……？」

「……何が変なんだ？ あれか？ もしかして最近ではクッキーを作るという技能は大学に一芸入試で入れるほどの特殊スキルにでも昇華してしまったのか？」

美波の言わんとしてる事が訳分からな過ぎるせいで、つられて俺も訳の分からないツッコミを口走ってしまう

しかし美波はその事は気になかったようで、戸惑いながら言葉が続けた。

「だ、だって、私そんなキャラじゃないでしょ？」

またしても意味不明な問いかけ

俺はゆっくりりと手に持った買い物カゴを床に置き、その問いに答えをやる。

「どうやったらキャラとクッキーが結びつくんだ？ 食べっ子動物なのか？ 別に美波がクッキー作っても俺はなんとも思わんぞ？」

むしろ好感が湧く」

そこまで言っで一区切り

食い入るように俺の話を聞いていた美波は、俺が喋り終わってからコンマ数秒の間を挟むと

顔を真っ赤に紅潮させたまま俯いてしまった。

「……………そう……………変……………じゃ……………ない……………のね」

美波は俯いたまま何かを呟いているようだが、生憎声のボリュームが低すぎるせいで何を言っているのかは聞き取れない

まあ、聞こえない声で喋るといふ事は多分聞かなくてもいい事なんでしょう、と俺は一人納得し、再び地面に置かれたカゴの取っ手を掴もうとする。

しかしそれは叶わなかった

何故なら次の瞬間、突如デパート内に鳴り響いた轟音とともに、世界が大きく揺れ始めたからだ

「何事！？地震！？」

立っているのもやっと言った激しい揺れに、棚の商品のいくつかが床に叩き付けられ、建物全体が軋む

「……………！きた……………」

美波はそう言っ唐突に顔を上げると、先程とは打って変わった険しい表情で丁度無人のレジが並ぶ辺りに視線を集中させる。

それにつられて俺も慌ててその方角に目を凝らした。

見てみると、無人のレジの向こう側で黒い何かが蠢いている。

それも一体じゃない、どうやら複数いるようだ

「……出たわね、ルーザー」

まるで美波の声に反応するかのように、その人の形をした何か、通称ルーザーが徐々に姿を露わにしていく

黒一色のゼラチン状の物体を人の形に押し固めたかのような出で立ち、顔と思われる部分には目も鼻も口もなし

先刻正面玄関で俺を襲ったヤツと同じタイプのヤツらだ、数は…
…三匹

「これじゃ運動の内に入らないわね」

美波はいつの間にかいつもの不機嫌な口調に戻っており、制服の内ポケットから四角い黒一色の板を取り出す。

舞曰く、ルーザーに対抗できる最も有効な武器 プレートだ

「じゃ、いくわよ」

美波はそう言って右手に収まったプレートを制服越しに自分の胸元へあてがう

それから間もなくプレートが淡く光りだし、まるで液体のように美波の中へと取り込まれていった。

「私のプレートは発火、？イグニッション？さっさと片付けて帰らせてもらうわよ」

美波がそう宣言したとほぼ同時に、美波の履いたスニーカーを赤い炎が纏った。

そして美波は靴に赤い炎を纏ったまま、ルーザー達めがけて駆け

出す。

そしてあつという間に一番近くにいたルーザーの眼前まで迫ると、女子とは思えないほど強烈な踏み込みで跳躍し、燃え盛るスニーカーでルーザーの顎を狙った二段蹴り
炎の軌跡を描いた凄まじい蹴りは、狙い通りルーザーの顎にクリンヒット

美波の蹴りによって強制的に天井を見上げることになったルーザーがぐらりとよろめき、体勢を崩す。

しかし美波の攻撃はそれだけでは終わらない

美波は軽やかにタイルの床に着地すると、すかさず体をひねり、ルーザーの腹部に後ろ蹴り

こちらも見事にクリンヒット、蹴りをマトモに受け、腹部にスニーカーの焼き印をつけられたルーザーは後ろに弾き飛ばされ、カウンターに背面を強打した。

ルーザーはカウンターに激突する瞬間ぐしゃりと嫌な音を立てて、崩れるようにその場に倒れ込む

「はい、一匹目」

最早ぴくりとも動かなくなったルーザーを視線から外して、残り二匹のルーザーを見据える。

ルーザー達は仲間が目の前でやられたにも関わらず、何一つ変わらない様子でゆっくりと美波との距離を縮めていく

こいつらに感情はないのだろうか

……最も、表情が分からないのでなんとも言えないが

「ッ！」

再び美波は攻撃態勢へと移り、床を強く蹴って比較的自分に近い方のルーザーへ向かって走り出す。

そしてまたも驚異の素早さでルーザーとの間合いを詰め、お次は右足を軸にした渾身のホースキックをルーザーのこめかみに命中させる。

勿論炎を纏ったそんな靴で頭部を蹴られればたまったものではなく、体勢を崩したルーザーは勢いよく洗剤コーナーの棚に突っ込んだ……てかホースキックって確かカンフーの技だよな……なんであいつが出来るんだ？

「次でラスト一匹ね」

美波はそう言って仰向けになりながら小刻みに震えるルーザーの喉元に駄目押しのレストランピング

今度はプロレス技か……一体美波は今まで何をしてきたんだろう、と一抹の疑問を覚える。

しかし次の瞬間にはそんな些細な疑問はすでに頭のどこかへ消えてしまっていた。

何故なら、すでに動かなくなったルーザーを見下ろしている美波の背後に、いつの間にか最後の一匹のルーザーが迫ってきていたからだ

「美波っ！」

俺は咄嗟に美波の名を叫んだ

しかし美波は意外にも涼しい表情で、人差し指をくいっと立てる。すると直後、どういう原理か背後で今にも美波に襲い掛かろうとしていたルーザーの全身に亀裂が走り、次の瞬間、亀裂が発火した

「あ
」

そのどこかで見た光景に俺は言葉を失う

更に美波は素早い動きで燃え盛るルーザーの腹部に後ろ蹴り、それをマトモに食らったルーザーはまるで炭か何かのように砕け散り、四方八方に弾け飛んだ

「はい、これでおしまい、……で、呼んだ？」

……なるほど、確かにコイツの事を一瞬でも心配した俺が馬鹿だったな……

「いやあこのデパート暖房きすぎじゃないか、って言おうとしただけだ、気にするな」

「あら、奇遇ね」

美波は短く笑って、胸元に手を当てる。

それと同時に胸元からプレートが吐き出され、スニーカーを纏っていた炎も消えた。

「んー……さすがにこれはもう履けないわね……、ちょっと二階で靴選んでこようかな」

美波は黒く焦げてボロボロになった靴と最早元の形も分からなくなった靴下をその場に脱ぎ捨てて、一仕事終えた後のような表情でこちらに歩き始める。

……そういえば一番初めのあの揺れはなんだったのだろうか？
横目でそこらへんに転がるルーザーの亡骸を一瞥してみる。

……到底こいつらにあの揺れが起こせるとは思えない、割とガチで地震だったのか？

などと思考を張り巡らせていると、意外にも早くその答えを知る事ができた。

何故ならその答えは再び激しい揺れを起こし、天井に亀裂を走らせ、そして？上から降ってきた？からだ

「え　？」

背後から聞こえた凄まじい轟音に美波は足を止めて首だけを後ろに振り向かせる。

そこにあつたのは、ぼつかりと穴の開いた天井に届くほどの巨体を四肢で支える異形の怪物の姿

大きく隆起した背中に黒一色で染まった全身、そして顔と思われ部分に目、鼻はなく、代わりに牙の生えた巨大な口が一つ

その禍々しさに俺の全身からどっと嫌な汗が噴き出る。

「嘘……」

「美波ッ！！」

次の瞬間、怪物の丸太よりも太い腕が美波めがけて薙ぎ払われた

イベント？6 「レベル2」

女子高生、水ヶ沢美波は生まれながらの天才であり、秀才だった。

勉強については言うまでもなく、小学生の頃は書道、空手、水泳、全ての大会で優勝

中学生時代では成績は常にトップをキープ、テニスは県大会で優勝、三年生になってからは生徒会長にも当選

それに加えて容姿も性格も申し分なく、美波が中学生を卒業する頃には異性同性を問わず告白された回数が二桁に達していたという。それでも彼女は自惚れることはなく、決して努力を怠ることはなかった。

学校では授業を真面目に聞き、放課後には部活に励み、帰宅をすれば入浴と夕食、そして睡眠の時間を除いた全て時間を学校の授業の予習復習に使う

しかし、そんな生活を何年か続けてきて美波はふと思った。

果たしてこの行為に意味があるのだろうか、と

毎日毎日、自分に与えられた時間の全てを捧げて努力してきた。

友人とも遊ばず、欲しい物も買わず、心から笑わず、楽しまず……

結局私が得た物はなんだろう？

学力？運動能力？周りの信頼？

果たしてそれらが平凡に学生生活を過ごしている学生たちが得た物の何分の一の価値がある？

そう考えると自分の今までの苦勞はあまりにも滑稽で、馬鹿らしくて

「ねえ、貴方新規さん？」

「美波ッ！！」

突如現れた巨大な怪物の薙ぎ払いが、周りの商品棚を破壊しながら美波に迫る。

徐々に勢いを増すその丸太のような太い腕で、軌道上にある物全てをスクラップにしなから

「っ！！」

コンマ数秒我を忘れていた美波は、ほとんど反射的に前面を両腕でガードしながら後ろに飛びのく

直後、怪物の凄まじい薙ぎ払いが美波の体に命中し、美波は激しい激突音をたてて遙か後方まで弾き飛ばされた。

怪物の手により弾き飛ばされた美波は勢いよく壁に叩き付けられ、悲痛な声をもらす。

美波は背面を強打したせいか呼吸が上手くできていないようだ

「っ……あ……！！」

なんとか呼吸を整えようと苦痛に顔を歪める美波に再び黒一色で染められた怪物の視線が向けられる。

美波は慌てて再度プレートの使用を試みるが、どうやらさっきの一撃でどこかにプレートを落としてしまったらしく、プレートはど

こにも見当たらない

そうこうしている間にも怪物は四肢で地面を掴みながら着実に美波との距離を縮めていく

明確に向けられた殺意に美波の顔から血の気が引き、呼吸が乱れる。

「……っ」

……勿論俺も怖かった。

足も震えるし、全身から嫌な汗が噴き出ている。

そもそもあんな人間の数十倍ものサイズの化け物を前にして冷静でいられる方がどうかしている。

だからこそ俺は手元の棚にあった2Lサイズのペットボトルを手に取り、それを思い切り怪物めがけて投げ放ったのだ

ポゴンと鈍い音を立てて、怪物の大きく隆起した背中をペットボトルが跳ねる。

それと同時に、怪物の注意が美波から俺に向いた。

「……やっそこっちに気づいたか水羊羹め」

俺は駄目押しにもう一発2Lペットボトルを投げつける。

手が震えていたせいで狙いの顔には当たらなかったが、……まあそれでも俺に注意を惹きつけるには十分だ

「恭介……逃げて……」

美波は壁に背をもたれかけたまま、息も絶え絶えに続ける。

「こいつは……レベル2の……ルーザーよ……早く……!」

そこまで言って美波は激しく咳き込む

逃げろと言うのはどっちかと言うと俺の立場だろうに、と心の中で呟きつつ、そのレベル2ルーザーに視線を移す。

……成る程、これが噂に聞いていた高レベルルーザーか
たったレベル1の差でここまで戦力が違うとはなんて初見殺しだ
デパートの天井まで届く巨大さに、それを支える強靱な四肢、オマケにその禍々しさもレベル1のルーザーとは比べものならず、不意を突かれたとはいえ、つい先刻レベル1のルーザー一匹に二度も殺されかけた俺に勝てる相手とは到底思えない
だが

「悪いが、知人を見殺しにして罪悪感を抱かないほど俺の神経は太くないんだ、せいぜい自己満足させてもらっぞ」

俺は美波の忠告を無視して怪物に向き直り、構えを取った。

「馬鹿……なんで……!!」

「うっさいボケ、ルーザーに負けるなんて笑い話にもならないだろ
うが」

ようやく息も整いだして余裕もでてきたのか毒を吐こうとする美波を一蹴して、俺はルーザーに向き直る。

その挑発に乗ったのかルーザーは完全に俺に狙いを変え、地響きを鳴らしながら接近、そしてその異常に発達した前足を俺の頭上に振り下ろす。

「ッ!!」

ルーザーの鋭く尖った爪を間髪横にずれてかわす。

次の瞬間、ルーザーによって凄まじい衝撃音とともに、俺の立っていた床がバターのようにごっそりと削れる。

これはマトモに食らえば痛いじゃ済まなそうだ……

などと悠長な事を考えていると、再びルーザーの攻撃

大きく振りかぶった腕をまるでハンマーのように振り下ろす。

俺はそれを紙一重で回避

しかしルーザーが破壊し飛散させた無数の床の破片が俺の体に刺さり、ところどころから血が滲みだす。

「つつ！」

鋭い痛みが全身を駆け巡るが今はそんなことを言っている場合じゃない

俺は再び地面に着地し、臨戦態勢

するとルーザーはおもむろに唯一の顔のパーツである巨大な口を大きく開き

直後、鼓膜を突き破るかのような咆哮をあげた。

「っ！？」

建物全体が細かく振動し、近くにあるガラスが音を立って割れる
激しい咆哮

それでいて全身の血を凍らされるかのような悍ましい声に俺は思わず両手で耳を押さえる。

それが隙となった

俺が耳を押さえ、完全な無防備になったのはほんの数瞬

しかしその数瞬の間に、ルーザーはその巨軀には見合わない程俊敏な動きで俺の眼前まで飛び跳ねたのだ

「やばっ

！」

そう思った時、すでに俺の体は宙を舞っていた。

いや、舞っていたなどという生温い表現じゃ表せない

俺はルーザーの攻撃を受け、地面と平行に後方へ弾き飛ばされたのだ

俺は途中にあったワゴンや買い物カゴをぶちまけ、背中から商品棚に激突する。

「恭介!!」

今度は美波が俺の名を呼ぶ番だった。

大丈夫だ、と返そうにもマトモに息はできないし、無理に応えようとしたら言葉の代わりに口の端から赤い液体が零れ落ちる始末

全身が熱い…… かるうじて骨は折れていないようだが、いくつかの箇所を打撲したようだ……

良かった、この程度で済んで

ルーザーの攻撃を全て紙一重で回避し、あの攻撃に誘う

これも全てヤツとの距離をとるための行動、打撲の一つや二つなんて安っぽい代価…… いくらでも払ってやる!

「これでやっと俺も使えるな……!!」

俺は上手く動かない足で立ちあがり、喉の奥から精一杯余裕ぶつた声を絞り出すと、制服の胸ポケットに手をつっ込んである物を取り出した。

黒一色で塗りつぶされた板、つまり、俺のプレートだ

「いくぞ!!」

俺は遠く離れた場所に立つルーザーを見据えながら、右手に持つ

たプレートを手の甲に押し当てる。

プレートは淡い光を放ちながら液体のようにドロドロに溶けだして、俺の肌から体の内部へ染み込んでいく

ルーザーが一直線に俺めがけて突進してきた。

野生動物顔負けのスピードで襲い掛かるルーザーを俺はギリギリまで引き付けてから 回避

ルーザーの巨体が勢い余って商品棚に突っ込み、激しい轟音がデパート内に鳴り響いた。

素早く体勢を立て直した俺は左手に押し付ける右手をゆっくりと離す。

するとそこにはプレートの形はなく、完全に俺の肉体の中に溶け込んでいた。

自然と俺の口元が歪み、少し遅れて体勢を立て直したルーザーに向かって俺は言う

「さあて、今度はこっちの番だな」

そう言った俺の左手の甲には数字の「1」の文字が刻み込まれていた。

イベント？7 「ディ・コンポーター」

ここはロスト学園サーバーのほぼ中心部に位置する名もなき学校
月明かりが照らす校舎の3階、2・1教室、そこに二つの影があ
った。

一つは長机の前で携帯ゲーム機をいじる男子高生、伊勢圭吾
もう一つは自前のティーセットで優雅にミルクティーを楽しむ敵
畑舞だ

「そついえば伊勢さん」

不意に舞が手に持ったティーカップを置いて口を開いた。

「は、はい!？」

先程の一件ですっかりトラウマになってしまったのか、圭吾は手
に持った携帯ゲーム機を落としそうになりながらも慌てて返事をす
る。

その際圭吾の持った少し古めの携帯ゲーム機からノイズの混じっ
た耳障りな音が聞こえていたのだが、それはまた別の話

舞は自分の趣味で教室に飾ってあるアンティークな鳩時計を一瞥
して続けた。

「さすがにあの二人遅すぎませんかねえ……ルーザー一匹見つける
にしては時間がかかりすぎな気がします……」

……言われてみればそうだ

あの二人が出かけたのは一時間ほど前、確かに時間がかかりすぎ

ていると言えばかりすぎているかもしれない

「念のため電話してみましようか」

圭吾はそう言ってゲーム機を机の上に置くと、懐から携帯を取り出し美波の番号にかけてみる。

しかしそこからは延々と呼び出し音が聞こえるだけで、一向に美波が電話に出る気配はない

「あれ、おかしいですね……」

圭吾は一度通話を切ってリダイヤルしてみることが、結果は同じだった。

「ロスト内では万が一の事を考えて携帯電話を常に携帯するよう水ヶ沢さんには言っておいたんですけど……何かあったのでしょうか」

舞は心配そうに首を傾げる。

「電話に出られない理由……」

舞につられて圭吾も神妙な面持ちになり、続ける。

「年頃の男女が深夜に二人きりになって電話に出られない状況……ひらめいた！」

直後、深夜の校内を爆発音が響き渡った。

不気味なほどに静まりかえった無人のデパート
天井にはぼつかりと巨大な穴が空き、床には散乱した商品、抉れた壁

仮にこの状況を通りすがりの誰かに見せたとして、ここで戦争があつたと言えれば信じ込むかもしれない
だって、あながち間違っていないんだから

「成る程なあ、気にはならないが少し疲れる感じだ」

俺はプレートを挿入した方の腕をぐるんと回してみた。

異物を体内に取り込んだにしては特に違和感を感じないが、全身に多少の疲労感を覚える。

これはあまり長い時間は動けそうにないな……

俺は自らの左手の甲に目をやってみる。

先程プレートを挿入した左手にそれほど変化はない、あえて言うなら何故か手の甲に数字の「1」が浮き出ている事くらいだろうか

「なあ美波、この1つてのはなんだ？」

俺は後ろに振り向いて若干へこんだ壁に背をもたれかけさせる美波に問いかける。

まだ先程ルーザーに与えられたダメージは回復していないようだが、さすがに喋る事はできるらしく美波は額に脂汗を滲ませながら苦痛にゆがんだ表情でそれに答える。

「その数字はプレイヤーのレベルを現しているわ…… RPGとかでお馴染みのね……」

喋るのも辛いらしく、美波はそこまで言っただけで両目を瞑り呼吸を整え始めた。

「……成る程レベルね、ならさしづめ俺はレベル1の駆け出し勇者ってところかな」

俺はそんな冗談を言って、今にも体勢を立て直そうとしているレベル2ルーザーを睨みつける。

「じゃあレベル1の勇者がレベル2のモンスターなんかには負けるわけじゃないわな」

体勢を立て直したルーザーの敵意が明らかに俺の方に向けられる。全身が黒一色で染まったその怪物に目らしきものは見当たらないが、殺気のようなものだけはひしひしと伝わってくる。

ならば俺もそれに応えなければなるまい

「俺のプレートは分解者、？ディ・コンポーザー？……だったよな確か」

俺はあの謎の空間で読んだテキストの内容を頭の中から引っ張り出してなんとかその名前を思い出す。

……なんだか違う気もしてきたが、まあこの際気にしないことにしよう

俺はできるだけ虚勢を張って、ルーザーを指さしながら高らかに

言った。

「なにはともあれこれで条件は対等だ、いざ尋常に勝負！」

カッコよく決まったかどつかは分からないが、背後からの聞き覚えのある溜息に軽く目に涙が滲む

対してルーザーはその言葉が通じたのか、ゆっくりとした動きで前足を伸ばして手元の冷凍庫にその鋭い爪を食いこませると、それをいとも容易く持ち上げた。

「えっ」

その行為が意味する物をすぐさま理解できなかった俺は一瞬動きを止める。

間もなくしてルーザーによって俺めがけて冷凍庫が投げ放たれた時、俺はようやく理解した

これやべえ、と

「恭介!？」

一直線に飛んでくる冷凍庫の風切り音に混じって、美波が俺の名を呼ぶ声が聞こえる。

しかしだからといってすでに眼前まで迫った冷凍庫にどうする事ができるわけでもなく、俺はほとんど反射的に両掌を前方に突き出して

瞬間、俺の手に触れた冷凍庫がいくつもの玉に分解されて？爆ぜた？

「え？」

それから間を置かずに弾け飛んだ無数のパチンコ玉大の粒がタイルの床に落下し、音を立てて二三度跳ねる。

ルーザーは顔のパーツが極端に少ない上リアクションも皆無なのでどう思っているのかは分からないが、これだけは言える。

この事態に一番驚いていたのは、間違いなく、この俺だった。

「マジで……」

そう言った直後、元冷凍庫の中に入っていたアイスが、ドサツと鈍い音を立てて俺の頭頂部に落下する。

俺はそのまま頭の上に乗ったアイスを右手で摘み上げ胸元まで持ってくる、おもむろにアイスの袋を握り締めた。

すると不思議なことに握り締めたソレは、中身のアイスは無傷なままアイスの袋だけが小気味良い音を立て、粒になって爆ぜる。

それと同時に俺はあの謎の空間での事を思いだしていた。

プレート名称はデイ・コンポーザー

能力は生物以外のあらゆる物質の分解……

「成る程、大体分かった……ってうお!？」

顔を見上げてみると、視界いっぱい広がるのは高速で飛来するぐにやぐにやにへし曲げられた商品棚

俺は咄嗟に両手を前に突き出して再び 分解!

俺の手の平に触れたソレは小気味良い音を立てて、一瞬で小さな玉のようなものに分解されると四方八方に飛び散った。

「あ、危ねえ……これはなかなか心臓にくるな……」

俺は胸のあたりを押さえながら、まるでヒステリックを起こした女のように周りの物を手当たり次第で投げつけてくるその怪物を睨みつける。

「でもさすがにやられっ放しってのはカッコつかないからな……ここらで反撃といくか……！」

俺は直感的に床に散らばった無数の玉に右手をかざす。

するとそれらはまるで意思を持っているかのように、決まった色の玉だけが俺の手の平に集中し始めた。

集まった玉は徐々に手首まで上ってきて、最終的には右腕全体を覆い尽くす。

そして 合成

俺が頭の中で念じると腕に密集した玉はまるで液体のように溶け出し、一瞬にして俺の右腕から先が鋭く尖った金属の塊でコーティングされる。

「おお、何事もやってみるもんだな、まさか本当にできるとは思わなかったが」

やたらメタリックになった右腕を見て俺は感嘆の声をもらす。その時だった。

「恭介！何やってんのよ！来るわよ！」

俺は美波の声で我に返り、右腕から視線を外して再び真正面からタックルをかまそうとするルーザーに視線を移す。

「おっと、何度もそんな攻撃食らうか！」

そこで俺は左手を床と平行に走らせ、床に転がる無数の玉を左手に集中させると、そのまま勢いを殺さず思い切り　振りかぶる！
そうして俺の手から投げ放たれた玉の塊は、突進するルーザーめがけて一直線に飛んでいき、ルーザーの顔面にクリティカルヒット
一瞬だけルーザーの動きが止まり、そこに隙が生じる。
当然その隙を見逃すわけもない俺は逆にルーザーめがけて一心不乱に駆け出した。

「うおおおおお！」

十分に助走をつけてからの跳躍

その勢いで俺はルーザーの頭部に飛び乗り、全体重をかけて右腕を纏う金属塊の先端をルーザーの頭頂部に突き刺した。

「ギイイイイイイイ！」

ルーザーが耳をつんざくような悲痛な叫びをあげる。

先程とは比べ物にならないほど至近距離での咆哮は、脳を直接揺さぶるように強烈だ

しかしここで俺が力を弱めれば全て水の泡

だから俺は更に腕に力を込め、右腕の槍を更に深く突き刺す。

ルーザーが叫び声をあげながらなんとか俺を叩き落とそうと頭部を上下左右に激しく揺さぶった。

しかし深々と刺さったソレがそう簡単に外れるわけもなく、俺はダメ押しでありつた力の力を込める。

唐突に右手に手ごたえがなくなった。

どうやらルーザーの頭部を俺の右腕の金属塊が貫通したらしい

「ギイイイイイイイイツツ！」

ルーザーはより一層大きな咆哮をあげる。

しかしそんなのは構わずに俺は右腕に体中の全神経を集中させ、
一声

「分解！」

その声を合図に俺の手を纏った金属がルーザーの中で玉になって
弾け飛ぶ

そして俺はすかさず大きく息を吸い込み、再び叫んだ

「合成！」

次の瞬間、ルーザーの頭部がまるで風船のように膨張する。

「ギツ」

ルーザーはそんな短い断末魔をあげると、派手な音をたてて内側
から頭部を破裂させた。

俺はその時の衝撃で4、5mくらい弾き飛ばされたが、受け身は
取れたので体へのダメージは特にならない

しばらく経ってからルーザーの肉塊らしき黒いゼリー状の欠片が
周辺に降り注ぎ、俺は素早く振り返ってルーザーに視線を向ける。

ルーザーは首から先がなくなった状態で、その場に立ち尽くした
ままピクリとも動かない

……どうやら俺の勝利のようだ

それにしても、内部に分解によって出来た玉を流し込み別の形に
再構築して内部から破壊する作戦、……即興で考えた割には上手く
いったようで良かった。

俺は上半身を折り曲げ、膝に手をつけて大きく安堵の溜め息を吐
き出す。

すると不意に背後から誰かの声が聞こえてきた。

「……っ！……！！！」

俺は咄嗟に振り返る。

そこにはまるで俺に何かを伝えようと懸命に言葉を叫ぶ美波の姿があった。

「恭……っ！……る……！！！」

……どうやらレベル2ルーザーの咆哮を近くで聞き続けていたせいでまだ上手く耳が機能していないらしい

しかし耳に意識を集中させ、しばらくすると徐々に俺の耳に飛び込んでくる音も鮮明になり

「恭介！ ソイツまだ生きてる！」

「え？」

俺はゆっくりと首から上だけを後ろに振り向かせようとする。

しかしそれも叶わず、直後俺の体は何者かの圧倒的な力によりタイルの床に勢いよく叩き付けられた。

イベント？8 「チート」コード

気が付いた時、俺は傷ついた体で天井の照明灯を見上げていた。

背中あたりに鈍い痛みを感じる。

目は霞むし呼吸も上手くできない、ついでに全身打撲傷だらけだ体が……冷たい……

俺の視線の先で首から上のなくなった巨大な怪物は首の断面をこぼこぼと泡立てる。

馬鹿だなあ、頭もないのに勝利の雄叫びなんてあげられるわけないだろ

「恭介！！」

最初のルーザーの攻撃により今まで壁に背をもたれかけていた美波が、俺の名前を叫びながらこちらに駆け寄ろうとその場から立ち上がる。

しかしまだ完全にダメージは回復していないようで美波は立ち上がりざま、すぐ前のめりになって倒れ込んだ。

ルーザーに至っては最早その少女の事など眼中にはないようで、相も変わらず床の上で仰向けになる俺の事を見下ろしながら断面を泡立てている。

ルーザーの断面からどろりとした液体が零れ落ち、俺の頬にかかった。

液体は妙に冷たく、まるで冷やしたコーヒージェリーのようだ

俺は最後に一応手足の先に力を込めてみる。

……ピクリとも動かない

それどころか手足が麻痺して感覚がなくなっている。

その様子を見てルーザーがその薄気味悪いゼリー状の物質を垂れ

流すのをやめ、ようやく動き出した。

ああ……本格的に終わりっぽいな……俺……

その巨大な腕を大きく振りかぶるレーザーの姿を見て、俺は十余年の短い人生の終わりを悟る。

そういえば昔ニュースやドラマを見るたびに「これから死ぬ人というのはどのような気持ちだろう？」などと考えていたが……なんてことはない、いざ死んでみるとなると割とどうでもよくなるものだ。走っている途中に疲れたから走るのをやめたりするのと同じ感覚……実際俺も正直どうでもよかった。

特にやり残したことも、やりたかったこともない

だから、もうやめていいだろ？

俺はゆっくりと瞼を下ろし、目を閉じようと……

「恭介！」

しかし、彼女だけはそれを許してはくれなかった。

俺はかろうじて動く首から上を動かして、声のする方向に視線を向けてみる。

視界がぼやけていたせいでよく見えなかったが、そこには間違いなく頬に一筋の線をつくった美波の姿があった。

「お願いだから……死なないでよ……っ」

いつも強気で不愛想な美波からは想像もできない喉の奥から絞り出した感情的な一言

会って3時間程度しか経ってない相手にそこまで言えるとは……

もしかしたら本当にいい奴だったのかもな

……でもその願いを叶えるのは無理そうだ

目の奥が熱い、全身が痛い、頭の中が真っ白になる。
しかしそれでも、最早手足を動かす事すらままならなかった俺は、
間違いなくその二本の脚で大地に立っていた。

「ぐああああああ！」

俺は再び獣のような咆哮をあげ、左手を前方に突き出す。
すると、それに同調するかのように俺の左手の甲に刻み込まれた
「1」の数字が、狂った電子音とともに激しく変化を始めた。

「まさか……レベル……アップ……？」

美波が涙を流すのも忘れ、驚愕を露わにする。

その直後、俺の一際激しい咆哮を合図に、左手に刻み込まれた数字が完全に形を変え、それは

全身が焼けるように熱い、いや、もうすでに痛覚なんて機能していないのかもしれない

だが、不思議と倒れる気はしなかった。

俺はその血走った眼でルーザーを睨みつける。

顔がない癖に俺の事はちゃんと見えているらしく、ルーザーの丸太のような前足が俺めがけて振り下ろされた。

すかさず俺は地面を強く蹴って真横にステップ

頭上スレスレまで迫ったソレを素早く躲し、代わりにタイルの床に巨大なクレーターができあがる。

ルーザーが渾身の攻撃を外し、無防備になったその一瞬

その一瞬の隙に俺は円を描くように駆け出し、途中で床の上の？

あるもの？を拾い上げ、そして急ブレーキ

スニーカーの滑り止めが不快な音を立ててタイルの床と擦れ、俺はルーザーの背後に回り込んだ

ルーザーがこちらを振り向くまでのコンマ数秒の間に俺はその先程拾い上げた？あるもの？を中空に放り投げる。

俺の頭上を回転しながら昇っていく黒一色の四角い金属質な板

それは少し前、ルーザーの意表をついた一撃により、美波の手から弾き飛ばされた？イグニッション？のプレートだった。

しばらくしてから重力に従い、イグニッションのプレートが落下を始める

それに合わせて、俺は突き出した左手に全神経を集中

次の瞬間、俺の左手から勢いよく吐き出された？ディ・コンポーザー？のプレートが宙を舞った。

そしてその二つのプレートが丁度俺の胸あたりの高さで並んだその瞬間、俺はその二つのプレートを大きく振りかぶった右手で、同時に？叩く？

直後二つのプレートは空中で一瞬だけ動きを止めると、全く同じタイミングで光の粒になって弾け飛んだ

「プレートを体外に排出しているのに……プレートの力を使ってる……？」

美波の驚きの声をよそに、俺の突き出した左手に分解された二枚のプレートの欠片が吸い寄せられるように集まり始めた。

まるで水辺に集まる蛍のような淡い光を放つ光の粒は、一つ一つが肌に触れると雪のように溶け出して体の中に染み込んでいく

再び鳴り響く狂った電子音、しかしソレは先程の比ではない

大地を揺らし大気を震わせ、左手に刻み込まれた数字が再度激しく変動を始める。

「またレベルアップ……！？」

間もなく電子音が止まり、俺の左手に刻み込まれた印が、完全に

数字の「3」に変化した。

俺の全身が悲鳴をあげる。

しかしまだ倒れるわけにはいかない

ルーザーの放った前足による薙ぎ払いが俺に迫った。

それは床に散乱した商品やらワゴンやらを巻き込み、タイルの床を剥がし、それでもなお勢いを増し続ける。

間違いなくこれがルーザーによる全力の一撃だ

しかし、だからこそ俺はこの怪物の事を哀れに思った。

初めから全力ならこんな事にはならなかっただろうに、と

「があっ！」

圧倒的サイズ差のあるルーザーの丸太のような太い腕から放たれた薙ぎ払いに、俺は右足を軸にして大きく腰を捻り、回し蹴り

直後、凄まじい激突音が鳴り響き、俺とルーザーの間に激しい衝撃が走った。

例えるならトラックとトラックが正面から衝突したかのような、そんな衝撃

そして次の瞬間

ルーザーの全力の一撃は、俺の回し蹴りによって真っ向から弾かれた。

ルーザーが自らの前足を襲う激痛に断面をより一層泡立て、同時に熱した鉄板の上にゴム手袋をのせたような酷い悪臭が漂う

ルーザーの前足は煙を立てながら焼け焦げていた。

「嘘……！」

美波が息を呑む

再び俺を仕留めにかかるルーザーの前足での薙ぎ払い

ソレを認識したと同時に、俺は右足に意識を集中、先程同様、脚

全体に、正確には制服やスニーカーに火を纏う
そして俺の首を狙って迫るルーザーの前足に 上段前蹴り
凄まじい衝撃音とともに、ルーザーの前足に靴底の焼き印が押され、ルーザーは全身を大きく仰け反らせた。
ルーザーの上半身が宙に浮き、ルーザーは自分の全体重を後ろ足だけで支える。

好機

「があああああああああああつ！！！！」

その人間離れた咆哮とともに俺の左手が淡く光り出し、俺はその左手で、空気を？切り裂いた？

パン、と小気味良い音を立て、空気が粒になり弾け飛ぶ

俺はその中から特定の玉だけを右手に吸い寄せ、集めると、それをルーザー目掛けて投げ放つ

投げ放たれた粒の塊は、一直線にルーザーのがら空きの腹部へと飛んでいき、直撃寸前で再び元の気体に戻り、霧散する。

そこで俺は間髪入れずに炎を纏った右足を振りかぶった。

狙いは勿論ルーザーの腹部

俺はルーザーの攻撃により破壊され、そこら中に転がったタイル床の破片の一つを力強く蹴り上げる。

破片は俺の足が接した瞬間、一瞬にして炎に包まれ、炎の軌跡を描きながらルーザーの腹部へ一直線に飛んでいき 爆発した

凄まじい爆音とともに、自分の数倍はあるであろうルーザーの巨体が勢いよく後方に吹き飛ば

途中にあつた商品棚やカートなどを薙ぎ倒し、そのままルーザーは背面から壁に叩き付けられた。

音を立てて天井が崩れ、建物全体が振動する。

そしてルーザーは崩れるようにその場に倒れ込み、砂埃を巻き上

げ、やがてピクリとも動かなくなった。
どうやら終わったらしい……

「っ……！」

同時に俺の方も限界がきたようで、突き出した左手から俺のプレートと美波のプレート、その二枚のプレートが吐き出され、地面に落ちた。

それからすぐに景色が傾き、俺はタイルの床に後頭部から天井を見上げる形で倒れ込む

しかし、次の瞬間後頭部で感じたのは固くて冷たいタイルの感触ではなく、柔らかくて暖かい感触

「……お疲れ様」

ふと視界にいつも通りの不機嫌そうに顔を赤く染める少女の顔が映り込んだ

……成る程、これが噂に聞いていた膝枕か
途端に凄まじい睡魔が俺を襲う

あれだけ無茶をしたのだ、まあ無理もない……
今になって蓄積した疲労とダメージが全身を駆け巡る。
俺はそのまま目を閉じようと瞼を

ヴォン

不意に、俺の狭まった視界の中に何かが現れた。

「は………？」

俺は全身を襲う疲労感も忘れて、目を見開く

>！<警告 不正なレベルアップが確認されました、現時点よりB
エリアに？削除人？を配置します。

- - - -
- - - -
- - - -

イベント？9 「デリート」

ここはロスト学園サーバー、エリアBに分類されるデパートの一階床に散乱した商品、粉々に砕かれたタイルの床、原型を留めていない商品棚

そして一際目を引くのは黒煙をあげながら、ピクリとも動かない異形の怪物

その惨状はそれほど先の戦闘が苛烈だった事を表している。

実際、俺こと八伏恭介は肉体的に限界に達していた。

レベル2ルーザーの攻撃で向こうの壁まで弾き飛ばされたり、地面に叩き付けられたり……

全身の傷は最早数えきれぬ量ではない、おまけにただでさえ使用に体力を消費するプレートを二枚も体内に取り込み、今まで戦ってきたのだ

疲労の蓄積も生半可なものではない、もう歩くことは勿論手足もマトモに動かない

生まれて初めて女子に膝枕をされているにも関わらず、今は早く帰って布団で寝たいという気持ちの方が強い、むしろここで寝たいくらいだ

そんな俺の前にソレは現れた。

突如空間に出現した青い枠で囲まれた無数のウインドウ

俺はその中の一つ、最も目立つウインドウに目を凝らしている。

警告とだけ記されてある他のウインドウとは違い、無機質な文字が並ぶウインドウ

そこには「不正なレベルアップが確認されました、現時点よりBエリアに？削除人？を配置します」という謎の文章

そしてソレを見て美波は青ざめた表情で自分の肩を抱きながら小刻みに震えている。

その様子はまるで何かに怯えているようで、俺は咄嗟に起き上が

り痛む腕で美波の体を揺さぶった。

「おい！ 美波！」

俺は名前を呼びかけながら何度か肩を揺さぶってみるが、美波は相も変わらずその虚ろな表情で床の一点を見つめている。

それからしばらくすると、あれだけあったウィンドウが一つずつ音を立てて消え、最終的にはそこには初めから何も無かったかのようにならずに消滅した。

「だ……」

美波が唐突に聞こえるか聞こえないかの音量で何か呟き、俺はそれに耳を傾ける。

すると美波は自らを守るように両手で頭部を押さえ

「やだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだやだ」

まるで壊れたラジオのようにひたすらその二文字を連呼し始めた。

「美波！」

俺は美波の名を叫び、少し強すぎるくらい揺さぶる。

「っ……… 恭介………！？」

それによってようやく我に返ったらしく、美波は素早くその場から立ち上がって言った。

「……っ！ 恭介！ 早くこのエリア内を出ないと大変な事になる

わ……！ 走るわよ！」

「え、ちよつ、待……っ、いだっ!？」

美波は強引に俺の手を引っ張ってデパートの入り口へ向かって駆け出す。

先程も言った通り俺はもう歩くことはおろか手足を動かす事もままならず、走る事など当然できるわけもない

……しかし腕が掴まれていれば話は別だ

美波が少し腕を引っ張るごとに俺の腕を打撲傷、擦過傷、筋肉痛その他諸々をブレンドした痛みが襲い、最早休むなどという行為すら許されずに、半ば引きずられるような形で美波の後ろについて歩く
美波は途中で？デイ・コンポーザー？と？イグニッション？のプレートを拾い上げ、それを懐にしまうと、前方を見据えたまま口を開いた。

「まだヤツはこちらを見つけてないはずよ……このデパートからエリアAまでは歩いて10分ちよつと、走れば5分……今からなら十分間に合うわ……」

美波は神妙な顔つきで俺の手を引き、歩を進める。

「ヤツって何だ？ ……もしかしてまた何か来るのか？」

俺は右手を襲う痛みに堪えながら、美波に問いかける。

「さっきの警告ウィンドウで見たでしょ、来るのよ……？ 削除人？
が」

？ 削除人？

その聞き慣れない単語に、俺は頭の上に疑問符を浮かべる。
美波はそれを読み取ったのか、そのまま続けた。

「削除人っていうのはこのロスト内のNPCで、簡単に言うところのロスト内のルールに違反したプレイヤーを実力行使で消しに来る殺し屋みたいなものよ」

その物騒な単語に俺は驚愕を露わにする。

「な、何だよそれ！？　そもそも俺はルール違反なんて……！」

そこまで言いかけて俺は数分前のルーザーとの戦闘を思い出し、口籠った。

短時間でプレートのレベルを1から3まで引き上げ、更に他人のプレートを分解して自分の体内に取り込む荒業

そしてウィンドウに記された「不正なレベルアップ」の文字

「……ここに来たばかりの恭介でも薄々は勘付いてるんでしょ、アレが普通じゃないことくらい」

自動ドアが音もなく開き、俺たちはデパートの外の一台も車が駐車していないがらんとした駐車場に出る。

月明かりにデパートの電飾も相まって、外はかなり明るい

「初めてプレートを使った恭介が短時間でレベル3……私でもレベル2が限界なのよ、それにプレートを体外に排出してからの能力の使用、更には本来一人一枚までのプレートを一人で二枚の使用……削除の対象にされるには十分すぎる材料ね」

美波が駐車場を出て、大きな道路に出る。

その広い道路には車一つ走っていないくせに信号機だけは律儀に点滅していて、そこはかたなく不気味な雰囲気醸し出している。

「……その削除人って奴から逃れる方法はないのか？」

「あるわよ」

ほとんどダメ元で口にした質問に美波は意外にも即答し、続けた。

「削除人が配置されたエリアから一度でも外に出れば削除対象から外されるわ、一歩でも外に出れば消えるようだからそれは削除人なりのルールってとこかしらね」

「何だ……簡単じゃないか」

それを聞いて俺はほっと安堵の溜息をつく

なんせこの広い学園サーバーの事だ、その中ですぐに俺たち二人を見つけるなど容易ではないはず

加えて一度エリア外に出るだけでいいのなら、あと少し歩けばそれで削除対象からは外される。

「恭介の甘い考えが手に取るように分かるわ……でもね、アイツはそんな簡単なヤツじゃない……とりあえず一刻も早くこのエリアから出るわよ!」

美波は怯えを隠しきれない表情を誤魔化すように、俺の腕をより一層強く引っ張り、駆け出した。

右腕に走る激痛のせいで軽く意識が飛びかけるが、その尋常でない美波の様子を見て、俺はなんとか首の皮一枚で堪えきり美波のペ

―スに合わせる。

煌々と輝く照明に静まりかえった街、満点の夜空や怖いくらい大きな満月も、今は全てがこのロストの不気味さを演出するセットにしか見えない

だから俺はなるべく周りの景色に気をかけないよう、美波のペー
スに合わせてひたすら前に走る事だけを集中する。

来た時の記憶ならあともう少しでエリアAの学校に着くはずだ
そうすればこのつまらない感覚もどこかに……

その時、不意に俺の手を引く美波が足を止めた。

俺は思わず美波の背中にぶつかりそうになるが、なんとか堪えて
その場に立ち止まる。

「……何だ？ 到着にしてはやけに早いな」

あと5分くらい走ると思ったが……

そう付け足そうとして俺はやっとその異常に気付いた。

美波がある一点だけを見つめて呆然と立ち尽くしていたのだ

俺の言葉も聞こえていないらしく、まるでこの世の終わりのよう
な表情で、ただその一点だけを

俺はおもむろに前方に視線を向ける。

次の瞬間、俺は戦慄した

「何だ……コレ……？」

視線の先にあったのは深夜にも関わらず派手な電飾で彩られた大
型の建造物

つまり先程俺たち二人が後にしたはずの、デパート

「削……除人……！」

美波は全身を小刻みに震わせながら喉の奥からなんとか言葉を絞り出す。

美波の視線の先、そこに？ソイツ？は立っていた。

デパートの屋上で、満月を背に黒を基調とした制服と、腰の位置まで伸びた黒髪を風になびかせながら鋭い眼光でこちらを、正確には俺を睨みつける少女

少女が両手に持った背の丈ほどもある太刀の刀身が月光を浴びて鈍く光を反射する。

言葉を失う俺たちをよそに、少女はゆっくりと口を開いた。

「八伏恭介、貴様は理想郷に生きる資格を失った、削除する」

イベント？10 「アウェイ&アウェイ」

「 八伏恭介、貴様は理想郷に生きる資格を失った、削除する」

デパートの屋上で満月を背に立つ少女は鋭い眼光で俺たちを見下しながら言った。

少女の身を纏う黒を基調とした学生服と腰の辺りまで伸びた黒髪が満月にシルエットを映し出す。

そして何よりも目を引いたのは、少女が両手に持つ身の丈ほどもある巨大な刀

少女の表情や雰囲気、そしてちょっととした仕草、少女の一挙一動全てに並々ならぬ殺気が込められており、俺はその得体のしれない恐怖に言葉を失い、同時に背中を嫌な汗が伝う

黒髪の少女が両手に握られた刀の柄に力を込め、それに伴い刀の刀身が月明かりを帯びて鈍く光を反射した。

「ッ……恭介！ 走って！」

だだっ広い駐車場に美波の声が響き渡る。

その声の少し後、デパートの屋上に立っていた少女は、何を思ったのか狭い屋上駐車場の中を駆け出した。

これからその黒髪の少女がやるうとしている事は大方想像はつく、しかし、本当にそんな事をする訳が

ターン

上方から靴底が大地を蹴る音が鳴り響く

次の瞬間、俺の予想を裏切って黒髪の少女は夜の闇に身を投げ出していた。

「ッ！？」

言葉にならなかった

黒髪の少女はワイヤーだとかクッションを使ったとかそういう小細工ではなく、ただ落ちて、ただ？着地？したのだ

常人ならまず即死の高さ

しかし、3階建てのデパートの屋上から飛び降り、その全ての衝撃を両脚のみで受け止めた黒髪の少女は、何事も無かったかのように立ち上がり再び鷹のような鋭い眼光でこちらに狙いを定めた。

「何やってんのよ！」

唐突に景色が横に流れる。

美波が横から俺の手を引いたのだ

俺はそれでようやく我に返り、美波に手を引かれるまま黒髪の少女のいる場所とは真反対の方向へと駆け出した。

最早腕が痛むとか足が痛むとかそんな事を言っている場合ではない

一刻も早くこの場から離れると体中の全細胞が警報を鳴らす。

頭の中が真っ白になり、体中の節々が悲鳴をあげているにも関わらず俺は一心不乱に足を動かす。

無論、周りの景色なんて気にかけている余裕もなく、まして自分たちがどこへ向かっているかなんて分からない

ただ目の前のソレから逃れたい、その一心で俺たちはただひたすらに走り続けて、走り続けて

そしてしばらくして俺たちは足を止めた。

全身の血が凍り、それでいて嫌な汗は滝のように噴き出す。

頭の中で圧縮されていた情報を一気に解凍させ、自分の一挙一動全てを思い出し、目の前の異常事態に対処しようとした。

俺は間違いなくヤツとは真反対、すなわちデパートから離れるように駆けていたはず

だからこそどうしても理解できない

何で俺たちはデパートの前に立っているんだ？

「嘘……だ……」

不意に視界の隅で何かが光った。

俺はゆっくりと首から上だけを光の方向へと向ける。

そこには両手に構えた長身の太刀を高々と掲げる黒髪の少女の姿が

「避けて!!」

「ッッ!!」

美波の叫び声で俺はほとんど反射的に跳躍し、同時に少女の太刀が風を切って振り下ろされる。

振り下ろされた二本の太刀は、月光を反射させながら夜の闇に光の軌跡を描き、アスファルトの地面をいとも容易く切り裂いた。

その太刀筋に躊躇いのようなものはない、避けなければ間違いない胸体を三等分にされていただろう

しかしそれよりも恐ろしいのが目の前の少女だ

彼女は今から人を殺そうというのに、その表情に怒り、憎しみ、戸惑い、その他一切の変化がない

まるで感情などないかのように、無機質に、淡々と殺す。

そこで俺はやつと理解した。

俺が初めに感じた得体のしれない恐怖感、それは目の前の少女が人の皮を被った何か別のモノだったからだ、と

「恭介！」

宙に浮く俺の耳に美波の俺を呼ぶ声が届いた。

咄嗟に振り向いた俺に美波は黒く金属質な板を投げ放つ

美波の考えを瞬時に読み取った俺は、左手の甲でソレを受け止めた。

直後、俺の左手に触れたその板は液体のように溶け出し、淡い光を放ちながら体内に吸収されていく

それとほぼ同時に黒髪の少女がアスファルトから刀を抜き、先程と同じく刀を二つ同時に横一線

ヤツの狙いは胴体、俺は引き延ばされた時の中で集中力を限界まで研ぎ澄まし、即座に両手を突き出した。

「おらあつ！」

瞬間、俺の両手に触れた刀の刀身は粒となって弾け飛び、俺が着地すると同時にパチンコ玉大の粒がアスファルトの地面に降り注ぐ

これでヤツの武器はなくなった。

俺は体勢を立て直し、構えを取って黒髪の少女に向き直る。

しかし、予想に反して黒髪の少女は大して驚いた様子もなく、柄だけになった刀を無感情に一瞥して、俺ではなく美波へと向き直り静かに言った。

「水ヶ沢美波、警告しておくが今回の削除対象は八伏恭介一人だ、手を貸すのは勝手だが攻撃を加えるようなら次は貴様を削除する」

黒髪の少女は淡々とそう告げると、何の未練もないように両手に持った刀の柄から手を離し、アスファルトの地面に落とす。

そして少女は再び無感情な、それでいて殺気に満ちた視線をこちらに向けた。

「八伏恭介、初めてプレートが使えるようになった事ではしゃぐのは勝手だが……生憎刃向う相手を間違えているぞ」

黒髪の少女はそう言っておもむろに両腕を広げ、天を仰いだ
その行為が何を意味するのかは分からない
しかし俺の本能が警告する。ソレの危険性を

直後、凄まじい地響きとともに大地が揺れ、大気が揺れ、世界が揺れ始めた。

「なっ ！？」

「上には上がいる その言葉の意味、とくと知るがいい」

黒髪の少女の言葉とともに次第に揺れが強くなり、間もなくソレは立っているのもままならない程の強い揺れに変わる。

そしてその揺れが最高潮に達した時、不意に黒髪の少女の制服がめくれ、「6」の刻印の刻まれた腹部が露わになった。

「では、削除だ」

黒髪の少女のその言葉で腹部に刻まれた刻印が淡い光を放ち、全身を気味の悪い感覚が走り抜ける。

その時、唐突に視界の外から高速で飛来した白い球体が少女の足元で爆発した。

「！？」

爆発による激しい爆音と爆炎により少女の姿が視界から消えたのと同時に、揺れが収まり、辺りを包む緊張した空気が解ける。

俺は咄嗟にどこか見覚えのある白い球が飛んできた方向へと視線を向ける。

するとそこには、薄グレー色の制服を身に纏い、周囲を不規則に

旋回するバスケットボール大の5つの白球体を操る女性の姿があった。

「探しましたよ、八伏さん、水ヶ沢さん」

「舞さん！」

女性、もとい畝畑舞は俺たち二人の名前を呼んで優しげに微笑み、突き出した右手を天にかざした。

それを合図に彼女を取り囲んだ5つの球体が一直線に、爆風の中心へと投下される。

そして再び先程とは比べ物にならないほどの凄まじい爆音、爆風、爆炎

それによつて生じた黒煙が辺り一帯を覆い尽くし、周囲は一寸先も見えない闇に包まれる。

「さ、ヒット&アウェイです。さつさと逃げましょう」

光の一切差し込まない闇の中で舞の声が聞こえたかと思うと、舞は俺と美波の手を取つて爆心地とは真反対の方向へと駆け出した。

「来るのが遅いですよ畝畑さん……」

美波が少し不機嫌そうに自らの手を引く女性、もとい畝畑舞に言う

「こつちに来る途中色々あってね……とりあえず無事で良かったわ」

舞は心底安心したようにほっと息をついて微笑む

「あれ……？ 圭吾は？」

俺の素朴な疑問に女性は首を傾けて少し考える素振りを見せると、しばらくして思いついたように言った。

「ここへ来る途中ルーザーにやられて名誉の戦死、……というのはどうでしょうか？」

「……ノーコメントで」

敵から逃げている最中だということにも関わらず、先程とは違ってかわって和やかな雰囲気

これもこの人の才能なんだろうな、と俺は素直に感心しつつ、俺たち3人は夜の闇へと姿を消した。

それから3人が駐車場を去ってしばらく経ってからの事

辺り一帯を覆っていた黒煙がようやくやくはれ、その中から全くの無傷で歩を進める黒髪の少女が現れた。

黒髪の少女はしばらく三人の消えた方向を見据えていると、おもむろに空に浮かぶ満月を見上げて呟く

「八伏恭介、貴様は屈したのだ、世界に、理想郷に、そして私に、な」

少女は誰に言う訳でもなくそう呟くと、いつまでも不気味なくらいに大きな月を見上げていた。

イベント？11 「レスト」

畝畑舞、水ヶ沢美波、そしてこの俺八伏恭介

俺たち3人がAエリア学園校舎2-3教室に辿り着いた時、時計の短針はすでに深夜の3時を回っていた。

舞が手慣れた様子で教室の扉を軽く二回ノックする。

「畝畑舞です。只今戻りました」

そして扉の前で10秒ほど待機、中から誰の声も聞こえてこないのを確認した舞はゆっくりと教室の扉を開け、一步踏み出す。

それに合わせて俺と美波も教室の中へ

教室内は相変わらず教室と呼ぶのも躊躇われる好き勝手なアレンジの加えられた自由なデザインとなっており、俺と美波が出かけた時となんら変わった様子はなかった。

強いて言うなら机に突っ伏したままピクリとも動かない圭吾が少し気になるところだが、さして問題ではないだろう

「ごめん……私もう無理……」

美波は気分悪そうに額を手で押さえながら、おぼつかない足取りで教室の隅に置かれたソファの前まで歩いてゆく

そして崩れ落ちるようにソファの上に倒れ込んだ

「おやすみ……」

美波は最後にそう言い残して、すぐに向こうの世界へと旅立つ

……まあ、あれだけの事があったのだ、無理もない

俺としてはどうやってこのソファをこの教室の中に運び込んだ

のかの方が疑問だ

しかしまあ今はそんな事どうでもいい、今日はもう疲れた……

俺はゆっくりと中央の長机を囲む椅子の一つに腰をかけ、机に突っ伏して目を閉じる。

そして間もなく俺は深い眠りの中へと落ちていった

……

……

……

暗闇の中、どこからか小鳥の囀る声が聞こえる。

更に耳を澄ませてみると木々の葉を揺らす音が耳に届いた。

「……っ」

唐突に暗闇の中へ差し込んできた光により俺は覚醒する。

ゆっくりと上半身を起こし、その状態で完全に意識を取り戻すまでしばらく待機

そして数十秒ほどの間を空け、俺は目を開いた。

一番初めに視界に入ったのは丁度俺の向かいの席で自前のティーセットでティータイムを楽しむ畝畑舞

ティーカップから香るのは甘い花の香り、どうやら今日の趣向は

ローズヒップティーらしい

「あら八伏さん、おはようございます」

舞は俺が目覚めたことにようやく気づいたようで、ティーカップを受け皿に置くとき優しげに微笑み、そう言って軽く会釈をした。……うむ、こういうのはなかなかいい、いやむしろ最高だ

俺は「おはよう」とか無難な挨拶を返して、ふと壁にかけられた時計に目を向ける。

時計は短針が7時を指しており、長針が50分と55分の間……若干55分よりなので7時53分だろうか、思ったより早く起きることができた。

あの疲れ具合からしてあと3時間ちよいは熟睡できると思ったのだが、どうやら固い机に固い椅子では俺の体は満足してくれなかつたらしい、体の節々が痛む

俺はおもむろに視線を左隣に向けてみる。

そこには椅子に腰をかけ、何食わぬ顔で携帯ゲーム機を弄る圭吾の姿があった。

……ここまでくると実はコイツの肉体にはストックがあつて数時間前に見た圭吾とここにいる圭吾は別人なのではないかと信じそうになる。

「お、おっ……おお、今日の俺神がかつてるな」

ちなみに今ここにいる圭吾はゲームに夢中なようで、そんな感じの独り言を呟きながらカチカチとボタンを連打している。

その熱中ぶりを見るに多分俺が起きた事にも気づいていないんだろう……こういう生き方ができればさぞ楽しいだろうな、という2割の羨ましさと10割くらいの呆れを込めた呟きは心の中にしまっておくことにした。

それはそうと……あとは美波だ
俺は教室の隅に置かれたソファの方へ目を向ける。
そこにはやはり美波の姿があった。

「八伏さん、そろそろ朝食の時間なのでできれば水ヶ沢さんを起こしてくれませんか？」

舞は俺が丁度美波の方へ視線を向けていることを知ってかそんな事を言う

「まあ構わないが……」

特に断る理由も無かったので、俺はゆっくりとその場から立ち上がった。

体の節々が痛むが、歩くことに支障はなかったのでそのまま美波の寝ているソファへと歩み寄り正面に立つ

美波はソファの背もたれに体を向ける形で横になり、気持ちよさそうに寝息を立てていた。

昨夜と違い学生服がソファの背もたれにかけられワイシャツ姿になっているのは大方寝苦しくなったので寝ている間に脱いだのだろう

それにしてもこのソファ柔らかそうだな……とか考えながら俺は美波の肩を揺さぶって呼びかける。

「おい美波、朝だぞ」

美波が目を閉じたまま眉を顰め、小さく唸った。

……しかし起きない

「美波、朝だ」

今度は少し強めに肩を揺さぶってみる。

すると美波は顔をしかめて、こちら側に寝返りをうつって仰向けになった。

いくら眠かったからとはいえさすがにこれは不用心すぎないだろうか、疲れてることを含めてもコイツは素で朝弱そうだな、と思いつつトドメにもう一度呼びかける。

「おい美波グツモーニン」

「ん……」

美波が辛そうに顔をしかめ、しばらくしてからゆっくりと上半身を起こす。

まだ完全には目が覚めていないようで何度も目を擦ってからようやく寝ぼけ半分に目を開いた。

「……おはよう」

美波の表情や口調はいつにもまして不機嫌そうである。

……うん、やっぱり朝は弱そうだ

「おはよう、なんでも朝飯の時間らしいぞ」

「うん……すぐ準備する……」

美波はそう言って両手で拳をつくり上に突き上げ、すなわち背伸びをする。

その時だった

「あっ？」

「えっ？」

一瞬何が起きたのか分からなかった。

その完全な不意打ちに俺は数秒ほど固まる。

だって普通は考えもしない

美波が背伸びをしようとして胸を反らせたその時、ワイシャツの前が大きく開き、美波の下着が露わになるなんて

「なっ」

俺より少し遅れてやっと状況を理解した美波の顔が徐々に赤みを帯びていく

そして美波は寝起きとは思えない俊敏な動きでソファの下にあった目覚まし時計を拾い上げ……

「私が寝てる間になにしてくれてんのかなよ変態！」

十中八九ソレを思い切り俺の顔面めがけて投げ放った。

しかしここに来たばかりの時似たような事があつたおかげで攻撃をいち早く察知できた俺は素早く腰を落として神回避

目覚まし時計は空を切って俺の頭上スレスレを通り過ぎて行き、後方直線上でゲームをしていた圭吾の携帯ゲーム機に命中して、ゲーム機はすごい音をたてながら圭吾の手から弾き飛ばされた。

「」

携帯ゲーム機が圭吾の後方のタイル床に叩き付けられディスプレイが真っ黒になると同時にあれだけ独り言を呟いていた圭吾が静か

になる。

哀れな……、多分ヤツはそういう星の下に生まれたのだろう、今度オススメのソフトでも教えてといてやるつか……

「美波さんは寝ぼけながら自分でボタンを外してましたよ」

後ろの方で舞がローズヒップティーを上品に啜りながら思い出したようにそう言ってフォローしてくれた。

「え、そ、そうなんですか……？」

美波はそれで納得してくれたらしく徐々に顔の赤みが引いていく。あらぬ誤解が解けて一件落着だ、圭吾には目もあてられないが

「ではあと一人ですね」

「あと一人？」

ティーカップを受け皿に置き椅子から立ち上がる舞の気になる一言に俺は聞き返す。

「そつえば恭介はまだ会ってなかったわね」

その質問には美波がワイシャツのボタンをかけ直しながら答えた。

「実はこの学校にもう一人プレイヤーがいるの、ただ恭介がロストに来る前に出かけちゃってね、なんでも？低反発枕に一目惚れしたので今から探してきます！？とかなんとか」

「……ホントにここ異世界か？」

数時間前に怪物や人間離れた黒髪の少女とファンタジーバトルを繰り広げておいてなんだがやはり疑問を感じる。

「まあルーザーや削除人さえいなければただ人が少ないだけの普通の世界ですしね」

舞はそう言っただけでティーセットを片し始め、美波はソファから立ち上がって制服に袖を通す。

その時、不意に廊下の奥から誰かが駆けてくる音が聞こえてきた。

「あ、噂をすればきましたね」

舞は一旦ティーセットを片付ける手を休めて教室の扉を見つめる。足音がだんだん近くなってきた、どうやらすぐそこまで来ているらしい

それから間もなくして教室の扉が音を立てて勢いよく開いた。

「ただいま帰りました！　なんか低反発枕は見つからなかったのだから代わりに低反発マットレスをぶっ！」

瞬間、突如高速で飛来した白球体が扉の前で満面の笑みを浮かべる少女を弾き飛ばし、少女は短い悲鳴をあげて勢いよく全開になった3階の窓から飛び出した。

後ろを振り向いてみるとそこには案の定不規則に飛び回る白球体を操る舞の姿が

「……と思いましたがどうやらルーザーだったようです、危なかったですね」

「いや……今間違はなくそこにマットレス片手に満面の笑みを浮かべたやたらハイテンションな女子中学生が……」

「ルーザーだったようです」

「……はい」

ノックの有無で生死が分かるだなんて恐ろしい場所多分世界でここだけだろう

そんなことを考えながら俺は全開になった窓をそれ以上何も言わずに見つめていた。

イベント？12 「イン・ザ・レストラン」

ここはロスト学園サーバーエリアAに位置するとあるファミリィレストラン

時刻は朝の8時を回ったばかりとはいえ、無人のファミレスというのはなかなか不気味だ

そんな空間で俺たち5人は一つのテーブルを囲んで、今までにない程の緊張した空気を創り出していた。

「……」

俺たち5人はひたすら無言

誰一人物音一つ立てようとしないその空間内では空調の音と時計の針が進む音だけが響き渡る。

その張り詰めた空気に握りしめた拳の中が汗でじっとり湿る。

空調が効いているにも関わらず額から滲み出る汗の粒は気にせず視線を動かした。

隣には神に祈るように自らの拳を額に当てて目を閉じる伊勢圭吾
正面には神妙な表情でテーブル中央に置かれた氷が入ったグラスの一点だけを見つめる水ヶ沢美波

美波の右隣ではいつもと変わらぬ優しい微笑みを浮かべながら
柔らかに拳を握る畝畑舞

そして美波の左隣、何故か延々と手の平に指で「人」の文字
をなぞっているショートボブカットの女子中学生が新顔、タカシマ？高島
チヒロ千尋？だ

確認も終わったところで俺は再び視線を正面のグラスに戻す。

グラスの外側を水滴が伝いテーブルを濡らした。

来る！

カラン

長時間外気に晒されたグラスの中の氷が音を立てる。

刹那　俺たちは握り締めた拳を前に突き出していた。

「おっしや！」

「すみませんね」

「僅差で勝ちました！」

「朝からついてないわね……」

直後、各々が三者三様の反応を見せる。

美波がグーで俺を含めた美波以外のメンバー全員がパー、完全勝利だ

「んじゃウエイトレスさん！　俺はドリアとハンバーグ！」

「では私はパンケーキをお願いします」

「なら私は海老とトマトのスパゲッティです！」

「……じゃあ俺はこの一番安いスパゲッティで」

美波を除いたメンバーが一斉に一人機嫌悪そうにする美波に向かって思い思いの注文をする。

「はいはいかしこまりました……、あと圭吾はこれが最後の晩餐になるわよ」

「ちょっとここ冷房効きすぎじゃねえかな……はは……」

美波はそんな不穏な事を言い残して一人厨房へと向かっていった。少し哀れな気もするがまあジャンケンで決まったのだから仕方ないちなみに、こういうフアミレスとかだとパツクで分けられた食品を温めたりするだけで割と簡単に調理ができるので、毎回メンバー内ではこのような決め方をしているようだ

今日が初参加の俺だったがなんとか勝って良かった。

自分の運に感謝してほつと胸を撫で下ろすと、不意にドリンクバーで持ってきたらしい紅茶の入ったカップを片手にした舞が口を開く
「そういえば八伏さんにはまだ高島さんの事をよく紹介していませんでしたね」

舞はそう言つて隣に座りながらスーパバーのコーンポタージュを啜る少女に視線を向ける。

それで気付いたのか千尋は飲みかけスープをテーブルに置くと、勢いよくその場から立ち上がり控えめな胸を張つて言った。

「ご紹介に預かりました！ 私は高島千尋です！ 以後お見知りおきをー！」

「ああ……うん、よろしく……」

胸を張つて自信満々に自己紹介をする少女に、朝っぱらからすごいテンションだな……と感心しつつ若干引く
ていうか名前だけなら学校で聞いたんだけど、というのは心の中にしまっておくことしよう

「……にしてもお前よくあの高さから落ちて平気だったな」

俺が言っているのは勿論学校でのあの事

千尋がノックを忘れたばかりに舞の？ストレイチャイルド？によつて校舎3階から叩き落とされたことだ

「平気じゃないです！ あの低反発マットレスが無かったら今頃私天国のおじいちゃんと再会してました！」

「いや……そんな高性能なマットレスはない……」

俺は身を乗り出して言う少女に思わずツツコミを入れる。

「コイツは頑丈なだけ取り柄だからな、はは」

「お前も人の事言えないだろ……」

隣の席でコーラを飲みながら言う圭吾のボケにも即座に対処、ツツコミ役とは忙しい職業だ

「ところで八伏先輩のプレートってなんなんですか？」

千尋は唐突に軽く首を傾げてそんな質問をしてくる。

「なんなんですか……って？」

「ほら、能力とかレベルとかです！ 味方の能力は知っておいた方が色々と捗りますから！」

「それも一理あります。できれば教えていただけると嬉しいのです

が……」

舞も紅茶のカップを傾けながらそれに同調、特に教えない理由もないので俺は胸ポケットから一枚の黒い板を取り出す。

「……俺のプレートは？ デイ・コンポーザー？ だ、無生物なら何でも分解して玉の形に固定できる……そんな感じだな」

「何か地味な能力だな……ちなみに俺のプレートは？ ジ」

「レベルはどれくらいなんです？」

何か言いかけた圭吾の言葉を遮り、千尋が再び質問をした。

「レベルか……」

俺は数時間ほど前、昨夜のレベル2ルーザーとの戦闘を思い出す。ルーザーとの戦闘で一度死にかけた俺はプレートのレベルが1から2にアップし、そのすぐ後にまたもレベルアップ、つまり……

「 恭介のプレートはレベル1よ」

唐突に俺の言おうとしている事は突如現れた美波によって遮られる。

「 やっぱりそうですよねえ……」

「 まあ初日ですし妥当なレベルでしょう」

「 よっしゃー！ レベル1仲間が増えたぞー！」

これまた三者三様な反応

一体どういうつもりなのか問いただそうと俺が美波の方へ振り返ると、美波は俺にしか聞こえない程度の声量で囁いた。

「恭介のレベルアップは一時的なものよ……削除人と戦った時レベルが1に戻ってたの気づかなかった？」

俺は開きかけた口を閉じる。

あの時は必死だったのでよく覚えてないが確かに言われてみればそうだった気もする……

「もし恭介がそれを言ってたら今頃恥かいてたわよ、感謝してね」

「……お気遣いどうも」

「どういたしまして」

美波は最後に一言そう言い残すと、再び厨房の方へと戻っていった。

それだけを言いに来るとは……実は結構優しいんだろうか

「ちなみに私のプレートはレベル2です！」

千尋はふふんと鼻をならして誇らしげに言う

「私のプレートもレベル2……ついでに言っと美波さんもレベル2ですね」

「俺はまだレベル1だよ……」

どうやらここにいるメンバー全員のプレートがレベル2以下らしい……確かに言わなくて正解だったかもしれない、あとで美波にちやんとお礼をしておこうか

「そっぴや美波のプレートがイグニッションで舞のプレートがストレイ・チャイルド……だったよな？ じゃあ千尋のプレートは何なんだ？」

「ん？ 今露骨にスルーされた気がするんだが」

隣で何か言っている圭吾は無視して千尋の回答を待つ

「え、あ、私のプレート……ですか？」

千尋は何故か戸惑った様子で言葉に詰まる。

「えーと……ですね、私のプレートは、あの、なんとというか……」

今度はこれほど冷房が効いているというのに顔中に変な汗を浮かべながら言葉を濁し始めた。

それに耐えかねたのか圭吾がコーラの入ったグラスをテーブルに置いて口を挟む

「いいじゃん見せちゃえば、減るもんじゃねえんだから」

「ちよっ……！ 伊勢先輩は簡単に言いますがけどアレ使うのすっぴい嫌なんですよ！ まるつきり悪者っぽくて！」

千尋が身を乗り出して圭吾に食い下がる。

すると圭吾はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら続けた。

「ほおー、じゃあ俺のプレートの方が上かな？」

「なっ……………！」

「知ってるか女子中学生、使わないのなら無いのと同じなんだぜ？」

ぷっん

突如千尋から何かが切れたような音

それを合図に千尋の雰囲気が一気に変わった。

「なるほどなるほど……………使わなければ初めから無いのと同じですか

……………」

千尋はゆらりと立ち上がり、懐から黒い板を取り出す。

皆さんご存知、言わずと知れたプレートだ

「なら私はこのプレートを伊勢先輩に使わせてもらいます……………！」

千尋はそう言って右手に持ったプレートを制服越しに左肩へあてがい、プレートは淡い光を放って水のように溶け出し千尋の肉体に染み込んでいく

「私のプレートは龍？ドラゴン？……………伊勢先輩！全身食いしばりやがってくださいー！」

「は ……！？」

間もなく千尋の体が部分的に硬化し、まるで鱗のように逆立ち始

めた。

更に拳に集中的に鱗が集まり、爪はまるで肉食獣のように鋭く尖る。

そして千尋は肥大した右拳を握りしめ、大きく振りかぶって

一声

「私は！高校生だあああ！！」

「へぶうつ！？」

次の瞬間、千尋の怒声をあげながらの右ストレートに圭吾はカンフー映画ばりのアクションで吹っ飛んで行き、まるで市場に仕入れられたばかりのマグロのようにピカピカに磨かれた床の上を滑った。

「はあ、はあ………」

千尋は肩で息をしながら床に倒れて全く反応しなくなったマグロを睨みつけている。

圭吾がアレなのはいつもの事だから気にしないでおくことにして……千尋、高校生だったのか……

てつきり俺もそのスレンダーな体型から中学生もしくは発育のいい小学生だと思っていた。

つまり一歩でも間違えば俺がああなっていたという事だ、恐ろしい……

「次はレモンティーですね………」

一方舞は何食わぬ顔で4杯目のお茶のお代わりを取りに行った

イベント？13 「ファーストステップ」

「割と美味しかったですね！」

空になった皿を前に、椅子の背もたれにもたれかかった少女は満足そうに腹をさすった。

さっきまであれほど怒り心頭といった様子だったのに満腹になると機嫌が良くなるとは現金な奴だ

ところで先程ボデイに強めの右ストレートを食らった圭吾がテーブルに突っ伏してから全く動いてないわけだが……

「死ぬかと思っただぞ！」

「うるさいわね……」

何の前触れもなく体を起こした圭吾に美波は冷たい視線を浴びせながらスプーンで掬ったドリアを口に運ぶ

「あ！ お前それ俺のドリアじゃ……！」

「圭吾がいつまでも寝てるからよ、冷めると美味しくないじゃない」

「ぐっ……！」

美波は食い下がろうとする圭吾を適当にあしらって、大して汚れてもない口の周りを紙ナプキンで拭き取る。

「まあいい！ 何故なら俺にはハンバーグがあ……おおおおお！
？ なんかコレめっちゃ縮んでるYO!？」

今度は手元の皿に乗ったハンバーグを見てラッパ調に叫びだす
始末……騒がしい奴だ

「知らないんですか伊勢先輩焼いたお肉は冷めると縮むんですよ」

「マジで!? そんな冗談初耳なんだがそういう事は口の周りのデ
ミグラスソースを拭き取ってから言・い・や・が・れ!!」

「ひだいれふ! ひだいれふ!」

身を乗り出した圭吾に千尋は両頬を思い切り引き伸ばされ、手足
をバタバタさせながら涙目になって必死に何かを訴えている。

まあなんとなく意味は分かるので解説は割愛しておこう

「はい、では皆食べ終わったようですよそろそろ帰りましょうか」

目の前でショートコントを繰り広げる圭吾と千尋を尻目に、舞は
ティーカップをテーブルの上に置いてにっこりと微笑みながら言っ
た。

「え、ちょ! ちょっと舞さん! まだ俺ハンバーグ食つ……、ハ
ンバーグが消えた……だと……?」

「やつは冷めるほおいひくくないれふね」

「貴様いつの間に!!」

「ひだいひだい!」

再び千尋のもつちりとした頬が左右に引き伸ばされる。

……どうでもいいけどお前ら絶対仲良いだろ

「はいはい伊勢さん高島さん、もう解散しますよ、食器を厨房まで運んでください」

舞はそう言って手を軽く二回叩き、事態を収拾させにかかる。

さすがに先輩肌の舞の命令とあってか、圭吾は苦しそうな表情で指にかける力を緩めた。

「うぐ……仕方ない、後でコンビニにでも寄るか……」

圭吾は一つ大きなため息をついて千尋の頬から指を離す。

そしてテーブル上の空になった皿をいくつか手に持って席を立った。

「一人で朝食って寂しいですね！」

それに続いて千尋がいらぬ一言を付け加えて皿を両手に立ち上がり厨房へと向かう

先に食事を終えた三人が厨房の奥に消え、10秒くらいしてからだろうか

一番初めに全力疾走する千尋が厨房から店の出入り口へと駆け抜け、少し遅れて圭吾が厨房から飛び出して千尋を追いかけた。それから更に間を挟んで厨房から優雅な足取りで舞が現れる。

「八伏さん、水ヶ沢さん、私たちは先に学校へ戻っていますので、では」

舞は丁寧にお辞儀をしてから店を出ていった。

相変わらず礼儀正しい人である。

「恭介、私たちも片付けましょう」

「あ、ああ……」

美波に言われて俺はようやく我に返る。

さっきの三人のギャップもさることながら、ファミレスで食事を取り、自分で食器を片付け、支払いもせずそのまま店を出る……その行為がとても新鮮だったのでつい我を忘れていた。

今後もこの世界で暮らしていくならこの感覚は直しておいた方がいいな、と一人決心しつつスパゲッティの入っていた皿と細かい氷がいくつか残ったグラスを手に立ち上がる。

そして厨房に向かって歩いていく美波の後ろについて、厨房の中へと足を踏み入れた。

「ほー、厨房ってこうなってるのか」

普段見ることのできないファミレスの厨房というこれまた新鮮な光景に俺は思わず感嘆の声をもらす。

成る程、誰も人がいないという事は普段足を踏み入れる事のできない場所にも自由に入入りできるようになるといふ事か

などと考えながら歩いていると、不意に先導の美波が足を止めて

……

「よいしょ……っつ」

何を思ったのか、美波は自分が手に持った皿を無造作に重ねられた汚れた皿の上に置こうと手を伸ばしたのだ

「あ、おい！ 油のついた皿の上に皿を置くのはダメだぞ！」

「……………え？」

俺の反射的な制止に美波は呆気にとられたような表情でこちらへ振り返る。

そして美波は一時停止ボタンでも押されたようにぴたりと静止

「……………ぷっ、あはははは！」

それからコンマ数秒ほどの間を空けて、突然美波は腹を抱えて笑い出した

「な、何がおかしい！」

何故笑われたのかさっぱり分からない俺は少しムキになって対抗してみる

すると美波はひとしきり笑った後で俺に向き直り口を開いた

「だ、だって恭介に言ったでしょ、この世界じゃ4日周期であらゆる物がリセットされるから食器を洗うなんて事にしなくていいのよ」

美波はまだ笑い足りないらしく、必死で笑いを堪えながらそれを告げる。

「あー、そっぴやそんな事も言ってたな……………」

「それに今日メンテナンスが行われるエリアはこのエリアだったはずだから、あと16時間後には汚れた皿も使用済みのスプーンも、

ついでにドリンクバーのグラスだって全部元通りよ、だから気にすることなんてないわ」

美波はそこまで言って再び手に持った皿を汚れた皿の上に置こうと手を伸ばす。

その時、俺が何を考えていたのかは覚えていない、いや、本当に何も考えてなかったのかもしれない

「でも、本当にそれでいいのか？」

だってそれは、ごく自然に、息をするように、口をついて出てきたから

「……」

美波はその手を止め、顔から表情が消える。
そして沈黙

「……いや、やっぱりなんでもない、今は忘れてくれ」

待っていても回答は来ないだろうと悟った俺はそう言って食器を片付けようと歩を進める

…… 右腕に違和感

後ろに振り返ってみると、そこには何かを決心したかのように俺の目を真っ直ぐと見据えながら制服の袖を掴む美波の姿があった。

「……一つ聞きたいんだけど、恭介は元の世界に戻りたいと思う？」

元の世界

この世界に来てから初めて耳にしたであろうその単語に俺は少し

戸惑う

「……唐突だな」

「いいから答えて」

美波はそう言って目を逸らそうとする俺の制服の袖を引っ張った。
……美波の表情は真剣そのものである。

「元の世界……か」

天井の照明灯を見つめながら、俺はまるで他にいる誰かに言い聞かせるように呟いた。

「……こういうのってさ、漫画とか小説の主人公なら「戻りたい」って即答するんだろうな」

そう言っただけ俺は自嘲する様に苦笑を浮かべる。

「でもな、不思議と戻りたくないんだ」

俺がそう言っていると同時に室内の気温が一定の温度に達し、耳障りだった空調の駆動音が消えた。

「普通、こんな異世界に飛ばされたら元の世界に帰りたいてって思うはずだと思ってただけだな、不思議と微塵も帰りたとは思わない。そしてもっと怖いのが、ルーザーとかいう怪物や削除人とかいうヤツに殺されかけて……それでも何故かこの世界が居心地良く感じることだ」

俺の声だけが響き渡る店内で美波は真剣な表情で俺の話を聞いている。

「それに……思い出せないんだよ」

そこまで言っただけ俺は言葉に詰まる。

しかしそれは何の意味もなかったことを数秒後思い知った。

「元の世界での記憶が　でしょ？」

「なっ……!!」

俺は思わず息をのんだ

何故なら、その言葉の先を続けたのが意外にも目の前の少女だったからだ

「恭介には言っただけじゃなかったけど……別に記憶がないってのは特別なことでもなんでもないわ、この世界のプレイヤーは皆元の世界での記憶を失っているのよ……かくいう私も」

美波はそう言っただけ俺の袖を掴む力を弱め、驚く俺をよそに更に続ける。

「それに元の世界に帰りたくないって思っているのも恭介だけじゃないわ、プレイヤーは皆元の世界の記憶がないにも関わらず、元の世界に戻ることは本能的に拒んでいる……」

私はこの辺にこの世界の秘密があるような気がするんだけど……まあ、今その話は関係ないわね……ところで質問の答えは出た？」

美波はそう言っただけ再度問いかけ、それによって俺は我に返る。

もう袖を掴む手にほとんど力がかかっている、いや、掴むと言うより添えると言った方が正しいだろうか
表情はいつも通りの不愛想な顔、しかし俺には心なしかその美波の顔が寂しそうに見えた。

「……勿論、帰りたくない」

美波は俺の言葉に大して反応せず、諦観を込めた表情で俯いている。

だからこそ俺は再び口を開き、こう続けた。

「でも、この世界は嫌いだ」

美波はその言葉に驚いたような様子で顔を上げる。

「だから、これはこの世界に逆らう第一歩」

俺はそう言って両手に持った皿を汚れた皿の？隣？に置き、スポンジを手取る。

そして無造作に積み重ねられた皿を一枚一枚丁寧に洗い始めた。

「ぐっ……油のせいで滑るな……」

洗剤と油が混じり滑りやすくなった皿を落とさないようしっかりと掴んで念入りに磨く

「……馬鹿ね」

今度こそ真正銘いつも通り不愛想な表情で、美波はもう一つのスポンジを手を取った。

イベント?13 「ファーストステップ」(後書き)

学園サーバー編 第一章 完

イベント？14 「ルート」

「ルーザーの駆除？」

ここはお馴染み、ロスト学園サーバーエリアAに属する校舎3階
2-1教室

長机を挟んだ向こう側で紅茶を啜る女性の言葉を、俺は語尾にク
エスチョンマークを加えて繰り返した

「ええ、そうです」

女性、もとい畝畑舞は飲みかけの紅茶が入ったティーカップを受
け皿に置くと、にっこりと微笑んでそう返す

……どうでもいいけど、確か舞ってさっきのファミレスでドリン
クバーの紅茶リレーを3周くらいしてたような……

「よっしゃ遂に俺のプレートが活かされる時が来たな！」

唐突に後ろで携帯ゲーム機を片手にした圭吾が両手で拳をつくっ
て歓喜の声をあげた

……ん？両手？

「……ゲームはどうした？」

「えっ？……あああああああああ！……？……？」

今度はタイル床の上でノイズ音をあげる携帯ゲーム機を見て絶叫
する圭吾

もっこれは一種の芸として確立できるのではないだろうか……な

んにせよ圭吾に使われた携帯ゲーム機が不憫でならない

「まあ、ルーザー駆除についてはオマケみたいなもので、本来の目的は深夜0時から明日の1時にかけて行われるメンテナンスの間のエリア移動です」

舞は床に這いつくばりながら呻く圭吾の事など意にも介さないと
いった様子で話を続けた

他のメンバーも誰一人圭吾に目も向けていないところを見るとど
うやら日常茶飯事のようにだ

「……少し早すぎないですか？まだ午前9時を回ったばかりですよ
？」

そう言ったのはミステリーものの文庫本を片手にした美波である

「それでも早めに移動しておくに越した事はありません、いざエリアを出ようと動き出した時ルーザーに襲われるという可能性も捨て
きれませんからね」

「えーと……つまり？」

部屋の隅で一人知恵の輪に奮闘していた千尋は話についていけな
かったようで首を傾げながら問いかける

それに対して舞は懐から一枚の紙を取り出して言った

「つまり、皆さんにはこれから明日深夜0時から深夜1時までの間、
Cエリアで各自自由に過ごしてもらいます」

舞はそう言って取り出し、テーブルに広げた紙、もといこの世界

の地図を指さした

「よっしゃキタアアア!!」

先程まで世界の終わりのような顔をしていた圭吾が唐突に起き上がり、再び歓喜の声をあげる

自由というのがよほど嬉しいんだろう、その顔はやけに艶を帯びていた

「でも各自自由っていうのは少し危ないか……？ルーザーに襲われた時対処できないんじゃないか……」

そう言ったのはこの俺、八伏恭介

先日、というか今日の深夜ルーザーに三度も殺されかけたばかりなのだ

一人一人別行動というのは最早死亡フラグにしか聞こえない

「その点は心配ありませんよ」

舞はそう言うのと懐から長方形の物体を取り出して俺に手渡す

俺は手渡されたソレを色々な角度から凝視してみる

重さ、質感、見た目……間違いなく、携帯電話だ

「もし万が一何かがあったらそれで連絡を取ってください、ちなみにその携帯にはすでにここにいる全員の電話番号とメールアドレスが登録されています」

「……用意周到だな」

「ええ、八伏さんと水ヶ沢さんがルーザー退治に出かけている間に

ささつと終わらせてしまいました」

俺は二つ折りになった携帯を開く
どこにでもある普通の携帯……

試しに中身をのぞいてみると舞の言うとおり、水ヶ沢美波、畝畑舞、伊勢圭吾、高島千尋、この場にいる俺を除いた全員のメールアドレスと携帯番号が登録されていた

「それに今回移動するのはCエリア内だけです。なので助けを求めればすぐに誰かが駆けつけられるでしょう」

「なるほど……じゃあ異論は無しだ、俺も少しロストを探索してみたいと思ってたところだしな」

「決まりですね」

舞はにっこりと微笑み、手を合わせる

そして席を立ててその場にいる全員に聞こえる声で言った

「ではメンテナンスに向けてのエリア移動及びルーザーの駆除を只今より開始します。各自解散してください」

その後、俺たち5人は舞の宣言で解散し、各々が好きな方法でエリアCへと向かった

美波は本屋、舞は喫茶店、圭吾はゲーム屋、千尋は……家具屋
ここまで見事に統一性がないのも逆に珍しい

ちなみに俺は今、どこまでも続く青空の下誰もいない歩道で黙々と歩を進めていた

少し視線を横にずらしてみる

……車が一台も通っていない道路というのはやはり何度見ても慣れないものだ

「ふう……」

何の気なしについた溜息が辺りに響き渡る

……確かにこの世界の探索をしたいというのは本音だ

しかしいざ歩き回ってみると何をしていいのかさっぱり分からない

適当に目についた100円ショップにでも入ってみようと思ったが、特に欲しい物もないのでどうせすぐ飽きるだろうと予想し足を止める

俺はおもむろに制服のポケットから舞に渡された携帯を取り出した
二つ折りになった携帯を手首のスナップで開き、画面を見つめる
そこには水ヶ沢美波、畝畑舞、伊勢圭吾、高島千尋の文字

「……よし」

一つ大きく息を吐き出してから携帯を二つに折り畳んで制服のポ

ケットへと滑り込ませる

そして俺は再び歩を進めた

まずは……あの人の所だ

イベント？15 「ティータイム」

……あれから数十分くらい歩いただろうか

学校を出発した時、あの人物が向かった方向を必死で思い出しながら路地の奥へ奥へと進んでいき、そして今俺はある小さな店の前に立っていた

レンガ造りのレトロな外観、立てかけられた看板には「喫茶レオ」の文字……店内から流れてくる小粋なジャズも相まって、いかにも隠れた名店といった雰囲気を漂わせている

「ふう……」

俺は扉の前で一度軽く深呼吸

そして数秒ほどの間を空けてそのアンティーク調なドアノブに手をかける

ひんやりとした冷たい感覚……俺はドアノブを捻り、扉を押し開けた

ドアベルが独特の音を奏で、狭い店内にその音色が響き渡る

そして、それによって一人小さなテーブルの前でティーカップを傾ける女性はこちらに気付いたようだった

レトロな雰囲気を漂わせる店内で古ぼけた椅子に腰を掛けながら一人紅茶を啜る制服の少女

「あら、八伏さん」

それは案の定、畝畑舞だった

「……すまん、お楽しみのところを邪魔して」

「いえいえ、そんな事はありませんよ、誰かとお喋りをしながら飲むお茶というのものなかなか味がありますから……どうぞ八伏さんも座ってください」

舞はそう言って手招きをする

俺はそれ以上何も言わずに舞の言葉に甘えて歩を進めると、もう一つの椅子に腰を掛け、ちょうど舞とテーブルを挟んで向き合う形になった

しかし舞はすぐに席を立ち、「少し待っていてくださいね」と言い残して店の奥へと消える

それからしばらくして、ようやく舞が湯気を昇らせる上品な柄のティーカップを片手に緩やかな足取りで戻ってきた

「どうぞ、当店自慢のロイヤルミルクティーです」

舞はにっこりと微笑んでテーブルの上に一杯のロイヤルミルクティーを置く

「急に押しかけてきたのに……なんか悪いな」

「いえ、八伏さんはお客さんですので」

そう言って舞は向かいの椅子に腰をかけた

テーブルが小さいせいかにこやかに微笑む舞の顔がやたらと近い

「……っ」

それに気恥ずかしさを覚えた俺は慌ててカップに口をつける

……良い香りだ、味の方も手がかかっていることが容易に想像で

きる。要するに

「美味い……」

「それは良かったです」

やはり常に紅茶を飲んでいるだけあって紅茶の極意なるものを会得していたりするのだろうか、と言うくらいに舞の淹れた紅茶は美味しい

そんな俺の様子を見て舞は嬉しそうに微笑むと、飲みかけの紅茶が入ったカップを手にとった

しばらくの間、店内をアンティークな振り子時計の時を刻む音と古ぼけた蓄音機から流れるジャズの音楽だけが響き渡る

それは耐え難い沈黙などではなく、心の安らぐ落ち着いた空間

……しかし、それを先に破ったのは意外にも舞だった

「そういえば八伏さん、私に何か用があつて訪ねてきたんじゃないですか？」

俺はティーカップを傾ける手を止め、視線を舞に向けてみる

やはりいつもと変わらない微笑みを浮かべながらこちらを見つめていた

……だからこの人と喋るのは苦手なんだ

と思いつつも、このままずっと見つめられていては気になって仕方がないので、俺はカップをテーブルに置いて口を開いた

「……なんでも舞はここにいるプレイヤーたちの中じゃ一番昔からロストにいるみたいじゃないか、だからちょっと色々聞いてみようと思つてな」

「あれ？バレちゃいましたか？」

舞はおどけた風にそんな事を言う

あれだけあのメンバーをまとめておいて白々しい人だ

「まあ冗談はさておき……私が答えられる範囲の質問なら何でもどうぞ、……あ、スリーサイズの質問でも構いませんよ、自信ありますので」

……この人こんなキャラだったっけか？

とりあえずスリーサイズについては聞かなくても凄いとこと事だけは分かるので後回し

俺が本当に聞きたいことは……

「削除人の事だ」

舞の動きがぴたりと止まる

そして舞は顎に手を当てて、悩むような素振りを見せた

「んー……いつか聞かれる気はしてましたが……」

舞は何かを躊躇っているようで、しばらく唸った後でやっと決心したように顎から手を離す

「……まあ、八伏さんもこの世界で生きていくつもりなら聞いておいて損はないでしょう、知っている限りの事は教えます」

「……？」

「この世界で生きていくつもりなら……？」

「ちょ、ちよつと待て、アイツは舞がストレイ・チャイルドで殺し……倒しただろう」

俺はまだ鮮明に覚えている

つい先刻、俺と美波が削除人に襲われていた時、駆けつけてきた舞のプレート？ストレイ・チャイルド？の集中砲火により削除人が爆風に包まれたのを

ただの一撃でも凄まじい破壊力だというのに、アレを一気に六つ

……

確認せずとも生きていないことは容易に分か

「生きてますよ」

……る……？

「生きてる……って……」

「言葉の通りです。削除人は生きていますよ」

舞の口によって告げられた事実には俺は開いた口が塞がらない

「あの程度で削除人を倒せるのなら苦労はしません、あれはあくまでも爆煙による目くらましですが目的でしたから……おそらく削除人は無傷でしょう」

「無傷って……それじゃまるで人間じゃないみたいじゃないか……！」

「ええ、人間じゃありません」

即答

「ちなみにこれは比喻でもなんでもありません、本当に、正真正銘、人間じゃないんです」

もう言葉が出てこない

数刻前、俺たちの出会った腰まで伸ばした黒髪と黒を基調とした制服が印象的なあの少女

あれが……人間じゃない？

「削除人と戦っている時、八伏さんも薄々気付いていたでしょう？」

舞にそう言われて俺は思い出す

3階建てデパートの屋上から飛び降りても無傷な肉体、そしてあの無感情な殺意

確かに人間離れしているが、それでも……

「……私が削除人について知っている事は全部で3つありますが……聞きたいですか？」

舞は心配そうに尋ねてくる

本当の事を言うと何も聞かずに心の中にしてしまっておきたい

……しかしここで真実を知っておかなければ何の意味もないのだ

「……大丈夫だ、続けてくれ」

「……分かりました」

舞はそう言って右手の指を三本立て、その内の一本を折って続けた

「まず一つ……これは八伏さんも知っているでしょうが、削除人はこのロストでのルールを破ったプレイヤーを消しに来るNPCです。メンテナンス対象となったエリアへの出入りなどがこれに当たります」

俺たちの時は、レベル2ルーザー戦での急激なプレートのレベルアップがルール違反とみなされ、結果的に削除人に襲われることになってしまった

結局どうしてレベルアップが起きたのかは分からずじまいだったが……

まあ今はそんな事どうでもいい、重要なのは削除人の事だ
俺は舞の目をしっかりと見据え、それを確認した舞は二つ目の指を折って続けた

「もう一つ、削除人は間違いなくプレートを持っています。しかもかなり高レベルなプレートを」

プレート

俺たちプレイヤーがルーザーに対抗するために最も有効な武器……それを削除人が持っている？

「能力は？」

「そこまでは分かりません……削除人は単純な戦闘能力だけで並のプレイヤーを上回りますので、そもそもプレートを使う必要性がないでしょう」

プレートをを使用したプレイヤーの身体能力を上回る……

それがどれほど人間離れた事なのかは先のレベル2ルーザー戦で実証済みだ

……気付けば全身が震えていた

俺はなんとか全身の震えを止めて、再び舞の目を真っ直ぐと見つめる

「ではこれが最後です……」

舞が躊躇いがちに最後の指を折り、言った

「……八伏さんは覚えていますが、キャラメイクの時の事を」

「え……？」

その突拍子もない質問に俺は思わず聞き返す

「……プロローグの事です」

「ああ、あの魔王がどうたら〜ってやつの事が……？」

舞が無言で頷き、言葉に詰まる

その質問の意図は分からない

しかしこの先を聞いたら後には戻れない、俺の直感がそう伝える

……だが、ここまで来て引くわけにはいかない

そんな様子を見て俺の決意を読み取ったのか、舞はようやく口を開き、そして言った

「八伏さん、削除人はNPCなどではありません、間違いなくこの

世界の？魔王？です」

古ぼけたレコードから流れる音楽は、
完全な沈黙で支配され
たその空間内ですらも鳴り続けていた

イベント？16 「ショッピング」

「八伏先輩！これどうですか！」

「いや、どうって言われても……」

俺は目の前のちっこい少女、もとい高島千尋が差し出した毒々しい観葉植物（のような何か）に対して返す言葉が見つからず言葉に詰まる

……いや、そんな満面の笑みで聞かれても答えられないものは答えられない

「えー、でもこれマイナスイオンとか出そうですねよー」

「……どっちかっていうと目に入ったら失明するタイプの毒液吐きそうだ」

千尋は不満そうに口を尖らせ、渋々とその観葉植物（のような何か）を元の場所に戻してくる

一応説明しておく、ここは先程俺が立ち寄ったレトロな喫茶店から歩いて十数分ほどの場所にある大型の家具店

舞との話が終わった後、ここに女子中学生……もとい高島千尋がいることを思い出して立ち寄ってみた所存である

……まあ本当の事を言っていると迷いに迷った挙句歩いて十数分のところを数十分もかけてしまい、諦めて帰ろうとしたところですよやくここを見つけたんだけどな、割愛

「じゃあ八伏先輩！これならどうです！？」

千尋は小動物を連想させるすばしっこい動きで何かを抱きかかえながら俺の元へと戻ってくる

円柱型のずんぐりとした出で立ち、銀色のボディ、そしてペダル……どこからどう見てもただの足踏み式ゴミ箱である

「……どうって言われても」

二回目

千尋は速攻で拒否されたことが納得できないらしく、その小さな手には余るゴミ箱を抱えながら不満そうに口を開いた

「えー！？いいじゃないですかこれ！ほら！試しにそのペダル押してみてくださいよ！」

「えー……」

正直心底面倒臭いが、俺は千尋に言われるまま腰を下ろし、ゴミ箱の底を片手で押さえてもう片方の手でペダルを押ししてみる

勿論ペダルがこちらに向いた状態で、ましてや千尋がソレを抱え込んだ状態でペダルを押せば結果など最初から丸わかりなわけで

要するに開いた蓋は勢いよく千尋の顔面に直撃し、千尋は「へぶっ」とかくぐもった悲鳴をあげた

俺がペダルから手を離すと、ゴミ箱の蓋は耳障りな音を立てて何事もなかったかのように閉じる

そこには案の定というかなんというか鼻の頭を真っ赤にして目に涙を滲ませる千尋の姿があった

「ねっ……っ？」

「いや、ねっ？って言われても……」

なんでこの子はこんなにタフなんだろうと一抹の疑問を覚つつ、俺は立ち上がって千尋が両手で力なく抱きしめたゴミ箱を取り上げた

「あー！八伏先輩それ返してください！」

「駄目だ、教室にはちゃんとゴミ箱あっただろう、それにこのタイプのゴミ箱は遠くからゴミを投げ入れる快感が味わえない」

つま先立ちで手をバタバタさせながら駄々をこねる千尋を適当にあしらいつつ、ゴミ箱を元あった場所に戻す

そして俺は千尋に向き直ると、頭の上にぽんと手を置いて諭すように言った

「ほら、諦める」

「うっ」

千尋は不服そうに短く呻くと、両手を広げて丁度後ろにあった大型のベッドに仰向けでダイブした

ふわりとスカートが舞い上がり、スカートの隙間からその体系に見合った細めの太ももが覗く

……仮にも女子だろうに恥じらいとかはないのだろうか

「……できればこのベッド持ち帰りたいです」

千尋はベッドの上をごろりと転がってそんな感じの事を呟きながらこちらを見つめる

「さらっと恐ろしい事を言っつな、俺は運ばんどぞ」

「ええー」

千尋はまたも不満そうにそう言っつて再び寝返りをうっつて仰向けになっつた

……それはそうと俺はこんなショートコントをするためにここに
来たわけではない

不意に俺は数十分前に例の喫茶店で舞と話したことを思い出す
本来それを聞くためにここへ来たようなものなのだ

「……なあ千尋」

気付くと俺は自然に口を開いていた

「はい？なんですか？」

千尋はベッドに寝転がっつたまま返事をする
俺は少し躊躇っつてから、続けて言っつた

「削除人っつて知っつてるか？」

俺のその問いに千尋は相変わらず視線を天井に向けながら、大し
て興味なさそうに答えた

「ああー、なんでもこの世界でルール違反をすると消しに来るNP
Cか何かでしたっけ？話だけは聞いたことがありますよ」

「見たことは？」

「ないですねー、私たちの中で削除人を直接見たことがあるのは畝畑先輩と水ヶ沢先輩くらいですから」

千尋はそう言って全身の力を抜き、リラックスの体勢

成る程、やはり美波も初対面ではなかったか
それなら俺が削除人と初めて会った時の美波のあの怯え方も納得
できる

……どちらにせよ舞から聞いた以上の情報は無さそうだ

「そうか、じゃあ俺はそろそろ行くぞ、そのベッドも元に戻してお
けよ」

俺は最後にそう言い残して出入口の自動ドアに向けて踵を返す
しかし数歩ほど歩いたところで俺はすぐに足を止めた
別に呼び止められたわけでもない、いや呼び止められなかったか
らこそ足を止めたのだ

あの少女の事だからってつきり馬鹿でかくて無駄に高い声で俺の事
を呼び止め、色々言ってくると思ったのだが……

「……？」

その違和感に堪えきれず俺は後ろを振り向く

そこには無音になった空間の中で一人、相も変わらずベッドの上
で仰向けになりながら天井の一点を見つめる千尋の姿があった

「……何やってんだ？」

さすがに気になって仕方がないので、俺は一つ溜息をついて再びベッドの前まで歩み寄る

すると千尋は天井を見上げたまま、心ここにあらずと言った様子でゆっくりと口を開いた

「……昔、これと同じ光景を何度も見てた気がするんです」

いつもの千尋からは想像もできないすぐに消えてしまいそうな細かい声

「毎日毎日……何も考えずにベッドの上で同じ天井ばかりを見上げていて、外から聞こえてくる声が嫌になって耳を塞いで……」

それは俺に向けられた言葉ではなく、まるでどこか遠い場所にいる自分に言い聞かせるような口調

「……元の世界の話か？」

「さあどうでしょうね、思い出せません」

千尋はいつの間にかいつも通りの口調に戻っており、どこか弱弱しい微笑みを浮かべながらベッドから飛び降りた

「じゃあ次はどこ行きましょうか八伏先輩！私としては甘いものが食べたい気分なんですけど……」

千尋は顎に指をあてて考える素振りをして見せる

どう見ても活発で元気で普通な、女子

なのに俺にはどうしても、その少女の態度が取り繕ったようなものにしか見えなかった

「元の世界に戻りたいとは思わないのか？」

ほとんど反射的に口をついてその言葉が出てくる

直後、千尋はいつも通りの眩しい笑みを浮かべながら、一言

「冗談じゃないですよ」

俺は思わず口をつぐんだ

その小柄で華奢な少女の放った言葉が持つ圧力のようなものに押し潰されて

「私はこの世界が気に入ってるんです。皆が笑って楽しく自由に過ごせてなんのしがらみもないこの世界が、分かりますか八伏先輩」

千尋が一步前に歩み出た

身長で言えば俺の胸辺りまでしかないはずなのに、それでも俺は圧倒されてしまう

まるで金縛りにでもあったかのように全身が動かなくなり、後ずさりをするこさえできない

「それとも八伏先輩はこっちに来たばかりだからまだこの世界の良さに気付いてないだけなんですかね、ねえどうなんです八伏先輩は」

千尋の顔が目の前に迫ったその時、突如自動ドア付近からガラスの割れるような凄まじい音が鳴り響いた

「！？」

辺りを包む緊張した雰囲気は解け、千尋と俺はほぼ同じタイミングで後ろへ振り返る

それと同時に全ての外に通じる窓が派手な音を立てて叩き破られ、窓の隙間から黒い何かかわらわらとあふれ出した

あえて形容するなら溶かして液状にした黒一色のゴムが意思を持ったような、そんな不気味な動きとともに液体が人の形を作り出す

俺がロストに来てからこれで3度目の対面、できることなら二度と会いたくなかった

「ルーザー……！」

イベント？17 「ハイディング」

狭いところで女子と二人きり

それは全国共通、世界中の男子が興奮するシチュエーション

……しかしそんな究極の持論にもやはり例外というものは存在するのだな、と私こと現役男子高校生八伏恭介は身を以て実感した

「（千尋、まな板が当たって痛い、元の場所に返してこい）」

「（誰がまな板ですか！）」

千尋が声のポリウムを最低まで下げて反論する

ちゃんと声を押し殺してはいるが、やはり耳元で怒鳴られるとそれなりにうるさい

「（知ってるんですよ！男の人はこういう控えめな胸に弱いつて本で読みましたから！揉みますか！揉むんですか！？）」

千尋は顔を真っ赤にしながら自らの胸を強調するように胸を反らせた

……うむ、見事な曲線である

「（……お前の胸揉むくらいだったら家で唐揚げ作ってた方が楽しいわ）」

「（ぐっ……！）」

千尋が悔しそうに拳をつくり、歯噛みをする

状況が状況でなかったらそのまま殴り抜けそうな勢いだ

「おい千尋、もうちょいそっち詰めてくれ、背中が見えてる」

「（ちょ！先輩マジでやめてください！転びます！転びますって！）」

「（お前の屍は越えていく）」

「（越えないでくださいっ！！）」

千尋は短い手足をばたばたとさせながらなんとかその場で堪える
さながらひっくり返って起き上がれなくなったミドリガメと言っ
たところか

どちらにせよ小動物的な何かなのは間違いなかった

俺はなんとか堪えようとする千尋の額を人差し指一本で押さえ、
絶妙なバランスを保ちながら口を開く

「（しかしこれはなかなか絶望的な状況だな……）」

ふと展示品の筆笥の裏から顔を出して外の様子を伺う

数分前まで誰もいなかったはずの空間、そこには黒一色で染まっ
た異形の怪物たちが我が物顔で闊歩していた

ルーザーどもの生気を感じられない動きは昔見たゾンビ映画を彷彿させる

数は3、4……7匹、全てレベル1ルーザーだが……少々数が多
すぎだ

「（ここから出入り口はほぼ真反対、走り抜けていこうにも間違
なく途中で見つかる……かといって倒すとしてもこの数だ、さてど
うしたもんか……）」

「（とりあえず離してください！転びます！転びますって！）」

視界の隅でバタバタしている小動物の要望は華麗にスルー

俺は空いた片手で千尋の制服の胸ポケットに入った長方形の物体を取り出す

ピンク色のいかにも女子らしいそのデザイン、無論、千尋の携帯である

「（ああ！八伏先輩何してるんですか！）」

千尋は更に両手をバタバタさせて俺が手に持った携帯を取り返そうと奮闘する

が、こんな幼児体型の少女が一般的な男子高生である俺にリーチで勝てるわけもなく、振り回す手は空しく空を切った

それでも尚両手をぶんぶんと振り回す千尋に、俺は二つ折りになった携帯を開きながら言う

「（馬鹿！助けを呼ぶんだよ！美波か舞を呼べばこの程度のルーザーはすぐに片が付く！）」

「（あ、なるほど！）」

千尋はやつと俺の意図が理解できたようで、つま先で絶妙なバランスを取りながらぼんと手を合わせる

……なんか誰かを忘れてる気がするが多分それは気のせいだ

と、そんな事を頭の中で呟きながら俺は千尋の携帯からあの二人にヘルプをかけるべく携帯画面を凝視

しかしそこに映っていたのは真っ黒な画面に反射する自分の顔だ

った

「（……なんだこれ？）」

千尋に視線を向ける
すると千尋は思い出したようにいい笑顔で

「（ああ、そういえば少し前にテトリスで遊んでて電池切れてたんです）」

「（この大馬鹿野郎！）」

「（ひどい！）」

押し殺した声でのショートコント

俺はとりあえず千尋の携帯を自分のポケットに突っ込むと、代わりに舞から渡された俺専用の携帯を取り出す

電話帳を開き、中から舞の名前にカーソルを合わせて……

「（私の携帯返してくださいー！）」

通話ボタンを押そうと思ったのだが……視界の隅バタバタしてると小動物が気になり始めてきたので俺は額を押さえていた指をさつと
離す

後々考えたらこれもフラグだったんじゃないだろうか

……まあ今となっては遅い事だが

「あっ」

「おっ」

そう、俺の指によって絶妙なバランスを保っていた千尋が勢い余ってこちらに倒れかかってきた今となっては

「おおああっ！！？」

千尋は俺に覆いかぶさるような形で倒れ掛かり、しゃがんだ状態で千尋の全体重をかけられた俺は、声押し殺す事さえ忘れた間抜けな悲鳴と共に派手な音を立ててフローリングの床に叩き付けられた

「いたいです……」

千尋が呑気に俺の上で赤くなつた顎をさする

それと同時にルーザーどもの視線（目がないので視線と言つのかどうかは分からないが）が一斉にこちらへ集まつた

「やべっ……」

俺の頬を冷や汗が伝う

そして少し遅れてようやくこの状況に気付いたのか、途端に千尋の顔が青くなつた

「ややや、やばいですよ先輩……！どうするんですか……！」

千尋がルーザーの方に視線を向けたまま下敷きになつた俺の制服の襟を掴んで激しく揺さぶる

元はと言えばこいつのせいなのだが……まあ今は関係ない！

「……っ！決まってるんだろ！」

俺はそう言っつて千尋の手を払いのけ、ついでに上に乗った華奢な少女もどけて跳ね起きる

「強行突破だ！」

後ろで箆笥に頭をぶつけて頭をおさえる千尋は放っておき、俺はルーザードもに向かってそう叫んだ

イベント？18 「エンター・ザ・ドラゴン」【前編】

拳を、握る

体全体に捻りを加え右腕を後方へ引き、視界の先にはしっかりと対象を捉える

スニーカー越しに、足の裏でフローリングの床を掴む

無限とも思える程に引き伸ばされた時間

時間が動き出した

次の瞬間、俺は全体重を乗せて振りかぶった拳を目の前のルーザーの顔面に叩き込む

拳が触れると同時に右手に走るひんやりとてぶにゆぶにゆとした不気味な感触、例えるなら水でいっぱいになったゴミ袋といったところか

できることなら素手で触りたくはなかった、が……この際贅沢は言ってられない

俺はルーザーの顔面にめり込ませた拳にそのまま力を込めて……殴り抜ける！

「ッ！」

掛け声とともに俺の拳がルーザーの顔面を打ち抜く

拳によるこれ以上ない渾身の殴打、凄まじい打撃音とともにルー

ザーは体を後ろに反らせ、そのまま頭部から床に激突　しなかった

「なっ……！？」

俺は一瞬その光景に自分の目を疑った

背骨のある生き物ならばまず不可能、まるで軟体動物のようにしなやかな動きで……手を使わないブリッジと言えば分かり易いだろ
うか

要するにルーザーは俺の拳がクリーンヒットし今にも倒れんと体を反らせたにも関わらず、その体勢で持ち堪えたのだ

ルーザーの上半身がゴムのような弾力で元に戻る

まるで巻き戻しのような……非生物じみた動き

「チツ……!!」

俺は目の前のルーザーの胸部に前蹴り

それをマトモに食らったルーザーはそのまま後ろに弾き飛ばされ、体勢を崩す

しかし当然この程度の攻撃はダメージにすらなっちゃいない

ルーザーが体勢を立て直す前にすかさず距離を取り、辺りを見回してみる

どこに視線を向けても視界に映るのはルーザー、ルーザー、ルーザー

下手したら泣いてしまいそうぐらい不気味な絵面だ

「 八伏先輩! 」

後方からの俺の名を呼ぶ声に俺は咄嗟に後ろを振り返る

そこにはようやく箆笥にぶつけた頭頂部のダメージを回復し終えたらしく、立ち上がって声を張り上げる千尋の姿があった

「ルーザーには痛覚がなく内臓もありません！なので弱点はありませんよ！」

「なんだそりゃ！？じゃあどうやって倒すんだよ！」

怒声にも似た声をあげながら、俺は目の前まで迫ってきたルーザーを同じように前蹴りで距離を取る

「ルーザーと言えどある程度のダメージを与えれば倒れます！それと頭部や胴体へのダメージはあまり決定打にはなりません！手足の破壊を狙ってください！」

「っ……！また面倒な注文を……！」

再び目の前まで迫ってきたルーザーの顔面を拳で殴り、体勢を崩したところでお馴染みの前蹴り

動きが遅いのが唯一の救いだ、これではいつまで持つかなんてたかが知れている

それに俺は今、先のとレベル2ルーザー戦でかなり体力を消耗しているのだ

対してルーザーどもは疲れの色など微塵も見せずにくっくりと俺との距離を縮めていく

これでは囲まれるのも時間の問題

「仕方ない！」

俺は眼前まで迫ったルーザーに今出せる最高の力での前蹴りを食らわせる

ルーザーは周りのルーザー何匹かを巻き込んで床に倒れ、その間ルーザー達の進行が止まった

そこに生じた僅かな隙に俺は制服の胸ポケットから？デイ・コンポーター？のプレートを取り出す

レベルアップの件や削除人の件もあつて正直余り気は進まないが……今ここでこいつらに殺されるよりはマシだ

「いくぞ！」

俺はプレートを左手の甲に押し当てる

プレートはいつも通り淡い光を放ちながら液体のように溶け出し、肌から体の内部へと吸収されていく

体の中が満たれていく感覚……

そして、プレートが完全に俺の手の中に溶け込んだ時、左手の甲には数字の「1」が浮かび上がっていた

「やっぱりレベルは元に戻ってるか……」

何度か左手で拳をつくったり開いたりして感覚を確かめる

握って、開いて、握って……うむ、特になんともない

あれほどの大きさのものを体内に取り込んで違和感一つないというのがまた不思議ポイントだ、多少の疲労感を感じるが

「感度良好、じゃあルーザー駆除の時間だ！」

俺はそう言って、すぐ近くにあったガラス製の天井が張られたお洒落なテーブルに左手で触れる

それと同時に、テーブルは無数のパチンコ玉大の粒となり四方八方へ飛び散った

「おー！」

後方から千尋の感嘆の声が聞こえる

俺はその期待の眼差しのようなものを背に受けながら、床に転がった粒の上を平行に右手を走らせた

集めるのは ガラス

俺がその頭の中で念じると、右手に同じ色をした同じ種類の粒だけが集まりだす

まるで俺の右手が磁気を帯びているかのように、吸い寄せられるように集まった粒が右手を覆い尽くした

そして 合成

俺の右手を覆った粒が形を失い、元の形へと姿を変えていくもつとも、元の物質に比べればもつと薄くて鋭いが

「オラア！」

俺は地面に平行に振った右腕の勢いをそのままに、目の前のルーザーの足めがけて右手を思い切り振り切った

鮮やかな音を立て、ルーザーの両脚が膝の少し上あたりの位置で切断される

それから少し遅れて何かのずれる音、そして自身の体を二つ……いや、三つに分けられたルーザーは、まるで歪な積み木を崩すかのようにその場に崩れ落ちた

「即興で作ったガラスのブレードだったが……なかなか良い具合だな」

俺の右手を覆った透明な刃が照明の光を反射する

咄嗟のアイデアだったがなかなかの切れ味だ、誤って自分の手を切り落とさないよう気を付けなくば

「先輩！それめっちゃかつこいいです！そのプレートください！」

「うつせえ！いいからお前も自分のプレート使って手伝え！」

後ろで呑気にも目を輝かせながら羨望の眼差しを浴びせる千尋を怒鳴りつける。

積みもり積もった疲労のせいか息が荒く、怒鳴り声一つあげるにも一苦労だ

以前、戦闘の度にわざわざプレートを取り込む美波や舞やらを見て疑問に思った事があったが……合点がいった、プレートは使用時の体力の消耗が激しすぎるのだ

一回目の使用時はそれどころではなかったため気にしなかったが、今改めてそう感じる

徐々に疲労が蓄積されていくこの感じ……まるで全身に粘土をくっつけながら動いてるようだ

これでは残り六匹のルーザーを倒す前に俺が倒れてしまう

「千尋！確かお前のプレートはレベル2だったよな！？」

すぐ近くまで迫ったレベル1ルーザーの片手をガラスのブレードで斬り落とし、千尋に言う

千尋は多少戸惑いながら「は、はい」とかそんな返事をした

「なら俺より強いんだろ！？早くプレートを使え！このままだと共倒れだぞ！！」

右手を纏ったガラスの刃を横一線薙ぎ払う、しかし積み重なった疲労のせいもあってか刃は空しく空を切った

「わ、私のプレートは見た目が悪役っぽくて……！」

「殺されたら元も子も無いだろうが！」

ルーザーが腕をしならせ、まるで鞭のように俺の頭部へ振り下ろす
俺はすかさずそれを右手のガラスのブレードで斬り落とし、ルー
ザーの腕が宙を舞った

「で、でも……！」

千尋はまだプレートを使う事を躊躇っているらしく、千尋らしく
ない気弱な態度でおろおろとしている。

……多分あの時の俺は疲労やらなんやらでストレスが溜まってい
たのだろう

だって普段の紳士な俺なら絶対にあんな事は言わない、神に誓っ
てもいい

ただあの時は極限状態と積み重なった疲労とその他諸々etcで
少し怒りっぽくなってただけなのだ、ほんの気の迷いだ

そうじゃなけりゃアイツに向かって

「いいからさっさとやれこの 幼 児 体 型 ！！」

なんて言うはずがないのだから

「なっ………！」

瞬間、千尋が丁度驚きと怒りを足して2で割ったような表情で顔
を強張らせる

そして2秒……3秒……

どれくらいの間が空いただろうか

何分こちらら頭の中が真っ白だったためよく覚えていない
だが、これだけは覚えている。

俺が自分の発言を悔いたのと、ほぼ同時だった

顔を真っ赤に紅潮させた千尋が制服の胸ポケットから？ドラゴン
？のプレートを取り出したのは

「だ、れ、が、幼児体型ですかあああああああああ！！！！
！」

その建物全体に響き渡るほどの怒声とともに、千尋の持ったプレートが制服越しに左肩へとあてがわれ、淡い光を放ちながら体内に吸収されていった

直後、千尋の体の末端から徐々に硬質化していき、肌はまるで鱗のように逆立ち始め、歯や爪は肉食獣のように鋭く尖り、両眼が紅に染まる

多分人間と爬虫類系の動物の割合を7：3ぐらいにすればこのように姿になるんじゃないだろうか

しかし、そんな悠長な事は言っている場合ではなかった

「八伏先輩ツ！全身食いしぼりやがってください！！！」

何故なら千尋の双眸が捉えていたのは目の前のルーザー共ではなく、紛れもない俺だったからだ

千尋はその小柄な体軀からは想像もできない踏み込みがフローリングの床を破壊する

そして特に鱗が集中し、大きさが元の数倍程にもなった巨大な拳

が俺目掛けて

「ヤバツ　　！！！！」

直感的に俺の本能が身の危険を感じ取った

俺はあれまで必死に耐えてきた疲労にあえて屈し、体勢を崩す
風景が上に昇っていき、対照的に俺は床に沈む

そして次の瞬間、弾丸顔負けのスピードで迫ってきた千尋の渾身のパンチが、哀れにも俺の前に立っていた片腕のないルーザーの顔面にめり込んだ

ぐちゃっ、とか、べちゃっ、とかそんな音がした

ほら、よくあるだろう？飛んできた硬球を金属バットでフルスイングして打ち返す瞬間をスーパーカメラで見ると硬球がありえないくらいひしゃげるアレ

俺はそれをリアルタイムで目の当たりにしていたのだ

「だっ！！」

千尋が拳を振り切る

同時にルーザーは格ゲー顔負けのやられアクションで後頭部から床に激突し、そのまま2、3度回転して展示用の食器棚にぶち当たった

食器棚が派手な音を立てて粉々になり、ルーザーの関節という関節が明らかにおかしな方向へと折れ曲がる

そしてそのまま食器棚の下敷きとなったルーザーはぴくりとも動かなくなっただ

「………すげえな千尋」

俺はその場から腰を上げて、感嘆の声をもらす

「全然恥じる事ないじゃないか、それ、最高にかっこいいぞ」

その言葉に反応したのか、千尋の肩が後ろからでも分かるくらいにぶるぶると震える

そしてしばらくして千尋はこちらに振り向き、肩で息をしながら言った

「……………後であるベッド運んでもらいますからね」

俺は親指を立てて了解の意を示すと、まるで古臭い刑事ドラマのように千尋に背中を預け、残ったルーザーどもを睨みつける

2対5

不思議と負ける気はしなかった

イベント？19 「エンター・ザ・ドラゴン」【後編】

ここはとある大型家具店1階

アンティークな家具の数々が所狭しと並べられ、それでいて小奇麗な店内は静寂に包まれていた

ただ一つ、四方から聞こえてくる不気味な足音を除いて

「敵は5体、全てレベル1ルーザー……」

辺りを見回してみる

どこに視線を向けてみても黒いゼラチン質の物質を無理矢理人の形に押し固めたような異形の怪物、通称レベル1ルーザーたちが必ず視界に入る

ルーザーたちは生気のない、さながらゾンビのような動きで徐々に俺たちとの距離を詰めていく

さしずめ俺はゾンビに囲まれ自暴自棄になって最後に残った一発の銃弾を自らの脳天に撃ち込もうとするも不発に終わり、無残にもゾンビたちに食われるちよっと嫌味な脇役ポジションと言ったところか、縁起でもない

まあ今はそんなことより

「……どうよ千尋」

俺は首を少し後ろに向け、小さな口から鋭く尖った二本の牙を覗かせながら腰を低く落として臨戦態勢をとる少女、高島千尋に尋ねる
それに対して千尋はこちらに目もくれず、紅く染まった両眼でルーザーたちを睨みつけながら静かに口を開いた

「レベル1ルーザーは弱点がないことによる耐久力さえ除けばそれ

ほど戦闘力は高くありません

……しかし、私のプレート？ドラゴン？は他のプレートに比べて異常に燃費が悪いんです。持って5分……3分で片付けましょう」

こんな状況でもいつも賑やかな千尋は至って冷静だ

本当にこの状況がヤバいからなのかドラゴンのプレートにより爬虫類っぽい見た目になったからなのかは分からない、というかどうかでもない

とりあえず俺は、千尋と同じく腰を低く落とし、右手を纏うガラスのブレードを構えて「オーケイ」と一言だけ千尋に聞こえるか聞こえないかくらいの声量で呟いた

果たしてその声が千尋に聞こえていたのかどうかは分からない

しかし俺と千尋が全く同じタイミングで駆け出していたことを考えるとやっぱり聞こえていたんだと思う

「うおおおおお！！！」

俺は地面を蹴って一気に一番手近なレーザーとの距離を縮め、そのままの勢いで握り締めた左拳をレーザーの顔面に叩き込んだ

それによりレーザーの体がぐらりと揺れる

……分かってる。どうせ大したダメージにはなっていないだろう

だから俺はすかさず右手を纏ったガラスのブレードで体勢を崩したレーザー目掛け、縦一閃

次の瞬間、中空にはブレードが照明を反射させたことによる光の軌跡だけが残り、遅れてレーザーの胴体から切り離された腕が不快な音を立てて床の上を跳ねた

「ッー」

そこへ更にダメ押しの前蹴り
さすがのルーザーも片腕だけでバランスを取る事はできないらしく、後方の食器棚に激突してそのまま食器棚もろとも派手な音を立てて床に倒れ、動かなくなつた

まずは一匹

「たあああつっ!!」

千尋のよく通る声がこの空間内に響き渡る

振り返つてみると、そこにはドラゴンのプレートによりまるで岩石のように硬質化した拳を大きく振りかぶり、ルーザーに渾身のアッパーカットを決める千尋の姿があつた

体格こそ中学生や小学生と見紛う程に小さく華奢だが、そこはさすがプレートと言つたところだろうか

千尋のアッパーにより、ルーザーは大きく体を仰け反らせ、足が宙に浮き、まるでゴミ袋か何かのように軽々と弾き飛ばされた

「すげ……」

戦闘中ということも忘れて思わず感嘆の声をもらしてしまふ

数刻前に見た対レベル1ルーザー戦での美波も凄かったが、これは凄いの種類が違う

美波が技を駆使して労せず最短で敵を倒す技の一号ならば、千尋は何も考えない強引な力押しで敵を捻じ伏せる力の二号つてところか

……などくだらない事を考えていると、千尋のアッパーで弾き飛ばされたルーザーが背面から壁に激突し、骨が粉々になるような嫌な音を立てて力なくその場に崩れた

あの様子では確認せずとも戦闘を続行できるような状態でないの

は容易に分かる。これで二匹目、あと三匹だ

「俺も負けてらんねえな」

誰に言う訳でもなくそう呟いて視線を戻す

こちらに向かつて迫るルーザーを視界に捉え、俺は再び地面を蹴って駆け出した

「おおおおおお!!」

雄叫びをあげながらルーザーとの距離を一気に詰める

手の届くほどの距離まで近づいたところで、ルーザーの腕がまるで鞭のようにしなやかな動きで俺の頭上に振り下ろされた

俺はそれを右ステップで回避、そしてがら空きになったルーザーの脇腹目掛けて右手を思い切り 振る

ずるり、と何かのずれるような音の直後

綺麗に切断されたルーザーの上半身が床に落ち、当然のごとくそのままぴくりとも動かなくなる

これで三匹目……いや違う、四匹目だ

俺は視界の端から端へと弾丸のように弾き飛ばされていったルーザーを一瞥し、訂正

視線を動かしてみると、案の定そこには握り拳をつくった千尋の姿があった

成人男性ほどもあるルーザーをああも軽々と……とんでもない怪力だ、燃費が悪いというのも納得できる

まあそんなことよりも……

「ラスト一匹ですよ先輩！」

どうやら千尋も俺と同じ考えだったようで、そう言って声を張り上げた

「おう！」

それに合わせて俺も右手に全神経を集中、そして 分解
頭の中でそう念じると同時に俺の右手を纏うガラスのブレードが
粒になって四方八方へ弾け飛ぶ

そして更に 合成
弾け飛んだパチンコ玉大の粒が空中で一瞬静止し、再び俺の右手
を覆い始める

作るのはグローブ、頭の中でそう念じる。
次の瞬間、俺の右手を覆った粒は形を失い、半透明な物体が完全
に右手を覆った

そして、なんの迷いもなく一直線に残った一匹のルーザーへと駆
け出す

勿論、千尋も一緒だ

「「おおおおおおお！！」「」

拳を、握る

体全体に捻りを加え右腕を後方へ引き、視界の先にはしっかりと
対象を捉える

スニーカー越しに、足の裏でフローリングの床を掴む

無限とも思える程に引き伸ばされた時間

時間が動き出した

「「「だあああああつ！！！！」」」

俺と千尋、二人が全身の体重をかけて振りかぶった拳が、全く同じタイミングでルーザーの顔面に叩き込まれる

右手を覆ったガラス越しに伝わる気色の悪い感覚

しかし、今回は不思議と気にならなかった

ルーザーの全身が後ろに大きく仰け反り、足が宙に浮く

そこでありつたけの力を込めて、拳を　振り切る！！

ルーザーの頭部が床に触れた、しかしそれでも拳にかける力は緩めない

そのままの力で勢いを緩めず叩き付けるように拳を突き出す

そして俺と千尋の拳は派手な音を立て、ルーザー越しにフローリングの床をぶち抜いた

2秒……3秒……

首から上を床にめり込ませたルーザーが再び動き出す気配はない
それを確認した俺と千尋はほとんど同時にゆっくりと拳をあげ、
息を大きく吸い込む

直後、俺は左手から、千尋は左肩からプレートが飛び出し、金属質な音を立てて地面に落ちた

「つつかれた……」

そしてお互いの背中にもたれかかるように俺たちはその場に崩れ落ちる

「もー……無理です。動けません……」

先程まで千尋の全身を覆っていた鱗は消え、今では元通りの柔肌に汗が伝っている

「ちょっとあそこのベッドで横になってこようかな……」

「駄目ですよ……あれは私のですから……」

息も絶え絶えなせいでいつも通りテンポのいいコメントはできそうになかった

イベント？20 「デート・オア・デリート【前編】」

唐突だが、結果には必ず過程がある

大成功や大失敗、それにはそこに至るまでの過程があり、また、過程にも結果がある

いきなり結果という物質が現れてくるわけではない、どんなに短くとも薄くとも、結果に至るには過程が必要だ

そして世の中には結果が大事だとか過程が大事だという輩がいるが、俺の持論では結果と過程は常に二つでワンセット、二つ揃って初めて一つの物質となる

そこで俺は今の結果に至るまでの過程をゆっくりと一つずつ思いだすことにした

まず2時間ほど前の話、大型の家具店に現れたレベルルーパーどもを千尋とともに掃討

その後、俺たち二人は床の上に座り込み、十数分ほど休憩しばらくして千尋が「お腹空いたんで何か食べに行きましようよー」とかおおよそ高校生とは思えない駄々をこね始めたので、俺たちは近くにあったファーストフード店に立ち寄りハンバーガーを注文、というか俺が作った

勿論、俺は生まれてこの方ハンバーガーなんて作ったことはない……はずだ、何分元の世界での記憶がないのでよく覚えていない
しかしまあ見よう見まねで作った割には意外と上手く出来、千尋はとても満足した様子で恭介製ビツクハンバーガーを4つほど平らげた、化け物である

ちなみに、初めは千尋にハンバーガーを作るお手本を見せてもらったのだが……色々と酷い有様だった

ピクルスはこぼすし、肉は焼きすぎて肉ではない別の何かになるし……おかげで千尋が壊滅的に不器用であるということを知るきっかけとなった

ちなみに千尋製ビックハンバーガーは後で千尋に美味しくいだけかせました、だって勿体無いし

まあここまではいいんだ、ここまでは
問題はその後である

ビックハンバーガー4つを平らげ、ご丁寧にLサイズのバナラシエイクまで綺麗に飲み干した千尋はやたら艶々とした顔で満足げに自らの腹をさすりながら店を出た

対して厨房ですでお腹いっぱいになってしまった俺は、Mサイズのコーラで喉を潤すと千尋に続いて店を出る

そこで千尋は「じゃあ私はさっきの家具店に戻ってベッドの上でくつろいでいますので」とかそんな感じの事を言ってからゆっくりと先の家具店を目指して歩み出し

……ここからだ

千尋と別れ、特に行くアテもなくなったのでとりあえず圭吾が美波辺りのところへ向かおうと歩を進めた俺は

俺は……

思わず眉間を抓む

何故だろう、どうしてこんな事になっているのだろう
考えれば考える程頭の奥の方が痛くなってくる

そんな時、不意にその痛み元凶が声を発した

「おい八伏恭介、あれは何だ」

ゆっくりと後ろを振り向いてみる

そこには黒髪で黒い制服を身に纏い、鷹のような鋭い眼光で飲食店などによく見かけるソフトクリームの置物を見つめる少女の姿が
どうしてこうなった

どこかで聞いたようなそのフレーズが頭の中を10往復くらいしている

本当に

どうしてこうなった

事の発端は今から十数分前

Mサイズコーラの炭酸で満腹になってしまった俺が大して意味もなくブラブラと歩き回り、

適当に周りの看板やなんやらに目を移しながら、頭の中で次は美波か圭吾あたりのところにもあたってみようか、などと呟いていた時の事だ

唐突に視界に何かが映り込み、俺はふいに足を止めた

「ん……？」

目を凝らしてみる

俺の視線の先、そこにはよく分からないが黒くて丸まった何か

あつた

俺は決して視力が悪い方ではない、ただそこにあるソレはどうしても黒くて丸まった何かとしか形容できなかつたのだ

歩を進めるのはやめずに、限界まで目を細めながら自分から数十メートルほど先にあるその物体の解析を急ぐ

よく見るとその物体は動いている。……気がする

大きさ的にはしゃがんだ人間ぐらい

初めはルーザーかと思いきや身構えたが、どうやらそれも違うらしいだから俺は慎重に、慎重にその何かとの距離を詰めていく

そしてやっとその物体が何かを認識できる距離まで近づいた時

「へえあ!？」

びっくりしすぎて変な声をあげてしまった

だって、その丸まった何かの正体が、腰まで伸ばした黒髪と身に纏った黒を基調とした制服が印象的な少女

すなわち、数刻前に俺を殺そうと襲い掛かってきたあの削除人だつたからだ

「……何だ八伏恭介」

さっきの声でこちらに気付いたのか、それとも前から気付いていたが俺の声で気を悪くしてこちらを振り向いたのか

無論、そんな事はへっぴり腰で両手を顔の前で構え、どこぞの光の巨人のようなポーズで華麗にバックステップを決めた俺にとって関係のない事だつた

そして、沈黙

歩道のと真ん中、しゃがんだまま無表情でこちらを見つめる少女と、それに対して一定の距離を保ったままファイティングポーズをとる男子高生

端から見れば相当間抜けな画だろうが、俺は至ってマジ本気、自分でさっぱり意味が分からないが要するにそれだけ真剣なのだ

「……だから何だと聞いている」

再び削除人が口を開く

心なしが先程より語調が強い

「そそそそれはこっちの台詞だ！来るならきやがれ！返り討ちじゃ
！！」

それに対して俺はあまりにも焦りすぎて、思わず漫画のような嘔み方をしてしまう

無理もない、だってこいつは少し前に俺の事を殺そうとした得体の知れない人間だ

ましてや、つい先ほど舞から削除人は人間じゃないだとかこの世界の魔王だとか、突拍子もない事を言われたばかりでパニックなう

「……何を言っているのか分からないが、私が削除を執行するのはこの世界のルールに背いたプレイヤーのみだ」

声がひっくり返ったりしきりにポーズを変えて相手を威嚇してみたりする俺とは対称的に、黒髪の少女こと削除人は冷ややかな視線を浴びせながらそんな事を言った

「でででもお前は少し前まで俺を殺そうとしてただろうが！」

「その喋り方をやめろ、耳障りだ」

「はい……」

削除人のただでさえ鋭い眼光で睨まれ俺はすっかり萎縮してしま
う、ついでにあのポーズもやめた

それにしてもなんで普通にはいとか言っちゃってるんだろう俺

俺が黙ったのを確認すると、削除人はようやくその獲物を狩るよ
うな視線を俺から外して続けた

「……すぐエリア外に出ようとしていたところを見ると貴様も知っ
ていたんだろう、指定エリアを出れば削除対象から外れるという事を
そして結果として貴様は逃げ切った、もっとも邪魔が入らなけれ
ば確実に削除していたがな……」

つまるところ八伏恭介、貴様はすでに削除対象から外れている。
ゆえにもう削除する道理はない」

……何だその自分ルール

こういう場合ルール違反した奴はたとえ便所に隠れていても息の
根を止めたりするんじゃないのか、よく分からない

「だがそちらから攻撃してきた場合は別だ、削除人に危害を加える
ことは立派なルール違反だからな、即刻削除する」

今一瞬だけ頭の中をよぎった「今なら攻撃し放題なんじゃ？」と
いう甘い考えがすごい勢いでどこかへ飛んで行った

というかもし攻撃OKだとしても無抵抗の女子を一方的にボコボコにするっていうのは気が引けるし、第一こいつは睨んだだけで一人殺せそうなので却下

しかしいくら（自分）ルール上OKだからと言って数時間前殺そうとしていた相手と普通に話すというのはアリなのだろうか

「だから言っているだろう、八伏恭介、貴様は削除対象から外れている。よってもう削除する必要はない」

削除人は相も変わらず無表情で冷たい視線を向けながらそう言う……なんだろうこの温度差、まるで勝手に俺だけが騒いでるだけみたいじゃないか、実際そうだが

……ともあれ、あちらから攻撃してこないというならばそれに越したことはない

「そ、そうかい、じゃあ俺は用事があるんでこの辺で行かせてもらうぞ」

俺は一言そう言ってしゃがんだままこちらを見上げる削除人から距離を取り始める

こつこつ時は確か目を見ながら決して背を見せずに後ずさりながら距離をとっていけばいいんだよね……

しっかりと削除人の鋭い眼光を見据えたまま、俺は一步、二歩と後ずさっていく

オーケーオーケー……これなら大丈夫、何も問題は……って、あれ？立ち上がったぞ

俺は更に一步後ろへ後退、ついてきた

俺は素早く後ろへ後退、素早くついてきた

ついに我慢できなくなつて俺は背を向けて駆け出した

さすがにこれなら大丈夫だろうと、ある程度進んだところで後ろに視線を向けてみる

案の定というかなんというか、真後ろにいた

そして冒頭へ戻る

「ふむ、要するにあれは糖分を豊富に含み、更に体温の低下を促す食物なのだな」

……一応確認しておくが削除人が呟いているのはソフトクリームの話である

それだけ聞くと、決してうだるような暑さの中でおやつ感覚に食べる物とは到底思えない、というかソフトクリームを知らなかったことに驚きだ

ついでに自分を殺そうとしていた相手に対し、ソフトクリームについて丁寧に説明してやった俺の親切さにも驚きだ

「しかし聞く限りではあまり栄養価の高い物ではなさそうだな、形状も食するに適していない、非効率ではないのか」

いや、おやつ感覚にペロペロする物に効率とかリーマンみたいな

事を言われても困る

とりあえず何て返していいか分からなかったので「そういうもんなんだ」とかお父さんみたいな事を言っただけで返してやった

「理解できんな」

削除人は一言そう呟き、もはやお馴染みの無表情のまま腕組みをしてソフトクリームの置物を見下す

俺としてはソフトクリームを知らんことの方が理解できないんだが……まあどうせ言ったとしても「何故だ」で返されて言葉に詰まる俺の姿が容易に思い浮かぶのでやめておく
というか

「……何でついてくるんだ？」

俺は、腕組みをすることで威圧感が三割増した削除人に恐る恐る尋ねてみる

すると削除人は腕組みをしたまま、一言

「特に意味はない」

……今、頭の奥の方がずきつときた

いつそのこと電話でヘルプを呼ぼうとも思ったが、美波とか千尋あたりを呼んだらまた面倒なことになりそうなので俺は制服のポケットに半分入れかけた手を外に出す

当然、削除人を後ろにくつつけたまま美波や圭吾のところへ行くのもNG

ならば、必然的に俺は削除人の気まぐれに付き合わなければなら

ないわけで……

「はぁ………」

俺は一つ大きなため息をついて再び歩を進めた、勿論、背後に削除人のオマケ付きで

イベント？21 「デート・オア・デリート【後編】」

ここはロスト学園サーバーエリアC

何の気なしに辺りを見回せば、レンタルビデオ店やコンビニエンスストア、更にはカラオケなどの看板が視界に移る

それほど都会というわけでもないがさして田舎というわけでもない程々に都会、もしこの近くに住むことができれば快適だろう

まあ人がいないのだから初めから快適も何もないだろうが……

いや、まずその話はいい

今はそれよりも……

「何だ八伏恭介」

俺の視線が気に障ったのか、黒髪の少女は俺の後ろにぴったりとくっつきながら鷹のような鋭い眼光でこちらを睨みつけて言った

身長は俺と同じかそれより少し低いくらいなのに、その威圧感だけはヤの人も顔負けだ

「……はあ」

出てきたのは削除人の問いに対する答えではなく、疲れ切った溜息あれから数十分は行くアテもなくブラブラと歩き回っていたが、一向に後ろにくっついたコイツが離れる気配はない

「……何時までついてくる気だ？」

思い切って聞いてみる

すると削除人はたった一言

「極秘だ」

即答である

しかも極秘ってなんだよ、暇潰しなら暇潰しって言えばよ最近、というか一昔前に流行ったツンデレってやつか、いい加減飽和してるしリアルでやられても面倒臭いだけなんだよ

「そうかい……」

などという事が実際に言えるはずもなく、俺は一言そう言っ
て肩を落としながら再び歩を進める。勿論、削除人とのセットで
これだけ付けてなんと税込み 円、どうです奥さんお買い得
ですよ、うわあやつすーい、……はあ

……なんだろう、レベル２ルーザーと戦った時や千尋とともにレ
ベル１ルーザーどもを片付けた時よりも疲れた気がする

「……はあ」

なのでついでもう一つ溜息

もうそろそろ幸せのストックも尽きるんじゃないだろうか

「八伏恭介、あれは何だ」

対して俺の後ろについて歩く黒髪の少女の辞書に配慮などと言っ
た文字はないらしく、再び遠くにある何かに視線を向けながら言った
俺は渋々と削除人の視線の先を辿る。

するとそこには明らかに異彩を放つ派手な彩色を施された看板が
一つ

「……あれはゲームセンターだ」

本当なら無視でもすればいいのだろうが、それでも答えてしまう
辺り俺は人が良すぎるのかもしれない

などと思っていると、削除人は間を置かず、まるで当たり前のように

「ゲームセンターとは何だ」

と、言っただけだ

案の定と言うかなんというか、やはりコイツはゲームセンターの
事も知らないらしい

本当なら無視すればいいのだろうが以下省略

「ゲームセンターっていうのはアレだ、簡単に言うと金を払って時
間を潰したり気分転換したりする場所だな」

そこで一区切り

そして削除人は俺の丁寧かつ簡潔かつ分かり易い説明に対し、腕
組みをして一言

「理解できんな」

ばっさりと切り捨てやがった

いや、そりゃまあ多少は予想してたが……やはり実際に言われて
みると少なからずカチンとくるものだ、俺の親切心を返していただ
きたい、お急ぎ便で

……だが、腑に落ちない

「お前はこの世界のルールに違反したプレイヤーを削除する削除人っていうぐらいだから昔からこの世界にいるんじゃないのか？」

次の瞬間、俺は頭の中に浮かんだ疑問をそのまま口に出していた。削除人はその問いかけに相変わらず変化のない表情のまま、静かに口を開く

「確かに私は遙か昔からこの世界にいるし、この世界の事は知り尽くしている……が、知る必要のないものは知らない、知ろうとしないからだ」

削除人はそこまで言って、何故か真っ直ぐと俺の瞳を見つめた。まるで頭の中をそのまま覗かれるような鋭い眼差しに一瞬気圧されるが……ここで引くわけにはいかない

「……それはお前が人間じゃないからか？」

気付けば、俺の口からは自然とその言葉が口をついて出てきていた。心なしか一瞬削除人の表情に変化があったような気がしたが、一度瞬きしてみればそこに立っていたのは紛れもなくいつも通り無表情の削除人

そして削除人は表情一つ変えずに俺の問いに対して、一言

「極秘だ」

……ああ、まあそう答えるだろうな、期待した俺が馬鹿だったと、一人諦めをつけて再び歩み出そうと方向転換、その時

「だが 八伏恭介、貴様にはどう見える？」

俺は思わず足を止める

予想外の問いかけ

俺はその問いに対する答えがなかなか口に出せず、言葉に詰まるそれからしばらくの沈黙を挟み、俺はようやくそれを口に出すことが出来た

「……さあな、よく分からん」

俺の答えに削除人は地面に落とした視線を戻して聞き返す

「分からない……？それはどういう意味だ」

削除人の表情に珍しく変化が表れる

といつても眉間に皺を寄せ、頭の上に疑問符を浮かべたしかめっ面であったが

とにもかくにも、俺はこちらを見つめながら回答を待つ削除人に言っただけ

「どういう意味も何もそのままの意味だ、お前とマトモに話したのは今回が初めてだし、そんな短い期間で本質を見抜けるわけがないだろっ」

「それが自分を殺そうとした相手でもか？」

そこから間を置かず再び問いかけられる

なんか子供の質問に答えてやるお父さんの気分だ

「お前さつきと言ってることが矛盾してるぞ、こつちから攻撃しなきゃお前は何もしてこないんだろ？それに俺は殺されてないしな」

そこまで言っつて削除人が黙りこくつたまま何も言い返してこないのを確認すると、俺は削除人に背を向ける

「……理解できん」

削除人は消え入りそうな声でそう言い、そのまま口を閉ざして俯いてしまった

なんだろう、俺そんなに難しい事言っただけか……

……まあ、いいや

それより次はどこへ行こう、喉も乾いてきたし適当なファミレスにでも入ってドリンクバーと洒落込もうか

こういう風にして時間を潰していればいつかはこいつも何処かへ行ってくれるだろう

そう思った矢先

「ぐえっ!?!」

唐突に首が締めまり、俺は片足を上げた状態で軽く後ろにのけぞった
そしてすぐに俺はその圧迫感から解放され、今度は勢い余って前に倒れそうになる

「な、何しやがる!」

その完全な不意打ちをまともに食らった俺は咳き込みながら怒声をあげる

振り返ってみると、十中八九それは俺の襟元を後ろから引つ張つた削除人によるものだった

どういつつもりなのか問いただそうと恨みがましい視線を向けるも、削除人はさして悪びれた様子もなく、ただしゃがんだまま息を荒くする俺を見つめながら口を開く

「……良い事を教えてやる八伏恭介」

削除人はそう言って話を切り出し、淡々と告げた

「この世界の最北東端、そこにこの世界のヒントがある」

「は……？」

初め、俺には削除人が何を言ったのか理解できなかった

多分端から見れば相当間抜けな表情をしていたと思う、何故、今、コイツが、そんな話を？

「……それだけだ、次会った時は必ず削除する」

直後、まるで削除人の言葉が合図になったかのように周りの景色がぐにやりと捻じ曲がる

歪みは削除人を中心に徐々に強くなつていき、捻じ曲がった景色は削除人の背後に闇を創り出した

削除人は何も言わずに冷たい視線でこちらを一瞥すると、踵を返してその闇の中へと歩を進める

「ま、待て！」

反射的にそう叫んでしまったが、意味なんて無い
しかし削除人は何かを思い出したかのように歩みを止め、首から
上だけをこちらへ振り向かせた

「一つ言い忘れていた」

削除人は、そこで一呼吸間を空けて
鷹のような鋭い視線でこちらを睨みつけながら相変わらずの無表
情で

「私の名は？エルツヴァイフルンク？……この名前、しか
と記憶に刻み込んでおけ」

削除人は最後にそう言い残し、ぽつかりと空いた闇の中へと飲み
込まれていく

そして削除人の後姿が完全に闇の中へと消えた時、そこにはもう
何も残っていなかった

いや、訂正

そこには呆然と立ち尽くす俺だけが残ったのだ

「結局何しにきたんだよ……」

取り残された俺のそんな呟きも、どこまでも青い空に溶け込んで
すぐに消えた

とあるビルの屋上

人の気配の一切しないその場所で、一人立ち続ける少女がいた
吹き付ける風が少女の黒く艶のかかった髪を揺らし、少女の身に
纏った黒い制服のはためく音だけがひたすらに辺りに響く

「八伏恭介か……」

少女は表情は一切変えずにそれだけを呟き、再び辺りを沈黙が包
み込む

「……いるんだろう、言いたい事があるならさっさと見え」

不意に少女がそう言った

しばらく間を空けて、少女の背後の風景が歪み始める
歪みは次第に強くなり、その中心に闇が生じ どろりと濁った
闇の中心、そこからソイツは現れた

『やっぱりバレちゃいますかそうですね』

歪より現れた影は一切表情を変えずに少女の方へ向き直る

「やはり貴様か……何をしにきた」

少女の鷹のような眼光がその影に向けられる

しかしその影はその鋭い眼差しに怖気づく様子もなく、ただ淡々と告げた

『いえただツヴァイさんがあまりにも元気がなさそうでしたので？
親友？として少し様子を見に来ただけです』

台詞だけ取れば幾分か普通に聞こえるかもしれない
しかしその影が発する言葉は一つ一つに抑揚も区切りも皆無の棒
読み、表情にも一切変化はない

無感情

その単語が驚くくらい綺麗に当てはまった

「ハッ、？親友？だと？」

少女は影を嘲笑する

「ふざけるのも大概にしておけ、お前が親友などとジョークだとしても最低の出来だ、滑稽にしか聞こえない」

『おやおや酷い言われようですね』

影はそう言うが、相変わらず表情に変化はない

「もう一度聞こう、お前は何をしにきた？答え次第では斬る」

少女の声に同調するかのようになり、少女の手元に二本の
太刀が出現

そして少女はその二つの刀を両手に握ると右手に握った刀の切っ

先を影に眼前に突き立てる

『おお怖い怖い私はただ聞きたい事があって遊びに来ただけですの
に』

「……聞きたい事？」

影の言葉に、少女は眉間に皺を寄せて刀の柄を握る手に込める力をわずかに緩めた

『そうです聞きたいことです』

影は刀の切っ先を突き付けられたにも関わらず、表情一つ変えずに続ける

『聞きたいことは一つ貴方は何故あそこまで？八伏恭介？に執着するのですか』

ぴくり、と少女の眉が僅かに動く

『確かに初日でレベル2ルーザーを倒したこともレベルが瞬間的とはいえ急激に上昇したのも驚くべきことですが貴方自ら調べに行くほどではないと思いますが』

影がその台詞を言い終え、そして沈黙

しばらくしてから少女はその沈黙を破った

「何故八伏恭介に執着する、か……」

少女はそう呟いて両手に持った刀を下ろす

そして少し間を空けて少女は口を開いた

「……八伏恭介、ヤツからの税率がいくらか知っているか？」

影は唐突に問いかけられた事に驚いた様子も見せず口だけを動かす

『80か90ぐらいじゃないでしょうか』

影の答えに、少女は静かに口を開いて、言った

「八伏恭介からの税率は62%だ」

少女の言葉で、僅かに影の肩が上下に動く

『へえ不思議なこともあるものですね普通それくらいの税率なら色々問題が起きると思います』

「だから私が見張っているのだ、……そしてたっさつき確信した」

少女はそこまで言って区切り、そしてビルの遥か下方で一人立ち尽くす一人の男子高生を視界に収めながら言った

「八伏恭介はイレギュラーだ、次会った時は手加減などしない、必ず削除する」

イベント？22 「ギャザー」

ピロリロリ

不意に、どこからか聞き覚えのないメロディが鳴り響いた。初め俺にはそれがなんの音か分からず、コンマ数秒ほど軽いパニックに陥ってしまったが、すぐにそれが舞から受け取った携帯のデフォルト着信音である事を理解し、一つ溜息を漏らす

慣れない携帯を持つと不便だな、一段落したら着信音を自分好みの物に変えておこうか

などと一人呟きながら、制服のポケット内で安っぽく着メロとバイブ音を発する新品の携帯電話を摘み上げ、手首のスナップで二つ折りになった携帯を開いた

画面には「畝畑舞 着信」の文字

何の用だろうか、と思いつつ親指で通話ボタンを強く押し、さすが携帯を耳に当てる

「もしもし？」

『もしもし畝畑です。いきなり電話してすみませんね八伏さん』

電話の向こうから返ってきたのは案の定畝畑舞の柔らかい声

よく電話になると声色の変わる女性がいるが、素の声と電話の声が全く同じ人っていうのは稀有ではないだろうか

こう、電話越しに伝わってくる声だけでもズタズタになった俺のハートのヒビにまるでそよ風のように吹き込んで……

つまり、その、なんというか 癒される

「ああ、舞か、何の用だ？」

いつまでも浮ついてる訳にはいかないので、とりあえず無難にそう返した

『いえ、そろそろ時間も遅くなってきたことですし集合をかけたよう
と思いついてね、他の皆さんにはすでに召集をかけておきました、
八伏さんで最後です』

ふと携帯を耳にあてがったまま空を見上げてみる
少し日が傾き始めていた、どうやら俺は結構な時間を潰していた
ようだ

『集合場所はCエリア南西のカラオケボックスに1時間後です。で
はこのへんで』

「ああ、分かった、じゃあ切るぞ」

ピッ

めっきり静かになった携帯の画面には「通話時間 43秒」の文字
どうせ通話料金なんて発生しないのだからこんな事を気にする必
要はないのだが、やはりそこは癖である

が、この困った癖はもうしばらく直りそうにない、ぶっちゃけさ
して困らないので別に直らなくてもいいが

と、そんな呟きは頭の中に留めておいて、俺は二つに折ってコン
パクトにした携帯をポケットの中に滑り込ませた

が

「ん？」

ポケットの中で何か固いもの同士がぶつかり合う感覚、一方は俺の携帯……それは分かるがもう一つは何だ？

右手をポケットの中に突っ込んでまさぐってみる
するとそれはすぐに見つかった

「何だこれ……」

ポケットから取り出した何かを顔の前まで持ってくる

長方形で金属質でいかにも女子が好みそうな薄いピンク色のデザイン、……見覚えがある

これは数時間ほど前に千尋から預かった千尋の携帯電話だ、そういえば返すのを忘れていた

カラオケボックスへ向かうついでこれも返しておこう、ということはまず先に千尋のいる家具店に寄らなくてはな……

そうして俺は、千尋の携帯を片手に家具店へと歩を進めた

「……へっ？集合ですか？」

少女は、俺の呼びかけに対して半目になりながらどこか上の空と言った様子でそう答えた

「こいつ……寝てやがったな

「……寝てまへんよ」

いや、まだ聞いてないし

とういかベッドの上で涎垂らしながら惚けたような顔で寝転がり、制服は乱れているこの状況で他に言い訳ができるのならしてみ
てほしい」

……今この中に変な事を想像した人がいます。おまわりさんこっ
ちです

とまあ、そんなことはともかく

「とりあえずは伝えたぞ、俺はもう行くからついてくるなら好きに
しろ、それとこれ」

俺はそう言って、まだ寝ぼけ半分と言った様子で上半身を起こす
千尋に携帯をパス

携帯はゆっくりと元の持ち主の元へと帰っていき……そして、千
尋は携帯を顔面でキヤッチした

「うぶえ!?!」

携帯は丁度鼻の頭に当たったらしく、千尋は一気に覚醒して鼻の
頭を押さえながら涙目になる

角をぶつけてやらなかったのはせめてもの慈悲だ

「確かに返したぞ、じゃあ俺は行くからな」

「ま、待てゴルァ！」

慣れないヤーサン言葉を使って背後からラリアットをかまそうとする千尋を華麗に避ける

千尋はとうとうと何もないところで盛大にこけてフローリングの床に再び鼻の頭を打った

「うぶう……」

その場にうづくまって両手で鼻を押さえながら必死に堪える千尋
いじると楽しいのだが、その内ガチで泣き出しそうなのでこの辺
にしておこう

……勿論それは嘘で、遅れたら感じ悪いので早く行こう、という
のが本音である

「ほら行くぞ」

俺はうづくまる千尋を無理矢理起こし、背中に罵詈雑言の嵐を受
けながらカラオケボックスへと歩を進めた

「では、これからロスト探索による結果報告会を始めましょう」

美波、舞、圭吾、千尋、そして俺…… 5人で入るには少し狭い気がしないでもない部屋の中で、舞はドリンクバーから持ってきたのである。アイスティーをスプーンでかき混ぜながら言葉を発する

ここはロスト学園サーバーCエリア南西にある雑居ビル三階に構えられた小さなカラオケボックス

小さいと言えど、中はそれなりに清潔で空調も効いており、設備もしっかりとしている。

あとフライドポテトがやたら美味しい、ここにきて千尋とのポテト争奪戦もなかなかヒートアップしてきた

あ、おいこら、フライドポテトにレモン汁かけるな、取り皿に分けてもそれは認めんぞ

俺と千尋は説明した通りで、圭吾に至ってはマイクを握り締めて一昔前の戦隊モノのOPを一人絶叫…… もとい熱唱しており、真面目に舞の話の聞こうとしているのは分厚い歌本を両手に持った美波だけである

……と、また目を離れた隙に！！

「させるか！ 八伏カウンター！」

「ぎゃあああああ！！ 目にレモン汁がああああああ！！」

まるで昭和アニメの悪役のような断末魔をあげて両目を押さえながら悶える千尋、当然の報いである。

「フハハハハ！ フライドポテトはケチャップ&マヨネーズ一択だ！ それ以外は邪道！ お前は一人で輪切りレモンでもしゃぶってるんだな！」

山盛りポテトフライ（¥699）の皿を片手に、こちらも負けじと悪役のような高笑い

……をしていたら美波にめちゃくちゃ睨まれた
すみません、自重します……

「……とりあえず私からね」

俺が黙って席に着いたのを確認すると、美波はやたら分厚い歌本をテーブルの上に置いて口を開く

「私は学校を出発してからほとんどの時間古本屋にいたんだけど、畝畑さんに召集の電話を貰った後、移動中マンホールに引っかかっていたこんな物を見つけたわ」

そう言っただけで美波は懐から取り出した何かをテーブルの上に置く
テーブルの上に置かれたその何かに視線が、厳密には俺と舞の視線が集中した

目を凝らして見てみると、ソレは一見透明なビニールの切れ端のような……

「これはなんでしょう？」

どう見てもゴミにしか見えないそれを見せられて、舞は不思議そうに美波に問いかけた

それに対して美波は真剣な表情で返す

「おそらくこれは煙草の箱についているビニールだと思います」

「なるほど……それは確かに妙ですね……」

美波の説明を聞いて、舞は一人納得した様子で頷く
俺には何が何だかさっぱりだ

「おい、俺にはさっぱり分からんぞ、別に道の上にゴミの一つ落ちててもなんらおかしくは……」

「おかしいのよ」

そこまで言いかけて、俺の主張は美波によつてばつさりと切り捨てられる

その時の俺は多分相当呆けた表情をしていたのだろう

美波はその俺の顔を見て、一つ呆れたように大きな溜息をつくところ続けた

「少し前恭介にメンテナンスの話はしたわよね？」

まさか忘れたんじゃないだろうな、と言わんばかりに美波はその鋭い眼光で俺を睨みつける

「ああ、あの一定周期で世界がリセットされるってやつか？それが……あつ」

そこまで言いかけて、俺はようやく美波の言わんとしていることを理解する

「その通り、メンテナンスがある限り路上にゴミが落ちているという事は絶対にあり得ないことなのよ、ましてや煙草なんて私たちの中で吸う人はいないでしょ？」

なるほど……つまり

「この世界に私たち以外のプレイヤーがいるかもしれないって事よ、ま、あくまで憶測ね」

どうやら俺の考えていたことは当たっていたらしい
そもそもこれほどの広さがあるのだ、俺たちの他に誰かがいても
なんらおかしくはないだろう

「私からの報告は以上よ」

美波は一仕事終えたような表情で再び歌本を手に取り、お目当ての曲を探し当てるためにせわしなく両目を動かし始める

「お疲れ様でした、私は特にありませんが……他に何か報告がある人はいませんか？」

「私も特にありません……」

やっとレモン汁の苦痛から解放されたのか、千尋が自らの目頭を押さえながら言う

「あ、そういや」

その時、不意に圭吾が思い出したようにマイクを口から離れた
その場にいた圭吾を除く全員の視線が一齐に集まる

「いやな、大したことじゃないんだけど、俺暇潰しで見るようにレンタルビデオ屋にビデオを借りに行ったんだよ、戦隊モノのさ
で、借りようとしたのは少し前にやってたチャリレンジャーって

やつでDVDは全部で12巻まであるんだが……どついつ訳かどつ
を探しても8巻以降が見つからなかったんだ、以上」

直後、空間内を微妙な空気が包み込んだ

しばらく沈黙が続いたのち発せられた「できれば死んで」とは美
波の台詞である

「ひでえ!?!」

圭吾は身を乗り出して驚いていたが、美波の反応は妥当だろう
いつも通りにこやかな舞の視線も心なしか冷たい気がする

「……では、他に何かある人はありませんか?」

と、舞が再びメンバーに問いかけた

こんな空気になってもちゃんとまとめられる辺りこの人はさすがだ

……それはともかく、俺もあの事については言っておいた方がい
いだろう

「じゃあ俺、いいか?」

「ええ、どうぞ」

今度は俺にメンバーの視線が集まる

少し落ち着かないが仕方ない、俺は口を開いた

「まず、俺はCエリアのとある家具店でレベル1レーザー7匹と遭
遇し、千尋とともに殲滅した」

を木霊した

イベント？23 「ジ・エンド・オブ・レスト」

？疲れた？

この単語を口に出すのは今日で何回目だろう

突然この世界へと飛ばされ、訳も分からない内にルーザーに襲われて……

かと思ったら今度はレベル2ルーザーに殺されかけ、休む間もなく削除人との連戦

そして少しの睡眠を挟んで千尋とともにレベル1ルーザー共との戦闘、更にその後何をどう間違ったのか削除人とのデート

極めつけはその件についてのメンバー全員による質問攻めである

「どこで会った」とか「何をされた」とか「何を言われた」とか、もう思い出すだけでも億劫である

しかもあいつらときたらどうにも俺の答えが信じられないらしく、同じ質問を何度も何度も何度も……思い出したら吐き気がしてきた

ちなみにあいつらの話をまとめると

？削除人は削除以外で姿を現すことはなく、ましてや削除人自らプレイヤーに話しかける事なんて絶対にありえない？……だそうだがそうは言われても実際会って話していたのだから仕方ない

ちなみに念のため削除人が去り際に言っていた「この世界のヒント」の事についても言ってみたのだが、満場一致で「畏だろう」と

いうことになった

まあ当然っちゃ当然か……

とまあそんな感じの質問攻めが小一時間、解放されたのが今から少し前の事だ

だからあえてもう一度

「疲れた……」

かぼーん

何度目になるであろうその音がこの広い空間の中を何重にも反響した

ここはロスト学園サーバーの外れにある昔懐かしい雰囲気漂わせたとある銭湯

元々女性陣の提案により立ち寄る事となったのだが、かくいう俺も一日風呂に入らないと気持ち悪くて仕方がない人なので嬉しい限りである

「ふう……」

背中を浴槽にもたれかけ、どこを見るわけでもなく虚空を眺める。立ち上る湯気が視界を覆い隠し、少し熱めのお湯に体に溜まった疲労が溶けていく

深夜の銭湯というのも新鮮だが、それ以上に他に誰もいない銭湯とはなかなか良いものだ

「あの壁の向こうは女風呂なんだよな……」

すぐ隣からごくりと唾を飲む音が聞こえる

……訂正だ、コイツがいた

「やめといた方がいいと思うぞ」

頭の上にタオルを乗つけて不穏な事を呟く男子高生、もとい伊勢圭吾にあらかじめ釘を刺しておく

「何故だマイブラザー!？」

「お前とブラザーになった覚えはない」

頭の上のタオルを落とさないよう絶妙なバランスを保ちながら一人熱くなる圭吾に俺は冷静にツツコミを入れる

「恭介エ！お前も同じ男なら分かるだろうこのロマンツ！もはや様式美！！このロマンの前じゃあんな壁紙切れ同然よ！！」

圭吾は高くそびえ立つ壁を指をさして、風呂場全体に響き渡るような声で高らかに宣言

つつかこれ絶対向こうにも聞こえてるだろ……

「元気だなお前は……まあ頑張ってくれ、俺はまだ命が惜しい」

折り畳んだタオルを顔の上に乗せて視界を隠す
しかしそれはすぐに圭吾によって剥ぎ取られた

「こんの玉無し恭介！」

「なんかもぎ取られそうな名前だな……」

唾が飛んでくるくらいの至近距離で意味不明な罵倒をされ思わず顔をしかめる

「ならいい！お前はそこで指を啜えて見てるんだな！」

「どう考えてもお前が舞辺りのプレートでぶっ飛ばされる姿しか思い浮かばないんだがな」

「ふっふっふ、案ずるな！さすがのあいつらも風呂にまでプレートを持ってくるわけがなかるう！それに俺がバレルようなへマを」

以下省略

「おぼぶえ！」

頭上から凄まじい爆発音

直後、上空から落下してきた圭吾により天井まで届くほどの水柱ならぬ湯柱が吹き上がった

えーと、配当はいくらだろう

「死ぬかと思っただわ！！」

激しく水飛沫を立てて湯船の中から姿を現した圭吾に、死ななかつたのかよ、そう心の中でツッコんだ

本当にコイツは内臓の代わりにスポンジでも詰まってるんじゃない

いだろうかと疑いたくなる

「畜生……全員タオル巻いてるなんて聞いてねえよ……」

「まあ大体そんなオチだとは思ってたがな」

限りなく他人事のようにそう言って、湯船に体を沈める

「しかし得るものはあった！そこでマイブラザー！お前にある暗号を託す！UM、D！MM、C！TT、2A……」

「聞きましたよ伊勢先輩イイイイイイ……！！」

「ぎゃああああ！！あつちの暗号解読班仕事しすぎいいいいいいいい！！！！」

……全く元気な奴らである

俺は再び折り畳んだタオルで視界を覆い隠し、背中を浴槽にもたれかけさせた

かぼーん

「恭介よ……」

「なんだ覗き魔」

大部屋の畳の上に腰をかけ、壁に無理矢理取り付けられた扇風機の乱暴な風を受けながら気だるげに口を開く

「その呼び名は甘んじて受けよう、しかしお前も男ならあれを見てこう……くるものを感じないか？」

「お前が千尋にドラゴンアッパーカット（仮）を喰らって宙を舞った事か？確かにあの時はこみあげてくる笑いを堪えるのに必死だった」

「ちげーよ!!」

圭吾が声を張り上げて身を乗り出す

こら、そこにいたら扇風機の風が当たらんだろうが

「俺が言ってるのはアレだよアレ！」

圭吾に頭を掴まれ、無理矢理顔を90度右に回転させられる

視線の先には浴衣姿の三人の少女の姿、無論、美波、舞、千尋の三人だ

「いやまあ新鮮だとは思うが……」

俺がそう言うと、圭吾はやたら満足そうに何度も頷く

「そうだろう！見てみる！普段粗暴な千尋でさえ浴衣補正でおしと

やかな女子に早変わり！しかも何気に似合っているという罫！」

「千尋ー、圭吾が浴衣似合ってるってさー」

「それは暗に無乳って言ってるんですか！！！」

「ゲブウ！！？」

次の瞬間、さっきまで隣にいたはずの圭吾が千尋の飛び蹴りをマトモに喰らい、視界から消えた

羊飼いの少年とはこういう事を言っただろうなあ、俺は扇風機の風を浴びながらしみじみとそう感じる

「また圭吾が何かやらかしたの？」

その騒ぎを聞きつけてか、浴衣姿の美波が牛乳瓶を片手にこちらに歩み寄ってきた

「まあ、そんな感じだ」

正確にはほとんど俺のせいだが面倒くさいので割愛

と、そんな事を考えていると不意に美波が先程まで圭吾が座っていた位置、すなわち俺の隣に腰を落とした

「よいしょ、っと」

シャンプーの良い匂いがする

野郎がシャンプーをしてもそれほど匂いはしないのに何故なのだろう

「そついえば恭介」

「……何だ」

圭吾ではないが確かに見慣れた奴の浴衣というのは新鮮で、少々危険だ

万が一顔に現れたりしないよう、俺は視線の先を左右に首を振る扇風機に向けたまま応答する

「分かってると思うけど今日から恭介にはエリアAの学校に住んでもらうからね」

きゅぽん

待合室の自動販売機で買った牛乳瓶の蓋を開ける音と同時に、浴衣姿の水ヶ沢美波はそう言った

「は？」

思わず振り返ってしまう

「何よその顔、もう帰る家なんてないんだし外にはルーザー、当然だと思っけど？」

「いやまあ、そうかもしれないが……」

さすがに若い男女が一つ屋根の下で寝泊りというのは……、と続けようとしたが、

美波の有無を言わせないその眼光に、俺は結局

「……分かったよ」

折れてしまった

「はい決まり、じゃあ改めてよろしくね」

美波は手を突き出して握手を求める

女子と握手と言うのは少々照れ臭いが、同意してしまった以上は仕方ない

俺は差し出された手を握り、軽く握手

風呂上りというだけあって美波の手は少し暖かくて柔らかかった

「じゃあとりあえず今日は遅いし宿を探さないかね」

「まだ決めてなかったのかよ!？」

「私はホテルを所望します!」

「お……俺は休めるところならもつどこでも……」

「私は紅茶のある場所ならどこへでも行きますよ」

わいわいと自分勝手な意見を飛び交わすメンバーたちに自然と笑みがこぼれる

もつとここにいたい、このメンバーで笑っていたい
そんなささやかな願いが頭に浮かんだ

しかし、この後俺たちは、いや、俺は実感することになった

この世界は狂っているのだ、ということ

午前0時

すでに日付も変わり、辺り一帯はぼつかりと浮かんだ満月の月明かりが照らすのみで、それ以外は深い闇に包まれている。

そんな中で煌々と光を放つ建造物の群の一つ、どこにでもありそうなコンビニ、そこに二つの影があった

真新しい蛍光灯で照らされたはずの店内はどこか薄暗く、うすら寒い空気が漂っている

ガシャン

不意に、耳をつんざくような音が空間内に響き渡る
カウンターに腰をかけた男が空っぽのレジスターを蹴り落としたのだ

「どうした、随分機嫌悪そうじゃないかい」

男の真正面で紙パックを片手に壁に背をもたれかけさせた女性が醜く口元を歪ませて言う

すると男は、ポケットの中の小さな？箱？を慣れた手つきで取り出して一言

「ああ、ムカつくね」

男は暴力的な言葉とは反した落ち着いた動作で取り出した？箱？の梱包を剥がしながら続ける

「いつつもこうなんだ、なんていうのかな、こう、自分の領域にずかずかと踏み込まれて好き放題かきまわされるのがさ、嫌で嫌で仕方ない」

「それはもう何回も聞いたよ、……まあそれは私も分からないでもないね、まるで自分たちの所有物みたいに土足で歩き回られるのは

「

唐突に、女性が近くにあったガラスを蹴破った

けたたましい音とともにガラスの破片が四方に飛び散り、床の上を跳ねる

「虫唾が走る」

くくっ

男は短く笑い、箱から取り出した一本の棒状の何かに安っぽいライターで火をつけた

「んじゃ……そろそろ行く？」

男がそう言うと同時に、女性はポケットから一枚の黒く塗りつぶされた金属質な板を取り出す

そして女性はそれを自らの首元に押し当て、直後、黒一色の板は淡い光を放ちながらまるで液体のように女性の肌へと溶け込んでいった

「 同感だね」

男はふん、と鼻で笑ってポケットの中から女性を取り出した物と同じ黒い板を取り出す

「お前は相変わらず気が早いな」

ふうー

立ち込めた白い煙が天井まで立ち上り、男はレジから飛び降りた

「 さ、久々のプレイヤー狩りだ、楽しく殺ろうか」

イベント？24 「インベーター」

午前9時

俺たち、正確には俺と圭吾の二人がAエリアに戻って来たのはつい先程の事だ

朝起きたら枕元に置手紙があり、そこには整った字で

「余りにも気持ちよさそうに寝ていたので、私たちは先に学校へ戻っています」と

その手紙に少し和んでから二度寝をし、その後隣の部屋でいびきかきながら爆睡していた圭吾を無理矢理叩き起こして出発

しかし学校へ帰ったところで特にやる事もないので、今俺たち二人は学校の前の自販機で暇を持て余している

初めは硬貨を入れずともボタン一つで出てくるジュースに違和感を感じたが……、慣れるとどうってことはない

空を見上げてみる

どんよりと濁った雲が視界を覆い尽くし、重くて湿った空気が辺りを渦巻く

ワイシャツが肌に纏わりついて酷く不快だ

「一雨、きそうだな」

隣で自動販売機に背をもたれかけさせた圭吾は一言そう言ってペットボトルのコーラを煽る

炭酸の抜ける音がやけに耳に残った

「そうだな」

俺はすでに空になったコーヒー缶を意味もなく傾げながら適当な
反応を返す

僅かに残ったコーヒーが缶の中でちゃぽちゃぽと音を立てた

陰鬱、憂鬱、沈鬱

聞いた話によると雨や曇りの日は空気中の酸素が少なくなり、頭
の回転が悪くなるらしい

なら、多分俺は今その状態なのだろう

「はあ……」

意味もなく溜息をついて、まだ僅かに内容物が残ったコーヒー缶
を目についたゴミ箱にロングシュート

放物線を描いて飛んでいったコーヒー缶は一度金属質な音を立て
て地面に転がった

「凶だな」

勝手に人の運勢を決めないでいただきたい

そんな事を心の中で呟きながら腰をかがめて地面に転がるコーヒ
ー缶を手に取り、空のゴミ箱へと投げ入れる

今度はナイスシュートだ

「……そっいや圭吾」

「ん？」

圭吾はペットボトルの口を啜えながら間の抜けた声をあげた

構わず続ける

「メンテナンス……だったけか、アレがあると世界がリセットされるんだっただよな」

「ん、まあ、俺はそう聞いたが……」

圭吾は改めて聞かれて、少し自信なさげに答える

「じゃあさ、俺らがいた教室にあったあのガラク……道具も全部元の場所に戻るんじゃないのか？」

「いや、その点は大丈夫らしいぞ」

さっきまではあれほど自信なさげだったくせに今度は即答
何故か、そう聞き返す間もなく圭吾はこう続けた

「この世界には？セーブ？ってシステムがあつてな、……ほら、お前教室の黒板を見ただろ？」

「黒板……？」

見たような、見なかったような……

「まあどっちでもいいや、とりあえず黒板に人の名前を書いておくとその部屋だけメンテナンスの対象から外されるらしいんだ」

……なんだそりゃ

しかも何で黒板限定なんだよ

「そんなの俺も知らん、でも黒板じゃなくても名前を書いたものを部屋のどこかに置いておくだけでいいらしいぞ

ま、例えメンテナンスから外されてもメンテナンスの時間帯にそこにいたら削除人が来て消されるらしいがな」

よし、よく分かった

この世界はさっぱり分らない

「まあいいや……」

考えるのも面倒になったので、俺は適当なところで思考放棄をして一つ背伸びをする

昨日は女性陣の提案で少し高めのホテルに泊まり、ふかふかのベッドでぐっすりと眠れたため、いくらか疲れは取れた

さすがに少し筋肉痛は残ったが、ほぼ全快である

「あっ」

そんな時、唐突に圭吾はそんな素っ頓狂な声を漏らし、そして何を思ったのか慌てて全身を手で叩き始めた

「どうした、ノミでも湧いたか」

余りにも必死だったので少しからかってみるが、まるで聞こえていないらしく何かに憑りつかれているかのように一心不乱に全身を叩く

そしてひとしきり体中を叩き終わったと思うと、圭吾の顔はみるみる青くなっていき……そして一言

「やばい……プレート忘れた」

「はあ!!?」

今度は俺が素っ頓狂な声をあげる番だった

「た、多分風呂入った後浴衣に着替えた時置いてきちまったんだ！俺ちよつと取りに行ってくる!!」

「お、おい圭吾！」

呼び止める声も空しく、圭吾は慌ててその場から駆け出す
そして圭吾の後姿はすぐに見えなくなってしまった

「せわしない奴だな……」

一つ溜息をつき、床に転がった空のペットボトルをゴミ箱に投げ
入れる

ペットボトルはぽかんと間抜けな音を立て、地面の上を跳ねた

……なるほど大凶だ

そんなくだらない事を考えながら俺は空のペットボトルを拾い上
げてゴミ箱の上で離す

そしてそのままの足で俺は開け放しになった校門をくぐった

ここから教室に着くまで3分弱……といったところか

一晩ぐっすりと寝たことでもいい具合に頭も冷めてきた、ここらで
ちよつと今の状況を整理しておくか……

正面玄関の引き戸を開け放ち、一步踏み出してから後ろ手に戸を

閉める

?ここは俺が元いた世界とは違う異世界、一見元の世界とはほとんど変わらない?

靴を適当にその辺に脱ぎ捨て、下駄箱の中に入っていた真新しいスニーカーに履き替える

?しかし、この世界にいるのは俺や美波のように体内に取り込むことで特殊な力を発揮することのできる謎の物質プレートを持つ人間、すなわちプレイヤー、そしてルーザーと削除人と名乗る黒髪の少女だけだ?

俺の足音が無駄に校舎の中を反響する

?ルーザーはどこからともなく現れプレイヤーを襲撃する謎の生物、……いや、生物かどうかも怪しい、その正体やプレイヤーを襲う理由、その他一切が不明?

一段ずつ階段を上っていく

?削除人はこの世界のルールに違反したプレイヤーを消しに来る存在、こちらもルーザー同等正体不明、ただ一つ分かっていることは俺たちでは到底歯が立たないほどに強いという事、そしておおよそ感情と言えるものが皆無だという事?

長い廊下を一直線に進んでいく

?そして、この世界でプレイヤーたちは何故か記憶を失っている。

……俺も含めて?

足を止め、方向を変える

？それに加えて削除人の言っていた？この世界のヒント？という
言葉の真意…… 課題は山積みである？

と、そうこう言っている内にもう教室前だ
時間が経つのは早いな……

「え、と……確か二回ノックすればいいんだっけな……」

コンコン

教室の扉を二回ノック

「八伏恭介だ、今帰った」

扉の向こう側にいるであろう人物に向かって言う
返事は……返ってこない

「……？」

誰もいないのだろうか？

それとも……何かあったのだろうか？

縁起でもない考えが一瞬頭の中をよぎる

俺はそんな不安を取り払うため、引き戸に手をかけ、慎重に戸を
開けた

「あ……おかえり、恭介……」

一番最初に視界に入ったのは椅子の背もたれに力なくもたれかか

る美波の姿

少し視線を動かしてみると、机に突っ伏す千尋とどこか力のない微笑みを浮かべながら椅子に腰をかける舞の姿も見えた

とりあえずは全員無事だったことに安堵を感じるが、次にまた新しい疑問が生まれる

なんだ？この惨状？

「ど、どうしたんだ美波！？」

美波は声こそ出せているものかなり辛そうだ

顔色もいつもよりずっと悪い

少し見ただけでも？大丈夫？ではない事が容易に分かる

「大丈夫……だって……ちょっと気分が……悪いだけだから……」

美波のいつもの不機嫌な顔に力はない

それどころかよく見ると顔全体に脂汗が滲んでいる

「な、何がちょっとだ！お前絶対おかしいぞ！ちょっと横に……！」

その尋常でない様子に俺は咄嗟に美波へ駆け寄り肩を抱こうと

どぞっ

その時、耳に届いたのはまるでゴミ袋を高いところから落としたような、そんな音

「え……っ？」

思考が停止した

いつも不機嫌で、不愛想で、しかし何かと世話焼きで
なんだかんだ言っつて、いつも騒がしいメンバーの中で楽しそうに
していた少女

それが、今では力なく床の上で横たわっていたのだから

「いやー、かつこいいねーお兄さん」

「おーおー、かつこよすぎて反吐が出そうだよ」

「!?!」

背後からの聞き覚えのない声に、俺はほとんど反射的に振り返る

視線の先に立っていたのは見慣れない男女

男は乱れた制服に啞え煙草、もう一方の女も同じように乱れた制
服と片手に紙パッケの林檎ジュース

そし二人に共通しているのは剥き出しの 敵意

「……誰だお前ら」

全身を緊張させ、臨戦態勢を取りながら胸ポケットにしまったデ
イ・コンポーザーのプレートに手をかける

脳の奥が熱くなり、全身の毛が逆立つ

これは、レベル2ルーザーと戦った時と同じ、あの感覚

「まー、うん、押しかけておいて名前を教えないのも良くないよね」

男の方が口に唾えた煙草をタイル床の上に落とし、靴でソレをのみ消しながら口を開く

「俺の名前は土倉ツチクラ 蓮レン、短い間だけどよろしくね」

「はーあ、面倒臭エ……アタシは尾羽梨オハナシ 真紀マキ、短い間だけどよろしく」

続いて女性の方も自己紹介

不快感、とてつもない不快感が俺を襲う

まるで下水の水を煮詰めたような、どろりとした不快感
そしてこの不快感、その正体に気付いたのはたったさつき

これは 明確な殺意

「じゃ……」

目の前の二人がほぼ同じタイミングである物を構えた
黒くて、長方形で、金属質で、見覚えがある

プレートだ

「短い間だったけど、さようなら」

直後、建物全体に凄まじい爆音が響き渡った

イベント？25 「ブルースネイク・1st」

教室の中を蹂躪する凄まじい爆風、焦げ臭い臭い、立ち込める黒煙

それは視界を覆い尽くし、俺とあの二人を空間から引き離す

俺の網膜にはその直前、何が起こったかが鮮明に刻まれていた

突如として俺の目の前に現れた謎の男女がプレートを構えるのよりも早く、力なく椅子に腰をかけた舞が？ストレイ・チャイルド？を放ち

まるで的外れな方向へと一直線に飛んで行ったストレイ・チャイルドの白球体が天井に接触、そして爆発

思わず耳を塞いでしまうような轟音と爆風が先程まで周囲を包んでいた緊迫した空気を霧散させた

爆発の直後、舞は力のない笑顔を浮かべながら苦しそうに口を開く

「すみません……八伏さん……狙いが……外れてしまいました……」

「舞っ！」

舞の顔には大量の汗が滲んでおり、顔は不自然なまでに白い

そこには、いつもティーカップ片手に優しい微笑みを浮かべている畝畑舞の面影はなかった

「あらら、まーだプレートなんて使えたかあ、すごいなあ素直に感心しちゃったよ」

「ゲホツゲホツ！……チツ！青二才が調子に乗りやがって！だから

さっさとぶっ殺しとけっつったんだ!!」

ガシャン

煙の向こう側で誰かの咳き込む音を掻き消すように耳をつんざく音が鳴り響いた

恐らくあの二人のどちらかが窓を叩き割ったのだろう

割れた窓の隙間から外の湿った空気が流れ込み、入れ替わりに部屋に充満した煙が外へと排出される

「恭介……早く……っ！」

床にうつ伏せで倒れ伏す美波がなんとか声を絞り出した

その先に続く言葉を俺は知っている

煙はほとんど晴れかかっていた、もう殆ど時間はないらしい

やるしかない……!!

「畜、生ッ……!!」

制服の胸ポケットに片手を突っ込む

ひんやり冷たく、金属質なソレに指先が触れる

できればもう触りたくなかった、使いたくなかった

だが、今はもうそんな事を言っている場合ではない

「おおおおおおおおお!!!!」

恐怖心を取り払うように腹の底から雄叫びをあげ、ポケットから取り出したプレートを咄嗟に左手の甲に押し当てる

淡い光とともにプレートは溶け出し、皮膚に吸収され、体内へと取り込まれていく

まるで全身に粘土を纏ったような、風邪で丸一日寝込んだ後立ち上がった時のような、そんな鈍くて重い疲労感が全身を侵食して

そして、プレートが完全に肉体に取り込まれた時、俺の左手には数字の「1」が浮かび上がっていた

「……っ！はあっ……！はあ……！」

息を荒くしながらも、再びプレートの使用に成功したことに安堵する

それと同時に煙は完全に晴れ、例の二人が姿を現した

「あらら、ちょっと余裕ぶりすぎたかな、失敗失敗」

煙の中から現れた男、土倉連は俺の左手に刻まれた数字を一瞥し、対して困ってもいない様子で軽く頭を搔いて言う

「チツ……だから言ったじゃねえか、あーあ面倒臭え……」

続いて姿を現した女、もとい尾羽梨真紀が、どこから持ってきたのか金属バットを片手に苛立った口調でそう言った

「まあまあそう言うな、後はお前にやらせるからさ」

「……ったりめーだ」

尾羽梨が醜く口元を歪めて一歩前に歩み出た

タイル床を擦れる金属バットの奏でる音が徐々に近づいてくる。

酷く不快だ

「……………何が目的だ？」

「ハア？」

淡々と歩を進めてくる尾羽梨への問いに対して、尾羽梨はまるで馬鹿を見るような目つきで返す

「……………こんな事するからには意味があるんだろ？金、食料、場所……何が目的だ？」

俺が体の震えを押し殺してそう続ける。その直後だった

「プツ……………アハハハハハ！」

尾羽梨がその場で足を止め、唐突に腹を抱えて笑い出したのは

「金！？食い物！？場所！？そりゃあ何の冗談だ！？」

尾羽梨は心底おかしくてたまらないと言った様子で、下品な笑いを続けながら言う

「この世界じゃあ食い物も場所も掃いて捨てる程ある！金なんてものは最初っから必要ねえ！そんなのが必要なのは外の世界だけだ！テメエはいつまで外の世界気分なんだ……よっ！！」

「ぐっ！！？」

尾羽梨が素早い動きで距離を詰め、手に持った金属バットを振り

下ろす

俺は間一髪横にずれることでその攻撃をかわし、代わりに金属質な音が耳に響いた

「チツ……外したか……」

尾羽梨の殺気に満ちた瞳が再びこちらに向けられる

今の攻撃……間違いなく俺を殺しにかかっていた

躊躇いもなく、戸惑いもなく

多分避けるのが少しでも遅れていたら今頃俺は脳天を叩き割られていただろう

初めて向けられた人間からの殺意に心臓の鼓動が早くなり、息は荒くなる

……それに比べてあの二人は何だ？

まるでゲームやスポーツ感覚で人を殺そうとしている

息も乱れず、目も血走らず、手も震えず

狂ってる

「おやおやどうしたんだい？もうスタミナ切れかな新規君？」

後方で胸糞悪くなる笑みを浮かべながら壁に背をもたれかけさせた土倉が？新規？という最早懐かしくも感じる単語を言い放った

「ああ、そうだ、さっきの質問には俺が答えてあげよう」

再び振り下ろされる金属バットを避けながら、意識を目の前の尾

羽梨と後方の土倉の言葉に分散させる

「俺たちが君たちを襲う事、それは突き詰めちゃえば特に理由なんてないんだ」

土倉はそこで一旦切って、先程まで美波が座っていた椅子に腰かけた

やめろ、そこは美波の場所だ、お前の場所じゃない

「ま、正直な話ただ君たちが目障りなだけ、それが理由」

……何だって？

一瞬頭の中が真っ白になった

目障りなだけ？何だソレ？何だその理由？

たったそれだけの理由で俺たちに殺意を向けている？

「ああそつだ理由ならあつた、君たちの亡骸からプレートを回収しなきゃいけないんだ、俺の趣味でね」

土倉の制服から、黒くて、金属質で、長方形な何かが大量に流れ出す

それは二桁にのぼるであろう数の大量のプレート

？本来プレートは一人一枚？

いつか聞いた美波の言葉が脳裏をよぎる

つまりこのプレートは、こいつらが*した犠牲者の数

その時、俺の中で何かが切れた

「うがあああああああああ！！！！！」

獣のような咆哮をあげ、机の上に置かれた電気ポットを取り上げる
そしてそのまま頭上に掲げ、振り下ろされた金属バットをポットの腹で受け止めた

激しい金属音が鳴り響き、それによって生じた衝撃がポット越しに腕を伝う

「やっとやる気になったかよ青二才！」

ポットにかかる重さが消える

尾羽梨が再びバットを振りかぶったのだ

そこで俺は両手で構えた電気ポットに意識を集中、そして分解

電気ポットはパチンコ玉大の粒となって四方八方に弾け飛び、空中で動きを止める

作るのは 盾

俺が頭の中で念じると同時に飛び散った粒の一部が、まるで磁石に引き寄せられるかのように突き出した俺の右腕に集まり出す

そして集まった粒は形を失い、俺の右腕に銀色の分厚い盾が完成した

直後、金属音とともに右腕を伝う衝撃

余分なものを抜き取り、必要な物質だけを固めて作ったため、元電気ポットだったソレは、より硬く、より軽く、より使いやすく

そして振り下ろされた金属バットの衝撃を受け止めるには十分すぎる代物だった

「なっ……!!?」

尾羽梨の顔に初めて驚きの表情が浮かんだ

俺はその隙を見逃さずに床に散らばる粒を足で蹴り飛ばし、空中で元の物質に戻す

蹴り飛ばしたのは電気ポットで保温されていた? 熱湯? の粒

つまり、俺のプレートで玉の形に固定されていた熱湯の粒が空中で元の熱湯に戻り、尾羽梨の顔に降りかかったのだ

「ッ……!!?」

予想外の攻撃に尾羽梨は金属バットを投げ捨て、反射的に顔を守る
当然、その隙を見逃すわけはなかった

「オマケだ! とっとけ!」

俺は怯む尾羽梨を渾身の前蹴りで突き飛ばす

尾羽梨は周りの椅子やらなんやらを巻き込みながら派手に転倒し、教室の壁に背面を強打した

「ぐっ……!!」

尾羽梨の顔が苦痛に歪む

やはり女子を、いや人間を傷つけるのは心が痛むが、やらねければこっちがやられていたのだ、仕方ない

そう自分に言い聞かせながら、今にも立ち上がるうとする尾羽梨を睨みつける

「ケツの青いガキが……! もう我慢ならねえ! ぶっ殺す!!」

尾羽梨の血走った眼と俺の目が合った
暴力的な口調、怒りに染まった顔、血走った両眼
その全てが殺意というベクトルへ向いている事に本能的な恐怖を
覚える

だが、俺はここで退くわけにはいか……ない……？

「あ……？」

唐突だった

唐突に視界が揺らぎ、ただならぬ吐き気、頭痛、そして眩暈が同
時に俺を襲った

その感覚に耐え切れず、俺は崩れるようにその場に膝をつく
動かないでいるのがやっと、少しでも気を抜けば腹の奥のモノを
全て吐き出して気絶しそうだ

「やっと効いてきたみてえだなあ青二才？」

俺はどれくらいそうしていたのだろう

気付くと目の前には金属バットを片手に口元を歪める尾羽梨が立
っていた

効いてきた……？毒でも盛られたか？いや、そんなはずはない
朝は教室についてから食うように何も口にしていないし、学校の
前の自販機でジュースを飲んだことくらいだ

毒ガス？……違う、それならこいつらも巻き添えだ

「ククク……いくら考えても分かんねえって顔だなあ！オイ！」

左肩に鈍い衝撃と激痛が走る
尾羽梨の振り下ろした金属バットが肩に当たったのだ

「ぐっ……！？」

あまりの痛みに俺は叫び出しそうになるが、そんな事をしては全
て吐き出してしまいそうなので必死に声を押し殺す

体が熱い、体中に嫌な汗が浮かび上がる

何だこれ……一体何が……？

「考えても分かんねえよ、一生な！」

再び左肩に鈍い衝撃、遅れて鈍痛

まるで骨に直接響き渡るかのようなその痛みに俺は顔を歪める
意味が分からない、訳が分からない

まさかもう一人の男がプレートを……！？

「全ッ然駄目、まるでちげえよ青二才」

その考えを遮るように尾羽梨は顔を近づける

そして尾羽梨は俺の耳元で囁いた

「良い事を教えてやる……テメエが今こうなってるのはアタシのプ
レート青の大地？ブルー・グラウンド？のせいだ」

「な、何言ってるんだ……お前はまだプレートを……」

俺がそこまで言いかけたところで、尾羽梨は懐から自らのプレ
ートを取り出して言った

「ああ、使っていない、今はな……んじゃ答え合わせは終わりだ、こ
こらで潔く死ね」

尾羽梨は意味深な言葉を残して、再び金属バットを大きく振りか
ぶる

今度の狙いは間違いなく頭部、喰らったら多分死ぬ

もし万が一気絶で済んだとしてもどっちにしろ死、避けることも
防ぐこともできず、他のメンバーは誰一人として動けそうにない

全身の毛が逆立ち、まるで背中に氷の板を突っ込まれたかのような
感覚

……この感覚はこっちに来てから何度目だろう

振り下ろされたバットが迫る

俺は覚悟を決め、両目を固く閉じる

その時だった

パキーン

俺の頭上で何かの破裂する音が響き、尾羽梨の手から金属バット
が弾き飛ばされたのだ

「は………?」

間の抜けた音を立てながらバットがタイル床の上を跳ねる
そして少し遅れて、俺の頭上から何かの破片が降り注いだ

俺は床に落ちた破片に目をやる

これは……粉々になった石………?

「恭介！迎えに来たぞ！」

聞き覚えのある声に、俺は咄嗟に教室の入り口へ視線を向ける
そこには見慣れた制服を身に纏った限りなく普通で特筆する点のない男子高生

そう、伊勢圭吾の姿があつた

「友のピンチに駆けつけた熱き友情の男伊勢圭吾！参・上！」

圭吾はどこかの戦隊モノで見たような名乗り向上と決めポーズをとる

……一瞬でもかつこいいと思つた俺が馬鹿だつた

「チツ……！まだいたのかよ……」

「いいじゃないか、獲物がいくら増えようが獲物は獲物だ、俺としてはプレートのコレクションが増える上に害虫駆除までできて一石二鳥だね」

苛立たしげに舌打ちをする尾羽梨とあくまで余裕をかます土倉
しかしその二人に負けず、圭吾はあくまでもいつも通りだつた

「言ってくれるじゃないかその不良兄ちゃん！だがな！こういう言葉もあるんだぜ！」

次の瞬間、圭吾は制服の懐からある物を取り出し、それを空中に投げ放つた

「三兎追う者は一兎をも得ずつてな！」

圭吾の投げ放ったソレは、導火線に火のついた爆竹

「なっ………!?!」

直後、火のついた爆竹は空中で炸裂し、凄まじい炸裂音が辺り一帯に響き渡った

それによりその場にいる圭吾を除いた全員がほとんど反射的に自らの耳を塞ぎ、体を丸める

唐突に、俺の手が圭吾によって引かれ俺はそのまま半ば無理やり走らされた

「逃げるが勝ちだぜ!!じゃあな!お2人さん!アディオス!」

そして圭吾は途中で床に倒れ伏す美波の手も引き、何を思ったのか教室の窓めがけて一直線に駆け出した

「へ………?何………?」

寝ぼけ眼の美波が、圭吾に手を引かれながらそんな呑気なことを言う

しかし、俺はそれどころではなかった

「ば、馬鹿!!そっちは………!!」

確かに圭吾が何をしようとしているのかは分かる
分かる………が、こっちは三階………!!

「I Can Fly!」

次の瞬間、俺の制止も空しく、俺と圭吾と美波の三人は教室の窓ガラスを突き破り果てしない曇り空に身を投げ出していた

イベント？26 「ブルースネイク・2nd」

ここは学校からそう遠くない場所にある、とあるコンビニ
品揃えは決して悪くなく、店内は掃除が行き届いており、埃一つ
すら転がっていない

誰もいないこの世界でも律儀に入店音が鳴ったのは少し滑稽に感
じた

そんな空間の中で、ぺちんぺちんと柔らかい何かを叩くような音
が周期的に繰り返される

「おーい、美波ー、朝だぞー起きろー」

ぺちん

丁寧に磨かれた床の上で大の字になり、すっかり気を失ってしま
っている美波の右頬を軽くはたく

しかし美波はうなされているように小さく呻くだけで一向に目を
覚ます気配はない

「それじゃあちよつとインパクトに欠けるな、もっとこつ飛び起き
るような台詞でテイクツー」

「なるほど、おーい美波ー、起きろー、火事だぞー、圭吾に至つて
は半分燃えてるぞー」

「マジで!?!」

圭吾のアドバイス通りインパクトを重視した台詞を吐きながら美
波の左頬を右手の甲で軽く叩く

圭吾は釣れたのだが、やはり美波は小さく呻き声をあげるだけで起きる気配はない

「おい、やっぱり起きないぞ」

「まだインパクトが足りないか……じゃあれだな、もういつそのこと台詞のインパクトじゃなくて物理的インパクトならどうだろうか？」

「なるほど、じゃあもうちょっと手首のスナップを効かせて……こうか」

未だに目を覚まさない美波めがけて大きく振りかぶる

そして振りかぶった手を思いつき振り下ろそうとした、その時

「あれ……？」「どこ？」

「あっ」

パン

気付いた時にはもう遅く、店内を小気味良い音が響き渡った

「今から1時間以内に学校に戻らなければ人質は殺す……確かにそう言ったのね？」

美波に確認され、俺と圭吾の二人をほとんど同時に無言で首を縦に振る

「畝畑さんと千尋ならそう簡単にやられたりはしないと思うけど……弱ったわね……」

美波は怪訝な表情で自らの頭をわしわしと掻いた

「……とりあえず私を助けてくれたお礼を言っておかなくちゃね、ありがとう」

美波は頭を掻く手を下ろし腕を組んで、余り感謝するには不向きな不愛想な表情で感謝の言葉を述べる

ちなみに感謝の言葉を受けるべきである俺と圭吾は何故か瀕死だった

「一つ聞いていいか……」

右頬に真っ赤な手形をつけた俺の隣で、圭吾が死にそうな声で美波に問いかける

「何？」

「何で俺の方が重傷なんだ……」

ちらりと横目で圭吾を一瞥する

その顔には手形ならぬ靴型がつけられていた

ちなみに美波はと言うと、その問いに対し何食わぬ顔で一言

「アンタに助けられた事に対しての感謝の気持ちとアンタなんかに助けられた自分の不甲斐なさを天秤にかけた結果圧倒的に後者が勝つてたっただけだけど、それがどうかした？」

「ひっでえ……」

今俺が心の中で呟いた言葉を次の瞬間圭吾が口に出していた
珍しく意見が合ったようだ

……とまあそれはさておき

「とりあえず聞かせてもらおうか、……あそこで何が起こったのか」

俺は神妙な面持ちとなり、辺りの空気が一気に張り詰める
そして美波は俺の言葉に少し苛立ったような様子で口を開いた

「どうもこうもないわ……教室に入って、雨が降りそうだったから窓を閉めて……それから文庫本片手に畝畑さんの淹れた紅茶を飲んでたら急に気分が悪くなってきた……そこで恭介が来たのよ」

「そ、それだけ……!？」

「ええ……それだけよ、奴らの姿を見たのは恭介が来てからが初めてだし、プレートが使われたような形跡もなかった」

「なるほど、それは妙だな……」

ここにきて圭吾が口を挟む

それについては俺も同意見だ

「確かに妙だ……俺が今まで見てきたプレートは美波の「イグニッション」舞の「ストレイ・チャイルド」千尋の「ドラゴン」俺の「デイ・コンポーザー」そして……圭吾が使ったあのプレート」

圭吾のプレートが今にも目に浮かぶようだ

俺と、美波が、校舎の3階から飛び降りた際に使われた、あのプレートが

しかし今考える場所はそこじゃない

俺はそのまま続けた

「どれにせよ、視認はできるし、さほど遠くからは使えないプレートだ、……しかし尾羽梨は言っていた、この事態は自らのプレート？ブルー・グラウンド？によるものだ、と……」

「憶測で物を言うのは死に直結するわよ恭介」

そこまで言ったところで、美波によって遮られる

「ここに来て日の浅い恭介や圭吾は分からないかもしれないけどプレート能力は千差万別、目に見えない能力もあれば何？先にいても操れる能力だってある。……第一、ソイツの言う事が嘘って可能性が入ってないわ」

「まあそれはそうだが……」

歯切れを悪くする俺に美波は呆れたような視線を向け、溜息を一つ吐き出して言った

「……じゃあアイツの言った通り、アレがプレートの仕様だったと仮定するわ、……ならアイツのブルーグラウンドとかいうプレートの能力はどう説明するの？」

美波に言われ、俺は指を顎にあててしばらく唸る
すると俺の唸り声に割り込んで、圭吾が口を開いた

「あれじゃねえかな、念じた相手の気分を悪くさせる能力」

「……馬鹿を言うにもハーファタイムを挟んで欲しいわね」

美波の侮蔑を込めた冷たい視線が圭吾に向けられる

「プレートってというのは一長一短、強いプレートにはそれなりのリスクや条件がつく、あくまで平等、……圭吾のソレはリスクが皆無じゃない」

「確かに……念じただけで相手の体調を崩す事ができるんなら見えないところからプレートを使うだけで最強だもんな」

「そういうこと、最強のプレートなんて存在しない、どんなプレートにも弱点や欠点はある。……強いて言うならプレートの強弱を変えるのはレベルの差と相手のプレートとの相性……ぐらいかしらね」

なるほど、なんとなく分かったような気がする

「つまりあのプレート、？ブルー・グラウンド？にも何らかの弱点、もしくは発動するための条件があると？」

「あるわ、……いや、無い訳がないわ、絶対にね」

美波は案外あっさりと肯定する

しかし、美波は依然難しい表情のままだ

「でもプレイヤー同士の戦いで一番難しいのがそこ……弱点さえ見つけられなきゃ敵は星を獲得したどこぞの髭の配工管ばりに無敵……それにもう一人の男、アイツも間違いない分尾羽梨とプレートを持っているし、プレートの正体が全く分からない分尾羽梨とかいう奴よりも危険よ」

言われてみればそうだ

勿論尾羽梨がプレートを使っていた事を前提としてだが……土倉連、ヤツは結局一度もプレートを使わなかった

終始こちらの様子を余裕ぶった表情で眺めていただけ……

そんな事を一人考え込んでいると、不意に圭吾が横から口を開いた

「でもさ、恭介の考え方はいい線いってると思うぞ、多対戦じゃあまず一つの場所に戦力を集中させて端から崩していくのが定石だ、無理に2対3にする必要もない

……それに、もし舞や千尋がああなってるのがあの女のプレート
のせいだとしたら、あの女を倒せば舞や千尋も復活するかもしれない
そうなりゃあとは5対1、煮るなり焼くなり好きにできるはず……

……って何だその目」

「いや……圭吾が珍しくマトモな事言ってたからちよっと呆気にと

られてな……」

「失敬な！俺は常に真面目だぞ！」

圭吾は自信満々にそう言って胸を張る

その根拠のない自信はどこから来るのだろうか……

「悔しいけど圭吾の言う事は正しいわ、悔しいけど」

「え、なんで二回言ったの」

そんな抗議をする圭吾を華麗にスルーし、美波は続ける

「それより約束の時間は迫ってきてるわ、どちらにせよ早く決めないと……」

「……俺は圭吾の案に賛成だ、これ以上迷っていても仕方がない」

「私も賛成、でもその作戦だと一人が男の方を足止めをして、残りの二人であの女を叩く事になるんだけど……問題は誰がやるかよ」

美波は神妙な顔で呟くように言う

そこで一人、挙手をするものがいた

俺ではない、となると当然それは……圭吾だ

「足止めだけでいいんだろ？なら俺があ不良男の相手になってやる」

「……足止めだけとはいえ危険な仕事よ、何せ敵のプレートが分からないんだから」

「大丈夫だ！俺のプレートは鉄壁だからな！」

圭吾はそう言っただんと胸を叩く

それは比喩表現でも自信過剰でも何でもない

何故断言できるか？それは俺が数分前に見ていたからだ

圭吾のプレート能力を

「……分かったわ、じゃあ任せるからね」

美波もそこは分かっていたようで、特に反論もせずGOサインを出す

「じゃあ俺と美波はその隙に一気に尾羽梨を叩く……、これでいいか？」

「上出来」

美波は制服の胸ポケットからプレートを取り出し、空に投げてキヤツチする

もう準備は万端という事らしい

「よし！じゃあ早速……！！」

ぐう

直後、三つの腹の虫が同時に鳴いた

「飯でも食つか……」

「うん……」

顔を真つ赤に紅潮させながらこくこくと頷く美波に目をやり、なんだか締まらないメンバーだなあ、と、俺は一人心中の中で呟いた

イベント？27 「ブルースネイク・3rd」

ロスト学園サーバーエリアA、校舎三階2-1教室

元が教室だということすら忘れそうになるほど好き勝手なアレンジの施されたその部屋は、今は最早見る影も無い

割られた窓ガラスに床に散乱した小物の数々

そんな部屋の隅で、体を椅子に縛り付けられた一人の女性がにっこりと微笑みながら口を開いた

「すみませんが、お茶を一杯いただけませんか？」

「……っ」

女性、もとい敵畑舞のおっとりとした口調に、真正面の椅子に腰をかけた尾羽梨真紀が紙パックに刺さったストローを咥えながら額に青筋を立てる

「……テメエにはアタシがウエイトレスにでも見えんのか？それとも自分の置かれた状況が分かってねえのか？」

尾羽梨は紙パックの林檎ジュースを片手に鋭い目つきで舞を睨みつける

しかし、荒縄で縛られ身動き一つ取れない状態にも関わらず舞は微笑みを保ったまま、ひたすら落ち着いた口調で「だって喉が乾いたんですよ？」と、当たり前のように言っただけ

「そーですよー！私だって喉乾きましたー！なんならその林檎ジュースくださいー！」

今度は舞の隣で同じく椅子に縛り上げられた千尋が両足をバタバタとさせながら、駄々をこね始める

「このガキっ……！いい加減にしろ！こちとらベビーシッターやってるわけじゃねえんだぞ！」

さすがの尾羽梨もあくまでもマイペースな二人のステレオ攻撃に耐え切れなかったのか、声を荒げて立ち上がった

「怒りっぱいですね……確か奥の冷蔵庫に牛乳が二本ほど入ってますので……良かったらどうぞ」

「飲むかボケ！なんだその憐れんだような目は！アイツらが少しでも遅れてきやがったら真つ先にお前を殺してやるからな！」

「残念だったね尾羽梨、……どうやら新規君たちも来たみたいだ」

苛立たしげに喚く尾羽梨に、窓から顔を出して外の様子を眺めていた土倉連が言う

それを聞くと尾羽梨は一瞬ぴたりと動きを止め、それから口元を醜く歪めて踵を返した

「ハッ、待ちくたびれたぜ、んじゃあ早速……」

「隙あり……！」

「ああ！？テメエアタシのジュースに……！」

尾羽梨の持った紙パックの林檍ジュースのストローに食らいつく千尋と、それをなんとか引っぺがそうと千尋の頭を押さえる尾羽梨

「……締まらないなあ」

その二人の姿を見据えながら、土倉は一人呟くように言った

校舎正面玄関前

空をどんよりとした鼠色の雲が覆い尽くし、今にも冷たい雨粒が落ちてきそうな不穏な天気

この分じゃ圭吾の予言は当たりそうだな、と心の中で呟き、おもむろにポケットの中から二つ折りになった携帯電話を取り出す

そして手首のスナップで二つ折りになった携帯を開き、ディスプレイを凝視する

ディスプレイに表示された時刻は10時を少し過ぎたところ、約束の時間までは約10分……

それだけ確認すると、俺は携帯を閉じてポケットの中に押し込む
そして一つ、誰にも聞こえないように小さく溜息をついて、少し躊躇いがちに口を開いた

「……なあ美波」

俺と同じく腰をかがめて植え込みの陰に身を潜める美波の名を呼ぶ
すると美波は相変わらずの不愛想な表情で「何？」と一言だけ口

にした

「あのさ……もしあいつらと戦う事になったら……どうするんだ？」

「……へ？」

俺の問いに対して美波はぼかんと口を開けたまま呆気にとられたような表情で返す

「聞こえなかったのかな、などと呑気な事を考えながら、俺はもう一度言い直す

「いやほら、もしかしたら説得できるかもしれないし、……それにあっちにもそれなりの理由があるかもしれないだろ？」

「あー納得、そういうことね」

美波はそう言って、どこか呆れたような口調でわしわしと茶髪のかかった頭髪を掻いた

「何か気に障る事でも行っただろうか……？」

などと考え始めた頃、美波は大きな溜息を一つ吐いて言った

「……単刀直入に言わせてもらおうと？何を今更？って感じね、アイツらは明らかに敵意を持って私たちに襲い掛かってきた、だったらこっちもそれに応えてあげるのが礼儀ってものよ」

「いやまあ、そりゃあそうかもしれんけどさ……」

「そ・れ・に、あいつらには多分恭介の期待する？それなりの理由？なんてものはないわ、ただ目障りだったから、それ以上でもそれ以下でもない」

歯切れを悪くする俺の言葉を美波は語調を強めて遮る

そして美波は再び俺から視線を外し、校舎の方へと視線を戻して続けた

「とりあえずもう分かったわよね、私たちの任務はあの二人を倒す事と人質及び拠点の奪還、それで終了」

美波はそう言って半ば強引に話を切り上げる

それと同時に俺と美波、二人のポケットの中で何かが同時に音を立てて震え出した

「……圭吾が裏口から侵入したみたいね」

それを合図に美波は神妙な面持ちとなり、真っ直ぐと校舎の正面玄関を見据える

美波はポケットの中でバイブ音を鳴らす携帯を取り出し、手慣れた手つきで二つ折りになった携帯を開く

そして聞き慣れた電子音を何度か鳴らした後、美波はすぐにまた携帯を折り畳んでポケットの中へと滑り込ませた

「……じゃあ行くわよ恭介」

「……ああ、分かったよ」

美波が植え込みの陰から飛び出して正面玄関目掛けて一直線に駆け出し、続いて俺も走り出す

玄関は開放しとなっており、俺と美波の二人はアイコンタクトを交わしてから飛び込むように中へ入り込んだ

下駄箱を背にしながら周囲を見回し状況の確認
辺りはしんと静まり返っており、人の気配も感じない
どうやら近くにあの二人はいないようだ

「……ここにはいないみたいね、教室まで一気に突き抜けるわよ」

美波が下駄箱の陰から飛び出し、中央階段まで走り抜け、俺もそれに続いて階段を駆け上がる

一段、二段……歩数を進めるごとに胸の奥にモヤモヤとした何か
が詰まっていくような感覚が俺を襲い、足が少しずつ重くなる

別に怖気づいたわけじゃない

ただ、誰かから殺意を向けられるのも、誰かに殺意を向けるのも
こんな非日常が たまらなく嫌なだけだ

「……これが終わればまたいつものメンバーで笑う事ができる……
失敗なんてしたくないからね」

丁度二階を通過した頃、美波はまるで俺の心中を見透かしている
かのようにそう呟いた

……確かに俺は、あのメンバーでいる時がとても楽しいと感じて
いた、自分の居場所だとさえ感じていた

しかし土倉連と尾羽梨真紀の二人は「目障りだから」ただそれだ
けの理由で、それを壊しにきたのだ

実際俺もあの二人が憎いと思う

……でも、だから戦うのか？

日常を得るために、非日常的な戦いをする。

……それは本当に俺の求めている物なのか？

そんな疑問が頭の中をぐるぐると周回する

しかし直後、俺の考えは強制的に中断させられることになった

「……ようやくお出ましょ」

不意に俺の数歩先を走る美波が、2階と3階の間にある階段の踊り場で足を止め、ある一点を見つめながらそう呟く

視線の先、そこには三階で壁に背中を預けながら紙パックの林檎ジュースを片手にした一人の女性の姿

尾羽梨 真紀だ

「遅い遅い、遅すぎてテメエらの友達も殺しちまうところだったよ」

尾羽梨はストローを口に咥えたまま、どこか嬉しそうな口調で言った

「それは大変ね、もしそうになったら墓石に何て刻もうか迷ってたから、……貴方の墓石に」

美波は皮肉を一つ吐き出し、落ち着いた動作で制服の胸ポケットからプレートを取り出す

余りにも自然な動作だったため少し反応が遅れたが、慌てて俺も制服の胸ポケットからプレートを取り出し、構える

「おーおー元気だねえ、……ならこっちも見せてやるよ」

尾羽梨は壁から背を離し、手に持った空の紙パックを握り潰す
そして乱れた制服の胸ポケットからゆっくりとした動作で、ある
物を取り出した

無論それは プレートだ

「アタシのプレートは青い大地？ブルー・グラウンド？」

美波は胸元に、俺は左手の甲に自らのプレートを押し当てる
プレートは淡い光を放ち出し、それは液体のように溶け出して肌
に溶け込んでゆく

「……そうだ、墓石にはこう刻むことにしよう」

尾羽梨はそう言って手に持ったプレートを自らの頬に押し当てる
プレートは同じく淡い光を放ちながら溶け出し、頬から体内へと
吸収されていく
そしてプレートが完全に原型を失った時、尾羽梨の頬には数字の
？2？が刻み込まれていた

「命知らずの馬鹿ここに眠る、だ……ただし、テメエらのな！」

その後、すぐにそれは起こった

尾羽梨を中心に、壁が、床が、天井が、その全てが一瞬にして青
く染まったのは

一方、校舎1階大体育館

「君が、俺の相手かな？」

大体育館のステージに腰を掛けた男、土倉連が出入り口で佇む圭吾に聞こえるよう、そう問いかけた

「ああそうだよ、不満だったか？」

圭吾は土倉の問いかけに対して、皮肉交じりにそう答える
すると土倉は相変わらずの薄気味悪い笑みを浮かべながら「まさか」と肩をすくめた

「俺はね、あの時から君に目をつけていたんだ、君のプレートはとても興味深いからね、あの新規君のプレートとおんなじくらい」

土倉はそう言ってステージの上から飛び降りる

「俺の趣味はプレート集めでね、適当なプレイヤーを倒して、そこからプレートを奪ってコレクションしてるのさ」

「ケッ、吐き気がするぐらい気持ちの悪い趣味だな、さしづめ俺の事も倒してプレートを奪おうって魂胆なんだろ？」

「そうそう、話が早くて助かるよ」

土倉は歩み出し、それに合わせるように圭吾も歩を進める

「でもさ、俺は君のプレートの能力を見ちゃったし、レベルも知ってる。対して君は俺のプレートについての事は一切分からない、これはちよつと不公平だよな、さてこの不公平感をなくすにはどうしたらいいか……」

土倉はわざとらしく顎に指を当てて考えるような仕草をとり、それからぼんと手を叩いて言った

「そうだ、大サービスで俺のプレートについて教えてあげよう！」

土倉はそう言って制服の胸ポケットからプレートを取り出し、圭吾はその場に立ち止まって臨戦態勢をとる

直後、土倉が手に持ったプレートを空中で離れた

プレートはゆっくりと落下していき、そして土倉のスニーカーに触れ、まるで液体のように淡い光を放ちながら溶け始める

そしてしばらくしてスニーカーの上で蠢く土倉のプレートは完全に土倉の肉体へと溶け込んだ

「俺のプレートは超重量？ヘヴィ・ボンバー？その名の通り、物体を重くする単純明快なプレートさ」

イベント？28 「ブルースネイク・4th」

俺は、校舎の二階と三階の間に位置する階段の踊り場で、三階に立つ尾羽梨真紀から一時も目を離さなかつたはずだ
何故今そんなことを確認するのか、それは俺が目の前の状況に対処できなくなつたからに違いない

「な、なんだコレ……!？」

右も左も上も下も前も後ろも、視界全てを覆い尽くす、青、青、青
まるで魔法か何かのような不可思議な光景
何が起きたのか全く分からない、理解できない、混乱する

ただ一つ分かるのは

「これがアタシのプレート!？ブルー・グラウンド?だ!」

尾羽梨は両手を広げ、醜く口元を歪めながらそう叫ぶ

次の瞬間、唐突に美波は踊り場から三階までの短い階段を一気に駆け上がり、そして尾羽梨との距離を一気に縮めた

「そこそこ頭は切れるみてえだな青二才!」

尾羽梨はこちらに向かってくる美波を見据えながら、前もって用意していたらしい金属バットに手をかける

そして、助走をつけて放たれた美波の回し蹴りを尾羽梨は両手に構えた金属バットで防いだ

「ぐっ……!」

凄まじい金属音とともに金属バットが弾かれる
そして息をつく間もなく、美波は青く染まった床に両手をつき、
尾羽梨の顔面めがけて後ろ蹴りを放った

「っ……！あぶねえ！」

バットを弾かれたことで大きく仰け反った尾羽梨は、わざと体勢を崩すことで美波の二発目の蹴りをかろうじてかわし、そのまま地面に手をつく

そして体勢を立て直しながら美波との距離を取ると、再びバットを構えた

「……アンタも案外頭は回るのね、てつきり悪ぶって粹がる私の大嫌いな人たちの類だと思ったけど」

「はっ！人を見た目で判断するのは良くないな、アタシは善良な一般人なんだ……ぜっ！」

尾羽梨が一気に距離を詰め、太腿のあたりに狙いを定めて金属バットをフルスイング

それに対して美波は、大して焦った様子もなく空中に跳び上がり、スニーカーの裏面で振りかぶられたバットを蹴り、その勢いで後ろに飛びのき着地した

……バク宙のオマケつきで

「なっ……！？」

尾羽梨は驚きを隠せないと言った様子だった

当たり前だ

「じ………実戦でバク宙かよ………」

その様子を静観していた俺も、とうとう驚愕の声を漏らしてしま
った

実戦でのバク宙も勿論だが、さっきの蹴りはカポエラの技………も
う滅茶苦茶だ

一体どこでそんな技術を会得したのか疑問でならない

「余所見とは余裕ね」

「ッ!!!?」

そんな事を言っている間にも美波は、いつの間にか尾羽梨の目の
前まで迫っていた

「はっ!」

美波の掛け声とともに、鋭い回し蹴りが尾羽梨に襲い掛かる
尾羽梨は咄嗟に手に持った金属バットを構え、その蹴りを受け止
めた

「なかなか良い蹴りじゃねえか………!」

「それは嬉しいわね、じゃあもう一発どうぞ」

次の瞬間、唐突にバットにかかる重さが消え、尾羽梨の体勢が崩
れた

「やべっ………!」

慌てて体勢を立て直そうとする尾羽梨の腹部に美波は渾身の後ろ蹴りを決める

それをマトモに喰らった尾羽梨は「ぐっ」と短い呻き声をあげて勢いよく後方へと弾き飛ばされ、派手に転倒した

「恭介！早く！」

「あ、ああ！」

美波に呼ばれ、ようやく我に返った俺は一気に階段を駆け上がり、美波の隣に立つ

それと同時に尾羽梨も起き上がった

「いつてえなあ……！」

尾羽梨は苦しそうな表情で蹴られた腹部をさすりながら体勢を立て直す

美波はその様子を見下しながら、冷たい視線で口を開いた

「アンタの能力は正直言つてよく分からない、でも分かったことが二つあるわ」

「へえ……」

美波の物言いに尾羽梨はニヤリと口元を歪め、床の上を転がる金属バットを拾い上げる

しかしそれにも構わず、美波は二本の指を立てて言った

「一つ、このプレートはすぐに効力を発揮するものじゃない、それ

は一度目の襲撃でも証明されている」

美波は二本立てた指を一本折って一つ目の理由を述べる
そして二本目の指を折って続けた

「それとも一つ、アンタのプレートはその効力を発揮するま
ではまるで無力、攻撃も防御もできない全くの無防備……正解かし
ら？」

美波は無無を言わさぬ口調で尾羽梨に問い詰める

俺はというと……正直、言葉を失っていた

プレートを使ったプレイヤー同士の戦闘などという非日常的な状
況にも関わらず、美波は極めて冷静

敵プレートの分析もさることながら、ブルー・グラウンド発動直
後に駆け出したことも、そしてこの揺さぶり方も
まるでこういった状況に慣れているかのような……

「くくく……」

不意に、尾羽梨が含み笑いをこぼした

「……何か良い事でもあった？それとも強く蹴りすぎたかしら？」

美波の皮肉も、まるで聞こえないらしく尾羽梨は不敵な笑みを止
めようとしない

そして尾羽梨はひとしきり笑い終えると、ゆっくりと顔を上げて
言った

「ああそうだよアタリだ、確かにアタシのプレートはその効果がで

るまで少し時間がかかる

……だがなあ、それが分かったところでアタシのプレートの本当のところはなんも分かつちやいない」

相も変わらず不敵な笑みを浮かべたまま尾羽梨は意味深にそう言う
しかし美波はそんな事など意にも介さない様子で、淡々と歩を進めた

「そう、それは気になるわね、私はA型だからそんな気になる事を言われちゃ夜も眠れないの、アンタをボコボコにして、それから聞いてあげるわ」

全ての感情を押し殺した無機質な表情で着々と尾羽梨との距離を狭めていく美波に一種の既視感を覚える

……そうだ思い出した、昔映画館で欠伸をしながら見た映画に出てくるサイボーグにそっくりなんだ

今の美波はどれだけ謝罪の言葉を並べたって止められない気がする

「おーおー怖いねえ、……なら逃げるが勝ちだ！」

尾羽梨の投げ放った金属バットが激しく回転しながら美波に迫る

「美なっ……！」

「馬鹿ね、逃げたら敗走って言うのよ」

バキーン

耳をつんざくような金属音

それは美波が飛んでくるバットを蹴り上げ、弾き飛ばされたバツ

トが天井に叩き付けられた音だった

……そうだった、つい失念していた

コイツは、そんなに簡単に倒せるようなヤツじゃない

「んなこたあ分かってんだよ！」

尾羽梨は最後にそう言い残し、廊下の角を曲がって教室棟の方へと走りだす

「……プレート効力が回るまでの時間稼ぎのつもりかしら、浅はかにも程がある……」

美波はそう言って背中を丸め、躊躇いもなく青く染まった床に両手の親指と人差し指をつける

そのフォームは見紛う事なんてない、誰もが一度は見たことのあるその型

そう、それはクラウチング・スタートの姿勢だ

「一つ教えてあげる。私の100mタイムは12秒切ってるのよ」

その言葉の直後、美波は地面を強く蹴り、文字通りのロケットスタート

走るフォームも非の打ちどころのない完璧さである

「バケモンだ……」

……まさか味方に恐怖を抱く事になるとは思わなかった

俺はあっという間に遠ざかっていく美波の背中を追って走り出す
そしてその更に前方を走っていた尾羽梨は、廊下の突き当たりに

ある部屋の中へと飛び込み、引き戸を閉めた

確かあの部屋は数十分前俺と尾羽梨が戦闘を行った場所…… 2 -
1 教室だ

「 好都合ね、あそこはもう行き止まり、ついでに敵畑さんと千尋も救出して万事解決よ、盾にしてやり過ぎそうなんて考えたら速攻でローストしてやるわ」

床、天井、壁、全てが青く染まった不気味な空間の中を走り抜けながら、美波は遙か後方の俺に聞こえるように呟く

……一方、俺は全く別の事を考えていた
尾羽梨真紀のプレート、ブルー・グラウンドについてだ

一度目の戦闘で、尾羽梨はプレートを使ってはいなかったし、当然今みたく一面を青く染めるような派手な真似はしなかった

にも関わらず俺の体には、奴と戦っている最中、時間にして教室に入ってから約5分ほどでプレートの効果が表れた

吐き気に頭痛、そして眩暈、それらが一斉に襲い掛かってきて、俺は倒れたのだ

……何だこの矛盾は？

違和感、形容しがたいとてつもない違和感が俺を襲う

美波は気づいていないようだが、端から傍観していた俺は知っている

尾羽梨がプレートを使ってからすでに5分近くの時間が経っているのだということ

にも関わらず美波や俺はまだ全力で走れるくらいには平気である

ということを

……もしやブルー・グラウンドは、プレートを使わずとも、すなわち所構わず青く染めずとも前もってなんらかの準備をしておけば効果は同じなのだろうか？

……いや、それではプレートを使う意味がない

では……何が違うのだ？

俺たちの健康状態？精神状態？時間？気候？気温？

頭の中をパズルのピースが散らばり、宙を舞う

俺は頭の中でパズルのピースを何度も繰り返し繋げて、崩して、繋げて、崩して

そしてそれは、俺の中で繋がった

「あつ………！」

頭に浮かんだソレは、憶測と言つのも躊躇われる程に曖昧な仮説しかし、もしそれが本当なら………！

「プレートは魔法なんかじゃない………！」

その一言とともに、俺は一気にこちらの世界へと引き戻され、俺の世界に非現実的な風景が戻ってくる

そして視線の先、そこには今にも扉を蹴破ろうとする美波の姿が

「美波ッ！！やめろ！！！！！」

直後、俺の言葉を遮り、2 - 1の扉は派手な音を立てて大破した
間に合わなかったんだ

美波の突き出した足が教室の扉を破壊し、それにより派手な音を立てて大破した引き戸の破片が四方に飛び散る

その時、美波の視界に飛び込んできたのは畝畑舞の姿でも高島千尋の姿でもなく、？誰もいない教室で一人不敵な笑みを浮かべながら佇む尾羽梨真紀の姿？だった

「え？」

美波はその状況がしばらく理解できずに、一呼吸間だけ動きを止める

それからすぐの事だった

美波の全身から力という力全てが抜け落ち、まるで糸が切れた人形のようにゆっくりと膝から崩れ落ちていったのは

「……ッ!？」

まるで足元に広がる青い大地に呑み込まれるように、美波はゆっくりと崩れ落ちる

そして美波は訳も分からないまま、両手を地につけることとなった

唐突に鼻孔を酸っぱい匂いがつく

遅れてやってくるのは数刻前の物とは比較にならないほどの凄ま

じい吐き気、眩暈、頭痛

しかし彼女には、そうやって床に手をついて腹の底から逆流してこようとするとソレを抑えつける事しかできない

「アハハハハハハハハハハ！！！！」

不意に、頭上から女性の勝ち誇ったような笑い声が聞こえた。多分それは尾羽梨真紀の物なのだろうが、今の美波にはそれを確認することさえできない。

「残念だったなア！逃げるが勝ちって言ったただろうが！」

「う……そ……？」

全身から嫌な汗が滲み出し、世界が揺らぐ。頭が割れそうに痛い、最早呼吸をすることさえままならない。

今、自分は、何をされた？

「どうした？随分苦しそうじゃねえか、逝っちまう時はもっと楽しい事を考えるもんだぜ？」

すぐ耳元で尾羽梨の声が聞こえる。

手を伸ばせばすぐに届く距離、だが床に張り付いた手はまるで縫い合わされたようにぴくりとも動かない。

尾羽梨はそんな美波を見下しながらテーブルの上から木彫りの置物を手を取った。

置物は木製とは言え、大きさも相まってその重量感は半端ではない。全身が逃げると警告する。

しかしその反面、まるで全身が金縛りにあつたかのように体が言う事を聞いてくれない。

「ま、短い間だったけどなかなか楽しめたな」

尾羽梨はまるで独り言のようにそう呟いて、手に持った木彫りの置物を大きく振りかぶる

狙いは後頭部、当たればただではすまない

「じゃあ、これで終わりだ」

ヒュッ、という風切り音を鳴らしながら、尾羽梨の振り下ろした木塊が迫る

躊躇いもなく、戸惑いもなく、ただ淡々と

「……っ！！」

美波は覚悟を決め、次の瞬間自らの頭部に走る事になるであろう鈍い衝撃に備えて固く目を閉じた

……

……

……

……いくら経っても、何も起こらない

美波はそこで恐る恐る目を開く

そして頭痛や吐き気を堪えながら、なんとか上を見上げた

「てっ…………てめえ…………!!?」

視線の先では、尾羽梨が驚愕の表情で振り下ろしたはずの腕を空中で止めていた

美波は尾羽梨の突き出した腕の先に視線を移す

そこに立っていたのは

「んんんんんんんんんんんんんんんんんっ!!!!!!!!」

口を一の字に結び、お世辞にも格好いいとは言えない表情で尾羽梨の手首を掴む八伏恭介の姿だった

「きよ…………恭介…………!」

美波の目に僅かながら安堵の涙が滲む

俺はそれに答えるように尾羽梨の手首を握った腕を振り払い、尾羽梨の手に握られた置物は床の上を滑った

「なっ……………何で……………何でアタシのブルー・グラウンドが効いてねえ!!?」

自分の能力を破られたことがよほどショックだったのか、尾羽梨は後ずさりしながら慌てた口調で問いかける

それに対して俺は無言で返し、腰をかがめた

「ッ……………!そうか……………てめえ……………!」

その時、尾羽梨が何か勘付いたように一人そう呟いてこちらを睨みつける

「どうやら種がバレてしまったようだ」

「ならば仕方あるまい、ここはあえて彼女の言葉を借りて……」

「え！？ちよつ、何！？」

「逃げるが勝ちだ！」

「あつ、て、てめえ待ちやがれ！！」

俺は美波を抱え上げ、俗に言うお姫様抱っこで駆け出した

手元では美波は顔を真っ赤にして暴れるし、後ろから尾羽梨が追っかけてくるが、それでもめげずに俺は2・1教室から飛び出し、無駄に長い廊下を一心不乱に走り出す

「てめえ待ちやがつ……べぶうつ！！」

後方から尾羽梨のくぐもった悲鳴が聞こえた

状況が状況なので確認はしないが、どうやら俺があらかじめ仕掛けておいた「パチンコ玉トラップ」に上手く引っかかってくれたらしい

「……まあ、さつき尾羽梨が投げ捨てていった金属バットを「デイ・コンポーザー」で分解して玉状に固定したやつを床にばらまいておいただけなんだがな」

「なにせよこれで障害は一つ取り除けた」

「残るは……」

「ちよっ……！ちよっと降りしてよっ！？」

走りながら降ろせるか馬鹿、と言い返してやりたいところだが、ここはぐつと堪えて教室棟を抜け、中央階段を走り抜ける

その間、まるでポストみたいに顔を真っ赤に紅潮させた美波が腕の中で暴れまくっていたが、それに構っている暇なんてないのだ

そして俺は味方の攻撃に屈することもなく（？）、校舎二階に辿り着く

白い壁や天井が目優しい、どうやら尾羽梨のブルー・グラウンドの効力はここまで届いていないらしい

「だから……離してって……」

……心なしか美波が少し大人しくなってきた気がするが多分気のせいだろう

とにもかくにも、俺はそんな美波を抱きかかえたまま二階教室棟の最寄りの教室へと滑り込み、タツチダウンを決めた

教室に滑り込むと同時に美波を解放してやり、俺はその勢いで二三回転してから教室の床に大の字で寝転がる

そして

「……つぶはあっ……！！？」

溜め込んだ息の全てを勢いよく吐き出した

「ゼハアッ……ゼフッ……ゲホッゲホッ！ゲホオエッ！」

俺は少し間違えば吐血するんじゃないかというくらいヤバめの咳をしながら息を整える

「ね、ねえ……ちょっと大丈夫……？」

いつも不遜な美波もこの時ばかりは若干引き気味だ
だが、まだそれに答えることすらできない

それを数分ほど続けた後、やっとの事で俺の肺は満足してくれたらしく、第一声

「し……死ぬかと思った……」

息も途切れ途切れに、なんとかその言葉を吐き出す
圭吾ではないが割と本気で死ぬかと思った……

「そ……そういうば、美波は、大丈夫か……？」

「え、あ、うん、さっきよりは大分マシになったわ、まだちょっと気持ち悪いけど……」

それは良かった、……まあ、あれだけ暴れられる元気があれば大丈夫だろう

ふう……と一つ安堵の溜息をつき、同時に全身の力が緩む
できればこのまま泥のように眠りたい衝動に駆られる……が、勿論そんな事は目の前の少女が許してくれるはずもなく

「それで思い出したんだけど……恭介はなんでプレートの効果を受けなかったの？」

至極当然の事だが、案の定それについて聞かれた

本当の事を言つと話すのすら億劫だが、人質がかかっている以上時は一刻を争う

そこで俺はゆっくりと上半身を起こし、ポケットの中に手を突っ込んで、その手を美波の前に差し出した

「……………」

美波は頭の上に疑問符を浮かべながら、俺の差し出した手の内を覗き込む

「なにこれ……………」

美波は訝しげな表情で俺の手の上に乗ったソレを指で摘み上げた
恭介の差し出したそれは小さな欠片、石……………?

よく目を凝らして見てみるとその石は微かに青みを帯びており、更に表面には小さい毛のようなものが生えていた

「……………それはお前が尾羽梨の投げってきたバットを蹴り飛ばした時に欠けた天井の一部だ」

「ああ、あの時の……………ってことは、これはブルー・グラウンドの影響で青く染まった天井の破片ってこと？」

「まあそうなるな……………で、美波、何か気付くところはあるか？」

美波は唐突にそう問いかけられ、破片を手の上で転がしたり近くで凝視したりしながらうーんと唸る

「気付くところって言われても……………でもなんかどっかで見たことある気がするわね……………」

見たことがある気がする……ね、まあ当然だろう
だって……

「それ、黴だよ」

「カ……ビ……?」

その二文字の単語を耳にした途端、美波の顔から目に見えるよう
に血の気が引いていく

そしてしばらくその状態で固まったかと思つと

「ッ……!」

唐突に手に持った欠片を全力で廊下目掛けて投げ放つた

「何だ……黴嫌いなのか、あんなだけ触りまくつてたのに」

「すす、好きなヤツなんているわけないでしょ!!?分かってたら
触んなかったわよ!!」

美波は肩で息をしながら軽く涙目になって怒声をあげる

いつつもはあんな不愛想なくせに変なところで普通の女子よりも女
の子っばいからギャップが激しい

それはともかくとして、だ

「ってことは……ブルー・グラウンドの正体は黴……!?!?」

「……概ねそんなところだろう」

ふう、と一息ついて天井を眺める

「まあ本物の黴にここまで毒性はないんだがな……、そこら辺はヤツのプレートの能力で補強してあるんだろう」

「そ、それは分かったけど、それじゃあアイツがプレートを使わなかったときにも能力が発動したことの説明が……！」

「舞や千尋のプレートみたいな魔法じみた能力ならまだしも、黴は別に魔法でも空想上の存在でもなんでもない、れっきとした自然現象だ、ならプレート未使用時に能力が残っていても不思議はない……大方奴らは先回りでもして予めプレート能力で部屋の中に黴をばらまいておいたんだろう、そして何も気付かずに部屋でくつろいで黴の胞子をたっぷりと吸った三人は特製黴の毒素に蝕まれてばっくなり……ってことだ」

「じゃ、じゃあ……ブルー・グラウンドの所有者に黴が効かないのは良いとして、恭介とアイツが戦った時あの場所にはもう一人の男もいたんでしょ、何でアイツには……！」

「……落ち着け美波、そして深呼吸しろ」

少々熱くなつて身を乗り出す美波を、両手で制して元の場所に座らせる

すると美波はこくこくと何度か頷いて、深呼吸を始めた

大きく吸って……吐いて、これを何度か繰り返した後、俺はようやく落ち着きを取り戻した美波の目をまっすぐと見据えながら口を開く

「思い出してもみる、あの時の俺とあの男、土倉連の違いを」

「違い……?」

美波は唇に指を添え、真剣な表情で一時間ほど前の出来事を記憶の底から引きずり出す

自らを襲う吐き気や眩暈、更には頭痛などの症状に苛まれ朦朧とした意識の中でぼんやりと見えていたもの

頭の中をよぎったのは、尾羽梨の振り回す金属バットから必死で身を躲す恭介と、椅子に腰かけて薄気味悪い笑みを浮かべながらその様子を眺める土倉連の映り込んだ、そのワンシーン

「あ
」

瞬間、美波の中で全てが繋がった

「……気付いたみたいだな、そう、アイツは呼吸一つ乱しちゃいなかったんだ」

そうだ、土倉連はあの時一切息を乱しちやいなかった

それとは対照的に俺は尾羽梨との戦闘や、情けない話だが恐怖から息が荒くなっていた

黴の毒素とは空气中に舞う孢子にこそあり、それを吸い込む事で初めて効果が発揮される

つまり土倉連も孢子を吸ってはいた、吸ってはいたが肩で息をしていた俺に比べれば吸い込んだ孢子の量は遥かに少なく、毒が回るまでに時間がかかった

……考えてみればあの時から兆候はあったのだ

やたらと俺を挑発するような言動、行動……それは全てその為の
伏線

それに俺はまんまと引つかかってしまったということだ

「なるほどね……でもさっき私が教室でた、倒れたのは？」

倒れた、の部分で口籠る辺り、やはり自らの不甲斐なさを感じて
いるらしい

それに免じて俺の手を患わせた事はこの際水に流して教えてやる
ことにしよう

「……多分、そこは現実の黴と一緒にだ、湿度の高い場所ほど必然的
に黴は多くなる……閉め切った場所なら尚更だ、……つまるどころ
お前は自分から黴の胞子が充満した部屋に突っ込んでっただよ」

「なんかまた吐き気がしてきた……」

美波が体をぶるっと細かく震えさせた

そしてそれから一つ咳払いをして、気を取り直す

「ま、まあ、特に他にアイツの能力の検討があるわけでもないし、
今回はその仮定を前提として考えるけど……問題はどうやってアイ
ツを倒すか、ね」

その意見はもつともだ

幾ら原理が分かったところで対策が思い浮かばねば所詮は無策
さっきと同じ結果になるのは目に見えている

しかし

「策ならある」

「ふーん……それってどんな？まさかカビデストロイヤー片手に特攻とかそんなのじゃないわよね？」

きつぱりと言い切った俺に対して、美波は半分疑ったような口調で問いかける

「うーむ、発想的には近いんだが……それは少し違うな、いいか？俺の作戦はこう」

すう

俺は息を大きく吸い、言い間違えの無いよう、はっきりと次の言葉を発した

「汚物は、消毒だ」

校舎一階大体育館

土倉連の振り切った金属バットが体育館の分厚い床をぶち破る音が広い体育館の中を反響した

「あらら、また外れちゃった」

土倉は、ふざけた口調でそんな事を言っ て首を傾げる

土倉が床にめり込んだ金属バットを引き抜くまでの隙に、俺こと伊勢圭吾はそんな土倉に狙いを定め、拳を振りかぶり、駆け出した

「空振り三振アウトだ！チェンジだぜ！」

「残念、ヒットだよ」

土倉がバットを握った手に更に力を込め、下から円を描くようにして振り切る

そして振り切ったバットは丁度土倉の眼前まで迫った俺の拳にジャストミートした

「っ……！い、つてええー！」

バットで殴られ、痺れる手を押さえながら俺は土倉との距離をとる

「うーん、本当に頑丈だね君は、骨くらいいけると思ったんだけどショックだなあ」

「ふざけんな！死ぬほどいてえだろぅが馬鹿か！」

赤くなった右手にふーふーと息を吹きかけ、それから乱暴に手を振る

折れてはいないが痣ができてしまった……しかしアイツがプレート能力を使わなかっただけでも運が良かったと思うべきか

……まあ、そんなこと今はどうでもいい、肝心なのはあくまでも

目の前の不良男の相手をして時間を稼ぐことだ

「よっし治った！さあかかってこいや不良男！」

「じゃ、お言葉に甘えて」

土倉が不敵な笑みを浮かべながら、金属バットを片手にこちらへ向かってくる

そして素早い動きでバットを振りかぶり　フルスイング

「ッ！！」

脇腹を狙ったその鋭いスイングを、俺は後ろに飛びのいて躲す
普通金属バットが命中すれば骨の一本二本は覚悟しなければなら
ない、が、この男の場合は違う

当たれば、骨の一本や二本なんて生温いものでは済まないのだ

ブンッ

再び振りかぶられたバットが、頭上に振り下ろされる

俺はそれを間一髪、サイドステップで回避

次の瞬間、さっきまで俺の立っていた場所の床が、粉々に砕かれた
仮にも体育館の分厚い床が、金属バット一振りでいとも簡単に

「こええええ！！なんつー破壊力だ畜生！」

あんなバカげた攻撃に当たれば骨どころではない、全身複雑骨折
に内臓破裂のオマケつきで即あの世行き

俺は追撃に備えて、土倉から更に距離をとる

しばらくして土倉はめり込んだバットを再び手に持ち、相変わら

ずの不気味な笑みを浮かべながら、言った

「時間稼ぎ……か、なかなかいい作戦だとは思っよ」

「何だ、バレてたのか……」

自分の演技力の無さに少し落胆しつつ、指先でぼりぼりと頭を搔く

「まあ、でもそれは相手が俺たちじゃない場合に限るかな、多分あの二人じゃ尾羽梨には勝てないよ、勿論君も俺には勝てない」

土倉はゆっくりと俺に向き直り、再度バットを構えて駆け出した

「勝とうが負けようが！お前を足止めするよう頼まれてる以上が
るかよ！」

土倉が金属バットを振りかぶる

ヤツの攻撃のバカげた破壊力は、ヤツのプレートにこそある
プレート名称は超重量？ヘヴィ・ボンバー？、最後に触れた物体
を重く出来るプレート

一見単純なように見えるが……これがなかなか厄介な能力だ

感覚を研ぎ澄まし、振り下ろされたバットを避ける

そして代わりに凄まじい音をたてて床に巨大な穴が開いた

ヤツは自分が手に持ったバットが相手に当たる瞬間だけ重さを増やし、そしてそれ以外の時は元の重さに戻しているのだ

シンプルな攻撃だが、それゆえに強力

弱点らしい弱点もない、一度でも当たれば致命傷

だが

「相手が悪かったな不良兄ちゃん！」

俺は、何の躊躇もせず、再び振り下ろされたバットを突き出した両掌で？受け止めた？

「へえ……」

土倉は不快な笑みを浮かべながら、俺の手の上のバットに力を込める

多分、今俺の腕には何十キロ、何百キロと言った桁外れな重さがかかっているのだろう

……何故そんな曖昧な言い方かって？

それは、俺がその重さを感じることが出来ないからだ

俺のプレートによって

「もう足止めは飽きた！っつーことで！」

俺は両掌を天に突き出したその状態で、土倉のから空きの脇腹に足蹴りを放つ

当然、そんな無理な姿勢で放った蹴りが当たるはずもなく、それは後ろにとびのいた土倉によって軽々と躲された

……が、この際、構わない

「ここらで今度こそ攻守交代！足止めも兼ねてぶっ飛ばしてやる！俺のプレート！？Z・I・P？でな！」

突き出した俺の手の上

そこには何故か一つのピンポン玉が乗っかっていた

あるところに一人の少年がいました

少年は生まれつき頭がよく、器用な子でした

しかしそれゆえに彼の両親は少年に過度な期待を抱き、少年に無理難題を押し付け、そして決して褒めることはしなかったのです

周りからの重圧に不満を持った少年はある日、学校のテストでわざと滅茶苦茶な回答をして酷い点を取り、その夜それを両親に見せました

すると彼の父親は怒り狂い、母親は泣き崩れてしまいました

それからというもの、彼は何も言わずに勉強に励み、両親の言うとおりの高校へと進学したのです

しかし、そこで彼はついに？重さ？に耐え切れなくなりました
いつしか彼は、表では善良な高校生を演じ、裏では町の不良をいたぶってそこからもぎ取った校章を集めるのが趣味となっていました
そうすることで彼は自らの？重さ？を消していたのです

ですが、それも長くは続きませんでした

そんな事を繰り返していたある日、ついに彼のしていた事が学校にバレてしまったのです

そしてそれが両親の耳に伝わるまでそう時間は要しませんでした
少年は、怒り心頭の父親に殴られ、泣き喚く母を見ながら気付きました

ああ、？重さ？は消えたんじゃないやなくて増えていたんだな
と

かくして、彼は自らの？重さ？に押し潰され、そしてしまいには誰の目にも見えなくなってしまういました、おしまい

大地を蹴り、風を切って一心不乱に駆ける

土倉の振り下ろしたバットが視界いっぱい広がる

俺は体をひねってそれを躲し、より強く地面を蹴って二度目のバットも回避

「何回やっても当たるかよそんなの！」

「うーん、そうか……ならこれならどうかな」

土倉が不意に床に転がったバスケットボールを持ち上げる

そして土倉は何を思ったのか、手に持ったバスケットボールを遙か上空に投げ出した

バスケットボールはぐんぐんと上昇していき、丁度天井に触れるか触れないかといった辺りの高さで動きを止め、落下を始める

「ハッ、こんなの……」

それなりの速度で落下してくるバスケットボールを見上げる

次の瞬間、何かが俺の横を高速で通り過ぎた

轟音、少し遅れて碎け散った体育館の床板が舞い上がる

例えば、数十メートルの高層ビルの屋上から鉄球を落としてやったらこんな感じかもしれない

ではもしそのビルの下に人がいれば？

十中八九 死

「慣れないことだから調整が難しいな……でもまあ、こんな言葉もあるしね」

土倉が手に持ったバットを壁に立てかけ、いつ用意したのか溢れんばかりのバスケットボールが詰め込まれたカゴを引きずってきた。そして土倉はそのカゴの中から両手に二つバスケットボールを持ち、一言

「？下手な鉄砲数撃ちや当たる？」

走れ！

「うっ、おおおおお！！！」

全身を響き渡った警告に従い、俺は即座にその場から駆け出す

轟音、轟音、轟音

天から降り注ぐオレンジ色の鉄球により、すぐ後ろの床板が、隣の床板が、目の前の床板が砕けて散って四散する

そうだった、ヤツの能力は別に対象に触れてなくともよいのだ。ヤツのヘヴィ・ボンバーは？最後に？触れた物を自由に重くするプレート

つまりヤツによって投げ放たれたバスケットボールはヤツの好きなタイミングで空中で重さを増し、重力に身を任せ、隕石さながらのスピードで落下してくる

？当たり前どころが良ければ？骨折で済むかもしれない、……まあその後どうなるかは目に見えているが

「くっそおおおおおおお！！こええええええええええええ！！！！」

俺は動きを予測されないよう蛇行しながら全速力で随分と穴だらけになった体育館の中を駆ける

落ちてきたバスケットボールが頬をかすり、右頬から鮮やかな赤色の液体が滴り出した

傷口が熱い、いやそんなことよりも段々とヤツの狙いが正確になってきている

もしヤツがあのカゴの中の大量のバスケットボールを投げ尽くしたところで、次は落ちてくる球がバレーボールか何かに変わるだけだそれにこのまま逃げ回っていれば初めに尽きるのはまず俺の体力だろう

となればこうやって逃げ回るのは得策ではない

この状態での最善策は　こう！

「おらああああああああああ！！！！正、面、突、破、だああああああああああああ！！！！」

視界の中心に土倉を捉え、一心不乱に走り出す

「良い判断だね、でも通さない！」

急降下してきたバスケットボールが視界に入り込む

このままの勢いで行けば命中、ならば

「ッらっつっ!!」

バスケットボールの落下地点の少し前で膝を曲げ減速しながら身を低くする

ボールは前方の床板を破壊し、俺は遅れて膝のバネを最大限まで活用し 跳躍

「なっ !!」

土倉の動きが一瞬止まる

俺はその隙を狙い、右手で握り締めたピンポン玉を土倉の顔面めがけて投げ放つ

ピンポン玉は一直線に土倉の眉間目掛けて飛んでいき、土倉はそれに合わせるように足元のバット拾い上げ、そのまま振りかぶる振り下ろされた金属バットとオレンジ色の球体が接触
自然に口元が歪む

「バーカ!」

直後、ピンポン玉とバットの接触部分に同心円状の波紋が立つ
まるで湖の中に小さな石ころを投げ込んだかのような、そんな光景
そして投げ放たれたピンポン玉は、振り下ろされたバットの全ての衝撃を?吸収?した

「 !」

土倉の表情に一瞬だけ驚愕の色が見える

何故なら、金属バットでの一撃を喰らったにも関わらず、ピンポン玉は止まらなかつたからだ

「残念だったな！ワンナウトだぜ不良の兄ちゃん！」

瞬間、ピンポン玉は空中で動きを止め、目を見張る勢いで膨張を始める

それからすぐに元の大きさの3倍近くまで膨張したピンポン玉が耳をつんざく爆音をたてて破裂

更に間髪入れずに、そこから見えない衝撃波のような物が放たれた

「くっ！？」

土倉はバットを両手で構え、咄嗟に防御態勢を取る
しかし、間に合わない

「がっ！」

「いづっ！」

衝撃波をマトモに正面から受けた俺と土倉の体がほぼ同時に仰け
反り、それぞれ真反対の方向へと弾き飛ばされる

「ぐっ……！」

激しい衝撃ののちに、背中を中心にじわりと鈍い痛みが広がる
どうやら壁に背中を強打したらしい、息も上手く出来ないし、す
ごく痛い……が、それはヤツも同じだ

「ハッ……どうだよ俺の圧縮と解凍のプレート？Z・I・P？の威
力は……」

俺は壁に背を預けながら、ゆっくりと立ち上がって虚勢を張ってみる

「どうもこうも……！俺の攻撃エネルギーを奪ってそれをそのまま返してるだけじゃないか……しかも自爆だ……」

土倉はほんの少しだけ苦痛に顔を歪めながらそう言った

そう、これが俺のプレート、圧縮と解凍？Z・I・P？の力使用中俺が触れた物体はあらゆる衝撃を吸収するようになり、好きなタイミングでその衝撃を解凍できるというプレートだ
もっともレベル1なゆえ衝撃を吸収できる物体は一個までしか作れないし、解凍の際媒体となった物質は崩壊してしまうという欠点付きだが

しかし、アイツのプレートとはとことん相性がいい、何故か？
それはアイツのプレートの特性にこそある

アイツのプレート、ヘヴィ・ボンバーは物体を重くするプレート
アイツの能力で重くした物で攻撃されれば即致命傷、だが一撃と一撃の間隔はそれほど短くない……そこがポイントだ
俺のプレートを使えば例えアイツがトン単位の桁外れな重さで攻撃してこようが無効化できる

そして俺はその溜め込んだエネルギーをそのまま返す事ができるのだ

さっきは咄嗟だったために自分もダメージを受ける距離にいたのが失敗だったが、離れて使えば……

「楽勝だ、そう思ったんだろ？」

先回りして言われてしまった

「……よく分かったな、エスパーか？」

考えていたことが見透かされていたことに多少の苛立ちを覚え、
皮肉を吐き出す

しかし土倉は眉一つ顰めず、胸糞悪い微笑を浮かべたままその場
に立ち尽くすと、何を思ったのか唐突に臨戦態勢を解いた

「いやいや、エスパーなんて大それたもんじゃないさ、俺はただの
善良な高校生、ただね……」

土倉が一步、力なく握った金属バットの先を体育館の床に擦りな
がら俺に向かって足を踏み出す

一步、また一步とゆっくり、本当にゆっくりと歩を進める

「君の考えてることがただの高校生にも分かるくらい浅はか、って
事さ」

土倉が徐々にこちらに近づいてくるつれ、バットが床を擦る耳障
りな音も近くなってくる

「ぐ……！」

額から頬にかけて一粒の滴が流れ落ちる

汗を拭う事も、瞬きをすることも許されない緊迫した瞬間

自然と視線は土倉の持った金属バットに集中する

コレで殴られた上プレート能力まで付与されれば全身粉碎骨折か
らの内臓破裂、そして即死の三連コンボ決める羽目になるのは間違
いない

だからここは慎重に……そう思った矢先だった

カラン

「は？」

金属質な音が何度も耳の中を反響する

視線の先、そこには何故か土倉の手から離れ、床の上を転がる金属バットが

やられた！

「ッ！」

俺は咄嗟に意識の中から金属バットを外し、大きく踏み込んで懐に潜り込んだ土倉へと移す

この距離からだど？Z・I・P？で攻撃を吸収するのは間に合わない

俺は拳を握りしめ土倉の顔面を狙って振りかぶる

しかし俺の拳は直前で攻撃を見切った土倉によって躲され、空しく空を切った

「しまっ」

全力での攻撃を盛大に外し、体勢が崩れる

その隙に土倉は脇をくぐり抜け、後ろに回り込み、俺の背中に一度軽くタツチ

直後、俺の体にとつともない重さのしかかった

「なっ！？」

上半身にかかる立っているのもままならない程の桁外れな圧力
足が震える、体が千切れそうに痛い

「ははっ、残念だったね、俺のプレートは別に攻撃だけじゃないの
さ」

土倉が背後で嘲笑を浮かべる

やられた、ヤツは、土倉連は、俺の制服をヘヴィ・ボンバー
の能力で重くしたのだ

「ぐ、ぐっ……！？」

その場から動こうにも足が地面から離れない

制服を脱ごうにも袖にも重さがかかっているせいで腕を持ち上げ
ることすらもできない

これは本格的にヤバイ……！？

「後は煮るなり焼くなり……って感じかな？」

土倉が、まるで散歩をするかのような足取りでこちらに歩き出し、
床に転がった金属バットを手に取る

今すぐ殴ってやりたい衝動に駆られるが全身が悲鳴をあげてそれ
を拒否する

「まあ大丈夫だよ、一発で頭砕いちゃえば痛みを感じる頃にはもう
天国だから」

土倉がそんな物騒な事を呟いて金属バットを振りかぶる

もうバットをヘヴィ・ボンバーで重くする気も無いらしい

「んじゃ……辞世の句とかある？メモ用紙に書いて君のプレートに張っておけば目印になるから一応聞いてあげるよ」

ニヤリと土倉の口元が醜く歪んだ

吐き気を催す明確な殺意、例えるなら薄皮一枚で包まれた煮詰めたドブの水

「つくづく腐ってやがる」

全身が悲鳴を上げるのも構わず、俺はいつまでも薄気味悪い笑みを浮かべる土倉を睨みつけながら続けた

「……いいかよく聞け土倉連、人から押し付けられた？重さ？なんざ、俺は痛くも痒くも重くもない」

一瞬、土倉の動きが止まる

「何故なら俺はお前のスツカスカな？重さ？よりもずっと重いものを自分から背負ってるからだ」

言い終えた直後、土倉連の顔から表情が消えた

「……変わった辞世の句だな」

「違うね、俺は死なない、頑丈なだけが取り柄なんだ」

俺はさっきのお返しと言わんばかりに口元を歪めて虚勢をはるすると土倉は片手を頭の後ろに回し、がしがしと頭を掻いた

「あーあ、胸糞悪い胸糞悪い胸糞悪い、こんなにムカついたのは久しぶりだ」

がしがしがし

明らかに今までとは雰囲気が違う

不愉快な笑みも、気取った喋り方も、もうそこにはない

あるのは純粹な 殺意

「あーやめだやめ、こんなんで頭潰して殺しても面白くない」

土倉の手から金属バットが落ち、金属質な音を立てて床の上を転がる

それから土倉はその場で少し膝を曲げ、腰をかがめ……そして、こちらを、見た

「こんなんじゃない、お前は原型留めなくなるまで？ 押し潰す？」

曲がった膝を伸ばし、土倉の体が宙に浮く

土倉がぴんと伸ばした手の先、そこには丁度俺の真上に設置されたバスケットボールのゴールが

「そら、ダンクシュートだ！」

土倉の手がゴールリングを掴み、不快な音が辺りに響き渡る
まるで錆びた鉄が軋むかのような、不快で、耳障りな音

同時だった

不意に、俺の体にかかる重さが消えたのと、頭上のバスケットゴ

「ールが音を立てて？落ちて？きたのは

「　　ツツツ！！！」

あつという間に俺の視界を覆い尽くす黒い影
間に合わない

次の瞬間、だだっ広い体育館の中を凄まじい轟音が木霊した
木片や金属片が四散し、床を跳ねて辺りに散らばる
そしてしばらくして鼓膜を揺るがす轟音の余韻が消えた頃、自ら
の服についた埃を払いながら、気だるげな様子の土倉が現れた

「……あーあ疲れた疲れた、さつさと尾羽梨んとこ行くかあ……も
う終わってるかもしれないけどさ」

肩をぐるぐると回し、土倉は最早何の興味もなくなったかのように
バスケットゴールを後にする
その時だった

「気が早い不良の兄ちゃん……！」

「……！？」

土倉が咄嗟に後ろを振り向く
視線の先、そこには全身傷だらけで両手を天高く掲げた俺の姿

「ばっ……！！？」

土倉が驚愕に目を見開く

「言っただろうが！こんな？重さ？屁でもねえんだよ！！」

天高く掲げた両手の上には広げた制服、そして更にその上には元バスケツトゴールだった物の瓦礫が

「あの一瞬で上着を脱いで能力を使用……！？ふ、ふざけんなッ！！」

土倉が怒りと焦りを足して2で割ったような表情で叫ぶ
そこにもう初めのような冷静さや不敵さは微塵も残っていなかった

「ッ……！ならもう一回だ！今度こそ押し潰れる！！」

土倉が腕を突き出し、再び能力の使用を試みる
が、そこで土倉は思い出した

先程、自分が制服の埃を払った時、自らの制服に触れていたことを

「ぐっ……！！」

あと少しの所で押し留まり、土倉は突き出した手を引っ込める
その迷いが、隙となった

「忘れもんだ！受け取れ！」

俺はその隙に瓦礫の山から抜け出し土倉までの距離を一気に狭め、
手に持った制服を投げる

「しまっ
「！」

「もう遅い!!」

中空に投げ出された制服が凄まじい速度で膨張を始める

制服は元の大きさの3倍ほどまで膨張した所で破裂

そして、先程の物とは比べ物にならない程の衝撃波が俺と土倉の体を弾き飛ばした

「ぐっ……!!」

意識が飛びそうになるくらいの衝撃

俺は大体育館のステージ上を滑り、背面を壁に強打することでその勢いを殺した

「がっ!」

口の端から鮮やかな赤色の液体が飛び散り、床を汚す

背中が冗談にならないくらい痛い、……が、どうやら骨は折れてはいないようだ

「はぁ……はぁ……」

必死で肺の中に酸素を取り込みながら、大の字でその場に寝転がる

視線をずらし体育館の出入り口付近に目をやると、そこには壁に背をもたれかけさせて俯く土倉連の姿があった

死んではいけないようだが、もう戦闘ができるような状態でもないだろう

俺はひとつ安堵の溜息を吐き出し、一言

「死ぬかと思った……」

俺の心からの独り言が、だだっ広い体育館の中を無駄に反響した

イベント？31 「ブルースネイク・7th」

……

……

……あ、やべっ、今ちよつと寝てた

大体育館のステージ上で大の字に寝転がった俺がそれに気付いたのは、土倉を倒してしばらく経ってから的事だった

体の節々が痛むし、口の中は血の味がする

さすがにあんなに走り回ったり自爆特攻したりと体に無理をさせすぎていたせいで、少しうとうととしてしまっていたらしい

……あ、そうだ

俺はおもむろに制服のポケットから二つ折りになった携帯を取り出し、ゆっくりとそれを開く

そしてメール作成画面で短い文章を打ち込んで、送信

「……ふう」

これで俺に任された仕事は完全に終了

あとは恭介と美波が上手くやってくれる事を願って再び夢の中へ

……

と思っていたら、今にもそこらへんに放り投げようとしていた携帯が手の中で振動を始めた

俺は多少の煩わしさを感じながら再び携帯を胸元まで持ってきて、

画面に目をやる

画面の端には1件の新着メールの文字

何用だろうか、とメールボックスの中に入れられた件名のない新着メールを開き、そして自分の不用意を後悔した

「ぐおおお……人使い荒すぎる……」

短く、簡潔で、それでいて残酷なメール本文に思わず身をよじる
どうやらあの二人は俺を休ませる気などさらさら無いらしい
しかし俺が今ここで幾ら愚痴を垂れたところであの二人が聞いているはずもなく見て見ぬふりも苦しすぎるので

「……行くか」

俺は大きな溜息を一つ吐き出し、その場から起き上がった

そしてこれは明日辺り筋肉痛で動けなくなりそうだな……などと
考え始めた頃だったろうか

その異変に気付いたのは

「……あれ？アイツどこ行った……？」

今は自分以外誰もいなくなった無人の教室
外は曇り空、窓から見える風景はこれ以上ないくらい最悪だ

「……」

特に何の意味もなく溜息をついて私は机の上に腰をかける

……思えばこの世界に来てから、この学校に来るのは今回が初めてだ

まるで世界の中心だとも言わんばかりにこの限られた世界の中で佇むこの建造物

何分目立つ建物だったため遠くから見ると機会が多々あったが、その度に気分を悪くさせられたのを覚えている

ふと辺りを見回してみる

黒板には何故かこの教室の元住人の物であろう名前が幾つか刻まれており、そこかしこには無造作に投げ捨てられたゲーム機や文庫本、加えて棚の中からは私にはよく分からないがなにやら高級そうなティーセットが覗いていた

上も下も右も左も前も後ろも

一面が青く染まった世界の中でも、それらはまるで私を嘲笑うかのように元の形を失ってははいない

それが妙に腹立たしく、私は金属バットのグリップを握り締め、思い切り振り下ろした

音を立ててゲーム機が粉々になる

音を立てて文庫本がぐしゃぐしゃになる

音を立ててティーカップが割れる

「はあっ……はあ……！」

ひとしきり視界に映るモノを滅茶苦茶にしたところで私はもう一度机に腰をかけ、そして天井を見上げた

視界いっぱい広がるのは鮮やかな青なんかじゃない濁りきって、どろどろで、吐き気を催す、ただの、黴

「きつたねえなあ……」

誰に言う訳でもなく、空にめがけて吐き捨てる

もしかしたら私は誰かに答えを返してほしかったのかもしれない……まあ、私の近くには誰もいないのだから関係ないか

「……土倉の野郎が戻ってくる前にアイツらを片付けねえとな、あーあ面倒臭え……」

私は気だるげに机の上から飛び降り、力なくバットを握って教室を後にしようと歩を……

「その必要はないぞ」

聞き覚えのある声

咄嗟に声のした方向へ振り向く

そこには、出入り口の前で佇む真っ白なマスクで口と鼻を覆ったあの新規の姿があった

「どうでもいいけどマスクって嫌いなんだよな、蒸れるし」

アイツはおどけたような様子でマスクの端を掴んでみせる

「チツ……その様子じゃあ、もうこっちのプレートは完全にバレてるみてえだな……」

しっかりとアイツを睨みつけながら数歩後ろに退いて金属バットを構える

……成る程、そうきたか

確かにマスクをしていればブルー・グラウンドではらまいた黴の胞子も少量しか吸い込まずに済む

これでプレートの効力が体に回るのを遅らせ、その隙に私を倒そうという魂胆か

にしても……敵ながら天晴とはコイツのために使うべき言葉なのかもしれない

「……さっきだってあの女を抱きかかえていく時に息を止めていた
だろ

女一人抱えてブルーグラウンドの範囲外まで無呼吸で走り抜ける
つてのは無謀といつかなんといつか……それにアタシの能力に気付
いたのだからってめえが初めてだ」

「ほー、それは光栄だな」

わざとらしく声をあげる

……何だ？コイツの落ち着き様は？

そりゃあマスクをしていれば多少は吸い込む胞子もカットできる
だろうが、それでも吸うものは吸う

この湿度なら常人は1分と待たずに失神、マスクをしていても……もって5分といつたところか
私の能力について知っているのならそれも容易に想像できるはず、もしや他に何か策が……？

「……まあいい」

金属バットを握る手に更に力を込める
そしてプレートの出力を全開、教室全体を覆った衣が更に青みを増した

「ここらで決着つけようじゃねえか青二オ！ブルーチーズにしてやんよー！」

金属バットを片手に駆け出し、ヤツを目掛けて思い切り振りかぶる
案の定ヤツはこれを躲し、脇の下をくぐり抜けて教室内に駆け込んだ

「そついや連れの女はどうしたよ！」

「アホか！病人連れてくるわけないだろ！」

「成る程優しいねえ……つと！」

振り向きざまに金属バットで薙ぐ
ヤツはそのバットを後ろに飛びのいて躲す

「そついやまだてめえの名前を聞いてなかったな！一応聞いてやるよー！」

大きく踏み込んで再びバットを　振る

「じゃあ覚えとけ！俺の名前は八伏恭介だ！」

新規、もとい恭介は膝を曲げ、腰を落として横一線に振られたバットを回避

ここが隙だ

「そうかい恭介！じゃあさよならだ！」

バットを大きく振りかぶり、恭介の頭上に今出せる最高の力でバットを振り下ろす

決まった、この体勢でこの勢いなら躲すのは100%不可能、どんな形であれ攻撃を体のどこかで受けるしかない

パニックって下手な場所で受ければ骨折、さあどうするか　！

「残念！さよならだ尾羽梨！」

「なっ　！？」

八伏恭介の取った防御は、意外にも真剣白羽取り

そんな高等な技術、ましてや金属バットのフルスイングに対して素人が成功させられるはずが

そう思った矢先だった

「分、解！」

金属バットと恭介の手が触れた瞬間、恭介の威勢のいい掛け声とともに金属バットはいくつものパチンコ玉大の粒になって四散

そつだ忘れていた、ヤツのプレート能力を

「油断したな尾羽梨！これが俺のディ・コンポージャーだ！」

恭介がそう言い放った直後、宙を舞った粒はまるで引き寄せられるように恭介の手の内に集まり、再び金属バットの形を構成する。そして恭介は盛大に空振りをして体勢を崩した私の腹部に、まるでビリヤードのキューのようにしてバットの先端部分を勢いよく突き出した

「ぐっ……！！？」

後ろに押し出されるように数歩下がってうずくまる

鳩尾をやられた

腹部に鈍い痛みがじわりと広がり息が詰まる

「いいか尾羽梨、よく聞け」

その場にうずくまる私を見下しながら、恭介は自らのポケットから何かを取り出した

長方形で金属質で、見慣れた物体、それは……携帯電話

恭介は落ち着いた動作で二つに折り畳まれた携帯を開き、何度か電子音を鳴らした後画面をこちらに向ける

どういふつもりなのか測りかねながらも画面に目をやる

するとそこには真っ白な画面の中に一つ、「ミッションコンプリート」の無機質でどこか滑稽な文字だけが浮かんでいた

「たったさっき、土倉連の足止めに向かわせた圭吾から俺の携帯に

こんなメールが届いた、意味は……分かるよな？」

「なっ……！？」

痛みでよく頭が回らないが、恭介の言わんとしていることは理解できた

つまり、土倉の野郎がやられた……と？

まだ頭の整理が追いつかない私に、恭介は追い打ちをかけるように口を開く

「相方がやられた時点でお前たちの敗北はほとんど決定済みだ、加えてもうじき圭吾が人質の二人も見つけ出すだろう

……が、できれば俺もお前とはこれ以上戦いたくないし、もしここで手を引くようならトドメを刺すつもりもない……どうする？」

「ッ……！？」

……負け？

私が……負けた……？

眼前につきつけられた敗北の二文字

まるでそれに引きずり出されるように頭の中で何かの映像がフラッシュバックする

光を追い続ければ追い続ける程、自分が暗くて狭くて黴臭い袋小路の中にいるという事を実感させられる

そして光の下を歩く者が羨ましくて妬ましくて仕方なかった少女の光景

もうあそこに戻りたくはない

「ふざけてんのか青二才……」

ようやく息も整い始め、私はゆっくりと立ち上がる

「ここまでやつといてまだそんな甘っちょろい事言ってるとは……
真性の馬鹿だな……」

しっかりと二本の足を地面につけて八伏恭介を睨みつける

しかしヤツには微塵も怯んだ様子はなく、ただ見下したような視線で

「そうか……残念だよ尾羽梨、これ以上続けたら言うなら仕方ない……こちらで強硬手段を取らせてもらう」

ふいに恭介がこちらに背を向け、歩を進める

「……？」

そして頭の上に疑問符を浮かべる私の事など気にもかけないように、恭介はある場所で腰をかがめ、近くの棚を漁り出した

何か武器の類でも取り出すつもりなのだろうか？

そんな警戒しながら目を凝らしてその様子を窺っていると、不意に恭介は「お、あったこれだこれだ」などと能天気な声を発して棚の中からあるものを取り出した

恭介の取り出した物は両手いっぱい……袋？

「知ってるか尾羽梨、俺と一緒にいたアイツ、水ヶ沢美波って言う

「ただけどき、なんでもアイツクツキー作るのが趣味らしくてな」

まるで友人か何かに話しかけるかのように軽い口調で言いながら、恭介は棚の中から取り出した何かの袋を床に並べていく

何をしているのか、何がしたいのか一切見当がつかない

しかしそれでも尚恭介は続けた

「で、一回材料の買い物に付き合っただけ一回に持つてく量がすごいんだよ、あれは多分金銭感覚とか狂っちゃってるんだろうな」

恭介は棚の中の袋をひとしきり床の上に並べ終わると、一仕事終えたかのような表情で二回手をパンパンと叩いた

並べられた袋の数は全部で7つ……、大きさはそれほどでもないが遠目からでもそれなりの重量がある事が窺える

「これでよし……っと、分解」

恭介の握っていた金属バットが再び粒となって弾け飛び、別の形を形成していく

粒が集まりできたそれは、一本の剣

そして恭介は何を思ったのか並べた袋の内の一つを手に取り、それを空中に放り投げると同時にその場から駆け出した

「ッ！」

攻撃に備えて身構える

しかし予想外にも恭介の狙いは私ではなく、宙を舞う袋

恭介は右手に構えた剣で宙を舞う袋を両断したのだ

「なっ ……!？」

縦から真つ二つに割れた袋が内容物を撒き散らし、青く染まった床を壁を天井を、全てを白く染め上げる

袋から溢れ出したのは真つ白な、粉

そこでようやく私はその袋の正体に気付いた

これは、小麦粉だ

「ぐっ!?!」

腕で顔を覆い、押し寄せる白い波から顔を守る

「……なるほどな!小麦粉をばらまいて空気を乾燥させるつもりか!だが浅はかだったな青二才!

私のブルー・グラウンドは乾燥で増殖を抑えることはできても消すことはできないんだよ!」

視界全てを覆い尽くす白煙の中で、改めて恭介の方へと向き直る舞い上がった粉のせいでよく見えないが、目を細めることに輪郭がはつきりと浮き出てくる

そこに立っていたのは紛れもなく八伏恭介

しかし私は次の瞬間、全く別の事で言葉を失っていた

予想外、完全な予想外

小麦粉の舞い上がった白煙の中で佇む八伏恭介の右手

そこには安っぽいライターが握られていたからだ

「んじゃ……せめて最期くらいは共に派手に散ろうじゃないか」

恭介の親指がライターのフリント・ホイールに乗せられる

「お、おい……嘘だろ……？」

ヤツはそんな言葉なんて意にも介さないように親指に力を加えた粉の充満した密室で火をつけた結果どうなるか、そんなの今時分中学生だって知っている。

？粉塵爆発？

どこかで聞いた覚えのあるその単語が脳裏をよぎった

正気の沙汰じゃない！

「ツツツ　！」

考えるよりも先に体が動く

次の瞬間、私は脇目もふらず一心不乱に閉め切った窓の方へと駆け出していた

ここは三階だ

落ちれば確実に骨の一二本は折れるだろうし最悪死ぬ
しかし背に腹は代えられない

「くっそおおおおー！」

腕を顔の前でクロスさせて顔面を守りながらの跳躍

直後、私は窓ガラスを突き破って校舎の三階から身を投げ出していた

まるでスロー映像のように粉々になった窓ガラスの破片が光を反射させながら宙を舞う

そして逆さまになった世界の中で、カチツ、という乾いた音が一度
私は衝撃に備えて全身を強張らせる

……！

……

………？

……… 衝撃が、こない？

「おっと残念、ガス切れだ」

カチヤン

恭介はわざとらしくそう言い放ち、宙を舞う私を見据えながらマ
スクを外して、手の上のライターを床に落とす

「なっ ……！」

偶然、違う！嵌められた！

奴には初めから心中するつもりなんて無かったんだ！
ヤツの本当の目的は私を教室から燻り出し、そして

「ナイスよ恭介、じゃあ派手に散ってもらおうかしら」

遙か下方から聞き覚えのある声

自分の体がどんだん声の主の元へと近づいていく

そこに立っていたのは、地に二本の足をしっかりとつけて構えを
取る恭介のツレのあの女

そこで私は自らの過ちに気付く

しかし時すでに遅し

落下する私が地面に直撃する寸前、私の脇腹に渾身の回し蹴りが叩き込まれた

イベント？32 「ブルースネイク・final」

空を裂くような渾身の後ろ回し蹴り

美波の引き締まった脚が綺麗な、それでいて刃物のように鋭い曲線を描く

ゆっくりと時間の流れる世界の中、放たれた踵はある一点を目掛けて振り切られる

狙いは遙か上空から高速で落下してくる尾羽梨

常人ならまず不可能な芸当

しかし、ここから遠く離れた地上に立つ相変わらず不機嫌そうな表情を浮かべた少女は、まるでそれを当然のようにやってのけた

「がッ　！？」

くぐもった呻き声

落下してきた尾羽梨と、美波の振り切った脚のタイミングが重なる

美波の刃物のように鋭い踵が尾羽梨の体を文字通りくの字に折り曲げ、重力に従って地面へと一直線に向いていたエネルギーが消滅する

そして次の瞬間、尾羽梨の体は蹴りの命中した方向とは逆方向へと弾き飛ばされていた

数メートル程宙を舞った尾羽梨はそのままの勢いで丁寧に整えられた植え込みの中に入った、更にその植え込みの中を数メートル程転がったことでその勢いを殺す

「……………ぐッ……………アッ……………！ガ……………はぁ……………！？」

尾羽梨は腹部を抑えてその場で体を丸める

当たり前だ

プレートを使わなかったとはいえ3階からの落下をそのまま無かったことにするほどの強烈な蹴り、しかも美波の最も得意とする後ろ蹴りを胴体に……

無事で済むはずがない、それは3階の窓から顔を出してその様子を見下ろしていた俺にも十分理解できた

「よし」

俺は先程尾羽梨が割っていった窓ガラスを開け放ち、乗り越えるようにして3階から身を投げ出す

空中で制服に軽く右手を触れ、デイ・コンポーザーの能力で分解直後、パチンコ玉大の粒になって分解された制服が別の形へと姿を変えていく

イメージするのは薄く大きく強靱な、一枚の、布

そう、それはパラシュート

「ほっ、と」

自分の体が丁度二階を通過した辺りで、両手で端を持った布がバシッ、と音を立てて頭上に展開される

同時に両手にはまるで上から引き上げられるかのような手応えそして俺は実にゆっくりと、風に揺られながら何事も無かったかのように地に両足をつけた

「……前から思ってたけど恭介のプレートって便利よね」

「だろ？」

俺は美波にそう言って笑って見せ、パラシュート代わりの役目を果たしてくれた元制服を巻き取る

「ただ欠点があつてな、バットみたいな単純な造形の物なら幾らでも作れるんだが制服みたいに複雑な物となると再構築は不可、だからこれとはおさらばだな」

階段を下りる手間を省いてくれた元制服に感謝をし、そこら辺に投げ捨てる

まあ、先ほど言った点を考慮してもこのプレートはかなり便利だそりゃあ美波や千尋のプレートのような派手さはないし戦闘向きとも言えないが、その分使い勝手は段違いである

「ま、今はそんなことよりも……アイツね」

美波の視線が俺から外れ、少し離れた場所の植え込みに向けられるいや、正確には植え込みの中で悶え苦しみ、身をよじる少女へと向けられた

「ふ……っ！ぐ……がッ！……ア……！」

……正直、目もあてられなかった

尾羽梨の両目は大きく見開かれ、呼吸もロクにできていない飛び降り自殺にならなかつただけマシだろうが……その苦痛に歪んだ表情を見ているとやはり少し罪悪感を感じる

「……下らない気は起こさないでね、恭介」

そんな俺の心境を見透かしたように、美波は冷たい口調で言った
そして美波はそれから再び尾羽梨の方へと振り返ると、まるで氷
のような冷たい目で淡々と言葉を吐き出す

「尾羽梨真紀、貴方ご自慢の黴も屋外じゃあ満足に効果も発揮でき
ないのは分かってるわ

それと恭介がすでに言っていると思うけどアンタの相手もすでに
圭吾が倒した、もう逆転の望みはないと思うけど？」

「……………ツ……………く……………っ」

美波の言葉に反応したのか、尾羽梨は目いっぱい歯を食いしばっ
て漏れ出そうとする声を抑えつけている

俺としてはこのまま起き上がらずに倒れていてほしい、できるこ
となら気も失ってほしい

しかしそれでも尾羽梨は立ち上がった、よろよると、自分の全身
に駆ける激痛を堪えながら

「じ……………冗談じゃ……………ねえんだよ……………」

息も絶え絶えに、尾羽梨はなんとかその短い台詞を吐き出す
そしてそのまま更に続けた

「なんで……………お前ら、なんかに……………負けないと……………いけないんだよ
……………」

壁に手をつき、荒く息を吐いて立っていることが精一杯
誰の目から見ても戦闘が続行できる状態でないのは確か

そしてそんな尾羽梨に追い打ちをかけるかのように、？彼女ら？
はやって来た

「八伏さん、水ヶ沢さん！」

背後からぱたぱたと慌ただしい足音が近づいてくる

咄嗟に振り向いてみれば、そこには満面の笑顔で大きくぶんぶん
と手を振る高島千尋と、お嬢様という単語がぴったりと当てはまる
ような優雅な足取りの畝畑舞

そして最後に、金属バットを杖代わりにして生まれたての小鹿の
ように足を小刻みに震わせながらこちらへ向かってくる伊勢圭吾の
姿があった

「お前が……探せて……言うから……学校中……探し回ったせい
で……もう無理だ……」

圭吾はまるでしがみつくようにバットに手をかけてゆっくりと歩
みを進めている

「なんていうか……アレだな……うん……」

上手く言葉に表せないので代わりに、よくやった、そう心の中で
褒め称え圭吾に合掌

「いやあー、もうずっと縄で縛られてたもんですからちょっとお腹
空きました！」

「私も少し体に縄の跡がついてしまいましたね……」

それとは対称的におおよそ少し前まで人質だった者のものとは思
えないほどの能天気な台詞を並べながら歩いてきた千尋と舞、遅れ
て圭吾が俺と美波の隣で足を止める

これで正真正銘の全員、集合だ

「……っ」

尾羽梨の表情に若干焦りの色が浮かぶ

しかしそれでも尾羽梨の目の奥に宿る炎は消えていない
何故そこまでして彼女は……

その時だった

「やあやあ、久しぶりだね君たち」

突如、どこからか聞こえた聞き覚えのある声

俺はほとんど反射的にその声の主を探す
すると、それは案外簡単に見つかった

尾羽梨の背後の校舎の陰、そこから現れた不敵な笑みを浮かべる

一人の男

土倉連だ

「久しぶりだね尾羽梨」

「土倉……！？てめえやられたんじゃ……！！」

尾羽梨が腹部の痛みも忘れて驚愕の声をあげる

「まさか、……でもちよつと油断しすぎた、死にかけだよ」

それを言う土倉連の表情にはどこか力がない

口の端には吐血の跡、僅かに見える肌の部分は痛々しい青痣の数々、加えて悟られないようにはしているが足にもダメージがあるようだ

とてもじゃないが戦闘を続行できるような様子じゃない

「俺も大概だがアイツもかなりタフだな……自分の全力の攻撃そのまま返されてまだ動ける余裕があるとは……」

隣の圭吾が驚きと呆れをまぜて2で割ったような呟きを漏らす

そこから察するに、つまり土倉は圭吾との戦闘で一度は戦闘不能になったがそこから復帰した……、と

そんな考察を一人頭の中で展開していると、土倉は息も荒く左手で壁を伝いながら口を開いた

「本当ならここは一時撤退してから出直すところだけ……残念ながら俺は久しぶりに少し頭にきててね……だから最後に一つ君たちにプレゼントがしたくてさ」

土倉は制服のポケットから一枚のプレートを取り出し、自らの足の上で落とす

プレートは淡い光を放ちながらスニーカー越しにどろどろと溶け込んでいき、最終的には完全に溶け込んで見えなくなった

「……俺のプレートは超重量ヘヴィ・ボンバー、触れた物体を重くする能力、そして俺は今校舎の壁に触れている。意味は……分かるよね？」

「なっ……!？」

土倉の口元が醜く歪む

「伊勢さん、彼の言っていることは本当ですか？」

「ヤツの言ってる事は全部真実だ！ヤツは校舎の片側だけ重くしようとしている！その結果……！」

「……それって私たち皆瓦礫の下敷きじゃないですか!？」

俺を含めて他のメンバーもパニック状態に陥る

しかしその中で唯一、美波だけがまるで道端のゴミを見るような冷たい視線を土倉に向けていた

「救いようのない屑ね」

美波に言われ、土倉の肩が微かに動く

「……でも君は今からその救いようのない屑に殺されるのさ」

「残念ながらその占いは外れよ、これが正しい予言」

もう他の誰もが声を発する事も忘れ固唾を飲んで見守る中、美波は挑発的な言葉を投げかけながらさりげない動きで少しずつ後退していく

「……なんだ、君も怖いんじゃないか、強がったりしないでこちらに背中を見せて無様に逃げ回ったっていいんだよ？」

「無様に逃げ回る？勘違いも甚だしいわね、私は探っているのよ」

「探る？」

土倉の頭に疑問符が浮かぶ

「私が探しているのは風の流れ」

美波がある程度離れた位置でぴたりと動きを止め、土倉はいつでもプレート能力を使用できるように壁についた左手に力を込める

そして美波は、土倉を真っ直ぐと見据えながらこう言った

「知っているかしら土倉連、私の蹴りは音速を超える

そして音速を超える物体が生み出すソニックウェーブ、それを今から貴方に見せてあげるわ」

「……………は？」

その美波の突拍子のない発言に対し、多分、というか絶対に、この場にいる全員が同じ表情をしていたと思う

確かに俺もアイツの蹴りを音速と言った事があつたかもしれない、しかしそれはあくまで比喻表現、人間が音速を超えられるわけがない
何故、美波は、この状況で、そんな事を？

……………ハッターならそれでいい、しかしあの目はハッターとかブラフとかそんな安っぽい物の目ではないような……………

「……………」

美波が無言で両膝を軽く曲げ、回し蹴りの構えを取る

「ほ……………本当にできるのか……………？」

絶対に有り得ない、有り得ないはずなのだが、美波のあまりの自信の籠った語調に一瞬ホントに信じそうになる

「へえ……それでこの状況を打破できるというのなら是非見せてほしいね」

土倉はあざけるようにして、美波を見下した
当然だ、反応としてはこれが当然、通常

なのに

「そう、じゃあ遠慮なく」

一度だけ小さく跳躍し、筋肉が元に戻るその瞬間
美波は誰もいないその空間にめがけて、先程尾羽梨に放った物とは比べ物にならないほどの鋭い回し蹴りを放った
美波の脚は鋭い軌跡を描いて風を切る

直後、俺を含めた全員の視線はある一点に釘付けになっていた
それは、美波から十数メートル近く離れた場所で呆気にとられた表情で佇む土倉連

いや、正確には土倉連の左腕だった物に

「は？」

まるで新鮮な野菜を新品の包丁で両断したかのような鮮やかな切れ口

それでいて一切の音を発しないその現象

土倉連の左腕は今や胴体とは切り離され、宙を舞っていた

「な……なん……」

俺たちがソレが何なのかを認識したのは、地面の上を一度ソレが跳ねると同時に一人静止した時間の中を動き出した美波が二度目の回し蹴りを啞然としていた土倉の首にめり込ませた辺りだったか

ゴキッ

そんな感じの耳障りな音が、静寂に包まれた世界の中で何度も反響した

世界が静止していた

音は消え、背景は白一色に染まり、あらゆる物体の動きがスローモーションとなる

片腕を失った土倉が曇った眼を見開いてぐらつく

そこへ美波はもう一度跳躍し、反対の脚で再び、蹴る

土倉の体がまるで水を含んだボロ雑巾か何かのように壁に叩き付けられ、崩れるように壁によりかかる

カシャン

遅れて土倉のスニーカーから一枚の黒い板が吐き出され、金属質な音を立てて地面に落ちた

「……え？」

すぐには理解できなかった

自分の本能がその事実を受け止めることを拒否している

それでもやがては雪崩れ込んでくる情報の波に耐え切れず、まるでダムが決壊するかのようには俺は一瞬で理解する

明らかにおかしな方向へ折れ曲がった土倉連の首、生気の感じられない曇った両眼、糸の切れた操り人形のように一切の力が消えた手足

そして土倉に放った片足を上げたままそれを氷のような冷たい眼で見下す少女

ぼつ

不意に頬を一滴の水が跳ねた

それは一定の間隔で跳ね、顔を濡らしていく

そして徐々に間隔が短くなっていき、それが雨だと気付いた頃、それは土砂降りへと変わっていた

轟音を立てながら降り注ぐ雨粒が体を濡らし、視界を狭め、その場を支配していく

次の瞬間、俺は反射的に美波の胸倉を掴んでいた

両手に力を込め、美波を壁際に追い込む

そして、腹の底からふつつつと沸いてくる何かを俺はそのまま吐き出した

「お前……自分が何したのか分かってんのか!!」

多分俺は今まで生きてきて一番感情的になっているのだろう
当たり前だ、だって人が、人が

「……何を熱くなってるの恭介、こうしなければ私たちが死んでい

た、当たり前前の結果じゃない」

感情的な俺とは対称的に美波はまるで鉄のようにひんやりとした目で見つめながら、自らの胸倉を掴む手を振り払った

「だからって殺すことは……！」

そこまで言いかけて視点を壁に背をもたれかけて動かなくなった土倉連へと動かす

さつきまで薄気味悪い笑みを浮かべていた顔に表情はなく、切り離された左腕から流れ出した赤い絵の具が辺り一面を一色に塗りつぶしている

降り注ぐ雨粒たちがご丁寧にもその滲んだ絵の具を広げ、俺のスニーカーにその滲んだ赤い絵の具が触れた

もう動き出すことも、気取ったような口調で話したすようなことも、不敵な笑みを浮かべることもない

完全に、死んでいるのだ

「殺すことはないだろ……！」

胸の奥から溢れ出そうとする妙な感覚を抑えつけ、俺はやっとの思いで言い切る

しかし美波はあくまでも冷静な眼差しで、静かに口を開いた

「……まず一つ私たちはコイツに殺されかけた、二つこうしなければ私たちが殺されていた、三つ見逃せば再び奇襲をしかけて私たちの命を狙ってくる。……ねえ恭介」

三本の指を立て、美波は問いかける

「？逆に殺しちゃいけない理由って……何??」

言葉を失った

どうしようもない吐き気がこみ上げてくる

確かに美波は性格的にキツイところもあった、だけど反面面倒見もよくて間違ってもこんな事をするヤツじゃない、少なくとも俺はそう思っていた

なのに美波は理由を並べてまるで当たり前前の事のように、人を

「くっ、ははははははは！」

突然、尾羽梨真紀が心底おかしいと言った様子で腹を抱えながら笑い出した

尾羽梨は啞然とする俺を前にひとしきり笑い終えると、うってかわって刺すような視線をこちらに向け

「……お人好しもここまでくると病気だな」

そう言った

「お前は仲間が死んでもなんとも思わないのか尾羽梨……！」

「仲間？誰がだ？」

尾羽梨は足元に落ちた土倉のプレートを持ち上げ、俺の答えを待たずに続けた

「アタシと土倉が仲間だなんて冗談抜かすな、ただ私のプレートは

他の誰かと組んで使った方が都合がいいんで一時的に手を組んでただけだ

……ついでに言うとアタシは土倉の人を見下してるような性格が嫌いでね、いつかは離れるつもりだったさ」

「ッ……！」

言い返せない、いや、言い返しても無駄だと分かっているから、言い返さない

……なんてことだ

今気付いたのだが、後ろの三人も先程から声を発さずにだんまりを決め込んで無言の肯定

ここでは人を殺す美波や、先程まで一緒にいた人間が死んでも悲しみもしない尾羽梨がおかしいんじゃない

？人が死んで騒ぐ俺の方がおかしいのだ？

胃の中の物を全て吐き出しそうになるどうしようもない嫌悪感

この世界は、狂っている

「ま……土倉が死んだのならもうアタシに勝ち目はないな、手負いで逃げ切る自信もねえし奥の手も使い果たした、好きにしてくれ」

「あら、案外物分かりがいいのね、じゃあ痛みを感じる間もなく楽にしてあげるわ」

諦観を込めた表情でその場に立ち尽くす尾羽梨へ、美波は一步步を進める

多分尾羽梨も土倉と同じように殺されるのだろう

もっともらしい理由を並べられ、ただ淡々と、機械的に

そして俺たちにはいつも通りの日常に戻る

翌日には何事も無かったかのように日常が繰り返される

でも、それが本当の日常と言えるのだろうか？

「……待てよ尾羽梨」

美波の動きが止まる

尾羽梨の視線がこちらに切り替わる

後ろの三人の視線が集中する

そして次の瞬間、その言葉は自然と俺の口について出ていた

「元の世界に戻りたいとは思わないのか？」

直後、その場の空気が凍りついた

誰も声を発しようとせず、動こうとせず、ただ呆然とした表情で俺の放った言葉を反芻する

その間、そこには雨粒が地面に叩き付けられる音だけが響き渡っていた

そして永遠に続くかとさえ思われた沈黙、それを破ったのは、尾羽梨の一言だった

「……ふざけんじゃねえよ……」

先程のように諦観の籠った声ではなく、腹の底から絞り出したよ
うな声

これは前に見たことがある

そう、千尋と家具店に行った時に、千尋に全く同じ質問をした時に

「それだけは絶対に……！あんなとこに戻るくらいなら……死んだ

方がマシなんだよ!」

「でも元の世界の記憶はないんだろ!? なのに何故そこまで拒絶するんだ!」

「無いからこそだ!」

尾羽梨が口に出したその言葉は、今までの演技じみた挑発ではなく真正銘心からの叫び

「元の世界での記憶なんてほとんどない……! なのにふとした拍子にまるで壊れた電球みたいに頭の中でちかちかと映像が浮かぶんだ……!」

尾羽梨はまるで何かに怯えるように両手で頭を押さえながら訴える
その時、ソレは始まった

ピッ

どこかで聞いたことのあるような無機質な電子音
その音の元は尾羽梨の頬に刻まれた数字

俺は覚えている

尾羽梨が頬にプレートを取り込む事で刻まれた数字、すなわちレベルが2だった事を

なのに なんで数字が?1?に減っているんだ?

「レベルダウンが始まった……!」

美波が?レベルダウン?という聞き慣れない単語を口にして、あ

からさまに焦りの色を見せる

「あんなところに戻るくらいなら……いつそ……!」

息を荒くしながら、尾羽梨は告げる

「死んだ方がマシだ!」

ピーッ

その音は例えるなら、患者に繋がれた心電図が告げる終わりの合図
尾羽梨の頬に刻まれた数字は、?0?になっていた

直後、空間にいつぞや見た青い枠のウィンドウが出現する

目の前の状況に対処しきれないまま、それでもそのウィンドウを
注視

すると、ウィンドウには無機質な文字で一つ「YOU LOSE」
とだけ記されていた

「あ……あ……!」

そして変化は尾羽梨自身にも表れる

頬に刻まれた数字が、突如出現した黒い泥のような何かに覆われる
黒い泥はまるで生きているかのように尾羽梨の頬で蠢き、凄まじ
い速度で分裂、増殖を繰り返す

そして、泥はまたたく間に尾羽梨の全身を覆い尽くした

「な……なんだコレ……!??」

何が起きているのか理解が追いつかない、いや、理解するなど本

能が警告する

だって、不気味な黒い泥で全身がコーティングされた尾羽梨の姿は レベル1ルーザーそのものだったからだ

「……これが恭介の望んだ結果よ」

美波は一体何を言っているんだ……？

こんなの俺が望んでいない、望むはずがない……！

「……恭介の事を思ってたってなかったけどね」

美波はそこで一旦切って、決心したように次の言葉を発した

「戦う意思を失くしたプレイヤーの行き着く果て、それがLoser
……人の形をしている間に楽にしてあげれば良かったのにな……
一度ルーザー化したプレイヤーはもう元には戻れない
今までの記憶や言語能力、その全てを失って完全なルーザーになるのよ」

「なっ ……!?!」

咄嗟に視線を尾羽梨の元へと戻す

すでに尾羽梨の全身は黒い泥に侵食され、もはや泥と肉体は完全に一体化していた

ただただ、生命感のない動きでゆっくりとこちらへ歩を進める

「今の尾羽梨真紀はもう人間じゃない、……恭介はこれで満足なのかしら、人間じゃないのなら殺しても」

「ち……違う……!俺はただ……!」

ぺた

ゴム手袋いっぱい水を詰め込んで、それを地面に叩き付けるかのような薄気味悪い足音

元は尾羽梨だったソレが、非生物じみた動きで徐々に距離を詰めていく

「助けたかった、かしら？　でも恭介には救えない」

ソレはもう手の届くところまで迫っていた

おそらく、俺の回答次第で美波の次の行動が決まる

そして美波に尾羽梨を救うことはできないし、俺にもできるかどうかは分からない

いつそ美波に頼み込んで苦しませずに死なせてやった方が尾羽梨にとっては幸せなのだろうか

そうすれば

「ふざけんな……！」

俺は美波を振り切り、ルーザー、いや？尾羽梨真紀？に向かって一歩歩み出る

もう手の届く距離

尾羽梨がその鞭のようにしなやかな腕を振りかぶる

「恭介！？」

美波が背後で俺の名を呼ぶ

しかし振り返らない、視界には尾羽梨だけを収め

「楽に死なせてやるとか、人間の内に殺してやればとか……そんな事は聞いてねえんだよ!!」

尾羽梨が頭上に振り下ろした腕が頭部に到達する前に俺は突き出した右手で尾羽梨の顔を掴み、そして叫んだ

「俺は、？尾羽梨真紀？を助けるんだ!!」

右掌との接触部分が眩い光を放つ、確かな手応え

俺はそのまま右掌を押し出すようにして、強く念じた

分解

引き伸ばされた時間の中、俺は確かに見た

掌に集まった光の集合体が、まるで槍を突き刺したかのように掌の直線状、すなわち後頭部から放出され

空中で元の黒くて長方形な金属質の板に戻る瞬間を

美波が、舞が、圭吾が、千尋が息を呑んだ

カシャン

板が地面の上に落ちる

尾羽梨の全身を覆った黒い泥が頭から剥がれ落ちて地面に溶けていき、驚愕に目を見開く尾羽梨と目が合った

雨はもう、止んでいた

イベント？33 「セカンドステップ」

あれから5日が経った

土倉連と尾羽梨真紀による学校への襲撃

人質に取られた舞と千尋を救出するために俺と美波と圭吾が手を組んであの二人と戦ったのが最早懐かしく感じる

あの騒動の後、俺たちは尾羽梨や土倉との戦いによって傷ついた校舎を後にして、Aエリアのメンテナンスが終わるまで某ホテルに宿泊

そしてAエリアのメンテナンスが終了したのがついこの間の事

そう、俺たちは今、5日ぶりにこの校舎へと戻ってきていたのであった

「よっ………と！これにて終了！」

俺はやつとの思いで運んできた一人用のシンプルなベッドを教室の隅に置き、それを眺めてしばし一仕事終えた後の優越感に浸る

「おおー！八伏先輩本当に運んできたんですか！？」

「まるで始めから無理だと思っていたような口ぶりだな………」

お望み通りのベッドを前にして感動の声を上げる千尋にじとつとした視線を向ける

しかし目の前のベッドでクリスマスに欲しかったプレゼントを買った子供のごとく完全に舞い上がってしまった千尋にこの声は届いていないらしく、ただただひたすらに嬉しそうな表情で新品のベッ

ドにダイブした

「いやあ……やっぱりいいですねえ……」

その華奢な体からのダイブをベッドに受け止めてもらった千尋は、幸せそうな表情で猫なで声をあげてベッドの上を転がる

これだけ見ると到底高校生には思えない、良くて「発育の良い小学生」止まりだろう

ちなみに言うときから脚をばたばたさせてはしゃぐたびにスカートの間から細めの太ももが覗いて、少しというかなんか危険な感じがする

「でもまさか本当に運んでくれるとは思いませんでしたよー」

「んー、約束は約束だしな」

約束とは以前千尋と二人で家具店のレベルルーターを掃討した時の事だ

おかげで俺は様々な苦難を乗り越え一人家具店からこのベッドを運び出す事となったのだが……まあ割愛しておこう

「まあぶつちやけ言うとプレート使った、だからそれほど苦にもならなかったからあんまり気にすんな」

「だから八伏先輩好きなんですよー」

千尋は新品のベッドの感触を楽しみながら再び惚けた声をあげる……さすがにベッド一つでここまで喜ばれると逆に少し恥ずかしいものだ

なので俺はこのどうしようもない気恥ずかしさを誤魔化すため、

辺りに視線を泳がせた

初めに視界に入ったのは部屋の中央を陣取ったガラスの天板が特徴的なお洒落テーブル

あとは緑色の地味めなソファや銀色のボディを鈍く輝かせた足踏み式のゴミ箱、その他諸々の機能性を重視した家具が置かれ飾りつ気は一切なし

良く言えば実用的、悪く言えば殺風景

ここが校舎三階2 - 4教室、いや、元2 - 4教室現高島千尋の部屋である

あの事件の後、俺たちは教室棟に一人ずつ個室を持つこととなった別にその行為自体に深い意味はない、ただ人数も増えたし良い機会だからとかそんな安直な理由

しかし自分の部屋ができるというのは個人的にも嬉しい限りなので俺もそれに便乗し今に至る

「そっぴゃ千尋、名前は書いたのか？」

「んー？……ああ、そっぴゃさっき畝畑先輩が黒板に名前を書いて回ってましたよー」

千尋に言われ、今ではむしろ浮いた存在となってしまうた黒板へと目をやる

そこには白のチョークで畝畑舞、水ヶ沢美波、高島千尋、伊勢圭吾、そして俺、八伏恭介の5人の名前が記されていた

圭吾曰く、これで周期的にやってくるメンテナンスを回避できるのだという

つまりこれが無ければメンテナンスが終わった頃、ここはただの教室に戻っており、また面倒臭い引越し作業が始まるのだそうだ

しかし書いてあるというのなら問題はない

ついでに言うと、2 - 2 教室は畝畑舞の、2 - 3 教室は水ヶ沢美波、2 - 4 教室は先ほど説明した通りで、2 - 5 教室が伊勢圭吾、そして残る2 - 6 教室が俺の

2 - 1 教室は以前と同じく、メンバー全員で集まってくつろいだり話し合いをしたりする場所だ

そしてたった今のベッドでメンバーの引っ越しは完全に終了

この後2 - 1 教室に集まって引っ越し祝いを行う事となっているとなれば、いつまでもここに居るわけにはいくまい

「んじゃ、俺は先に2 - 1 教室に行ってるからな、遅れたら悪いし」

俺はひらひらと手を振って2 - 4 教室を後にする

すると案の定、ベッドの上で寝転がっていた千尋は「あ、私も行きます！待ってください！」と、ベッドから跳ね起きて俺の後に歩いてきた

そして後ろに小さなお供をつけて2 - 1 教室に向けて出発

まあここから2 - 1 教室までは徒歩で数十歩、その間どちらかが話題を飛ばす間もなく、気付けば俺たちは2 - 1 教室の前に立っていた

「よし……八伏恭介だ、入るぞ」

「あ、高島千尋ですー」

そう言った後、忘れずに引き戸を二回ノック、それにつられて千尋も思い出したように扉の向こう側にいるであろう人物に言う

それからすぐに教室内から柔らかな声での返事が聞こえ、俺は引

き戸を開け放つて千尋とともに2 - 1教室へと足を踏み入れた

「八伏さん高島さん、丁度良かったですね」

一番初めに天使のように柔和な笑顔で出迎えてくれたのは、中央の長机を囲んだ椅子に腰を掛ける舞

そしてその隣には舞とは対照的に相変わらずの仏頂面を浮かべる美波の姿もあった

「悪い、ちよつと準備で手間取って遅くなった、千尋はベッドでくつろいでた」

「そうなんですよ……ってあれえ!？」

途中まで乗りかけてようやく気付いたらしく千尋が驚愕の声をあげる

しかしそれを華麗にスルーし、俺が一番近かった美波の向かいの席に腰をかけ、千尋はしばし何か言いたげな表情でこちらを見つめてからしばらくして俺の隣の席に腰をかけた

「そついえば圭吾は？」

そついやいつも騒がしいアイツの姿がないな、そつ思つて問いかけてみると、美波は一言「星になったわ」とだけ言った

「ああ、またか……」

圭吾はいい加減扉をノックする癖つけたらいいのに、と若干呆れ気味に心の中で呟く

と、噂をすればなんとやら、不意に教室の扉が二度ノックされた

後に音を立てて開いた

「死ぬかと思った……」

扉の向こうから現れたのは案の定制服をボロボロにしてぶすぶすと黒い煙を立てる伊勢圭吾の姿

「あら圭吾さん遅かったですね」

舞が先ほどと変わらぬ優しい笑みを浮かべながら、何事も無かったかのように圭吾を出迎える

圭吾はもう何も言う気力が残っていないらしく、無言で席に着いた

「はい、では皆さん揃ったようなので引越し祝いを行いたいと思います」

舞がぱんと手を叩き、先ほどから気になっていた長机の上でぐつぐつと煮だつ土鍋に全員の注目が集まる

それを確認した舞はタオルを挟んで鍋の蓋に手をかけ……そして開け放った

「うおおおおおー！」

さっきまで意気消沈といった様子だった圭吾が唸る

開け放たれた鍋から立ち上る白い蒸気、食欲をそそる甘くて香ばしい香り、鍋の中身はすき焼きだった

「おお！すき焼きとはまた手が込んでるな！」

「ちなみにこれはほとんど美波さんが一人で作ってくれたんですよ」

「う、畝畑さん！それは言わない約束じゃ……！」

「そうでしたっけ？」

舞が悪戯っぽくそう言いながら、手際よく各々に小皿と卵を配っていく

それにしてもクッキーの時から思っていたのだが、美波は何故自分が料理する事を隠すのだろう

まあ考えたところで分かるはずもないので仕方ないのだが

「……まあいつか、んじゃいただきますっつと」

皿の縁で卵の殻を割り小皿の中を卵で満たしてから、配られた割り箸を割って素早く卵を溶く

そして圭吾や千尋が卵の殻を相手に苦戦している隙に一番乗り

ぐつぐつと煮だつ鍋の中から肉と白菜と白ネギを一つずつ最速で

確保

「あっ！ずるいですよ八伏先輩！」

隣で未だに卵をコンコンやってる千尋は無視して、俺は確保した具材にしっかりと卵黄を絡ませ賞味

口の中で何度も咀嚼して具材から溢れる旨味を堪能し、ひとしきり楽しんでから飲み込む

味の感想は言うまでもなく

「……おお美味い！美味いぞ美波！」

「そ……そう……？」

その小学生並な贅辞の言葉に、美波が少し頬を赤らめ照れ臭そうに言った

しかしお世辞を抜きにしても本当に美味しいな、これなら何杯でも

……

「そうはいかんざき！」

「うお！？」

突如視界の外から伸びてきた箸が鍋の中に突き刺さる

咄嗟に振り向いてみると、そこにはなにやらムカつく顔で小皿を片手に腕を伸ばす圭吾の姿が

「女子の手作りすぎ焼き、こんな二重で美味しいものを恭介だけに渡すわけにはいかなあ！」

「ちっ……！食事中は静かにしやがれ！」

俺は空いた左手で制服の胸ポケットからディコンポーターのプレートを取り出し、それを宙に投げ放って左手の甲で軽く叩く

それによってプレートは淡い光を放ちながら体内に溶け込んで、直後俺は圭吾の突き出した箸を思い切り左手で掴んだ

「なっ！？」

「俺に喧嘩を売ったのが間違いだっとな！レッツ、ディ・コンポーター！」

握った手に力を込め、圭吾の割り箸を幾つかのパチンコ玉大の粒

に分解

そして空中に散った粒を圭吾の手の中で再構築、できたのは割れ目のなくなった割り箸、というか最早一本の木の棒だ

「プ、プレートを使うなんて卑怯だぞ恭介！」

「フハハ！文句を言ってる暇があったらもう一度割り箸を割ることに専念したらどうだ！もっとももう割れ目なんてないがな！」

圭吾は悔しそうに歯噛みをしながら、完全に繋がった割り箸をどうにかして割ろうと奮闘する

その隙に俺は二口目のすき焼きを口に運ぼうと……

「そうは」

「シャットアウト！」

そろそろ来る頃だろうと思って構えていて良かった

ということ、俺は流れるような動きで千尋の割り箸も圭吾と同じく一本の木の棒に変える

「ふふ、行儀が悪いですよ皆さん」

一方、舞はいつ取ったのか一人上品に卵に絡ませたすき焼きを口に運んでいた

隣で割れない割り箸を割ろうとする馬鹿コンビはともかく……

「美波、お前さっきから食べてないみたいだけどどうした？」

箸で肉を掴んだまま美波を指す

美波は卵はおろか、皿を机に伏せたままじっとこちらを見つめていた

何か言いたげ……に見えなくもない

と思っていたら、美波は神妙な表情でゆっくりと口を開いた

「恭介……ちょっと話があるんだけど」

「……何だ改まって」

一旦箸で挟んだ肉を小皿の中に移して美波の話に耳を傾ける

正直聞かれる事の検討は大体ついていた、美波の言わんとしていることは恐らく……

「分かってると思うけど、尾羽梨真紀の事……まだちゃんと話を聞いてなかったからね」

「……やっぱりな、で……何だ？」

小皿の中の牛肉を卵に絡ませながら聞き返す

「あの時、貴方は一度ルーザー化した尾羽梨真紀を元に戻し、あまつさえ見逃した」

「……」

「……これがどれだけ危険な事分かる？相手は私たちを殺そうとした敵、助けられた恩を仇で返すって可能性も十分にあるのよ」

「……人が人を信じられなくなったら人間終わりだよ」

「もしそうだとしても、一度ルーザー化した人間を元に戻すなんて絶対に不可能、イレギュラー中のイレギュラー」

あの時はルール違反と見なされなかったから良かったものの、今後ルールとして付け加えられる可能性だってあるのよ、……そうなたら最後、駆けつけた削除人によって助けられた敵もろとも私たちまで殺されるわ」

「知らされてもないルールに違反したら処罰するのはおかしいとは思わないか、前回大丈夫だったのなら次回からもまた大丈夫だ」

その言葉で、美波がしばし口を閉ざす

「……もう素直に言ったらどうだ美波」

俺は、はあ、と一つ大きな溜息を吐き出し、そして続けた

「……その甘さが気に入らない？って」

美波は大して驚いた様子もなく、ただ不機嫌な表情で再び口を開く

「……ええそうよ、はっきりと言ってあげるわ、私は恭介の甘さが大嫌いなものよ」

美波は一層険しい表情で静かに、しかしはっきりと責め立てるように言葉を吐き出す

「恭介には言っただけでなく、別に私たちが他プレイヤーと戦ったのは今回が初めてじゃないのよ」

「……薄々は勘付いてたさ、あの実戦慣れした動きは遅緩なルーザ

「相手の戦いじゃあ身につかない」

「そこまで分かっているのなら、意味は分かるわよね？」

「私は、いや私たちは今まで私たちを襲ってきた何人ものプレイヤーたちを消してきた」

「……」

「お人好しな恭介が勘違いしないよう言っておくけどね、正当防衛なんかじゃないわよ」

襲ってきたプレイヤーは二度と仕返しできないように消した、必死で命乞いをしていても腹の底では復讐の計画を企ててるかもしれないから消した」

「はあ……」

「恭介、この際だからはっきりと言わせてもらおうわ、貴方は甘」

瞬間

俺は手に持った小皿から黄金色の輝きを纏った肉を箸で摘み、それを何か言いかける美波の口へと放り込んだ

「うっさいわ馬鹿」

ぴたり

そんな擬音が目に見える程美波は見事に動きを止める

そして美波は口を閉じて一度顎を小さく動かしたと思うと、それを皮切りに顔全体がみるみる紅潮していつて

「ツッ！！！！？？？？」

美波が顔を真っ赤に染めながら声にならない叫びをあげる。今にも蒸気を噴き出しそうな勢いだ

「何が「この際だから」だ、祝いの席で堅苦しい話しやがって」

未だに口の中の牛肉を呑み込めずに「んーんー」言いながらしどろもどろしている美波なんてお構いなしに俺は続ける

「いいか、美波よく聞け」

俺はその場から立ち上がり、机を挟んで美波にずいと顔を近づける。そして多少落ち着きを取り戻したであろう美波に向けて、はっきりと言った

「人に人を殺す権利なんてない、ここでの決まりがどうかは知らんが俺はそれを守る

俺は助けられるヤツはどんなクズだろうが悪党だろうが助けるし、助けようとする。それを誰かに止められる筋合いもない

人を殺したいならお前らが好きにやればいいさ、お前が何度人を殺そうとしようが、俺はソイツを助けるよ」

「……！」

美波がここで本当の意味で言葉を失う

そして俺は美波が何も言い返してこないのを確認すると再び席に戻って声を張り上げた

「さあ！折角の祝いだ食うぞ食うぞ！余った汁にはうどんで締めだ！」

「あら奇遇ですね、私もうどん派なんですよ」

「や、やっと割れました……縦に」

「……奇遇だな」

なにはともあれ俺たちにはこれでいつも通りの日常が戻ってきたのだ

すでに日も落ち、すっかり暗くなったこの世界の中、俺たち五人は一つの土鍋を囲んでただひたすらに賑やかだった

ここはとある学校の一教室

窓の外に広がるのは血のような深紅色に染まった空、乱雑に並べられた机は倒れているのもあれば原型が分からなくなるほど無惨に破壊されたものまである

窓ガラスは一枚残らず割られ、時計はすでに時を刻むことを忘れ、かろうじて残った黒板には赤い塗料で無数の呪詛の念がびっしりと書き殴られていた

そんな嫌悪感の塊のような空間に、少女の姿はあった

少女は腰まで届く艶のある長い黒髪を垂らしながら、ひたすら無言で窓から覗く紅色の満月を眺めている

虚空にぽっかりと浮かぶその月は不気味なほどに大きく妖しく美しい

ぎりっ

不意に、少女の歯軋りをする音が静まり返った空間の中で響くそれから少女は黒髪をなびかせながら翻り、どこか呆れたような口調で誰もいないその空間めがけて言葉を投げかけた

「アウラト、あまり私を怒らせるな」

少女が言葉を発した直後、少しの間を空けて目の前の空間がまるで液体のようにどろどろと溶け出す

どろどろ、どろどろと、固体と液体の間のような塊が剥がれて落ちて　そして？ソレ？は姿を現した

『おやおやまたバレてしまいましたか少しだけショックです』

そこから現れたのは、一人の少女

柔らかい印象を持たせるふわりとしたスカートに、上着は一枚のワイシャツに加えて首に巻いた赤いネクタイだけというシンプルな服装

鼠色の髪とコバルトブルーの瞳、少女の発する言葉は無機質で無感情で、抑揚や区切りも無い完全な棒読み

それに比例して色白な顔におおよそ表情と呼ばれるものは皆無だ

彼女の右手に握られているのは一本の雨傘

そしてその雨傘の先端、即ち石突部分は黒髪の少女の目と鼻の先に突き付けられていた

「アウラト、少しでもその右腕を動かしてみろ、二度とお気に入りの傘が持てぬように肘から下を斬り落としてやる」

黒髪の少女はそう言って大気を震わせ、手元に出現させた二本の太刀の柄を握る

『嫌ですねただの冗談ですよそもそも接近戦でツヴァイさんに勝てる訳がないじゃないですか』

アウラトと呼ばれた少女は全く変化のない表情で機械のように台詞を言い終えると、ゆっくりと手に握った傘を下ろした

「……………今日もまた聞きたいこと、か？」

『その通りですそれとこれは私の憶測ですがもしかしてツヴァイさん私がこれから何を質問しようとしているのか分かってるんじゃないんですか』

ツヴァイの射抜くような鋭い視線を浴びせられながらも、アウラトは微塵も怯むような仕草は見せずに淡々と質問する

それに対してツヴァイは両手に持つ太刀を消し、しばし間を空けてから少し躊躇いがちに答えた

「……………今回の八伏恭介の事だろっ」

『ピンポンピンポン大当たりすごいですね』

アウラトが感情の籠っていない声でわざとらしくそう言う

『ツヴァイさんも知っている通り一度ルーザー化した人間を元に戻す事なんて絶対に不可能です』

「にも関わらずヤツは、八伏恭介は一度は完全にルーザーと化した尾羽梨真紀を人間へと戻した、……そんな事は私にも不可能だ」

アウラトの言葉を引き継ぎ、ツヴァイが続けた

『最初の予想が当たりましたよツヴァイさんは人を見る才能があるようです』

「……いや、事態は予想以上に深刻だ、私は少し八伏恭介を甘く見過ぎていたらしい……」

『いっその事難癖つけて？削除？するというのはどうでしょうか』

「馬鹿が、削除すること自体は簡単だがそれでは本末転倒だ、削除人の意味がない」

ツヴァイが若干苛立たしげな声を漏らす

「それに……もし今ここで無理矢理八伏恭介を削除したとしてもいつか再びヤツのようなイレギュラーが現れないとも限らん」

『と言いつつ』

「出る杭を打つのは今でなくても良い、ということだ、八伏恭介ほどのイレギュラーならば私自らが打たずとも自然と打たれるだろう、

そしてその間私は八伏恭介を一時も目を離さずに観察する」

『なるほどではもし再び八伏恭介がツヴァイさんの前に立つことがあれば』

「その時はその時だ、八伏恭介という名の杭は根元からへし折ってやるう」

大気が目に見える程激しく震え、少女の手元に身の丈ほどもある一本の太刀が出現

黒髪の少女はその艶のある黒髪をなびかせながら太刀の柄を握ると、その濡れたような刃で月の光を反射させる

崩れゆく世界の中、少女は一人静かに月を見上げていた

イベント?33 「セカンドステップ」(後書き)

学園サーバー編 第二章 完

イベント？34 「レッツ・スイミング！【前編】」

女子高生、水ヶ沢美波がいつも不機嫌そうな表情をしている事は周知の事実だ

何故か、その理由を聞くことすらも躊躇われるような不愛想な表情
そもそもここにいるメンバーは皆、その件についてはすでに慣れているので問いただそうとはしない
しかし、今日だけは特別だった

「……美波、どうしたそんな顔して」

2・1教室、そろそろ日の高さも真上まで昇ったか、と言った頃
椅子に腰をかけながら暇潰しに圭吾に借りた携帯ゲーム機を弄っていた俺は、丁度向かいの席に座る美波に向かってそう言った

「ん……いや別に……」

……いや、それはどう見ても「別に」という顔ではないのだが
その心の中でツッコミはするが、決して口には出さない

こつ、なんていうか……今日の美波はいつもに比べて、より一層
不機嫌そうだ

例えるなら行き所のない怒りを抑え込みつつ濃縮し、そこに悲しみや焦燥感などを少々混ぜて炊き込んだ感じの……

……まあ要するに、それくらい不安定で危険な感じを漂わせていた

「あ、もしかして」

不意に、美波の隣で昼下がりのティータイムを楽しんでいた舞が

思い出したように口を開いた

美波は相変わらずいつもの三割増し不機嫌そうな表情を浮かべながら、そして俺や千尋や圭吾は身を乗り出して舞の話に耳を傾ける
すると直後、舞は見事に声色を変えて

「？ああ、最近運動不足だったせいでちよつとたるんできちゃったわね……ルーザーの出現は不定期だしレベル1ばかりだから運動にもならないし……」

あ、そういえば料理するようになってから急にお腹がもつちりしてきた気も……今度隠れて運動でもしたいけど他の皆にバレたら嫌だしなあ……

いつそ皆が寝た後にジムにでも……でもそれもなんか気にしてるって感じがして嫌だなあ……そういえば最後に体重計乗ったのいつだっけ……？

……と、こんな感じではないでしょうか？」

次の瞬間、長机に頬杖をついていた美波がすごい勢いで椅子から転げ落ちた

「なっ……、ななっ……！？」

美波が驚愕の表情でなんとか起き上がろうと長机に手をつく

これは舞の神がかった再現率もさることながら、完璧なまでに凶星を突かれた時の表情だな

そう思いつつも口には出さない、決して口に出した瞬間赤面した美波に回し蹴りを喰らって吹っ飛ぶ未来の俺のビジョンが見えたからではない、決してだ

「はーん！これは凶星ですね水ヶ沢先ば……いただだ！ギブですギブですギブギブ！」

とか思ってる傍から悲しいまでに単純な千尋はそれを口に出そうとして、言い終える前に美波の流れるような動作からのコブラツイストを決められた

「ふむ……美波が足技を使わずに関節技……か、珍しいな……」

「れっ、冷静に分析してないで助けてくださいよ八伏先輩!! って水ヶ沢先輩折れます折れます折れます! ギブギブギブ!!」

「Give? 何かくれるのか?」

「ここに殺しますよ伊勢先輩!!……ってギャー!!」

千尋の断末魔と重なって、まるで何かが外れるような音が辺りに響き渡る

そしてそんな中で一人何事もなかったかのように落ち着いて紅茶をすする敵畑舞は、思いついたように言った

「そうですね、では運動不足の解消のため……プールにでも行きましょうか!」

めんどくさいので省くが、紆余曲折あつて結局は舞の先輩権限により俺たちはプールへ行くこととなつた

確かに運動自体はそれほど嫌いでもない、ただ何故この前鍋を食べたばかりなのに今度はプールなのか疑問を禁じ得なくはある……が、なんだかんだ言つて楽しみなので賛成

そしてメンバー全員で意気揚々と学校から少し離れた温水プールへと出発することになったのだが、ここで問題が起きた

誰も自分の水着を持っていなかったのである

だが安心してほしい

この世界では全ての物品が口八、すなわちタダ

そこで俺たちは今、いつぞや美波と二人で訪れた某デパートの二階の衣服コーナーに立ち寄り、現在進行形で水着選びをしているのである

「これどうよ恭介！」

圭吾がやたら自信満々に胸を張つて日の丸と大漁の文字が描かれた一枚の海パンを突き出す

「どうよと言われても俺は野郎の水着なんかに興味は微塵もないしあとついでに言わせてもらうけどセンス最悪だな」

「うん、心に染み渡つた、お前の容赦ない暴言と言う名の強塩酸が」

何かポエムのような物を呟いている圭吾は放つておいて、俺は適当に目についた海パンを手取る

黒の生地ヤシの木とサーファアのシルエットが描かれた無難なデザイン

俺も大して着る物を気にするタイプでもないので、それをテイク

アウトする事に決定

あとは残りの女性陣を待つだけだ

「……やっぱり女子は水着選ぶのに時間かかったりするのかねえ」

「そらそうだ、男が水着選ぶことと女が水着を選ぶこと……それはポンタンとポンカンくらい違うんだぞ」

「同じミカン科だろうがこのアンポンタンが」

「例えば男にとっての水着がいたいけな少女たちに通報されないための布一枚で構成された薄っぺらい拘束具だとしよう

しかし女性にとっての水着、それはあえて見せないという事で全裸時よりも妄想という余地を与え、よりエロスを引き立てる

更にスク水などという変則的な特殊拘束具に至っては見る側の不思議な背徳感を掻き立ててだな……」

「全部お前主観じゃねーかこのロリコーンが」

「ストライクゾーンが関東平野並に広い俺にとっちゃあロリもまた悪くはないがどっちかって言うと丁度手に収まるくらいの胸が……ってロロロ、ロリコーン！？それはさすがに圭吾お兄さん許さへんよ!？」

ぎゃーぎゃーと喚く圭吾を適当に流しながら、俺はそこら辺の椅子に腰をかけて美波、舞、千尋の三人を待つ

そして数十分ほどの時間が経過し、圭吾が「そもそもロリコーンってなんだ？」とか言い始めた頃だっただろうか

少し離れた場所にある衣服コーナーの奥から、ようやくこちらへ近づいてくる足音が聞こえ始めたのは

「八伏さん伊勢さん、遅くなりましたー」

特にやることもなくただ床のタイルを見つめていた俺は、こちらを呼びかける優しい声ではっと我に返った

それは意味もなく自分のチョイスした海パンを眺めていた圭吾も同様だったようで、俺たちはほぼ同時に顔を上げ……

「ぶーーーーっ!!!？」

そして、ほぼ同時に吹いた

「どうしようか?これ」

いつの間にか目の前に立っていたのは声からも大体分かってはいたが、畝畑舞

しかし違う、今の畝畑舞の体を覆っているのはいつもの見慣れた薄グレー色の制服ではない

美波の体を覆っている物、それは他ならぬホルターネックの純白ビキニ

制服越しても分かる豊富なバストは制服と言う何重にも重ねられた呪縛から解き放たれ、ここぞとばかりに大胆な露出で自らを主張をする

更に元から白い肌やその聖女のような容姿のイメージにビキニの純白がベストマッチして

「恭介……後は頼んだ……具体的にはデジカメで……」

「圭吾オオオオオーーーー!!!？」

結果、圭吾は死んだ

「あら？あんまり似合いませんでしたか？」

ビキニ姿の舞が腰を屈めて椅子から落ちて動かなくなった圭吾を見つめる

俺の隣で谷間がヤバい、直視できないレベルだ

「折角他のお二人の水着姿も見てもらおうと思いましたが……」

「閻魔殴って三途の川から自家用ジェットで最速帰還！伊勢圭吾です！」

「落語家かお前は」

悪霊的な何かに憑りつかれているのではないかといった動きで床に倒れた状態から逆再生のように起き上がる圭吾にそう突っ込みを入れる

その様子を見ていた舞はにっこりと微笑んで、言った

「では、ちゃんと見てあげてくださいね？」

舞は横にずれ、その後ろに一つの人影が露わになる

俺と圭吾は再び視線を動かし、その影を凝視

そこに立っていたのは、顔を赤くしてもじもじと体をよじらせる高島千尋の姿だった

千尋が身に着けているのは端にフリルのついたオーソドックスな桃色ビキニ

控えめな胸やスレンダーな体軀は露出の多いビキニにより更に強調され、なんとというかすごく危険な感じがする

「ど、どうでしょうか……?」

千尋が恥じらいをこめ、上目づかいでこちらに問いかける
しばしの沈黙、誰も声を発さない止まった時間

しかし、圭吾だけは違った

千尋のビキニ姿を見つめながら、ゆっくりと口を開く
千尋も俺も、舞でさえ息を呑む緊迫した瞬間

そして圭吾は短く

「ハッ」

次の瞬間、案の定圭吾の体は宙を舞った

イベント？35 「レッツ・スイミング！【後編】」

ここはロスト学園サーバーCエリア、温水プール

四方が人工的な壁に囲まれ、プールの水は温水の名の通り人の手によって程よい温度に調節されていた

海や川などの自然の物とは違い、人の手によって創られ人の手により管理されるこの空間

しかしそれもまた悪くはないな、と私こと八伏恭介は今実感しているところだ

「いやあ……ここは天国だな、ホント」

プールサイドに設置された安っぽいプラスチック製のビーチチェアに体を預け、頭だけをプールに向けた圭吾が幸せそうに呟く

圭吾の視線を追っていくと、そこには二人の少女の姿があった
一人は、持ち主が動く度に揺れる豊満な胸をホルターネック式のビキニだけで抑えつけ、こちらと同じくビーチチェアの上でくつろぐ淡い金髪の少女、畝畑舞

もう一人は、一人プールに浮き輪を浮かべ、その上に乗っかって遊んでいる見た目中学生の女子高生、高島千尋

こちらは舞とは対称的に胸も控えめで体全体の起伏も乏しい……
が、そのおかげで可愛らしいフリル付きの桃色ビキニがとてもよく似合っている

確かに圭吾のような健全な男子高生にとっては天国かもしれない、しかし

「お前はさっき物理的に逝きかけてたけどな」

圭吾の赤く痣のできた顎を見ながらそうツツコミを入れる
それは勿論デパートでの不用意な発言により千尋渾身のアップ
を喰らった時にできたものだ

「いやあ、さすがの俺もあの時は割と本気で死ぬかと思った……」

圭吾はそう言いながら自らの顎をさする

「一昔前の格ゲーのやられアクションみたいな吹っ飛び方してたも
んなお前、てかいい加減学習しろよ……」

「だってさあ……明らかに出てくる順番が違いじゃん、舞の次に千
尋って……メインディッシュの後に前菜出された気分だぜ
舞のアレをメロンと例えるのなら千尋のはホットケーキ、いやむ
しろホットプレートだ」

「……その発言千尋に聞かれたら間違いなく顔面 Grill されるな」

「平気だって、確かにアイツは地獄耳だが俺たちとは真反対にいる
んだぜ？聞こえたらそれこそ盗聴器を疑うレベルだ」

圭吾が楽観的にハハハと笑う

それに対して俺は少し驚いたような顔を見せ、「なんだ気付いて
なかったのか」と一言言っ手を持った携帯電話の画面を圭吾に向
けてやった

「ん……？」

圭吾が携帯の画面に目を凝らす

俺の手に持った携帯電話、その縦長なディスプレイの中心には「

通話中 高島千尋」の文字が

「はっ!?!」

そこに表示されたメッセージの意味を即座に理解した圭吾が咄嗟に振り向く

視線の先には水の上をぷかぷかと浮かぶ一つの浮き輪のみ

右へ、左へ……せわしなく視線を動かす圭吾

背後には顔に影を作り、妖しく目を光らせ佇む水着姿の高島千尋の姿がいるとも知らずに

「良かったな圭吾、一足先に天国逝きだ」

「なっ!?!?!」

その言葉でようやく圭吾は千尋の存在に気付く

しかし時すでに遅し、その華奢な腕を大きく振りかぶった少女は必死でその場から逃げ出そうとする圭吾の顔面めがけて

「全身……食いしばれええええええ!!!!」

「ポブツ!」

次の瞬間、千尋渾身のストレートできりもみ状に飛んで行った圭吾により、プール上に盛大な水柱ができた

「良く飛ぶなあアイツは」

その光景を眺めながら、そういえば水族館のイルカショーでこんな見たな、とかそんな的外れな事を考え始めた頃

不意に目の前のプールサイドにプールから伸びてきた何者かの手がかけられ

そしてそれが誰のものであるか俺が結論を出すよりも先に、そいつはプールから姿を現した

水に濡れ艶を帯びる薄い茶色のかかった頭髪

水の雫が滴る体は程よく引き締まり、健康的な脚や、舞ほどではないがそこそこ豊かな胸

それらは全て淡い水色の無難なビキニにより更に強調されており、なかなかの高得点

そして極めつけにはいつも通りの不愛想な表情……そう、彼女が水ヶ沢美波である

「ぷはあっ」

美波は大きく息を吐き出し、水滴の付着した髪をかき分けてからプールサイドによじ登る

「なんだ、割と楽しんでるみたいじゃないか」

「そうね……泳ぐ事自体は好きだし否定はしないわ」

そう答える美波の表情は相変わらず不機嫌そうだが、少し前に比べればいくらか柔らかくなった気がする

「……で、恭介はいつまでそこでくつろいでるつもりなの？」

唐突に美波がビーチチェアに寝そべる俺にずいと顔を近づけた谷間とか太腿とか顔とか色々近い近い危ない

「……まさかあの時賛成したのはプールに来れば女子の水着が見れるからとかそんな安直な考えじゃないわよね？」

美波のじとつとした視線が突き刺さる

「根も葉もないことを言うな、ただ実際来てみたらやる気がどっかいつっちゃっただけだ」

「……本当に？」

……これはあからさまに疑われてるな

もしここで引き下がってしまえば今度からことあるごとにこんな目で見られ……いや、もしかしたら扱いが圭吾と同等になってしまいかもしれない

何か……何か良い言い訳はないものか……

俺は頭をフル回転させ、必死でこの状況の打開策を探る
その時だった

「……ん？」

突然視界に割り込んできた美波の背後から伸びる誰かの手

そしてそれに呆気を取られて美波に弁解の言葉を返すのも忘れて
いると、その伸びてきた手はじとつとした視線を向ける美波の脇腹
を つまんだ

「へっ？」

いきなりの出来事に状況が把握できず、そんな間の抜けた声を漏らして硬直する美波

俺は美波の脇腹を掴んだその色白で指の細い手の元を目で辿る
すると美波の背後には、いつの間にか先ほどまで向こう側のビー
チチェアでくつろいでいたはずの舞の姿が

「うーん、これくらいなら気にするほどじゃないと思いますけどね
え、むしろ丁度いいと思いますよ?」

未だに身動きの取れない美波に対し、舞はそう言って美波の脇腹
をぷにぷにと揉み始める

「どうせなのでこちらも」

舞は未だに頭の整理が追いつかずに呆然と立ち尽くす美波の脇腹
から手を離し、今度はなんとあろうつことか水着越しに胸を揉みしだ
き始めた

「あ、こっちはもっと柔らかいですね、柔軟剤使っ」

案の定と言えば案の定、予想外と言えば予想外
次の瞬間、舞が全てを言い終える前に、顔全体を真っ赤に染めた
美波は俊敏な動きで舞の右足を腋に挟んで

「へむっ」

「ま……舞イイイイイ……!!?」

結果、舞は美波のドラゴンスクリーにより空中で激しく体を回
転させ、そのままプールの中へとダイブした

圭吾の時同様、水柱を上げて水中に沈んだ舞を一瞥し、美波は踵
を返す

「じゃ……もうひと泳ぎしてこようかしら……」

「水ヶ沢先輩……私も一緒にします……」

妙に影を帯び、うわごとのように眩きながらプールに向かって歩いていく美波と千尋

まるで捨てられたビニール袋のように水の上をゆらゆらと浮かぶ
圭吾と舞

すっかり静かになってしまったこの場所で一人取り残されてしまった俺は、そこでとうとう堪えきれなくなった

「……ぷっ、ははははは！」

腹を抱えて、馬鹿みたいに大笑いする

何で笑ったのか、それは自分にも良く分からない

ただ、俺の笑い声はしばらくこの空間の中で続いていた

この温水プールには、ウォータースライダーがある

室内の階段を上ってチューブ状の入り口から滑り降り、出口から出てプールに飛び込むという子供向けに作られたアトラクションだ

しかし子供向けとは言え、さすがに親の付き添いなしでは滑るのも危険な子もいる

だからチューブ内は大人一人と子供一人入れるくらいの広さはあるのだが……

丁度壁一つ隔てた向こう側で圭吾が千尋に右ストレートを貰った頃だったろうか

そこには一人楽しそうにチューブの中を滑る一人の少女の姿があった

「~~~~っ！」

若干子供っぽくも見える水色と白の縞模様の水着を身に纏った少女は、勢いに身を任せてチューブの出口から飛び出し、勢いよくプールにダイブ

少女が水の中に飛び込んでから、水のおぶくが何度か弾け

そして少女は水中から飛び出し、満足げにガッツポーズを作って、一言

「よっしゃあ！新記録！」

尾羽梨真紀は、割と元気だった

イベント？36 「ディストーテッド・ギア【前編】」

アスファルトの地面を削り、尚も勢いを衰えさせることなく
高速で接近する拳大の歯車

歯車は鉛色のボディを激しく回転させながら、足元で？跳ねた？

「恭介！避けて！！」

「ッ！！」

美波に言われたのとほぼ同時に、俺は反射的に顔を横へとずらす
それによって俺の顔面目掛けて飛んできた歯車は、顔面スレスレ
を通過してどこまでも青い空へと消えていった

「あ、あぶねえっ！？」

「もう一発来るわよ！！」

未だにバクバクと鳴る心臓を抑えつけながら再び前方を見据える
そこには激しく回転しながら地を這う先程のよりも一回りは小さな
歯車が3つ

そして3つの歯車は同時に？跳ねた？

「うおっ！！！？」

一つ目、顎のあたりを狙って飛んできた歯車を小さく後ろにステ
ップすることで回避

二つ目、俺の胸部を目掛けて飛んでくる歯車を、右に転がること
で回避

そして三つ目、体勢を崩した俺の眉間を狙った歯車に右手で触れ、
デイ・コンポーザーの能力で分解

「ギリギリセーフ!!」

地面に膝をついた姿勢で両手を水平に広げ、心からの安堵をポ
ズと共に表す

しかし息をつく間もなく前方から再びアスファルトを砕く音

「恭介!また」

美波の言葉が激しい轟音によりそこで途切れる

何事かと思いい顔を上げてみたところ、そこには高速で回転する身
の丈ほどの巨大で分厚い歯車が

「やばっ!!!?!」

俺はしゃがんだ姿勢から立て直し、美波と共にその場から一目散
に逃げ出す

「ヒヤッハアアアアア!!逃げろ逃げろ歯車ども!全員まとめて挽肉
にしてやらああああああ!!!!」

歯車がアスファルトの地面を削る轟音に混じって、後方からやた
らハイな男の狂喜の声が聞こえた

その声の主は言わずもがなプレート使い、加えてこの歯車を操る
張本人でもある

プレート名、歪な歯車?ディストーテッド・ギア?

観察していて分かったことだが、ヤツの能力は視界に入った物体

が一回転した際に発動

その物体を歯車の形に変え、自由自在に操れるというものだ
更にこの能力は対象となった物体が大きければ大きい程作られる
歯車も巨大になり、それに比例して重量も増す

もしかしたら他にも能力があるかも分からない……が、俺たちにはソレを悠長に分析している暇がない事だけは確かだった

「うおおおおおおおおおおお！！ヤバいやバいやバいやバいや！！」

全力で駆ける俺たちの後ろで、アスファルトの破片を撒き散らしながら着々と距離を縮めていく巨大な歯車

「ちょ……ちょっと恭介！さっきみたいにアンタのプレートで分解しなさいよ！！」

「む、無茶言うな馬鹿！！俺の能力は掌で触れないとダメなんだよ！！あんな凸凹してて高速回転してるもん迂闊に触ったら手首から持ってかれちまうだろうが！！」

珍しく感情的な声で責め立てる美波に俺も若干焦りを込めた口調でそう返す

いつも冷静な美波が声を荒げるのも無理はない、なんせ少しでも足を緩めれば即地面のシミとなるのだから

いや違う、あの歯車は俺たちの走る速度より明らかに早い、その内追いつかれるのは明白だ

「美波！このままじゃ追いつかれる！同時に横に飛ぶぞ！」

「言われなくてもっ！」

美波とアイコンタクトを交わし、ギリギリまで歯車を引き付けてから回避

俺と美波はほぼ同時に横へ飛び出し、受け身を取って着地する
そして凄まじい速度で通り過ぎていった歯車は直線状にあった建造物の壁に激突し、そこでようやく動きを止めた

「美波っ！こっちだ！」

すかさず俺と美波は再び追撃が来る前に近くの自転車置き場に転がり込んで身を潜める

幸い先程の歯車から逃げている内にディストローテッド・ギアのプレート使いからは大分離れることが出来たので、すぐにまた攻撃が飛んでくる気配はない

「はぁ……はっ……ちっ……畜生……！なんだってんだ……！」

「し……知らないわよ……！」

ぴつちりと整列された自転車の一つに背をもたれかけ、息も荒く肩を上下させながら途切れ途切れに言葉を交わす

その行為に自分たちがまだ生きてることが実感できて安堵の溜息が漏れるが、状況はなんら変わっちゃいない

「しかし厄介だなヤツのプレートは……」

「そうね……接近戦にさえ持ち込めれば私のイグニッションで蹴りを叩き込んでやれるけど……まず接近することができない……」

美波が苛立たしげな様子で自転車置き場から少し顔を出し、向こ

う側の様子を窺いながら言う

「……そうだ、美波のイグニッションであの歯車を空中で溶かしたりとかは……」

「無茶言わないですよ……確かに私のイグニッションなら今のレベルでも最大3000 くらいの炎なら出せるわ、ちなみに鉄の融点は1500

できないことはないだろうけど私のプレートはあくまで？発火？……物体に火をつけることはできて溶かすまでに時間がかかりすぎる……それとも火のついた歯車から逃げ回りたい？」

「そいつはご遠慮したいな……」

休んでいたおかげで大分落ち着いてきたが、だからといって良い案が浮かぶわけでもなく、俺たちはそんな不毛なやり取りを繰り返して途方に暮れる

その時俺はふとあることを思い出した

「そうだ美波、お前のソニックウェーブでなんとかできないのか？」

一応説明しておくが、ソニックウェーブとは物体が音速を超えた時に発生する一種の衝撃波のようなものの事だ

そして何故今この単語が出てきたのかと言うと、俺がつい数日前のあの出来事を思い出していたからに他ならない

あまり思い出したくないが数日前の学校での戦いで美波が見せたあの技

そう、十数メートル離れた場所から今にも能力を発動させようとする土倉の腕を斬りおとしたあの人間離れた音速の蹴りの事だ

あれならばあるいは……

そう思つて口に出したのだが、予想外にも当の本人はまるで鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情でぼかんとしていた

「……え？何？もう一回お願い」

なんだ聞こえなかったのか

「だから……ソニックウェーブだよ」

俺は改めてもう一度言葉に出す

今度はちゃんと聞こえたはず、そう確信して美波の表情を窺う

「ソニックウェーブ……えっ？一体何の話を……って、もしかして土倉連と戦った時のアレ？」

「そのつもりで言ったんだが……なんだその反応」

逆にこっちが恥ずかしくなってくるだろうが

と続けようとしたら、それよりも先に美波は額に手を当て、呆れたように口を開いた

「……まさか本当に信じてるとは思わなかったわ」

「えっ、じゃあなんだ、あれって嘘だったのか？」

驚きを交えた声でそう問いかける

「嘘に決まってるじゃない、あんなのトリックよトリック」

そもそもソニックウェーブで狙った部位を斬りおとすなんて不可

能だし、第一音速を超える蹴りなんてそれこそ化け物じゃない、ス
トリートファイターじゃあるまいし」

「そりゃソニックブームだ」

他にツッコむところが色々あるだろうに、あえてそこへツッコん
でしまうあたり俺は徐々にこの世界に染まってきているのではない
だろうかと一抹の不安を覚える

が、結局はまた一つ可能性が潰えただけで振り出しだ

……そもそも何で俺たちはこんな危機的状況に陥っているのか、
ゆっくりとここに至った経緯を思い出してみる

まず恒例のルーザー狩りの当番を決めるため、舞がジャンケン
を提案したのが事の始まり

美波、舞、千尋、圭吾、そして俺を含めた5人がジャンケンをし
た結果、俺と美波がチョコキで他の三人がグー、見事俺と美波がルー
ザー狩りへ行くことになったのだが、ここからが問題だ

順調にレベルルーザーたちを駆除していった俺たちは、学校か
ら数百メートルほど離れた駐車場、そこで佇むくたびれたスーツ姿
の一人の青年を発見

この世界にいるということはプレイヤーには違いないのだから、
と俺たちが慎重に話しかけてみたところ突如襲われ、冒頭に戻る

「……どうしてこうなった」

思わず口をついてその言葉が出た

思い返しといてなんだが襲われる心当たりがさっぱりない
それともあれか？プレイヤーってのは皆人格破綻者なのか？

「概ね間違っちゃいないわ」

いつものように美波は俺の心の中を読んだようで、そう口を挟んだ

「プレートの力に溺れたのか、法も警察もないこの世界だからなのか、はたまた元からそういう人間ばかりが集まっているのか……いずれにせよプレイヤーにロクなヤツはいないわね、勿論、私や恭介も含めて」

「俺は普通だぞ」

少しムキになって反論する俺に、美波は悪戯っぽくクスリと笑う

「多分そう思ってるのは恭介だけよ、貴方も十分変人だわ、削除人にマークされるのも無理ないかもね」

「失敬な……」

クスクスと含み笑いを浮かべる美波の横顔を眺めながら、小さくそう呟いた

思えば美波は最初に会った時に比べて大分表情が柔らかくなった気がする

俺もだいぶ打ち解けられてきたのだろうか、それなら幸いだ

「さ、こんな事してる暇はないわね、助けを呼びましょう」

美波は案外あっさりと言って、制服の胸ポケットから二つ折りになった携帯電話を取り出した

「あれ？そんなに簡単でいいのか？」

「いいわよ、だってアイツのプレートと私たちでは相性が悪すぎる。勝つことができたとしても無傷で勝てる保証はない、だったら迷わず助けを呼んだ方が良いでしょう？」

幸い敵畑さんのプレートは遠距離戦向きだし、千尋のプレートなら強引な力押しだけでもあの歯車を弾いてプレイヤーを叩ける」

美波はそう言いながら二つ折りになった携帯を開き、手慣れた動作で親指を動かし始めた

俺はてつきり美波の事を意固地になって一人でも倒す、とか言いそうなタイプだと思っていたのだが……どうやらその考えは訂正しないといけないらしい

とりあえず舞か千尋が来ればこの場は大丈夫だろう

俺は携帯をカチカチと弄る美波を一瞥し、一つ安堵の溜息をつく
そして何気なく自転車の影から顔を覗かせ、あのプレイヤーの方へ視線を向け

凍りついた

「なっ………!?!」

ここからは百数十メートルほど離れた場所に立ったスーツ姿の男
ソイツは駐輪場に並べられた自転車の一つを担いで、こちら見据え

そして、勢いよく？転がした？

「ッ……!」

男の手から離れ、金属音を立てながらアスファルトの上を転がる
自転車

そしてその自転車が縦に一回転した時、それは巨大な歯車に形を
変え、轟音を立てながらこちらへ向かってきたのだ

「えっ？」

着信履歴からあの二人のどちらかの携帯番号を選択し、今にも通
話ボタンを押そうとしていた美波が動きを止める

自転車置き場の自転車をスクラップにしながら徐々に距離を縮め
ていく巨大な歯車、その直線上には状況が理解できずにきょとんと
した表情で固まる美波の姿が

「美波ッ！！」

俺は美波の名を叫び、その場から跳躍

そして歯車が美波のすぐ後ろの自転車を巻き込んだ瞬間、俺は美
波を抱きかかえアスファルトの地面にダイブする

それによつて歯車は凄まじい音を立てながら後方を通過し、そし
て先程の歯車同様壁に激突して勢いを殺した

「づっ……！！」

粉塵が充満する中で、左足に焼けるような痛みが走る

どうやら少しあの歯車にかすったようだ、多少血は出ているが、
これくらいなら問題はない

それよりも問題なのはこちらの方だ

「なっ……なっ……！！」

目の前にあったのは、俺の下で最早お馴染みの赤面顔を浮かべて
上手く声を出せずにいる美波の姿

よく見たらこの体勢かなりヤバいんじゃない……

「わ、悪い！今離れる！」

若干、というかなんかなり焦りながら俺はその場から立ち上がることに
する

片手を地面につけ、膝を地面について、そのまま

「……あれ？」

……立ち上がれない

いや、正確には？俺の右手と美波の左手がくっついて離れない？

「えっ、えっ？」

どちらも手を握っているわけじゃない

なのに俺と美波の手の平がまるで接着剤でくっつけられているか
のように離れない

捻っても、向きを変えても、強めに引っ張っても　ビクともし
ないのだ

「どっぴいっこと……！？」

美波が驚愕の声を漏らす

その時、視界の隅で何かが光る

「ッ……！」

俺は視界の隅から飛んできた石ころ大の歯車を回避
それにつられて、美波も腕を引っ張られる

「ヒヤッハアアー！！全部まとめてミートソースにしてやるぜえええ
ええええ！！」

徐々にこちらへ迫ってくるあの男の声、足音

そして、まるで生き物のように地を這う無数の歯車

「と、とりあえず一旦戦線離脱だ！！」

俺は美波の手を握り、襲ってくる歯車の群れを躲しながら走り出した
男女二人が手を繋ぎながら走り出す様は端から見れば臭い恋愛ド
ラマだな、などと下らない事を考えながら

イベント？37 「ディストローテッド・ギア【中編】」

ここは先程の駐車場から少し離れた場所のにある、とあるコンビ二
なんかああの歯車スーツ男（仮）を撒くことが出来た俺たちは、
全くの別件で苦戦を強いられていた

「いくぞ……」

美波は返事をする代わりにこちらへ視線を合わせ、アイコンタク
トで合図をする

そこで俺と美波は同時に自らの腕に力を込め、そして思い切り引
つ張った

「ぐっ……！」

「くっ……ふっ……！」

掌をこれ以上ないくらい開き、お互いが逆方向に腕を引く
しかし俺と美波の繋がってしまった掌はびくともしない

「っ……ぶはあっ……！」

ほとんど同タイミングで俺と美波は大きく息を吐き出し、手に込
めた力を緩めた

「だっ……駄目だ……全然離れねえ……」

「ど……どうなってるのよ……これ……」

俺と美波は掌同士をくっつけたまま肩を上下させて息を荒くする
そう、俺たちが躍起になってるのは何故かあの歯車スーツ男（
仮）との戦いで離れなくなってしまうた俺の右手と美波の左手の件
ソレはまるで初めからそこに固定されていたかのようにぴたりと
繋がりが、引つ張っても捻つても向きを変えても、結局ソレは離れな
かった

「多分これもヤツのプレート能力と考えるのが無難でしょうね、例
えば……？ 歯車に触れた相手が一番初めに触れた物体に接着される
？ とか」

「そんな訳ないだろ？ だって俺はアイツの攻撃なんか……あ」

そこまで言いかけて俺は思い出したように自らの左脚に視線を落
とす

視線の先には、少し破けた制服から染み出す赤いシミ
これはあの歯車スーツ（仮）の攻撃から美波をかばった際に俺た
ち二人のスレスレを通った歯車がかすれてできたものだ
大した怪我ではなかったので放っておいたが……まさかそんな効
果があつたとは……

「でもまあくつついたのが地面とか壁じゃなかったただけ幸いね……」

それもそうか……

もしそんなとこにくつつけられでもしたらそれこそ一巻の終わりだ
そう思えばこれは幸運と言えば幸運なのだろうか……

「……とりあえずアイツを倒さないことにはこれも離れそうにない
わね……」

美波がそう言って繋がった手を掲げる
それにつられて俺が力なく下げていた右手も引っ張られる

「……………」

俺は無言で合わせた手を軽く揺さぶってみる
するとそれに連動して美波の手も揺れる

「……………不便だな」

「……………そうね」

はぁ、俺と美波は同時に一つ溜息を吐き出した

「とりあえず……………助けを呼ばないとね……………」

「……………そうだな……………」

幸せの逃げる音が、見事に重なった

ここはいつぞや千尋と訪れたあの家具屋
メンテナンスのおかげで前回壊した家具も、ルーザー達が割った

窓も全てが元通りになっている

が、俺たちがここへ来たのは勿論新しい家具を調達するためではない

いや確かにちよっとお洒落な電気スタンドが欲しいなあとは思っていたが……まあ、まずその話は置いておいて

俺たちがここへ来た理由は他でもない、アイツに助けを求めるためだ

「敵プレイヤーのプレートで手が離れなくなった……ですか？」

目の前の見た目中学一年生の後輩といった感じの雰囲気を漂わせた少女、高島千尋がそう言っって首を傾げる

「ああそうだ、これのせいでこちらロクに動くことすらできない」

「こんな状態じゃ反撃しようにもできないわ、だからちよっとお願いしたいんだけど、一緒に来てディストーテッド・ギアのプレート使いを……」

「成る程成る程分かりました！把握しましたよ！」

美波が全てを言い終える前に千尋はやたら得意げな表情でその言葉を遮る

……やけに物分かりがいいな、何か嫌な予感が……

「つまりこういうことでしょうー！」

そんな悪い予感さえも遮り、千尋は人差し指を一本立て、言った

「ノロケですね！」

直後、千尋の放ったその言葉は石化呪文か何かの類だったらしく、俺と美波は揃って動きを止めた

しかしそれでも尚千尋の呪文は止まらない

「いやあ、実を言うと私も前々から気づいてはいたんですよー、なんか八伏先輩と水ヶ沢先輩最近仲良いですしー、羨ましい限りですよコンチクショウ！」

「えっ、ちょ、おい千ひ」

「おっと！その手には乗りませんよ！油断したら「敵プレート名は……恋天使？キューピット？……さっ」とか臭い事言い始めそうですしね！やばいですね！」

自分で言っておきながら、やたら興奮した様子でせわしく身をよじる千尋

もう会話が成り立たないってレベルじゃない、会話のゲシュタルト崩壊だ

そして千尋はそろそろ気付いた方が良さそう

俺のすぐ隣で美波が郵便ポストのごとく顔面を真っ赤に染めて、恥じらいと怒りを足したうえであえて割りませんでした、みたいな顔をしていることを

「いやあでもやっぱりお似合いですねー！カメラとかがあれば……あっ！写メがありました！笑って笑って！はいパルミジャーノ・レツジャーノ！」

ギリイ……

隣からシャッター音に混じってそんな不吉な音が聞こえる

恐る恐る目をやると、そこでは携帯を構えて意味不明な暗号をさも当たり前のように口に出す千尋を睨みつけながらも肩をわなわなと震わす美波の姿

下唇を血が出んばかりに噛みしめ、かつ顔は今にも爆発しそうなくらいに真っ赤だ

「んー……なんかイマイチぎこちないですねー……もう一枚撮るんで次は八伏先輩ちよつと強引な感じで水ヶ沢先輩を抱き寄せちゃったりしてください！あ！勿論台詞付きで！」

ブチッ

今明らかに俺の隣から何かの切れる音が聞こえた、いやむしろ見えた

ゆっくりとそちらに視線を向ける

それと同時に美波は腰を低く落とし、獲物を狩るような目で

「うわあああああ！！千尋！ちよちよつと俺たちインポータントな用事を思い出したから！じゃ！じゃあな！」

「あー！逃げるんですかー！？」

後ろの方でなにやらの外れな事を叫んでいる千尋はこの際無視することにして、俺は今にも飛びかからんとする美波の手を強引に引き全力でその場から逃走した

いや、逃走と言うには少し語弊があるかもしれない

……運が良かったな千尋、俺と美波の手が繋がってて

「つまり敵のプレート能力で手が繋がってしまった……と？」

所変わってここはいつかの喫茶店「レオ」

アンティークな内装の店内は人一人おらず、古ぼけたレコードだけがレトロなBGMを奏でるこの場所で椅子の一つに腰を掛けてティーカップを片手にした先輩肌の大人びた女子高生、すなわち畝畑舞はそう確認して首を傾げた

「ああそうなんだ、この通りどうやっても全然外れそうにない」

俺は美波と繋がった右手を揺さぶり、それでも手が離れないことを舞に見せる

すると舞は珍しく神妙な顔つきで指を顎に当て、ふうむと軽く唸った

「これは厄介ですね……」

先程の千尋とは違ってかわって真剣な表情

ああさすが舞、いや畝畑舞先輩様様だ、いつもはマイペースで紅茶ジャンキーだけど困ってる時は的確なアドバイスを……

「八伏さん、美波さん、出身はどこですか？」

唐突に、舞がそんな事を問いかけた
一瞬質問の意味が理解できずに固まるが、少しの間を空けて俺は
口を開いた

「いや……元の世界の事はよく覚えてないんだが……」

「私も全然……何で急にそんな事を？」

引き続き美波も無難な反応を返す

舞はその反応を見て、更に至って真面目な表情でこう答えた

「いやですね、北海道や山梨の方では小豆の代わりに甘納豆を使っ
らしいですし、新潟の中越地方では醤油を使ったものもあると……」

「えっ」

「えっ」

俺と美波の声がワントンポずれて発せられる

一体何の話を……？

そう思った直後だった

「でもまあ、やはりオーソドックスなもち米と小豆の赤飯が一番で
すね、八伏さんと水ヶ沢さんもそれでいいでしょうか？」

恒例の時間停止タイム

舞の言葉にセルフエコーがかかり、何度も頭の中で反響する

そして何度もその言葉を反芻し、丁度脳内で舞の発した言葉がゲ

シユタルト崩壊を起こし始めた頃だったろうか
隣で啞然とした表情をしていた美波が一瞬にして真っ赤、という
かむしろ真っ紅に変わったのは

ノーモーション赤信号

何の前触れもなくそんなフレーズが頭の中に浮かんだ
大事故である

いや、大事故と言っても過言ではない

さつきから顔中から蒸気を噴き出して肩を、全身を小刻みに震わ
せる美波

その震え方はさながら携帯のマナーモード……いやむしろ地震兵
器だ

そしてその表情は生放送でなければ画面の端に映り込んだだけで
カットされそうなくらいギリギリの顔である

美波がこういう系のネタに弱いのは分かった、分かったからその
顔やめてくださいお願いします

と、勿論超絶マイペース、いや舞ペースな少女がその程度で勢い
を失う訳もなく

「……ところで水ヶ沢さんはサッカーと野球どっちが好きですか？
ちなみにサッカーは11人で野球は9人ですよ」

ブチッ

意味を理解するまで数瞬程の時間を要するそのネタに、ついに美
波の堪忍袋の緒が吹っ飛んだ

美波が無言で低く腰を落とす

そしてまるで猛禽類のような鋭い目つきで舞の首筋に狙いを定め

て

「うわぁー!!もうこんな時間だ!天日干しにしておいた梅干しが干からびちゃうよー!!」てことでじゃあな舞!」

再び逃亡

「ほー、恭介と美波がねえ、不思議なこともあるもんだ」

「ここは……ああもう説明するのもめんどくさい

「ここはとある中古ゲーム屋の店内で、目の前の相変わらず空気を読まずに意味深な笑みを浮かべる男が伊勢圭吾だ

「それにしてもあの美波がねえ……いやぁ、前々からおかしいとは思ってたんだよ、何か恭介が来てから丸くなつたし蹴りの回数も減つたしな!」

美波は一人そう言いながらニヤニヤと笑みを浮かべる圭吾を視線から外し、無言で首だけをこちらに振り向かせる

その無言の問いかけに、俺はそれ以上何も言わず、ただ空いた左手の親指を立て、自らの首をかつ切る動作で答えた

それを合図に美波が今までにないくらい流麗な動きで腰をかがめ、
圭吾に背を向ける

「えっ」

圭吾の口から間拔けな声が漏れる

しかしそんなのもお構いなしに美波は圭吾に狙いを定めて空いた
右手をタイルの床に付け

「セイ、ヤー!!」

見事な力ポエイラキックが圭吾の鳩尾にクリーンヒット

時間のゆっくりと流れるスローモーションな世界で圭吾は宙を舞
い、美波は今日一番清々しい笑顔を浮かべていた

イベント？38 「ディストーテッド・ギア【後編】」

「結局進展は無し、か……」

とある公園の一角

ベンチに腰をかけ意味もなく青い空を流れる雲を眺めていた俺たちは、ついに離れることのなかったお互いの手を諦観を込めた視線で一瞥し、本日何度目になるであろう溜息を吐き出した

ふと、公園のベンチで手を繋いでる男女つて端から見たら恋人同士だろうな、などという考えが浮かんできたが、まだ命は惜しいので頭の中だけに留めておく

……それにしても三人訪ねて全滅とは……意外と人望ないのだからか、俺

「……まあでもよく考えたら？手を繋げて離れさせなくするプレイト？なんて言っても信じるわけねーよなあ……」

「それもそうね……」

美波が心底疲れ切ったと言った様子で深く溜息を吐き出す

圭吾を一発でノックアウトして幾分かストレスは解消できたらしいが、さすがに少し疲れているようだ

「どうすればいいのかしらね……」

「そあ……」

少なくともこのままだったらしてるのは良くないだろう、そうは思うが代案が思い浮かばないというのもまた事実

俺たちにできるのはただこうしてどこを見るでもなく視線を虚空に投げ出したまま途方に暮れることであり……

「どうした八伏恭介」

聞き覚えのある声と視界の隅に映り込んだその人影に、今冗談抜きで心臓が止まった

「うおおっ！！！」

「きゃあっ！！？」

俺は驚きの余りベンチから後ろに転げ落ち、当然手を繋いでいた美波もそれに引かれて珍しく女の子らしい悲鳴をあげてベンチから転げ落ちる

芝生の地面に背を預けて見上げる青い空、その中には何故かこちらを鷹のような鋭い眼光で見下ろす一人の黒髪の少女の姿が

「削除人！？」

俺と美波の驚愕の声が見事に重なった

ちなみにその驚愕の声には二種類の意味がある

一つは削除人がここに居ること、そしてもう一つは？削除人がジヤングルジムの側面に立って何食わぬ表情でこちらを見下ろしていることだ？

「削除人アンタ一体何をしに……！？」

美波が若干怯えた声で問いかける

対する黒髪の少女、もとい削除人は短く「水ヶ沢美波、貴様には

関係ない事だ」と言い放ち、ジャングルジムの側面に立ったままこちらに向き直った

「重力無視かよ!!」

口をついてそんなツッコミが出る

二人仲良く仰向けになりながらのツッコミは大変シュールな光景だろう

「私にできないことはない、そんなことよりも質問に答える八伏恭介」

「ぐっ……!!」

渾身のツッコミにこんな雑な返しをされたことに多少腹を立てるが、だからといって事態が好転するわけでもないのだ

「敵のプレートの能力でな……このザマだ」

俺は多少面倒臭そうにそう言って、美波の左手と繋がり全く離れる気配のないその手を見せつける

すると意外にも削除人は腕を組んだまま、大して驚かない様子で口を開いた

「ふむ……ディストーテッド・ギアか」

「……!知ってるのか!?!」

慌ててその場から起き上がり、削除人に問い詰める

「私は削除人だ、この世界の事で知らないことはない
……しかし確かかデイスターテッド・ギアのプレート使いはここに
来たばかりのレベル1だったはずだぞ、まさかレベル2と1二人が
かりで負けるとはな」

削除人が見下したような視線で言い、くるりと踵を返してジャン
グルジムの側面を歩く

そして頂上まで達した時、削除人はようやく？縦？になり、そし
てジャングルジムの天辺に立った

「まあこの程度でやられるようなら所詮はただの1プレイヤー、
私としても監視対象が減ってくれて助かる

それに……最近では？インペリア？の連中も動き出したようだし
な」

「？インペリア？……？」

俺はその聞き慣れない単語を復唱する

心なしが美波の肩が少し動いた気がする……が、それを確認する
前に削除人は淡々と質問に対する答えを告げた

「この世界にいれば否が応でも分かる時が来るだろう、そして私が
それを教える義理も 無い」

直後、削除人は予備動作も無しでジャングルジムから跳躍

そして華麗に宙を舞った削除人の影が丁度太陽と重なった時、す
でにそこには削除人の姿はなくなっていた

「……」

ざざあ、と音を立てて緑のカーペットが波打つ
妙な静けさだけが残るその空間で、俺と美波はどれくらいそうし
ていただろうか

不意に、仰向けになったまま目を合わせ口を揃えて

「ム力つくな」

俺たちは動きをぴったりと揃えて跳ね起きる

「黙って聞いてれば思わせぶりな事ばかり言いやがって……何が
監視対象だ、何がその程度だ」

「同感、私もなんかすつつつつつごく見下されてる気分よ、何しに
来たのよ全く」

俺と美波は苛立たしげにそう吐き出して、そのままある一点を睨
みつける

視線の先、そこには周囲に無数の歯車を蠢かせながら徐々にここ
らへ近づいてくるスーツ姿のあの男の姿が

「好都合ね、あっちから来てくれたみたいよ」

距離にして百メートル前後、遮蔽物の類は一切なし

男の周囲を囲む歯車が回転の速度を増す

周囲を緊張した雰囲気包み込む、一触即発とはまさにこの事
繋いだ手を強く握り、そして俺たちは構える

「……………いくぞ！」

俺たちが走り出したのと、歯車が動き出したのはほぼ同時だった

「おおおおおおおおおおおおおお!!!」

咆哮を上げ、大地を踏みしめ、風を切って駆ける

視界の大部分を占める緑色を塗りつぶさんばかりに押し寄せる銀色の波

拳大の歯車は、足元まで来たところでまるで弾丸のように撃ち出され、俺と美波を襲う

しかし俺たちは決して立ち止まらない

美波と完全に息を合わせて襲いくる無数の歯車を右へ左へ、ほとんど本能的に躲しながら徐々に男との距離を詰めていく

「オラア!こんなんじゃないまだ終わんねーぞ!!!」

男が狂ったような笑いをあげ、それに呼応するように男の手前にある歯車のいくつかが高速回転しながら宙を舞う

そしてそこへ更に飛んできた歯車が命中し、二つの歯車による回転の相乗効果で今までの物とは比べ物にならないほどの速度で歯車が撃ち出された

その数は合計で三つ

「美波ッ!」

「分かってるわ!!!」

足元の歯車も躲しながら、前方から凄まじい速度でこちらへ迫る歯車の弾丸を見据える

当たれば怪我では済まない、更に触れれば他の物体と接着されてしまう

となれば選択肢は必然的に？避ける？の一点のみ

しかし、美波の人間離れした集中力と脚力は別の選択肢を生み出した

それは

「はっ！」

美波の蹴り上げた石が歯車めがけて一直線に飛んでいき、そして美波の狙い通り蹴り上げた石は？高速で飛来する歯車の端を的確に射抜いた？

ぎいん、という激しい金属音の後、ここからでも視認できるほどの火花が散る

そして軌道を逸らせた歯車は隣の歯車にぶつかり、弾かれ、連鎖が始まる

まるでビリヤードか何かのように弾け、歯車の弾丸は完全に視界の外へと消えた

しかし足元を這う、この気持ち悪くすらある歯車のカーペットは今も健在だ

芝生の地面を乱暴にめくりあげ発射される無数の歯車

このままでは埒が明かない

「美波！」

俺は美波の名を呼び、そこであえて一旦立ち止まる

無論そんな事をすれば、ここぞとばかりに俺たちを狙った歯車の津波が押し寄せた

「ちょ、ちょっと恭介！？何で止まるのよ！」

美波が若干焦ったような口調で言う

しかしそれには答えず、停止と同時に投げ放ったプレートを手甲にぶつけ、体内に取り込む

プレートは淡い光を放ちながら、俺の左手に数字の？1？を刻み込んだ

「……そういうことね」

そこでようやく美波も俺の考えを理解したようで、自らの胸ポケットからプレートを取り出し、それを制服越しに胸部へあてがった。プレートは液体のように溶け出し、形を失い、美波の体内に取り込まれる

まるで巨大な壁のように眼前にそびえ立つ歯車群

それが到達する前に、俺はディコンポーザーのプレート能力で左手を大きく振り、空気を切り裂いて玉の形に分解する

そして四方八方へ飛び散った粒の中で特定の粒だけを左手に集め、その玉の塊を思い切り歯車の中心へと投げ放った

「やっちまえ美波！フリーキックだ！！」

「任せて！」

その合図に合わせて、美波の脚を、正確には美波のスニーカーをオレンジ色の炎が纏う

美波は大きく足を振りかぶり、それこそ空気を切り裂くような蹴りで、足元の小石を蹴り上げた

小石はどういう原理か美波の足に触れた瞬間発火し、そのまま炎の軌跡を描きながら先程俺が投げ放ったあの玉の塊へと一直線に飛んでゆく

ちなみに言うところの先程のあの塊は、空気中の酸素と水素だけを寄せ集めて作ったとてもデンジャーな物質となっている

そんなところに炎を纏った石ころなんか命に命中すれば、言わずもがな

爆発

「ッ！！」

スーツ姿の男が初めて驚愕する

至近距離での凄まじい轟音と共に歯車の壁が弾け飛び、爆風と爆炎が歯車を砕き、元は歯車だったものの破片が辺りに降り注ぐ

もうこうなってしまうえばそこにあるのは歯車などではない、ただの鉄片、すでに？歯車を操る？能力の対象外である

「これでフィニッシュだ！一気に決めるぞ！」

俺たちは最早何の驚異でもなくなった歯車の残骸の上を駆けて、

最早守る物のなくなったスーツ姿の男との距離を一気に縮める

あと十数メートル

その時だった

「ヒヤハハハハハハ！知らねえのか！？切り札ってのは最後の最後まで取っておくもんなんだぜ！！！」

男が下卑た笑い声をあげ、何を思ったのか自らの身を纏う黒一色のくたびれたスーツを剥ぎ取った

そして男は脱いだスーツの端を掴み、それをまるでピッチャーの投球フォームのようにして振り下ろし、手を離す

それによりスーツは空中で？一回転？

「なっ
」

そこまでしてようやくその行為の意味に気づき、足を止める
しかし

「遅すぎるんだよ！？デイストローテッド・ギア？！！！！！！」

男がそう叫ぶのと同時に、空中で一回転した黒一色のスーツは銀色の歯車へと形を変えた

その大きさは先ほどの歯車の比ではない

自転車のタイヤほどもあり、かつ両腕ほどの厚さの歯車が、砂塵を巻き上げ襲い掛かる

「
ッ！」

この速度、この距離では避けることは不可能

ならばどうすればいい

俺のデイ・コンポーザーなら分解はできるかもしれないが、上手く掌で触れるとは限らない

もし手首などに歯が当たれば十中八九俺は左手を失うことになる

高速で回転しながら近づいてくる歯車に、タイミングを見極め、

掌で、触る

一見簡単そうに聞こえるが、その実これは至難の業
そんな集中力が俺にあるわけが

「しょうがないわね」

唐突に、俺の左手首が美波の右手によって掴まれた

「み、美波っ……!!」

「……あとで買い物に付き合っただけ、それでチャラよ」

美波が少し照れくさそうにそう言って俺の手を握る右手に力を込め、俺はそれに任せて手を動かす

もう少しで手の届く位置にまで迫った巨大な歯車

俺は美波に誘導されるようにゆっくりと手を伸ばし、そして

「今っ!!」

美波がより一層腕にかける力を強め、俺は歯車に手を突き出す
疑うことはない、ただ真っ直ぐと手を伸ばし、一声

「分、解!!」

俺の声がだだっ広い公園の中を無駄に反響する

次の瞬間、俺の触れた巨大な歯車は、粒になって四方八方へ
飛び散った

「バツ……!!」

男が再び驚愕の表情を浮かべる

しかし、もう遅い

弾け飛んだ玉が地面に着くよりも先に、息をつく間もなく大地を蹴って接近した俺と美波

初めに美波が男の顎を蹴り上げた

美波の強烈な蹴りにより男は全身を逸らせ、強制的に空を見上げることになる

続けて俺は左手を男の首に刻まれた数字の？！？めがけて伸ばし掌でしっかりと触れ、頭の中で強く念じた

分解

男の首元から眩い光が放たれる

それによって放出された光の粒は空中で再びプレートの形を構築し、芝生のクッションに受け止められた

「本当に……スミマセンでしたあ……！」

あの戦いから数分後

たった今そこにあったのは、トチ狂ったディスト・テッド・ギアのプレート使いなどではなく、深々と頭を垂れて謝罪をする一人の好青年の姿だった

「あ、自分？^{ヒノキオ} 松尾 ^{リョウタ} 涼太？つて言います！
気付いたらどこか知らない会社でスーツ姿で寝てて……何事かと
思つて飛び出したら怪人に襲われて……
自分中坊の頃から興奮すると周りが見えなくなつて……本当にス
ミマセンでしたあ！！」

今ので七度目になるたどたどしい謝罪の言葉を聞きながら、俺と
美波は顔を見合わせる

美波の微妙な顔は、無言で「ギャップがすごすぎるでしょ……」
と語っていた

そらそうだ、さっきまで世紀末的な話し方をしていた男からプレ
ートを取つたら活発な新入社員風な好青年だつたなんてどんな錬金
術だ

「……とりあえずさっき話したこの世界の事については信じてるの
か？」

「はい！勿論ツス！」

そして即答である

しかもかなりいい笑顔で

まあ彼の場合はこの世界の事について知るよりも先にプレートを使
つてしまったのだから仕方ないのかもしれないが……でもなあ……

「とりあえず今回の事についてはお世話になりました！この恩につ
いては一生忘れないツス！では！」

終始微妙な表情をしていた俺たちを余所に、齒車スーツ男（仮）
もとい松尾涼太は最後にそう言い残して終始爽やかなまま立ち去つ

て行った

「……」

「……」

残された俺たち二人は、意気揚々と去っていく松尾涼太の背中が見えなくなるまで無言でその場に立ち尽くす

デイス・テッド・ギア的能力が解除された今、もう二人の手は繋がっていない

しばらくしてから俺と美波は首から上だけを動かして顔を見合わせ、それから 腹を抱えて笑った

イベント？39 「ブルー・オブ・リユニオン」

ここは2-1教室

各々が中央に置かれた長机を囲んで趣味に時間を費やす中、俺は一人黙々と携帯ゲーム機をいじっていた。

「…………ふう」

一旦ゲーム画面から目を離し、肩をぐるぐると回してみたり背伸びを試みたりする。…………何分ずつとこの姿勢だったせいで体の節々が痛いのだ

不意に、壁にかけられたシンプルな白い壁掛け時計に目をやる。

時計の短針はすでに正午を、いや午後1時を回ったところだ

昨日圭吾に借りた某人気モンスター育成RPGにハマった結果がこれである、時間が経つのは早いな

そう分かった途端、俺は自らを襲う空腹感に気付く

そういえばゲームに夢中になりすぎて昼食を食べるのを忘れていた、いや、よく考えると朝飯食べてなかった

若干へこんだ気がしないでもない腹を軽くさする。

こうなると人が発する言葉は万国共通だと思う

やっと言葉を話せるようになった幼児から腰の曲がったお年寄りまで、半ば条件反射のように口をついて出してしまうテンプレ的な台詞そしてやはり俺もその例にもれず、その言葉を口にしていった。

「…………腹減ったなあ」

「！」

何気なく発したその言葉に瞬間、その場にいた全員の視線が集中した。

いつも通りミステリーものの文庫本を読みふけていた美波も、高級そうなティーカップを傾けて紅茶を楽しむ舞も、珍しくゲームではなく漫画雑誌を広げていた圭吾も、ソファアの上で寝転がって家具のカタログを見ていた千尋も

……え？なにこれ？

「八伏さん……今貴方は？お腹が空いた？……そう言ったんですか？」

何故か張り詰めた空気の中、あのいつもマイペースにこやかに微笑んでいる舞が真剣な表情で問いかける

「いやまあ言ったけど……」

その他大勢いや三名が、ざわ……と漫画のような擬音を立ててあからさまにざわつく

「本当……ですか？」

舞が再びよく分からない質問を投げかけ、周りはそれを固唾をのんで見守る。

そんなよく分からない雰囲気にも多少戸惑いつつも、俺はなんとかその一言を口に出した。

「いや、まあ……本当だけど……」

「！」

舞、美波、千尋、圭吾が驚愕に目を見開き、声にならない叫びをあげた。

一方の俺は何が何やら状態である。

「そうですか……そこまで強い意志を持っているなら私から言う事は何もありませんね……」

Ｃエリア西……赤い暖簾がその聖域へと繋がる道標、そこが貴方の栄光への道　！さあ行ってください勇者八伏さん！貴君の勝利はすぐそこに！」

おもむろに立ち上がっていつもの3割増し位のテンションで高らかにそう宣言する舞、惜しめない拍手を送るギャラリ―

ちなみに俺はというと早々に考えることを放棄していた。

「……」

あれから数十分後、俺はＣエリアのとある一軒家の前に立っていた。

周りに目立った建物はなく、大きめの空き地にぽつんと一軒だけ立つ小さな建物

舞の言った通り入り口に提げられた赤い暖簾には、なにやらレト

口な雰囲気を漂わせる「らあめん」の四文字
ここはどこからどう見ても……

「ただのラーメン屋だよな……」

そう、見事なくらい普通のラーメン屋なのである。

「本当にいるのか……?」

そんな疑問を抱きつつ、入り口の引き戸に手をかける。
木製で、少し湿った感じの引き戸は、軽く力を込めると軋む音を
立てながらゆっくりと開いた。

「ごめんください、っと……」

暖簾をくぐり、店内に足を踏み入れる。

がらんとした店内には人一人おらず、これまたレトロな扇風機や
古臭いブラウン管のテレビ、更には週刊誌や少し古めなビールのポ
スターなどが目についた。

しかしそんな古臭い内装にしては意外に中は綺麗だ、これもメン
テナンスの影響だろうか……

そんな事を考えていた時だった。

「あーいらっしやいませー!!」

「っ!?!?」

いきなり店内に響き渡ったその威勢のいい声に自らの体がびくつ
と跳ねる。

そして俺は恐る恐る声のした方向へ振り向いて

「うわあ！お客さんなんて久しぶりだなあ！」

……そこにいたのは、やけに目をきらきらとさせた一人の少年だった。

歳は14〜15歳といったところだろうか、その幼い顔立ちや小柄な体躯のせいか更に2、3歳は下に見える。

黒い前掛けに黒いバンダナ、いかにもラーメン屋の店員と言った感じである。

こいつが舞の言っていた料理人だろうか……

「舞の紹介を受けてきたんだが……いいのか？」

「ええ！勿論タダですから！ささ、適当な席に腰をかけてください！」

どうやら俺の推測は当たっていたらしく、少年は心底嬉しそうにニコニコと微笑みながら空いた席へと案内する。

もともと、どの席も空席だったのだが

「……じゃあ俺はここで」

俺はカウンター席の右から三番目を選択

そして、多少戸惑いがちにその席に腰を掛けた。

テーブルの上にはラー油や胡椒などの調味料、数本の割り箸
しかしメニューのようなものは見当たらない

「うちのメニューはラーメン、チャーシューメン、味噌ラーメンの
三つです！お冷はご自由、ラーメンの方は大盛りは勿論、替え玉、
ニンニクチャーシュー野菜などのトッピング増しも指定できますの

で！」

「おお、なかなか本格的だな」

タダって言うぐらいだからてつきりもつとこ身内同士の軽いノリでやってるとばかり思っていたが、案外ちゃんとしているようだ……とりあえず最初から捻った物を注文する必要もないだろう、俺が選んだのは「ラーメン」無難なところである。

「かしこまりました！では少々お待ちください！」

少年はテーブルの上に水の入ったコップを置くと、足取りも軽く厨房へと消えていった。

残された俺は手元のコップを取り、一口分の水を口に含む

ちなみに舞の説明によると、あの少年の名は？内ヶ谷ウチガタ陸？

プレイヤーでありながら戦う事を拒み、ひたすら無人なこの世界で一人この店を切り盛りしているらしい

所持プレートについては詳しくは聞いていないが、舞曰く戦闘向きのプレートではないのだそうだ

とか言っている内にも食欲をそそるいい感じの匂いがしてきた……目いっぱい腹を空かせているところであつつりとラーメン、夢と唾液が広がりがまくりだ

と、そんな時だった

ガラッ

「……ん？」

不意に入り口の引き戸が音を立てて開く
誰だろうか、と素朴な疑問を覚え振り返る。

そこにいたのは乱れた制服で、片手に紙パックの林檎ジュースを
持った見覚えのある少女

「あ」

「あ」

視線が合う

丁度暖簾をくぐった辺りでこちらを見つめ硬直する少女

そう、彼女は数日前に学校を襲撃した二人の内の一人 尾羽梨
真紀だった

「お、久しぶり」

「てっ、てめえ……!？」

こっちは軽く無難な挨拶を試みるが、尾羽梨は慌てた様子で臨
戦態勢を取り、こちらを睨みつけて言った。

「ここで会ったが百年目だ！幸いここは飲食店、湿度は十分……！
アタシの強化された？ブルー・グラウンド？でブルーチーズにして
やんよ……！」

尾羽梨はそれほど広くない店内でそう叫び、制服の胸ポケットか
らプレートを取り出そうとして、そこで

ぐう

尾羽梨の腹の虫が鳴いた。

「……」

胸ポケットの中のプレートに手をかけた体勢のまま顔を真っ赤にして固まる尾羽梨を、俺は椅子に腰を掛けたまま無言で見つめる。それからしばしの沈黙が続いて、厨房の奥から出てきた内ヶ谷がその沈黙を破った。

「う、うわあ！一日に二人お客さんが！ごごご注文はどうします！？」

嬉しさの余り言葉がバグってしまったている内ヶ谷の問いかけに、尾羽梨は真っ赤な顔で露骨に目を逸らせながら俺の隣の席に座ると、消え入りそうな声で「ラーメンで……」と言葉を發した。

「は、はい！じゃあ少々お待ちくださいね！」

内ヶ谷は尾羽梨のテーブルにお冷を置くのも忘れ、大急ぎで奥の厨房へと舞い戻る。

「……仕方ねえだろ……最近コンビニ弁当ばかりで飽き飽きしてて……ぶらぶらしてたらここから良い匂いがしてきたんだからよ……」

それから再び何とも言えない微妙な雰囲気が始めた頃、尾羽梨が首から上だけをこちらとは真逆の方向へ向けながらそう呟いた。俺は別に何も言っていないんだが……よほど恥ずかしかったのだろう。耳の先まで真っ赤になっているせいで後ろからでも分かる。

「まあ……あんまり気にするな……」

そんな曖昧な感じの言葉をかけ、コップの中の水をまた一口だけ口に含む

……うん、超気まずい、何だコレ

尾羽梨は相変わらず頼杖をつきながら明後日の方向を向いて押し黙り、俺は無駄にちびちびと水を飲みながら厨房の奥から聞こえてくる食欲をそそる音に耳を傾けている。

張り詰めた空気の中で、俺は尾羽梨に何と話しかけようか思考を張り巡らす。

こんな空気の中で飯を食うなんて御免だ、何か……何か良い話題はないものか……

と、そんな事に頭を捻っているとき意外にも尾羽梨が先に口を開いた
「……そっぴやまだ聞いてなかったことがある」

尾羽梨はそっぴ話を切り出してようやくこちらに振り向き、続けた

「……あの時、どうして私を助けたんだ」

尾羽梨が真剣な表情でそっぴ問いかける。

対して俺は、水の入ったコップを片手にしながらその問いかけに答えた。

「別に意味なんてないね、ただ目の前で死なれるのは胸糞悪いからああしただけだよ、土倉だって助けられるなら助けてたさ」

「……アタシはお前を殺そうとしたんだぞ」

「だから何だ、俺は死んでないし今もピンピンしてラーメンを食いに來てる。それに尾羽梨、お前人を殺したことなんてないだろ」

そう即答して、俺はコップをテーブルの上に置く

「へえ、どうしてそう思う？」

尾羽梨が興味深そうに聞き返す。

「美波と比べてみれば誰だってすぐ分かる

お前、自分では気付いてなかったろうけど、バットを持つ手がずっと震えてたぞ」

「あー……情けねえなあ……」

尾羽梨が右手で顔を隠して言った。

「……でもアタシ自身が直接手を出さなくたって土倉がプレイヤーを殺すところをアタシは黙って見てただぜ？これって自分で殺すより酷いとは思っけどな」

「お前の価値観なんて知るか、さっきから言ってるだろ、俺はどんなクズでも助けられる奴なら助けるって」

「……まるで仏様だな、てめえは……」

尾羽梨が呟くようにそう言って、しばし口を閉ざす

「……ありがとう」

「えっ？」

尾羽梨の最後の一言が上手く聞き取れずに、俺はそう聞き返す
そして俺が聞き返したのと、厨房の奥から満面の笑みを浮かべた
少年が両手に二つの器を持って現れたのは、ほぼ同時だった

「はい！お待たせしましたラーメン2つ！熱いのでゆっくり食べて
ください！」

「お、早いな！」

俺は尾羽梨が何を言っていたのか聞き返した事も忘れ、手元の箸
立てから割り箸を一本取り出し二つに割る。

尾羽梨も何故か顔を真っ赤に染め、続いて割り箸を手取る。

「はい、どうぞー！」

そして内ヶ谷により、カウンターのの上に湯気を立てる二つの器が
置かれ……

次の瞬間、俺たちはまるで石にでもなっただかのように動きを
止めた。

目の前に置かれたのはラーメン、ラーメンには違いない
しかし問題はその圧倒的ボリューム

ただでさえ大きな器に満ちるスープと、さながらチヨモランマの
ようにそびえ立つ野菜のタワー

強烈なニンニク臭に、スープに浮き上がった光り輝く油

更に追い打ちをかけるように器の内側に沿って並んだ親指ほどの

厚さもあるチャーシュー×3

まず率直な感想

「どっやって食べるんだよこれ……」

内ヶ谷がスキップしながら厨房へ消えた後、俺と尾羽梨の心の声が見事に重なった。

ここはロスト学園サーバーDエリアに位置するとあるホテルのロビー

赤いカーペットに大理石の柱、天井を見上げればいかにもと言った感じのシャンデリア

どこからともなく流れてくるのは落ち着いたクラシックのBGM
窓から見える風景には整えられた庭に、その中心で吹き上げる噴水

豪華絢爛

その四文字の漢字がぴったりと当てはまるそんな空間に、三つの影があった。

「なあ姉御！そろそろ良いんじゃないかい！」

影の一つが落ち着きのない様子で、ソファに背中を預けて静かに葉巻を吸う人物に向かって言った。

「少佐　と呼べと何度言ったら分かる」

葉巻を啜えたその人物は口から白い煙を吐き出し、半ば諦めたような口調で静かにそう言っ、その場から立ち上がる。

「行くのですか、少佐」

最後に残った人物が、無感情ともとれる口調で問いかける
すると葉巻を手にした人物は足を止めず静かに、しかしはっきりと言った

「　反乱分子は全て粉碎する、我ら？インペリア？の目的のためにもな」

イベント？40 「アウトブレイク・オブ・ウォー」

ゆっくりと瞼を押し上げる。

ぼやけた視界を支配していたのは真っ白で無機質な一枚の板

それを認識してしばらくしてから俺はそれが天井だという事に気が付く

ゆっくりと体に感覚が戻ってくる。

自分の全身を包み込んでいたのは冷たくて硬い真っ白な、ベッド
柔らかな風が吹き抜け、風になびく白いカーテンが視界の隅に割り込んだ

俺は布団を除けて気だるげに上半身を起こす。

良く見てみると腕には何本かの管が繋がっており、自分の服はどこか見覚えのある薄い生地の変な物に変わっていた。

頭の中にはまるで靄がかかってしまったかのように思考がはつきりしない

……どれくらいの時間が経っただろうか

不意に、自分が右手で何かを握っていることに気付く

固くて四角くてひんやりとした、金属質な何か

その金属質な何かを胸元まで持ってくる。

それは二つ折りになった携帯電話だった。

俺は何気なく二つ折りになった携帯を開き、画面を見てみる。

すると縦長の液晶の端には無機質な文字で「新着メール94件」
の表記

びしりと音を立て、ひとりでに携帯に亀裂が入る。

空がどす黒い赤に染まり、ガラスは割れ、壁や天井は表面がぼろぼろと剥がれ落ちる。

前触れもなく鼻孔をつく胃の中の物全てを吐瀉してしまいそうな異臭、まるで泥のように生暖かくどろりとした空気が全身を包み込む

世界が壊れていった。

目が覚めた時、俺は暗闇の中にいた。

暗闇に目を慣らしていく内、次第に視界が鮮明になっていく
それにしても背中が痛い、どうやら俺は床の上で寝ているようだ
開かれた窓から月明かりが差し込み、同時に吹き込んだ肌寒い風
が俺の意識の覚醒を促す。

そこで俺は初めて、自らの腹部にかかるなんらかの圧力に気付かされた。

「……………」

頭に疑問符を浮かべつつ、仰向けの状態のまま慎重に首から上だけを起こして状況の確認

視線の先にあったのは、俺の腹をまるで丁度いい枕か何かのように独占し、すーすーと寝息を立てる高島千尋の姿だった。

よく辺りを見回してみるとソファの上で寝転がる美波と机に突っ伏して死んだように眠る圭吾の姿も確認できる。

更に皆は共通して、テレビの前に設置されたハードから伸びるコントロールを握っていた。

そうだ、思い出した。

確か俺たちは数刻前、唐突に圭吾が「ハロウィンやろう！」とか言いだったのでハロウィンっぽい事をやろうとしたのだが、いまいちハロウィンっぽい事が思いつかなかったので美波と千尋と圭吾、加えて俺で某電鉄ゲーム99年プレイに挑戦していたのだった。

で、結局50年目辺りからの記憶が無い

この状況から察するに全員そこで力尽きて眠ってしまったんだろう

と、状況分析も終わったところで……とりあえず喉が渴いた。

ここらでひとまず校舎一階にある自販機で缶ジュースの一つでもゲットして、ぐいっと飲み干したいところだ

問題は俺の腹の上で気持ちよさそうに眠るこいつをどうするか……

何気なく千尋の顔を覗き込む

普段騒がしい分、大人しく寝息を立てている千尋の姿はどこか新鮮だ

しかしそれよりも意外だったのは黙っている時の方が普段よりずっと幼く見えるという事

千尋には絶対に言えないがこうして見ていると小学生の高学年くらいにしか見えない、間違っても高校生などとは思えないだろうだが、いくら外見ロリでも女子は女子

さすがにいつまでもこのように俺の腹を低反発枕のように使われでは色々と困る。

なので俺は片手で千尋の頭を掴み、ゆっくりと体を横にずらして

……

「ふあ……それは私が初めに目を付けたマグロです……引退前のおやつさんに寿司を……」

……色々と突っ込みどころ満載の寝言だがこの際スルー

俺は気にせず千尋の頭をゆっくりと押し出そうと力を込め……

「ああっ！最高級のツナ缶なんて許しませんよ！」

「なんぞ！！？」

突如千尋が最早寝言とは思えないレベルの音量で叫びながら俺の体をつちりとホールドし、決して離すまいと力を込める。

その予想外の動きに俺は一瞬ビクッリしすぎて動きを止めてしまったが、すぐに我に返り千尋を引っぺがそうと腕に力を込めて押し出した。

が、自分より一回りも二回りも小さいはずの少女はビクともしない
それどころかそんな事を行っている間にも自分の体は締め付けられ
れていく

「いだだだだだだ！！」

「さあ観念してください！貴方は軍艦巻きの上でコーンを添えられる運命なんです！」

「寿司ってそつちかよ！？」

そつツッコミはするが千尋に手を緩める気配はなく、ましてや目を覚ます様子もない

腹部を圧迫するその馬鹿力に苦しみ悶えながら千尋の顔に目をや

るところには何故か満足げな表情が
そこで俺の堪忍袋が破裂した

「痛いっつってんだらう……ソイヤッ!!」

全身に力を込め、体を捻って左方向に回転

それにより俺とタイル床の間にサンドされた千尋は「みぎゅ」と
か短い呻き声をあげて、ようやく俺の背中に回した腕を解いた

「はあ……はあ……」

「な、なんですか……?」

千尋がまだ上手く状況を把握できていないと言った様子で後頭部
を押さえながらうつすらと目を開ける

「それはこっちの台詞だこの野郎」

俺はそう言って立ち上がり、一人涙目でうずくまる千尋を尻目に
踵を返した

「あれ?どこか行くんですか?」

「ちょっと一階の自販機までジュース買いに行ってくるだけだ、そ
れから部室のシャワーで汗を流して自分の部屋に戻って二度寝」

「あ、それ私も行きます!」

背後からぱたぱたと千尋の駆けてくる音が聞こえてくる。

特についてこられて困る理由もないので、俺は千尋を連れて中央

階段まで向かい、緩やかな足取りで階段を降りていく

ここは三階で自販機は一階の玄関前、この道のりは案外短く、得意げに先程のゲームについて自慢する千尋に適当な相槌を二三返した頃、俺たちはすでに目的地までたどり着いていた。

「何にしましょうかねー」

美波は暗闇の中でぼうつと妖しく光を放つ自販機の前に立ち、せわしなく視線を動かす。

「うーん……いちごオレ……いややっぱりオレンジジュース……」

……これはしばらく決まらなそうだな

そう思いつつ、俺は隣の自販機のボタンを軽く押し、少し遅れて自販機から一本のペットボトルが吐き出される。

俺が選んだのは無難に緑茶、腰を屈めてそれを手に取り、蓋に力を込めながら壁に背をもたれかけさせた。

……ふと思った。

自販機のジュースがタダ、それは元の世界では考えられなかったことだ

しかし最近では以前感じていた違和感が段々と薄れてきている。

そりゃあこの世界に来てからもう一ヶ月近くも経っているのだ、慣れというものがあったもおかしくはない

……でも何だろう、やけにすんなりする気がする。

おおよそ十数年以上生きた世界で積み重ねてきた常識がただの一ヶ月で無かったことになる……何かがおかしい

なんというかまるで本当に重要な物が抜け落ちているような……

「……考え過ぎか」

俺がそう呟いたのと、ペットボトルの蓋が開いたのはほぼ同時だった。

そうだ、そんな事を気にしていても仕方がない
この世界で生きていく以上、いつかは？ 当たり前？ になる事なのだ

そう結論づけ、俺はペットボトルの口を啜え込み少し傾けて中身を喉の奥に流し込む

そして何気なく半開きになった正面玄関の扉へ視線を向けた。

その時だった

「ん………？」

視界に入ったソレを目を凝らして見つめる。

最初は見間違いか何かだと思った。

だが間違いはない、校舎正門前、何かが、いる

「………？」

更に目を細めて、ソレに意識を集中

ソレは校舎正門に寄りかかるようにして自重を預けている

直後、まるでタイミングを見計らっていたかのように雲の切れ目から月の光が差し込み、その何かを照らし出した

「は………？」

全身の血が凍る

頭の中が真っ白になる

体中から力が抜け、右手から滑り落ちたペットボトルが音を立てて床の上に緑色の液体をぶちまけた

何故なら視線の先にあつたその何か
それが、薄グレー色の制服と淡い金髪をとどころ赤黒く染め、
力なく寄りかかる畝畑舞の姿だったから

「ッ!」

声に出すよりも先に、俺はその場から一心不乱に走り出す
半開きになつた扉を強引に開け放ち、何度も躓きそうになりなが
ら、ただひたすらに
そして俺は息を荒くする憔悴しきつた舞の前で屈み、そこで初め
て舞の名を呼んだ

「は……八伏さん……」

喉から絞り出したようなかすれた声、とりあえずは息があること
に安堵するが、この傷つき方は普通ではない
ところどころ破けた制服、額から流れる鮮やかな赤い液体、目に
見える箇所だけでも数え切れないほどの打撲傷、擦過傷
右腕に違和感　骨が折れている。

「気にしないでください……少し怪我をしただけです……」

「ッ……!こんな怪我があるか!」

こんな大怪我で本人も辛いはずなのに舞はいつも通りの微笑みを
浮かべようとしますが、代わりに出てきたのは今にも消え入りそうな
弱々しい笑み、無理矢理すぎる強がりだ

それにしても出血が酷すぎる。このままでは危険な状態だとい
うのは素人の俺の目から見ても明らかだ

まずは誰かを呼ばなくば……！

俺は制服の胸ポケットから携帯を取り出し、教室にいる美波にコールをかけようと着信履歴を開く

それとほぼ同時だった。

学校の向かいにあった建造物が音を立てて崩れ、そこから数メートルを超える巨大な影が現れたのは

「なっ　！？」

二階建ての建造物をまるで積み木か何かのように壊し、現れたソレは生物と呼んでいいかも怪しい禍々しい物体だった。

見上げる程に巨大なその体軀を二本の足で支え、腕をだらんと垂らし、まるで死人のような動きでゆらゆらとこちらへ向かって歩いてくる黒一色の巨人

顔には目鼻などといったパーツはなく、ただ力なく開いた大きな口だけが目を引く

形こそ人の形を保っているが、生氣などと言ったものはおおよそ皆無

レベル2ルーザーだ

「クッソこんな時にっ！！」

この世界に来た日から一ヶ月以上見ていなかったのに何でこんな時に限って！

いや、もしや舞に怪我を負わせたのはこいつ

「　　八伏先輩！！伏せてくださいっ！！」

後方から響き渡る聞き慣れた声

俺は反射的に体を伏せ、同時に俺の頭上を弾丸のように一人の少女が駆けていく

そして少女は岩石のように硬質化した腕で、レベル2ルーザーの足に拳を叩き込んだ

ルーザーの大木の幹のような足が弾かれ、僅かだがレベル2ルーザーがバランスを崩す。

しかしそれはあまりダメージになっていなかったらしく、レベル2ルーザーはすぐに体勢を取り直し、再び進行を開始しようと一歩踏み出す。

「八伏先輩!! 畝畑先輩を連れて早く逃げてください!!」

全身にまるで爬虫類のような鱗を纏い叫ぶのは、案の定先程まで自販機の前で迷っていた高島千尋

「恩に着る!!」

俺はぐったりとした舞の腕を肩に回し、なんとか立ち上がらせようと力を込める。

しかし力なく頂垂れた舞の体は予想以上に重く、なかなか上手くいかない

更に今は千尋がレベル2ルーザーを抑えてくれてはいるが、肝心のレベル2ルーザーには大したダメージにはなっていない

このままでは千尋のエネルギー切れが先だ、だからこそ俺がここで意地を見せねば

「うぐおおおおおおおおお!!」

全身の力を振り絞り、なんとか舞を立たせる

「八伏先輩早く！こちらももう限界です！！」

千尋の動きが鈍くなり始め、それに伴いルーザーの進行も早くなる。

俺は無言で頷き、そのまま舞を引きずるような形で踏み出そうとする。

その時、不意に舞が消え入りそうな声で、こう言った

「八伏さん……本当の敵は……」

そして、舞が全てを言い終える前にソレは起こった。

まるで全力で投げ放たれた鉄塊をぶつけたかのような凄まじい打撃音

そんな凄まじい打撃音に先んじて、千尋の攻撃でビクともしなかったレベル2ルーザーの巨大な体が大きく傾く

驚愕する俺たちを余所に、小さな影がレベル2ルーザーの頭部付近から地面に飛び降りた。

そして影は俊敏な動きで、大きく傾きそのまま地面に倒れ込もうとするレベル2ルーザーの真下に回り込み

「くるみ、アッパーツ！！」

影がおおよそこの状況にそぐわない場違いなセリフを叫びながら自らの頭上に迫ったレベル2ルーザーの頭部目掛けて拳を突き出し、そして 粉碎した

「な……！！！？」

俺と千尋が驚愕の声をあげる。

少し遅れて周囲にルーザーのゼリー状の肉片が降り注ぎ、首から上のなくなつたレベル2ルーザーの巨体が轟音を立ててアスファルトの地面に沈む

そしてその影は最早ピクリとも動かなくなつたレベル2ルーザーを一瞥し、満面の笑みを浮かべてこちらに振り返つた。

長く伸びた茶髪と、頭頂部から飛び出た二本のアホ毛

安っぽいTシャツには豊満なバスの形がくつきりと浮かび上がつており、紺色のジーンズは引き締まつた脚の形を強調する

腰に手を当て仁王立ちをしていたその影は右膝を曲げ右足を宙に浮かせると、ジーンズ越しに右太腿から一枚の金属質な板を吐き出し、それを空中でキャッチ

「アタイの名前は？^{フナサガ}船坂 くるみ（クルミ）？インペリアメンバー肉弾戦担当、階級は？軍曹？」

くるみと名乗つた影、もとい少女が俺たちに向かつてそう告げ、そしてまるで旧友に向けるかのような眩しげな笑顔で、言った

「戦争、始めようか！」

イベント？41 「ザ・ストロンゲスト・アーミー・1st」

「戦争、始めようか！」

頬を撫でる肌寒い空気、月明かりが照らす人気がない寂しげな街路
船坂くるみと名乗った女性は、今はもう動かなくなった巨人を背
に満面の笑みを浮かべ間違いないと言った。

普段の俺なら突如現れたコイツに対し痛い子とか適当な感想を抱
くことで自己解決するのだろう

しかし違った。

月の光を帯びそこに佇む一人の女性に、俺は今明確な恐怖を感じ
ている。

底知れない畏怖、嫌悪、足が動かない、体の奥で震えが止まらな
い、本能が警告する。その危険さを

「くるみ……さん……！？」

ドラゴンのプレートにより全身に鱗を逆立てた千尋が驚愕の声を
上げる。

それに対して、船坂くるみはまるで旧友に向けるかのようなそん
な親しげな笑みを浮かべた。

「久しぶりだねえ千尋！ 姉御もアンタに会いたがってたよ！」

夜の静けさにはおおよそ似つかないその威勢のいい声に、千尋の
表情がこわばる。

千尋の反応から見るにこの二人は知り合い……？

「で……アンタは新入りみたいだねえ、強い奴なら大歓迎だよ！」

船坂くるみは千尋から俺に視線を移し、この緊迫とした空気の中、腰に手を当て堂々とした態度でそう言っただけのける。

そしてそれとほぼ同時に、くるみの背後でピクリとも動かなかった筈のレベル2ルーザーがゆっくりと起き上がった。

先程くるみの一撃を受け粉々になった頭部の破片を汚くアスファルトの地面に零しながら、ゆらゆらとその巨体を揺らして、まるでゾンビのように

「ボゴゴゴボゴゴボボッ」

レベル2ルーザーの首の断面がぼこぼここと不快な音を立てて黒いあぶくを吐き出す。

顔がないせいで表情は分からないが、それでもこれだけは分かった。

レベル2ルーザーの標的が目の前で自らに背を向ける少女に定まったという事が

「ボゴゴッ」

レベル2ルーザーの断面がより一層激しく泡立ち、ルーザーはその丸太よりも太い腕で大きく薙ぎ払った。

先程の緩慢な動きからは考えられないほどの速度で振るわれたルーザーの腕は、アスファルトの地面をめくりあげ、背中を晒したくするみに迫る。

しかし、意外にもくるみは背を向けたままこれを避けようとすらしなかった。

「なっ!？」

思わず驚愕の声が漏れる。

今のくるみはプレートを排出し、完全なる無防備な状態にも関わらずその場に佇むくるみは微動だにしない

ただ、粉塵を巻き上げながら迫るその腕がもう手の届く位置まで迫った時、あるうことかくるみは不敵に笑い、高らかに声を上げた

「オーケー！ やっっちゃっていいよアリシア！」

その謎の合図とともに遙か遠くから数回程鳴り響く乾いた音、遅れて夜の闇から無数の何かが飛び出した。

暗闇より放たれたその何かは空中で月の光を反射させながら高速でその身を回転させ、まるで引き寄せられるようにレベル2レーザーの体へ向かっていく

そしてレーザーの腕がくるみに到達する寸前、レーザーは全身に無数の風穴を開けた。

「ゴボ」

全身に数え切れないほどの小さな穴を空けたレーザーが動きを止める。

指一本が楽に入ってしまったいそうなその穴から、まるでワインの栓を抜いたかのようにどす黒くてどろりとした液体がとめどなく溢れ出し、再びレーザーはアスファルトの地面へと沈んだ

「んー、やっぱりレーザー相手じゃ張り合いがないねえ、アリシアもそう思うだろ？」

『何が張り合いがない、ですか、面倒な事ばかり私に押し付けて』

ザザツ、とノイズ混じりの音を立て、くるみの腰に提げられた無骨な鉄の塊から女性の声が発せられる。

声質がかなり若い事から10代後半から20代前半だということが予想できるが、その声の主は360°どこを見回しても見当たらない

そんな様子に気付いたのか、くるみはにつこりと笑って口を開いた。

「ああ、こいつアリシアって言ってね！ プレート名は透過殺害？ スルース・キル？」

「なんで勝手に人の能力明かすんですか……」

その機械の向こう側で女性がため息交じりに言う

「まあいいですけど……では改めて自己紹介させてもらいます。私は？ アリシア・ハリソン？ インペリアメンバー狙撃手担当、階級は？ 曹長？」

……またインペリアの単語

前回削除人の言っていたインペリア

そしてインペリアのメンバーを名乗る二人の人物

何が何だか分からない……

『それはそうとくるみさん、少佐が言ってましたよ？ このウォッカと葉巻がなくなったらそちらへ向かう、それまでに終わらせる？』

……と

「うげえ……姉御ボトルから直飲みなのに……ちょっと間に合うか心配になってきたよ……」

くるみが若干顔を青ざめさせて呟く

その時、不意に俺の視界の隅で千尋が動いた。

一枚一枚が岩のような硬度を誇る鱗、それを纏って肥大化した腕でいとも容易くアスファルトを削り取る。

そうすることで千尋の手に握られたのは両手で抱える程の大きさの歪な石塊

何を思ったのか、千尋はそれを躊躇なくくるみ目掛けて投げ放った

「ばっ　！」

俺の制止の声が上がったのはすでに石塊が千尋の手から離れた後塊は激しく回転しながら風を切り、まるで野球ボールさながらのスピードでくるみに飛来する。

そして一直線に飛んできた石塊は完全にこちらから注意の逸れていたくるみの無防備な頭部に　命中

石塊が鈍い音を立てて砕け、くるみは大きく体を仰け反らせる。確認なんて必要ない、普通の人間なら頭蓋骨陥没で即死に決まっ
て……

「いたた……ちょっと油断しすぎたかねえ……」

い……る……？

驚きで言葉を失う俺を余所に、くるみはまるで何事も無かったかのようにそこに佇んでいた。

避けられたとか、ガードをしたとか　そんなんじゃない

ただ、頭部に両手で抱えるほどの大きさの石塊を高速でぶつけられ、石塊は派手に砕けたにもかかわらずくるみには傷一つなかった、

それだけの事

たったそれだけのシンプルな事実が、目の前の人間離れた女性の存在を確固たるものとしたのだ

「まあ不意打ち鬨討ちも戦争の定石、とやかく言おうなんて細い神経持ち合わせちゃないし、むしろ褒められることさ、ただ……」

とん

地面を軽く小突いたようなそんな軽い音、その音と重なってくるみの体が少しだけ宙に浮きあがり、足が地から離れる。

浮き上がった体は当然重力に引かれ緩やかに落下し、着地のショックをその柔軟な筋肉で受け止めて……

そこで、途切れた

「えっ……?」

一瞬自分の目を疑った。

くるみと俺たちの距離は少なくとも10m前後は離れていた、少なくとも俺が見た時は

それなのに、なんで……

なんでくるみが？俺の後方で身構えていた千尋の前に立っている？

「相手が悪かったね！」

くるみが大きく拳を振りかぶる。

その拳はさながら鉄球

そして、くるみは満面の笑みを浮かべたまま、その拳を千尋が先程やったように躊躇いなく千尋の顔面に叩き込んだ

ドラゴンのプレートによって反射神経、運動能力、耐久力その他諸々が飛躍的に跳ね上がったはずの千尋は、その拳を避けることもガードすることもできずに真正面から直撃ぐしゃり、と嫌な音の後、大きく後ろに傾いた千尋の体は地に叩き付けられ、鱗を纏う事で重量感の増した体が大きく跳ねた。

「……………あ……………！」

強制的に夜空を見上げる形となった千尋が口から赤い液体を吐き出す。

同時に固まっていた思考がやっと溶け始める。

あの瞬間、宙に浮いたくるみは着地と同時に脚の筋肉を伸縮

そして筋肉が最も稼働しやすい状態で大きく地面を蹴り、ロケットスタート

目にもとまらぬ速さで俺のそばを駆け抜けていったくるみの姿を俺は間違はなく半ば反射的に目で追っていた。

しかし、そのあまりにも非現実的な速さに理解がついてこれず、まるでそこから消えてここに現れたかのように錯覚

そして意識の隙間に潜り込んだくるみは、そのまま助走をつけて目にも止まらぬ右ストレートを放ち、その結果が目の前で口の端を血で汚し、目を見開いて苦しみ悶える千尋の姿なのだ

ようやく理解が追いついた。

「船坂アアーーーーッ！」

俺の怒りに任せた咆哮に、返り血を浴びてところどころを赤く染めた船坂くるみが無邪気な笑みでこちらに振り返る。

「なんだ、やる気になったのかい？ だつたら戦争だ！」

振り向きざまに右拳を振りかぶり、そのままくるみの顔面に拳を放つ

「遅い遅い！ 蚊だつてもっと早く動くよ！」

当たらない

渾身の拳がごとごとく躲され空を切る。

「くつ ！！」

拳が当たらないなら蹴りだ

俺は右足を大きく振り上げ、くるみの首筋を狙って上段蹴り

しかしそれも素早く腰を落としたくるみに軽々と躲され、またしても右足は空を切る。

「その根性は気に入った！ アリシア！ 私がこの新入りを倒すまでスルース・キルは使わないでくれよ！」

『……分かりました、その代わりさっさと終わらせてくださいね、私まで少佐に怒られたくはありませんので』

再びくるみが腰に提げた無骨な鉄の塊から声が発せられ、それきり機械から漏れ出していたノイズ音が消えた。

くるみはそれを確認すると、右足の上段蹴りを盛大に外し体勢の崩れた俺に狙いを定める。

くるみの攻撃は非常に単純だった。

腰を低く落とし、地面を踏みしめ、がら空きの俺の腹部に力強く握った拳で正拳突き

別に腕が伸びたりとか、拳に炎を纏ったりとか、そんなファンタジーな事はしていない

ただ拳を突き出し、殴る。

それだけの行為が俺の中に、まるで心臓をそのまま鷲掴みにされたかのような感覚を呼び覚ました。

「くるみ、パンチ！」

少女の威勢のいい掛け声の直後、俺を最初に襲ったのは痛みではなく、浮遊感だった。

たった一撃の、しかも女子のパンチで標準的な男子高校生である俺の体が宙に浮いている。

そして空中で初めて、意識を霞ませるほどの鈍痛が襲い掛かった。

「がっ……！？」

くの字に折れ曲がった俺の体が地面に叩き付けられる。

しかし、落下の衝撃による痛みを全て無かったことにしてしまうほどくるみの拳は重く、鋭く、そして決定的だった

腹部を中心に全身を駆け抜けるその痛みに、頭の中を全て真っ白に塗り潰されそうになる。

「あちゃー……力の加減間違っちゃったかねえ、やっぱり力を抑えて戦うのは性に合わないよ」

くるみがそんな？バカげた？事を言いながらこちらに歩み寄ってくる。

俺はまだしもプレート使用中の千尋をプレート未使用のまま殴り倒す、これでまだ力を抑えているなんてどんな化け物だ

……だが相手が化け物ならばこちらにも考えがある。

「この際女だろつが遠慮なくやらせてもらつ……！俺は男女平等主義者なんだ……！」

うづくまつた状態で胸ポケットからディ・コンポーザーのプレートを取り出し、それを左手の甲に当てる。

プレートは手の上で液体のようにどろどろと溶け出し、肌から体内へと取り込まれていく

「おお、まだ反撃するのかい！ いいねいいね！ 使える策は全部使った方がよいよ！」

くるみのそれは嫌味などではなく、見たことも無い敵の見たことも無い能力に対する純粹な期待から出た言葉

それと同時に俺の左手に完全にプレートが溶け込み、手の甲に数字の1が刻まれる。

余裕をかましてられるのもそこまでだ

！

「分解！」

「おっ？」

その一言で、くるみの足元の地面が粒になって弾け飛び、足場を失ったくるみが体勢を崩す。

そして俺はすかさず立ち上がり、その無防備なくなるみの顔面に一発決めてやろうと拳を振りかぶり

「よっつと」

しかし、拳は空を切った。

くるみは拳が顔面に到達する寸前、まるで体操選手のような動きで崩れた体勢から大きく上半身を後ろに仰け反らせ、バク転
そして、華麗に着地した。

「なっ……！？」

「あー悪かったね、良い作戦だったから一発くらい受けてあげようかと思っただけど条件反射でさ、つい避けちまった」

くるみが人差し指でぱりぱりと頬を搔く

？つい？

そんな一言で片付けられてしまう程、アイツは俺の攻撃を容易く避けた。

やっぱりこいつ……普通じゃない……！

「　　ったく、世話焼かせるわね」

不意に聞こえた聞き覚えのあるその不機嫌そうな声

そしてその声の主は俺が振り返る間もなく背後から俺の傍を駆け抜けて、くるみの側頭部に上段回し蹴り

「なっ！」

風を裂くようなその蹴りはくるみの片腕で防がれてしまったが、それでもそいつは追撃をやめない

先制の蹴りが防がれたその後は前足蹴り、カポエラキック、ホースキック、後ろ回し蹴りと、蹴りの応酬

それらの蹴りは全てくるみに防がれてしまったが、それでも今までに比べればいくらかのダメージを与えられたようで、若干くるみが怯んだ

ひとしきり蹴りをかました後で、その声の主は一旦後退し俺の隣に立ち、言った

「全く、折角気持ちよく寝てたのにあんたらが外で派手に格ゲーなんてやるもんだから目が覚めちゃったじゃない」

その声の主は、茶髪混じりのショートカットを風に揺らしながら不愛想な表情を浮かべる水ヶ沢美波

「へい！俺もいるぜ！」

そして遅れて俺の隣に立ったのは、こんな状況だというのに相変わらずテンションの高い男子高生、伊勢圭吾

「つうー……痛いです……」

最後に、持ち前の頑丈さでようやくくるみの攻撃で受けたダメージを回復した高島千尋

舞は……さすがに動けそうにないが、
ともかくこれで全員集合だ

「くうー！面白くなってきたねえ！さあ全力で」

くるみが心の底からの笑みを顔に浮かべて、すう、と息を吸い込み、そして吐き出した

「戦争をしよう！」

イベント？42 「ザ・ストロンゲスト・アーミー・2nd」

数少ない街灯だけが照らす漆黒の闇

その中でひとときわ目立つ激しく燃え盛る橙色の炎が美波の右脚を覆う

炎は不思議なことに脚以外の場所には燃え移らず、まるでそこに固定されているかのように留まり、尚且つ不規則に揺れていた。

そんな幻想的な光景に思わず見入ってしまう俺などお構いなしと言った様子で美波が強く地面を蹴って走り出す。

美波の鋭い視線が捉えているのは、いかにも嬉しそうな表情で佇む船坂くるみだった。

「はっ！」

船坂くるみが十分自分の間合いに入ったその瞬間、美波は炎を纏っていない右足で大地を踏みしめ、燃え盛る左脚を大きく振り上げホースキック

美波の左脚が流麗な炎の軌跡を描き、くるみのこめかみに迫る。

しかしくるみはその燃え盛る美波の脚を避けようともしない

「なっ　　！？」

美波の口から驚愕の声が漏れる。

その反応は当然だ、美波の操れる炎は最大3000、これはバーナーの発する炎と大体同じくらいの温度

それをマトモに喰らえばどうなるか、そんなのは小学生だって分かる。

なのに何故くるみはそれを避けようとしなかったのか、それはすぐに明らかになった。

「くるみ、パーンチ！」

美波の蹴りが命中する寸前、くるみは常人離れした瞬発力で体を捻り、拳を突き出した。

狙いは美波の突き出した右脚

「ッ！」

それをいち早く察知した美波は振り上げた足を空中で止め、素早くそれを後ろに引こうとする。

しかしそれは美波の驚異的な反射神経をもつてしても間に合わなかった。

くるみの握り締めた拳が躊躇いもなく燃え盛る美波の脚に叩き込まれる。

鈍い嫌な音が鳴り響き、美波の右足が大きく弾かれた。

「ッ！」

美波は苦痛に顔を歪め、くるみの殴打による衝撃で地面を滑る。

あの時途中で止めていなければ美波の脚は確実に折られていただろう

「あつちい……」

くるみは最早美波の事など目にもかけずに殴った方の拳をひらひらと振って息を吹きかける。

力任せのパンチで炎に拳が焼かれるよりも先に拳で脚を弾く

無茶苦茶だ

「リベンジですよ！くるみさん！」

先程の攻防から息をつく間もなくドラゴンのプレートにより体の各所に鱗を纏った千尋が弾丸のように飛び出す。

美波のように技で攻めず、ただ真正面から突っ込んで、鱗が集中し岩石のように硬質化した腕で殴る……シンプルな戦法だがそれゆえに強力、常人なら一撃で致命傷

それでもくるみは避けようとせず、不敵に口元を釣り上げた。

「力比べだね！受けて立つよ！」

くるみは大きく拳を振りかぶり、向かってくる千尋に狙いを定める。

次の瞬間、千尋の突き出した拳とくるみの突き出した拳が重なった。

二つの拳の衝突により生じた凄まじい轟音が周囲に轟き、一方の体が後方に弾かれる。

地に転がることになったのは千尋の方だった

「ぐうっ……！？」

千尋の顔が苦痛に歪み、痛みに耐えかねた声が漏れる。

千尋の腕を纏った鱗にはところどころ亀裂が走り、そこからは鮮やかな赤い液体が滴っていた。

「つうー……さすがにちょっと腕が痺れちゃったねえ……」

くるみが腕を軽く振り、そこから飛び散った少量の赤い液体が地面に染みをつくる。

しかしそれもほんの4滴か5滴、決定的ダメージとなり得ていないのは明らかだ

「ッ！」

アイコンタクトの後、美波と千尋、二人が一斉にくるみ目掛けて走り出した。

「お！ いいねいいね！ こういう少年漫画みたいな展開は大好きさ！」

こんな状況にも関わらず眩しげな笑みを浮かべるくるみ
まず初めに千尋が跳躍し右拳を振り下ろす。

くるみはそれを再び真正面から拳を叩き込み相殺、千尋が衝撃の反動でアスファルトの地面を滑る。

続けて美波の空を裂くカポエラキック

これくるみはクロスさせた両腕でなんなく防御

そしてすかさず逆さまになった美波の腹部に突き上げるようなボ
ディブロー

美波は苦しげな悲鳴をあげ、体を少し宙に浮かせる。

そこで復帰した千尋が駆け出し再び力任せに殴る。

しかし今回は拳がくるみに届くよりも早く懐へ潜り込んだくるみの右ストレートで千尋の体は宙を舞う

二対一の凄まじい攻防

拳と蹴りの応酬、防御、回避

火花が散るような激しい戦いに目を奪われる。

そう、俺と圭吾は遠目でそれを見ていることしかできなかった。

別に怖い訳じゃない、むしろ今すぐ戦いに加わりたくらいだ

しかし戦い慣れた美波や千尋が二人がかりでやっとの相手、そ

んな中に戦闘についてはド素人の俺たちが入ったところで何の意味もない、足を引っ張るだけだ
そしてもう一つ、俺や圭吾の素人目でも容易に分かることがあった。

「？こちら側が圧倒的に押されている？」

「くっ　！」

美波と千尋が苦痛に顔を歪め、ここまで後退する。

息も荒く、その体のところどころには生々しい痣の数々、出血している個所も数え切れないほどだ

「なんだいなんだい、これで終わりかい！」

対する船坂くるみは拳に多少の出血が見られる以外はほとんど無傷
それどころか疲れの色も見えやしない

「く……くるみさんは相変わらずの化け物っぷりですね……」

千尋が荒く息を吐き出しながら、そう呟く

「……千尋、お前はアイツの事を知っているのか……？ インペリアってのは何なんだ……？」

俺はくるみを見据えたまま千尋に問いかける。

怪我人に質問をするのは少し気が引けるが、その答えによって俺の行動が決まるのだ

そう自分に言い聞かせてその質問の答えを待っていると、千尋は一度息を大きく吸い込んで言った。

「……インペリアは？カチューシャ？少佐の率いる戦闘集団……誤解を承知で言えば軍隊です」

「軍隊……！？」

「ええ……メンバー全員が特殊な訓練を受けていて身体能力は勿論、プレートのレベルも他プレイヤーとは一線を画しています」

「？帝国？と銘打っているだけあって、目的のためなら自分たちに従わないプレイヤーや障害となるプレイヤーを迷いなく抹消する血も涙もない集団ですよ……」

「しかもルール無用な分だけ削除人よりも性質が悪い……くるみさんはそのメンバーの一人です」

「そんな奴らが……！」

「……ちなみに私は以前カチューシャさんとちょっと色々ありましてね……そういうことです」

千尋の顔に僅かながら寂寥の色が浮かぶ

以前千尋とそのカチューシャとかいう人物に何があったのかは分からないが、聞く限りではロクな事じゃないんだろう

……ならば話は簡単だ

「……皆、聞いてくれ」

俺はそう言っただけで臨戦態勢をとる3人の視線をこちらに集める。

そして全員の注意がこちらに向いたのを確認すると、静かに口を開いた。

「……たった今アイツを倒す方法が浮かんだ」

「……………！ 本当！？」

美波が押し殺した声でそう聞き返してくる。

「ああ……………断言しよう、この作戦は？必ず？成功する。……………普通の人間にやればオーバーキルの大技だが……………アイツなら多分死にはしないだろう」

「ど、どんな作戦だ！？」

圭吾が若干焦りを込めて口を挟む

「まずこの作戦は俺と美波が囷になってヤツの動きを少しだけ止めないと始まらない……………これさえ成功すればもう作戦は完了したも同然だ」

「わ、私！？」

「そうだ、そしてこの作戦の核は圭吾と千尋……………この二人だ」

「俺！？」

「私ですか！？」

「そう、……………で、肝心の作戦内容は……………」

ひとしきり全員を驚愕させたところで俺は声を潜め、耳を傾ける
3人に作戦内容を告げる。

説明を終えてから数秒弱の間を挟み、各々は文字通り三者三様の

反応を見せた。

しかし否定的な者は一人もない

「うーん……なんだい？ こないんだったらこっちからいくよ！」

痺れを切らしたらしく、くるみが動き始めた。

もう迷う暇すらないようだ

「よし！ 作戦開始だ！」

その合図で俺と美波はくるみに向かって駆け出し、千尋と圭吾の二人は真反対にある校舎の正面玄関へと向かう

「あ！ 逃げるのかい！」

「残念！ 相手はこっちよ！」

美波が炎を纏った右足で上段回し蹴り

こちらに背を向けて走り出す二人に気を取られていたくるみはそれによって我に返り、咄嗟に美波の脚を拳で弾いた。

「こっちもさっきのお返しだ！」

俺は地面に掌をつき、アスファルトを幾つもの玉に分解して再び手の内で再構築、丁度サッカーボール大の塊を精製した。

俺はそれをくるみの前に投げ放ち、その意図を理解した美波が即座に体勢を立て直して二度目の燃える蹴りを放つ

しかしそれはくるみ目掛けてではない、くるみの目前まで迫ったアスファルトの球体だ

「なっ　　！？」

くるみの顔に初めて驚愕の色が見える。

それもお構いなしに美波は燃え盛る脚でアスファルトの球体を蹴り砕き、炎を纏ったアスファルトの破片を飛散させた。

「くっ……」

襲い掛かる無数の炎の破片にくるみは顔を守りながらそれらを振り払う

そこが隙だった。

「やあっ！」

隙を突いた美波の蹴りが、初めてくるみの腹部に命中する。

「ッ……！！」

怯むくるみに対し、美波は続けて蹴りを放つ

「……っ！　何度も同じ手は喰らわないよ！」

くるみが拳を突き出し、美波はそれを間一髪回避して後退

それと同時に俺は再びアスファルトの地面を分解し槍の形状に再構築

力強く地面を蹴り、美波と同時に駆け出す。

まずは俺がリーチで有利なアスファルトの槍を突き出し牽制

しかしそれは当然くるみにへし折られてしまう、ここまでは予定通り

それに続いて美波の飛び蹴り、くるみはその蹴りを腕で受ける。その間に俺は再び砕けたアスファルトの破片を分解し、合成元の形を取り戻した槍で間髪を入れずに突く
これの繰り返しで時間を稼ぐ

……が、それも長くは続かなかった

「ぐっ……!!」

美波が呻き声をあげて飛びずさる。

美波は肩を上下させ、息を一つするのも苦しそうだ
さすがにもう限界か……!!

「万策尽きた、って感じだねえ!」

くるみがそう言って拳の骨をばきばきと鳴らし、一歩一歩距離を詰めてくる。

美波の疲労ももう限界だ、これ以上時間稼ぎは出来ない

その時だった

突然、何か巨大な物に月の光が遮られ、辺りに闇が広がる。
どうやら間に合ったようだ

「八伏先輩! 水ヶ沢先輩! 伏せてください!!」

頭上から聞こえる声

俺と美波と、そしてくるみはその声の元を辿る。

そこには巨大な石塊を抱え、凄まじい速度で校舎の屋上から落下してくる千尋の姿が

「おおおおお! こういつのを待ってたんだよ! いいね!
真っ向勝負!」

くるみがやたら興奮した様子で腰を低く落とし、拳を握りしめる。視線の先には当然眼前に迫る巨大な石塊

徐々に迫っていく石塊をしっかりと見据えながら、くるみは全力で拳を突き出し、くるみの拳が凹凸のある石塊に触れる。

しかし、くるみの拳がマトモに命中したに関わらず石塊は砕けない

代わりに、石塊とくるみの拳の接触面に同心円状の波紋が広がった。

「へ？」

拳を突き出したくるみがそんな間抜けな声を漏らす。

石塊は、くるみの拳での殴打による衝撃を全て吸収したのだ

そしてくるみが状況を理解する暇も与えず、石塊に無数の亀裂が走る。

「伏せる！」

俺がそう叫び、美波と俺は地に体を伏せる

直後、石塊は鼓膜を突き破るような凄まじい破碎音を立て、爆発した。

まるで時間が止まったかのようだった。

校舎屋上から落下してきた巨岩にくるみの突き上げた拳が叩き込まれたその瞬間

岩石の表面に同心円状の波紋が立ち、落下の衝撃、くるみのパンチの衝撃……それら全てを吸収した後無数の亀裂を走らせ、元の大さきの数倍まで膨張

そしてそれを確認した俺と美波が地面に体を伏せ、岩を抱えていた千尋が窓ガラスを突き破り校舎の中に飛び込んだのとそれが起こったのはほぼ同時だった。

「へ？」

直後、船坂くるみが思わず発した間抜けな声を掻き消す大爆発膨張した巨岩はまるで風船のように弾け飛び、鼓膜を突き破るかのような爆音に俺は地面に伏せたまま両手で耳を覆う

四方八方に散る岩の破片があらゆる場所に突き刺さり、凄まじい衝撃波が周囲の物を剥がし破壊し薙ぎ倒す。

時間にすればほんの数秒の出来事、しかし俺たちにはその時間が数分にも、数時間にさえも感じた。

「っ……っ」

俺が固く閉じた目を開いたのは、それが完全に終わってしばらくしてから的事だった。

宙を舞う粉塵が視界を覆い、未だ降り注ぐ微細な破片がばらばらと音を立てアスファルトの上を跳ねる。

砂塵の隙間からうつすらと見えるその様子はさながらクレーター
先程まで身で感じていた爆発が、それほど凄まじい物だったとい
う事を物語っていた。

ドラゴンのプレートで強化された千尋の腕力で学校の一部を
削り、それを圭吾のプレートZ・I・Pであらゆる衝撃を吸収する
不思議物体に変換

あとは俺と美波が足止めも兼ねて校舎の真下に誘導、そこへくる
みの頭上に不思議物体を抱えた千尋が飛び降りる。

ヤツの性格上避ける事は絶対にしない

俺の読みは見事的中し、くるみは予想通り真正面から拳を打ち込
んだ

そしてくるみのパンチを受けた不思議物体はその衝撃を吸収し圧
縮、そして解凍

これがその結果なのだが……

「一応成功するにはしたが……」

屋上から珍しく怪訝な顔を覗かせた圭吾がそう呟き、俺はそれに
続ける

「死んでないよな……？」

クレーターの中心を戸惑い気味に眺めながら俺はそう漏らした。
確かにヤツの馬鹿力やタフネスさは俺の知る？常人？を遥かに上
回っていた。

……しかしこの爆発だ

「これはもしかしなくても粉々に……」

二階の割れた窓ガラスの隙間から千尋が恐る恐る顔を覗かせ、そんな物騒な事を呟く

さすがにそれはないだろうと思うがそう言われると段々心配になつてきた……

願わくば死体でありませぬように……、そんな事を頭の中で繰り返しながら目を凝らす。

時間が経つにつれ、あれほど視界を覆っていた砂煙が徐々に晴れてゆき、砂煙の向こう側の黒い影のような物が視認できた。

とりあえず粉々ということはないようだ、その事実に対し少し安堵する。

でも、それはすぐに絶望に変わった。

「けほっけほっ……うー……口の中がじゃりじゃりする……」

砂煙の向こう側から発せられたその声に、俺は、いや恐らくその場にいた全員が一瞬にして全身の血が凍るような感覚に見舞われる。ざしざしと砂利やなんやらを踏みつけて歩くスニーカーの音、次第に大きくなる黒い影

そして彼女は向こう側から？やって来た？

「なっ……!?!?」

舞い上がった砂埃をかき分け、苦虫を噛み潰したような表情で影はこちらへ向かって歩いてくる

それはところどころが破けたTシャツとジーンズを身に纏い、頭頂部から二本のアホ毛を飛び出させた　船坂くるみだった。

「服も破けちゃったし……また姉御に叱られる……」

くるみは歩みを続けたまま、こちらの事など眼中にないと言った

様子でそんな独り言を呟く

そしてくるみはしばらくしたところで歩みを止めるところこちらに向き直り、打って変わって眩しい笑顔で言った。

「まあ動きやすくなっているね！ さあ次は何をするんだい！」

くるみは高らかにそう言い放ち、再び俺たちの前に立ちただかる。

「化け物……っ！」

いつも毅然な態度のあの美波が恐怖に怯えた声を漏らした。

見せつけられた圧倒的力の差

絶対的な力の前に誰もその場から動けない、できることといえばただ呆然と立ち尽くす事だけ

「んー……今度こそ本当に万策尽きたみたいだねえ、じゃあ……最後にちよつとだけ本気を出させてもらおうよ！」

くるみはそう言ってホットパンツほどの短さになったジーンズのポケットからあるものを取り出す。

黒光りする金属質な一枚の板 十中八九、くるみのプレート

くるみはそれを手に持ち右膝を曲げて脚を浮かせると、その露出した太腿に手に持ったプレートをあてがった。

プレートは淡い光を放ちながらまるで液体のように溶け出し、肌に染み込むようにして体内へと取り込まれてゆく

そしてくるみの太腿に刻まれる？？？の数字

「レベル……3……！？」

「そつちー！」

俺が思わず発した言葉にくるみは威勢よくそう返し、両拳を握りしめ、まるで力を溜めるような構えを取った。

「アタイのプレートは皇帝の拳？カイザー・ナックル？！このプレートを使用することでアタイの身体能力は50%アップ！更に99秒ごとにアタイの身体能力は50%ずつ上がり続ける！」

くるみの声に同調する様に大気が震え、大地が揺れる。

「まずは150パーセント！ いくよ！」

くるみがそう叫び、視界から姿を消す。

気付くとくるみは俺の隣で佇む美波目掛けて、大きく拳を振りかぶっていた

「ッ！？」

美波は咄嗟にガードを固め、くるみの攻撃に備える。しかし結果的にそれは何の意味も成さなかった。

「くるみ、パーンチ！」

まるで大砲

くるみの放ったパンチは今まで見たどのパンチよりも速く、重く、そして鋭い

そんな一撃が、いとも容易く美波のガードを突き破った。

「く、あ……ッ！？」

腹の底から絞り出したような呻き声

直後美波の体はまるで大型トラックにでも弾き飛ばされたかのよう
に遙か後方へ吹き飛ば

そして美波は校舎を囲む鉄柵に背中を強打したところで、ようやく
その勢いを殺した。

「か……は……！」

鉄製の柵を歪め、壁に背中をもたれかけた美波の口から赤い液体
が吐き出される。

背面を強打したせいか息も上手く出来ていない

「美波ッ！」

その場で振り返って少女の名を呼ぶ

そしてソレが起こったのは、ほとんど同じタイミングであった。

パン

唐突にレベル２ルーザーと対峙した時に聞こえたのと同じ乾いた
音が辺りに響き渡る。

「ぐあっ!？」

間を置かずに圭吾の呻き声

俺は咄嗟に校舎屋上に目をやる。

そこには制服のズボンを赤く染めて地に膝をつく圭吾の姿が

「……ッ! 圭吾!」

呼びかけも空しく、圭吾は膝のあたりを抑えながらどさりと音を立ててその場に倒れ込んだ

「っ……！？ ア、アリシア！ 約束が違うじゃないかい！」

それを見てくるみは意外にも慌てた様子で声を張り上げる。

すると、まるでタイミングを見計らっていたかのようにくるみが腰に提げた鉄の塊からノイズ音交じりに落ち着いた女性の声が発せられた。

『…… たった今少佐が到着しました、「退がれ」との命令です』

「……ッ！？」

無線機から流れる声に耳を傾けていたくるみの顔に初めて驚愕の色が浮かぶ

しばらくしてくるみは思い出したように必死で視線を泳がせた。

右へ、左へ

そしてある場所で、くるみの視線は固定される。

「あ……姉御……」

くるみが一点を見つめたまま、怯えた様子でそんな弱々しい声をあげた。

くるみの視線を追う

視線の先、約数百メートル地点、そこにはいつからいたのか一人の女性の姿があった。

そしてその女性は迷いのない足取りで大地を踏みしめ、確実にこちらへ近づいてきていた。

「……」
女性の口が微かに動き、咳くように聞いたことのない言語が発せられる。

「」
女性が近づくとつれ、その言葉がはっきりと聞こえるようになってくる。

「」
これは……歌だ
それに気付いた時、すでに女性は数十メートルほどの距離まで迫ってきていた。

「」
……」
女性はそこで一旦区切り、歩みを止める
歳は20代後半か30代前半、身長は俺よりも高い
白人特有の白い肌、それを覆う軍服の上には分厚い毛皮のコートを羽織り、頭にかぶったロシア帽からはまるで雪のような白銀の髪が夜風になびく
ルビーのように紅色で尚且つ氷のように冷たい双眼はそれだけでとてつもない威圧感を放っており、その圧倒的プレッシャーに息が詰まる。

そして俺は頭でなく、本能で理解した。
コイツは危険だ、と

「」
……またヤポンスキか、全く一目でアジアンの区別が付くように

なってしまった自分に反吐が出るよ」

女性が見下したような視線でこちらを睨みつけ、自嘲を込めて吐き捨てる。

その言葉の意味は分からない、が、俺はその女性の刃物のような突き刺さる視線に思わず屈してしまいそうになる。

しかしここで目を逸らせばそこで終わり

俺は震える拳を握りしめ、虚勢を張って女性を睨み返した。

「……ふむ、ヘタレのヤポンスキにしては上出来だ、紹介が遅れた、私は？カチューシャ？インペリア総司令、階級は？少佐？」

やはりこいつがカチューシャ……

近くにいるだけで感じるただならぬ殺気、凄まじい威圧感、目を伏せてしまいそうな圧倒的な畏怖

その出で立ちを考えたとしても存在感の大きさは明らかにこの中で一人別格だ

不意にカチューシャは興味を失ったかのようにこちらを視線から外すと、ゆっくりと向き直った。

俯いて縮こまる船坂くるみに、だ

「さて……船坂軍曹」

くるみの体がビクツと跳ねる。

「私は言ったはずだな、私が向かう前に終わらせておけ……と」

カチューシャの鋭い眼光で睨まれ、先ほどまであれほど豪快に振る舞っていたくるみが萎縮し、無言で肯定する。

「船坂軍曹、アリシア曹長、両名にはあとでそれなりの刑罰を与える。以上だ」

「……はい」

くるみが小さく頷く

同時にくるみの右太腿からプレートが吐き出され、くるみはそれを手に取って青い顔でその場から離れた。

それを確認したカチューシャが再び向きを変える。

カチューシャの視線の先、そこには校舎の2階からどこか寂しげな表情でカチューシャを見下ろす千尋の姿があった

「……久しぶりだな千尋、もう分かっているとは思うが今日は君に用があつて来た」

千尋は無言でカチューシャを見つめ返す。

カチューシャはそのまま続けた。

「高島千尋、君をインペリアに招き入れたいと思う」

「なっ……!!」

驚愕の声を漏らしたのは千尋ではなく、俺

千尋はとうとう何か言いたげに哀愁に満ちた目でカチューシャを見つめていたが、しばらくすると決心したように喉まで出かかった全ての言葉を呑み込んで、息を大きく吸い、一言「お断りします」とだけ言った。

「……そうか、嫌ならば仕方ない」

カチューシャは大きく一つ溜息をついて、懐に手を入れる。その手はすぐに取り出されたが、そこにはあるものが握られていた。

映画や刑事ドラマでよく見る黒光りするアレ

見るからに重量感を感じさせるソレは月の光を反射して鈍く冷たい光を放つ

おおよそ女性の手に余るであろうその無骨な鉄の塊を持つカチューシャの姿は、何故か異様にしっくりときていた

そう、カチューシャが手にしたのは、一丁のリボルバー式拳銃だったのだ

「一つ良い事を教えてやろう」

俺と千尋はカチューシャが懐から取り出し右手に握ったソレに全神経を集中させ、体中の筋肉を緊張させる。

しかしそんなのはお構いなしと言った様子でカチューシャはリボルバーの弾倉に？一発の弾薬？を装填した。

それからカチューシャは手慣れた動作で弾倉を銃の中に戻すと何度か弾倉を回転させる

「？死？とは案外臆病者だ」

何を思ったのか、カチューシャはそう言って自らのこめかみにリボルバーの銃口を向けた。

俺と千尋の声にならない驚愕の声が重なる。

「死は自らを恐れる者には強気だが、自らを認識し尚自らを恐れない相手に対しては途端に臆病になる」

カチューシャの白く細い指が引き金にかけられ、そしてカチュー

シヤは何の躊躇いもなく、その指に力を込め？引いた？

カチッ

銃口から吐き出されたのは、そんな一つの乾いた音

そこから弾丸は発射されずに弾倉が微かに動く

しかしカチューシヤはそれだけでは終わらなかつた。

親指で撃鉄を起こし、人差し指で引き金を引く、乾いた音、不発

親指で撃鉄を起こし、人差し指で引き金を引く、乾いた音、不発

親指で撃鉄を起こし、人差し指で引き金を引く、乾いた音、不発

そこでようやくカチューシヤは手を止める。

カチューシヤは、まるで息をするかのように、その狂気の沙汰を

やつてのけた。

「狂ってる……」

口をついて自然とその言葉が出てくる。

それを聞いたカチューシヤはそんな俺を嘲るようにせせら笑う

「それは所詮君が？常人？止まりだからだ、本当の意味で死を克服した時、それは確実なものとして結果に現れる」

カチューシヤはそう言つて再び撃鉄を引き起こした。

あの拳銃に込められる弾は計6発、込められた弾は1発……すなわち次撃てばその銃口からは間違いなく銃声とともに一発の弾丸が吐き出される。

にも関わらず、カチューシヤは銃口を自らのこめかみに向けたまま引き金に人差し指をかけ、力を込めた

「ッ……!？」

「私が生き残る事は決定事項、しかしそれではまだ常人止まり」

脅しやハツタリではない

カチューシャはルビー色の目を見開き、口元を歪める。

そして引き金にかけた指に力を込め、カチューシャは引き金を引いた。

先程のような空砲ではない、銃口が火を噴き、凄まじい破裂音とともに一発の弾丸が吐き出される。

しかし、弾丸はカチューシャには命中しなかった。

いや、正確に言くと弾丸はカチューシャに当たる寸前、消えたのだ

「本物の強い意志は結果さえも捻じ曲げる」

カチューシャがそう言った直後、視界の外から形容しがたい3つの音が鳴り響いた。

その音がした方向へゆっくりと首から上だけを動かす。

音の元は校舎二階、そこには何故か右肩に一箇所、膝に二箇所、計三箇所の？銃創？から血を滲ませる千尋の姿があった。

「え……?」

千尋が虫の羽音のようなかぼそい声を漏らす。

右腕は力なくだらんと垂れ、千尋は力を失った両足から崩れるようにぐらりと体を傾ける。

そして千尋はまるでゴミ袋か何かのように、どさりと音を立ててその場に倒れ込んだ。

「これで残るは君一人だな」

カチューシャの双眸がこちらに向けられる。

「ッ」

俺の中をいつか味わったあの感覚が全身を駆け巡った。

全身の血が沸騰し、頭の奥が熱くなり、頭の中が真っ白になる。
脳裏をフラッシュバックしたのは、灰色の空、降り注ぐ黒い雨、
足元に広がる赤い海

俺の中で何かが弾けた。

「お前だけは……」

いつかのように左手の甲に刻まれた数字が狂った電子音を立て、
激しく変動する。

そしてその狂った電子音が鳴りやんだ時、左手の甲には数字の？
2？の刻印が刻まれていた。

「殺す！」

自分の口から出たその二文字の単語が自分でも信じられなかった。
カチューシャはそれを聞いて口元を釣り上げると狂喜に満ちた表情で両手を広げ、そして言い放った

「上等だ、さあ戦争をしよう」

イベント？44 「ザ・ストロングエスト・アーミー・final」

まるで全身の血管に熱湯でも注がれたかのようにだった。

たぎるような熱さの血潮が血管の内側を焼きながら体中を駆け巡る。

心臓から噴き出し、指の先から爪先、そして戻ってきた血液の行き着いた先は頭

沸騰したソレは余計な思考の一切合財を溶かしつくし、代わりに頭の奥の奥で隠れていたソレを露わにした。

明確な 敵意

「がああああああああああああああああつ！」

俺の口からそんな人間離れた咆哮が発せられる。

左手の甲に刻まれた？2？の刻印が光を放ち、俺は地面を蹴って大地を駆ける。

神経が麻痺しているのか先程まで体の隅から隅まで俺を支配していた疲労感は今となっては感じない

「良い目だぞ少年、私の好きな色だ」

俺の体は自分の意思なんて関係なしに、まるで何かに操られるように動く

まず初めは右拳を握り締め、目いっぱい助走をつけた右ストレートを薄ら笑いを浮かべるカチューシャの顔面めがけて放つ

しかしカチューシャはまるで街中ですれ違った通行人を避けるように、最小限の動きでそれを躲した。

「アリシア軍曹の報告通り戦闘の方は完全な素人、か……、勿体無い、実に勿体無いな」

「くっ!？」

あくまでも余裕の表情を浮かべたカチューシャが、流れるような動作で俺の突き出した腕を掴んだ

カチューシャの動きに合わせてロシア帽から零れた白銀の頭髮と軍服の上に羽織った毛皮のコートが揺れる。

次の瞬間俺を襲ったのは形容しがたい浮遊感、めまぐるしく景色が移り変わり 気付くと俺は夜空を見上げていた。

「な……?」

その状況を把握するにはしばらくの時間を要した。
制服越しに背中をアスファルトの冷たい感触が伝わってくる。

「一本背負い 投げられるのが上手いな、君は」

混乱する俺の視界の端でカチューシャが妖艶な笑みを浮かべ、そう囁いた。

「ッ……! があああああッ!」

手足をがむしゃらに動かしてカチューシャの拘束を振り解き、素早くその場に立ち上がる。

そして俺はアスファルトの地面に右掌を押し付け、頭の中で念じた

分解

掌の触れていた場所を中心にして地面に丸く穴が開き、アスファルトは小さな粒になって弾け飛ぶ

俺はそうして弾けた粒を手の内に集め、再構築する。

創るのは一本の棒

合成、そう頭の中で念じると同時に粒の集合体は一本の棒へと姿を変えた。

「ほう……」

アスファルト製の棒を構え、余裕の表情で佇むカチューシャに突っ込む

が、カチューシャはまたもこれをすり抜けるように躲し、ルビー色の目を妖しく光らせた。

「その根性だけは褒めてやろう、しかし君には足りない物が多すぎる」

盛大に攻撃を外し、大きく体勢を崩した俺の後頭部にカチューシャの回し蹴りが叩き込まれる。

頭の中を真っ白にして意識を飛ばすような一撃に、一瞬目の前が暗くなる。

しかし俺は何とか持ち堪え、そのまま地面に倒れ伏した。

「ぐっ！」

体を走る鈍い痛みに呻き声が漏れる。

そんな俺の様子を氷のような目つきで見下しながらカチューシャは続けた。

「単純な筋力や瞬発力、更には動体視力、加えて状況判断能力も欠如、そして極めつけは圧倒的実戦経験の無さ、……兵士としては使い物にならない」

俺は地面に転がったアスファルト製の棒を手にとって素早く立ち上がり、再びカチューシャと対峙する。

そして腰に手を当て余裕の表情で佇むカチューシャに、俺は手に持ったアスファルトの棒を槍投げの要領で投げ放った。

「しかしその執念には私も目を見張るものがある。……いいだろう、少しだけ本気を見せてやるぞヤポンスキの少年よ」

それなりの速度でカチューシャに迫るアスファルトでできた棒避けようと思えば楽に避けられるであろうその一本の棒きれに對しカチューシャは微動だにせず、ただゆっくりと左手をかざす。

目を疑った

俺の投げ放ったあの棒はカチューシャの突き出した掌に触れる寸前、カチューシャの体に近い部分から形が歪み始め、そのままどこかへ消えてしまったのだ

咄嗟に辺りを見回す、が、消えたアスファルトの棒はどこにも見当たらない

「余所見とはな、なんだ案外余裕じゃないか」

カチューシャは皮肉っぽくそう言って醜く口元を歪め、突き出した左手の指を鳴らす。

パチン

そんな小気味良い音が辺りに響き渡ると同時に地面が歪み、そしてそれは？生えてきた？

「！？」

空を裂くような音を立て、地面から突出する何か

それは俺の目と鼻の先を通って乱雑に切り揃えた俺の前髪を少しだけ千切り、そこでようやく動きを止めた。

理解するのに数秒の時間を要したが、それは何処からどう見ても俺が先ほど投げたアスファルトの棒

しかも良く見てみるとこのアスファルトの棒は地面を突き破って生えてきているのではない、まるで地面そのものが盛り上がっているかのように接合部分が完全に地面と一体化していたのだ

「な……!?!」

なんだこれは、そう口に出そうとして俺の言葉は中断させられた。先程と全く同じアスファルトの棒が更に三本ほど足元の地面から突出したことによって

「そら、頑張つて避けろ、さもなくばシャシリクだ」

カチューシャの冷笑から間髪入れずに辺り一帯の地面がぐにやりと捻じ曲がり、まるで沼の上に立っているかのような奇妙な感覚が全身を襲つ

「くっ
「!」

次の瞬間、俺は直感的にカチューシャに背を向け一心不乱に校舎目掛けて走り出していた。

そして直後、空を裂く音だけを立てて地面から一本ずつ飛び出していく無数の石柱

特に鋭利な部分はないが、それを補うほどの凄まじいスピードで突き出してくるアスファルト製の棒はまさに槍、いやそれ以上だ

そして槍で突かれて無傷でいられる人間はいない
したがって俺はひたすらに走るしかないのだ

「邪魔だ！」

進行方向に突き出た棒はディ・コンポーザーの能力で分解し、それ以外の物は気合で避ける。

先程突き出した石柱がかすったせいか頬を伝って生暖かい液体が流れ落ちたが足は止めない、止めれば串刺しだ

俺は無我夢中に林立した石柱の合間を縫って駆け抜け、扉が半開きになった正面玄関に滑り込む

「はあっ……！ はあ……！」

壁を背にして息を整えつつ、扉の隙間から外の様子を窺う

そこには地面から突き出した無数の柱が月明かりを帯び、静かに佇んでいるだけ

……どうやら建物の中にまでは生えてこないらしい

その事に少しばかり安堵し、俺はすぐに移動を開始する。

「はあ……は……ぐっ……！」

全身が熱い、眩暈がする。

そうして体の節々が痛むのも耐えながら、俺は左手の甲に刻まれた数字に目をやった。

そこには相変わらず？？の数字が刻まれており、また変化するような様子はない

「これがレベルアップの影響ってやつか……」

とうとう立つこともままならなくなり、俺は壁伝いになんとか歩みを進める。

もうじきカチューシャもここへ攻め込んでくるだろう、それまでに何とか対処法を見つけないければ俺は殺される。

……しかしヤツのプレート能力がさっぱり分からない

物体を瞬間移動させるプレート？ 物体を複製するプレート？

……どれも違う

肌で感じて分かった、ヤツのプレートはそんな単純な物じゃない

「もっと違う何か……」

1階から2階へ続く中央階段で静まりかえった校舎の中を俺の眩きが無駄に反響する。

だが作戦と言える作戦は一向に浮かばない

……そもそも俺の考えた作戦がアイツに通用するだろうか

俺がいくら頭を絞ったところで所詮高校生の頭で思い浮かぶ浅知恵止まり

対してカチューシャは百戦錬磨の軍人……作戦どころか俺の次の行動さえも読んでしまうような相手だ

加えてヤツには二人の仲間がいる。船坂くるみとアリシア・ハリソンの二人

もし万が一俺がカチューシャを倒したとしても、その後で他の二人に殺されるまで……

「見事に絶望的な状況だなこれは……」

朦朧とする意識の中で何とか階段を上りきると、俺は二階のある場所へと向かう

無論カチューシャの攻撃を受け、倒れ伏した千尋の元へだ

ヤツの狙いはよく分からないが千尋に何らかの因縁があることだけは分かった。

つまりカチューシャが俺ではなく千尋の元へ向かう事も十分考え

られる……

「……となると俺が守るしかないんだよな」

誰に言う訳でもなくそんな事を呟いて、俺は廊下の突き当たりを右に曲がる。

視線の先、そこには力なく床の上で仰向けになった千尋の姿があった。

俺は全身を襲う痛みなど無視して千尋に駆け寄る。

千尋は肩に一箇所、膝に二箇所の銃創から血を滲ませていた……が、出血はそれほど酷くない、急所は外れているようだ

「弾丸は……残ってない、ちゃんと貫通してるみたいだな……」

「……良かった、これならばすぐにどうこうなるといつ訳じゃないだろう」

思わず安堵の溜息を漏らす。

「あ……八伏先輩……」

しばらくして千尋はようやくこちらに気付いたのか、そんな弱々しい声を発した。

「すみません……油断しちゃいました……」

痛みに耐えながら無理矢理笑顔を作ってかすれた声を絞り出す千尋の姿は酷く痛々しい

しかし、それでも尚千尋は続けた。

「私がおうちちょっと強ければカチューシャさんも……やっぱり私の

せいですね……」

その言葉は俺に向けられたものではない、自分自身への戒めの言葉
俺は千尋とカチューシャの間に何があったのかは知らない、だから何と声をかけてやればいいかなんて分からない

不意に、千尋の頬を一粒の雫が伝った。

「やっぱりまだまだ弱いですね……私は……」

「ッ
！」

初めて見た千尋の涙に、俺の中を何とも言えない感情が渦巻く
怒りや悲しみ、一言では形容できない感情の集合体
自然と拳に力が入る、頭の奥が熱くなる、全身の血が沸き立つ

「もう疲れました……少しだけ……少しだけ眠ります……」

その言葉を最後に千尋の体を纏った鱗は霧散し、年相応の柔らかい肌へと戻る。

それと同時に千尋の左肩からプレートが吐き出され、千尋はそのまま気を失った。

「本来人間とは皆自分勝手であるべきなのだ」

俺はゆっくりと声のした方向へ振り返る。

そこには暗く長い廊下の先で軍靴の音を鳴らしながら、こちらへ歩みを進めるカチューシャの姿があった。

その瞬間、自分の中の訳の分からない感情が、目の前の女性に対する憎悪に変わっていくのが分かる。

「腹の内では皆自分の我儘を押し通したいはずにも関わらず、下らぬ良識に捉われ損をする」

カチューシャがここから数十メートルほど離れた場所で歩みを止め、左手を天にかざす。

するといつものように空間は歪み始め、両の指では数え切れないほどの数の何かがカチューシャの下に降り注いだ

黒く無骨なボディで鈍く光を反射させ、重量感のある金属質な音を立ててそれらは積み上がる。

カチューシャは一つ一つが形も大きさも違う山の中から一つ手に取り、それをこちらに向けて構えた。

「シンプルで単純に、自らだけが正しいと信じ、それに反するものは力づくで排除する……それこそが最も確実に尚且つ分かり易い」

俺は奥歯を噛みしめ、床から拾い上げた千尋のプレートを空中に放り投げる

間髪入れずに左手を突き出し、そこに全神経を集中させて体内のプレートを排出

ディ・コンポーザーのプレートが勢いよく吐き出され宙を舞う

そして重力に引かれて落下するドラゴンのプレートと、ディ・コンポーザーのプレートが丁度胸の高さ辺りで並んだその時、大きく振りかぶった右手で二枚のプレートを同時に叩く？

直後、プレートは空中で一瞬動きを止め、光の粒になって弾け飛んだ

「があああああああああああああつー！」

怒りにまかせた咆哮に引き寄せられるかのように光の粒が体に溶け込んでいく

しばらくして耳をつんざくような狂った電子音とともに左手の甲に刻まれた数字は変動を開始
間を置かずに全身の皮膚が硬化化し、それは岩のように頑強な鱗となつて逆立った

「 さあ、戦争だ」

その合図とともに俺はカチューシャ目掛けて走り出し、カチューシャの構えた砲身からは激しい爆音とともにロケット弾が発射される

ここで俺の記憶は途切れた

イベント？45 「エンド・オブ・ウォー」

「私は今、非常に怒っています」

大分日も高くに上りそろそろ真上に差し掛かるうといった頃、ロスト学園サーバーエリアAに位置する校舎三階2-1教室にて右腕にギブスをつけてところどころに包帯を巻きつけた淡い金髪の女性 畝畑舞は、珍しく怒気を込めた声音で言った。

いつもにこにここと天使のような笑みを浮かべる舞が眉に皺を寄せ、椅子に腰を掛けながら腕を組む姿はいかにも？怒っている？といった感じだ

良く見ると紅茶にも手を付けていない、これは相当怒っているな俺たちは四人は長机を囲みながら一様にそう思ったが、なにせ心当たりがない

「……私が何故怒っているか分かりますか？ ちなみに正解者には金一封です」

「はい！」

「hay！」

「僅差で千尋さん！」

舞は声を張り上げてずびしと千尋の方を指さし、両膝に包帯を巻いた千尋はガッツポーズ、メンバーの中で比較的傷の浅い圭吾は握り拳を机に叩き付けて悔しがる。

「クソッ！ 暇潰しに床の溝でアミダしてたのが祟ったか！」

「お前は一体何をしているんだ」

あの戦いからまだ一日も経っていないというのに我ながら的確なツッコミだと感心する。

一方で千尋は自信満々と言った感じで控えめな胸を張り、高らかに回答した。

「答えは……あの日ですね！」

「はい不正解です。それと次それ系統の事を言ったら問答無用で罰ゲームですからね」

「ふはは！ 詰めが甘いわ千尋！ 答えは生「ぶふうっ!？」」

案の定、圭吾は全てを言い切る前に舞のストレイ・チャイルドによつて勢いよく椅子の上から弾き飛ばされ、そのまま窓ガラスを突き破つて校舎三階からフライアウェイした。

ちなみにしばらくしてから圭吾が疲れ切った表情で「死ぬかと思つた……」とか言いながら引き戸を開けるのがいつもの流れである。

……最近この光景を見てもなんとも思わなくなつてしまつた自分が少しだけ怖い

「では他には」

舞が割れた窓ガラスから吹き込む風など気にもかけずに何食わぬ顔で再度問いかける。

とりあえず顔を青くさせて縮こまる千尋は当分手を挙げることはないだろう、となると残りは俺と……

「じゃあ……はい」

そんな時、一人の少女が躊躇いがちに拳手をした。

それは体中の至る所に湿布や絆創膏をベタベタと貼り付け、相変わらずどこか不機嫌そうな表情を浮かべる　水ヶ沢美波だ

「はい、美波さんどうぞ！」

当然美波以外に手を挙げる者はおらず、必然的に美波が当てられる。

すると美波は珍しく歯切れの悪い物言いで口を開いた。

「もしかしてそれに関係することですか……？」

そうやって美波はある一点を指で差す。

舞の後方窓際の壁……美波の指が差すその場所には、明らかに異様な雰囲気を持つ巨大な段ボール箱があった。

段ボール箱はぴっちりとガムテープで封をされていて、それ自体は別におかしなところはない

ただあえて一つ問題を挙げるとしたら……中から変な音が聞こえるのと、時折段ボールが動いていることくらいだろうか……

「……スネーク？」

思わず俺の口について某伝説の傭兵の名が出てくる、が、それから間を置かずに箱の中の何かがガタガタ言い始めたところを見ると違っただろうな、多分

「嫌ですねえ美波さん、これはなんでもありませんよ」

舞はにっこりと微笑んで自由に動く方の手で段ボール箱をぼんと叩く

すると直後、まるで水を打ったように段ボール箱は静かになってしまった。

目を凝らして見てみると小刻みに震えているのが気になるところだが……

「はい、時間切れです。ちなみに賞品は金粉入り煎茶（茶葉）一袋でした」

「騙された！　ずっと生クリームチョコレート一袋だと思ってたのに！」

「それでいいのかお前は……」

身を乗り出して声を張り上げる千尋にまたも冷静なツツコミを入れる、慣れとは恐ろしいものだ

そんな事を思っていると今度は舞が席を立ち、机から身を乗り出しました。

「私が怒っているのはそんなことじゃありません！　私が怒っているのは……！」

舞が声を荒げてばんと机を叩き、今度は打って変わって静かに言う

「……私の事、忘れていたでしょう」

「あ」

千尋が先に短く声を漏らす。

確かに言われてみれば船橋くるみと対峙した時あたりから舞の姿を見てない気が……

「別にいいんですよ、私も結局は負けたわけですし偉そうなことを言うつもりはありません、……でも忘れるってどういうことですか！？ 水ヶ沢さんや伊勢さんに至っては私がいたことすら気付いてないんですよ!?!」

「いや……まあ……」

美波はこちらをじっと睨みつける舞からあからさまに目を逸らし、そんな曖昧な返事を返した。

インペリアとの戦いでは色々と余裕が無かったからな……後から来た美波や圭吾が知らないというのも無理はない
しかしなんだかんだ言っただけの中では舞が一番重傷なのだ、舞が怒るのも分かる。

「ついでに気絶していた貴方たちを治療したのは誰だと思っただけです!?!」

「はい！ 畝畑先輩!」

「正解！ 正解者の高島さんには金一封プレゼント!」

舞の投げた煎茶パック（金箔入り）をキャッチし、それを誇らしげに高々と掲げる千尋

何だこのコント、そう心の中でツッコミを入れるがもうなんか色々面倒臭いので口に出すのはやめておく

それにしてもこの包帯やら絆創膏やら湿布やらの治療は舞がやつ

てくれたのか、その点では感謝せねば

と、そう思った矢先舞は唐突に立ち上がり、何を思ったのか先程の段ボール箱の前に立った。

「では第三問！ 校舎正門前で一人倒れていた私を介抱してくれたのは誰か分かりますか!？」

舞の三度目の問いかけ

……そういえば誰だろう？

美波は150%くるみパンチ（仮）をボディに食らって動けるような状態ではなかったし、圭吾もアリシアの狙撃によって膝を撃ち抜かれ動ける状態ではなかった筈だ

となると両膝に加えて右肩を撃たれた千尋にも不可能、あの後の記憶が無く気が付いたら自室のベッドで寝かされていた俺も当然違うだろう

ならば……誰だ？

「残念時間切れです！ 正解は……」

おもむろに舞はその場で屈み、段ボールに貼り付けられたガムテープを乱暴に剥がす。

そして舞は何の躊躇いもなく段ボール箱の蓋を開け放った。

「ん……?」

箱の中に何かの影が見える。が……位置的にこの場所からでは見れない

ということと俺と美波と千尋の三人は椅子から立ち上がり、筋肉痛で痛む足を気遣いながら開け放たれた段ボール箱に歩み寄る。

その人が一人入れそうなくらいに巨大な段ボール箱の中には……

本当に人が入っていた

「んーっ！ んーっ！」

段ボール箱の中で体を丸め、きつちりと収まった一人の女性
手足は荒縄で縛られているせいで体をよじるくらいしか身動きが
取れず、口には何か布のようなものを啜えさせられていて言葉が言
葉になっていない

乱れた制服に肩口くらいまで伸びたショートカットの髪型、コイ
ツは……

「オ マ氏！」

「んんんんんーっ！ んんー！」

段ボール箱の中に収まった少女は千尋のポケに身をよじらせ、言
葉ではない何かでツッコミを入れる。

箱の中の少女、……その顔は忘れるはずもない、数週間前土倉連
とともにここへ襲撃を仕掛け、数日前にはラーメン屋で一緒になっ
た……尾羽梨真紀だ

「あ、クイズも終わったからもうこれは取って大丈夫ですね」

舞が思い出したように箱の中に手を入れ、片手だけで器用に尾羽
梨の口から布を外す。

「ぶはっ！ はー……はー……」

尾羽梨が肩を上下させて呼吸を整える。

密閉された段ボール箱の中で口を塞がれたのがよほど息苦しかった

たらしく若干涙目だ

「あ……アンタ何でここに……!?!」

美波が初めてマトモな反応を見せる。

すると舞はいかにも待つてました、といった感じで口を開いた。

「尾羽梨さんはですね、皆さんに忘れられて一人傷ついていた私を手当てしてくれたんですよ」

「……どうい風吹き回し?」

美波が疑いの眼差しで尾羽梨を見つめる。

「……べ、別に大した意味はねーよ、ただブラブラしてたら目についたから気まぐれで……っていうかこれ解け! 今すぐ!」

尾羽梨が必死に手足を動かす、が、がちりと縛られたそれが解ける気配はない

「……というか何でこんなとこに尾羽梨が……」

「まあ単刀直入に言うとなら尾羽梨さんには今日からこの学校に住んでもらうということですよ」

「え?」

「え?」

「え?」

……え？

舞の一言にその場にいた全員、手足を縛られ段ボール箱の中に収められた尾羽梨でさえもがぼかんと口を開け、全く同じ反応を見せた。

えーと、つまり……どういうことだ？

「簡単な事ですよ、私の趣味です」

「分かるか！ 早く解け！」

舞の言葉を聞いて尾羽梨がより一層激しく暴れる。

その様子を見て舞はふうと一つ溜息をついて、段ボール箱の中の尾羽梨に顔を近づけ、こう囁いた。

「その体勢でそんなに暴れると見えちゃいますよ？ 色々」

「ッ……！」

尾羽梨はそう言われてようやく自分の状況に気付いたのか、あからさまに頬を染め、その動きを止める。

「見事に良いように扱われてるな……」

「う、うるせえ！」

尾羽梨は顔を真っ赤にして反論

眉間にしわを寄せ犬歯を覗かせながらこちらを威嚇してくるが、正直全く怖くない

と言うか……あれだ

「なんか犬みたいですわね」

次の瞬間、千尋は俺が思っていたことをそのまま口に出してくれた。

「なっ………！」

千尋の一言で尾羽梨は耳の先まで真っ赤に染め、舞は顎に指を当てて頷く

「成る程言われてみれば……この犬耳とどこかに挿し込めそうな感じの尻尾、どっちつけます？」

「付けるか馬鹿！」

「茶葉食べます？」

「食つか馬鹿！」

あの状態から両サイドのポケを的確に撃ち落とすとは……もしかしたらとんでもない逸材を発見してしまったのかもしれない……

「でも……正気ですか敵畑さん？ 尾羽梨を飼うなんて……」

俺の隣で怪訝な表情をした美波が舞の方を見る。

対して舞は「だから私は犬じゃねえ！」とツッコミを入れる尾羽梨の事など気にもかけずに言った。

「ええ勿論飼いますよ、餌もやりますし散歩もさせますし一日中過

剰なスキンシップしたりとかもします、ふへへ」

「いよいよキャラがぶっ壊れてきたな……」

「私は別にいいと思います！ 賑やかなのはいい事ですし！」

にっこりと天使のような微笑みを浮かべたままおおよそ上品とは
言えない笑い声を上げた舞はともかく、千尋もかなり乗り気のようだ
俺としてもこの前尾羽梨にもう戦意が無いことは分かったので別
にいいのだが……

「まあ畝畑さんが良いというなら別に……戦力が増えるのはいいこ
とですし……」

どうやら心配していた美波も渋々だが賛成なようだ

「はい、これで満場一致ですね」

「おい待て！ アタシはいいなんて言っただろーぞ！」

その声を張り上げるのは当然のことながら尾羽梨真紀本人

こいつの性格からして素直に首を縦に振るわけがないよな……

と、思っていたら意外にもそれを聞いた舞は微笑みを浮かべたま
ま何故か嬉しそうに「そう言うと思ってました」と一言だけ言い、
再び段ボール内の尾羽梨に顔を近づけ、そして何かを短く耳打ち
すると最初は眉を顰めていた尾羽梨の表情が一瞬にして強張った。

「なっ……！？」

「……という事ですが、考えは変わりませんか？」

「ぐっ……！ ……分かったよ！ 住めばいいんだろ！」

「マジか……」

ホントに同意させたよ……

舞が何を吹き込んだのかは分からないが多分ロクな事じゃないんだろうな……

「はい、ではこれで完全に満場一致ですね！」

舞が天使のような微笑みを浮かべて嬉しそうに言う

正確にはメンバーの一人が舞に吹っ飛ばされてるんだが……なんかこの短時間でどっと疲れてしまったのでツッコむのはよしておこう……

とにもかくにもこれで一段落だ

俺は一つ溜息をつき椅子の背もたれに腰をかけ、何の気なしに視線をずらす その時だった。

「……え？」

視界に入ったのは、この教室の中では明らかに異質なモノ

よく映画やらなんやらで見る軍服に軍帽、黒い眼帯、短く切り揃えた若草色のショートカット

その全てを兼ね揃えた少女がすぐそこで後ろに手を回し、静かに佇んでいた。

「……ようやく気付きましたね」

少女は自分に視線が向いたのと同時に小さく声を漏らす。

「この声は聞き覚えがあった。
船坂くるみが腰に提げた無線機から流れてきたあの声……すなわ
ち……」

「……もう一度自己紹介をさせていただきます。私は？アリシア・
ハリソン？インペリアメンバー狙撃手担当、階級は？曹長？」

「ッ！？」

目の前の少女は限りなく無表情で淡々とこの前と寸分違わぬ自己
紹介を終え、口を閉ざす。

それによってその場にいた全員がその少女の存在に気付いたらし
く、段ボール箱の中で一人外の様子を見ることが出来ずに混乱する
尾羽梨を除き、全員が傷ついた体で臨戦態勢を取った

「……身構えずとも別に貴方たちを襲うつもりはありませんよ、肉
弾戦は私の領分じゃありませんし」

「じゃじゃじゃじゃあ一体何しに来たんですかっ！」

千尋が漫画のような噛み方をして問いかける。

するとアリシアは相変わらずの無表情で、静かに、しかしはつき
りと通る声で言った。

「強いて言うなら偵察……それとカチューシャ少佐からの伝聞を伝
えに来ました」

「カチューシャさんから……？」

千尋が肩をピクツと動かして反応する。

「はい、時間の都合で質問は受け付けず、一度しか言いませんので悪しからず」

アリシアは作業じみた淡々とした口調でそう告げる。

それに合わせて俺たちはごくりと唾をのみ、アリシアの言葉に耳を傾けた。

「では……」

アリシアが一つ深呼吸、それから言葉を発する。

「圧倒的な戦力差、今回の戦争で私たちインペリアの勝利はほぼ確実だった

事実、主戦力である敵畑舞、水ヶ沢美波、高島千尋……以上三名を撃破し、そして君たちの側に残った最後の戦力、八伏恭介も多少はてこずったが私自ら戦闘不能まで追い込んだ」

まるで機械のように無機質にアリシアは続ける

「本来なら殺している所だが、君たち、特に八伏恭介には俄然興味が沸いた。

勝者命令だ、君たちは敗北を噛みしめ今以上に強くなれ、そしてまた戦争をしよう」と

アリシアはそこで区切り、それから思い出したように

「ああ、それと高島千尋さん、もし気が向いたらいつでもこちらに來いとのことですが……では伝えることは伝えたので、私はこの辺でさようなら」

アリシアは最後に一言別れの挨拶を付け加え、踵を返す。

そしてそのまま軍靴の音を鳴らしながらアリシアは至って普通に2-1教室を後にした。

「……………」

まるで嵐が去った後のようにしばしの沈黙

それからしばらくして圭吾が最早テンプレとなった「死ぬかと思つた」の台詞を吐いて教室に戻ってきた頃、ようやく止まっていた時間が動き出した。

「結果オーライ……………なのか？」

誰に言うでもなく、俺はその問いを空に投げかける。

直後、俺の問いかけは言葉でなく、誰かの腹の虫によって答えられた。

「……………」

首から上だけを音のした方向へ振り向ける。

そこにあつたのは、傷だらけの顔に少しばかり恥じらいの色をちらつかせた高島千尋の姿だった。

気付けば全員の視線が千尋に集中し、それに気づいた千尋は赤みを帯びた顔でこほんとして咳払い

「とりあえず……………」

千尋はすう、と息を大きく吸い込み、それからよく通る声で

「ファミレスでどうでしょう!」

千尋の一声で先程とは別種の沈黙に包まれたこの空間
段々と現実離れた場所から自分が戻ってくるのを肌で感じ、そ
して同時に気の抜けた溜息を吐き出した。

それから俺たちはほぼ同時に目を見合わせ、やれやれと言った感
じで肩をすくめる。

「んじゃ……行きましようか」

俺たちが変わるのはまたしばらく後になりそうだな……
舞の呆れ気味で、どこか嬉しそうな言葉を聴きつつ、俺は一人心
の中でそう呟いた

イベント?45 「エンド・オブ・ウォー」(後書き)

学園サーバー編 第三章 完

イベント？44・5 「アナザー・ウォー」

そこはまるで戦場のようだった。

壁や天井はところどころが崩れ落ち、元からそこにあった物は原型を留めないほど破壊しつくされ、極めつけはところどころに残った弾痕や火薬痕

この狭い空間の中には未だに鼻をつくような火薬臭が立ちこめており、それはそこであった？戦争？の真新しさを物語っていた。

割れた窓ガラスから差し込む月明かりがその場を照らし上げる。

床の上に倒れ伏した傷だらけの男子高校生と、それを見下ろす軍人

「まさかこんな隠し玉がいたとはな……正直予想外だったよ」

軍人 カチューシャは軍服の上に羽織ったコートを整え、白く濁った息を言葉と共に吐き出した。

同時に力なく横たわった男子高生の左手が光り出し、そこから排出された二枚の金属質な黒い板が床の上を何度か跳ねる。

その直後、男子高生の体を覆っていた鱗のような物はまるで砂か何かのようにさらさらと崩れ落ち、そのままどこかへ消えていった。

「しかし本当に他者のプレートを取り込むとは……アリシア曹長の報告を受けた時は半信半疑だったが、なかなかどうして……」

カチューシャはすでに意識の途切れた男子高校生、八伏恭介を見下ろし、一つ含み笑いを見せる。

それからしばらくしてカチューシャは毛皮のコートを翻し、横たわる八伏恭介に背を向け暗闇の続く廊下の奥へと振り返った。

「……ま、奴も黙っているはずがないだろうな」

嵐が過ぎ去った後のような静けさを放つその場所に流れ込む冷たい夜風が不意に、止んだ

ヴォン

どこか聞き覚えのある音を立ててそれは現れる。

廊下の奥の奥、突き当たりに浮かび上がった四角形のソレは光を放っているという訳ではないにも関わらず、暗闇の中ではつきりとその存在を主張していた。

離れているとはいえ、そこに記された文字だけは読み取れる。

警告

直後、その二文字だけが記された四角いウィンドウがどこからともなく出現

一枚また一枚と出現したウィンドウが凄まじい勢いで一直線に並ぶ

警告、警告、警告、警告、警告

最早数えることすらも忘れられる程おびただしい数のウィンドウが停滞した空気をかき混ぜながらこちらに向かってくる。

そしてその無数のウィンドウは最後に一つ、カチューシャの目の前に一際大きなウィンドウを出現させ、そこで停止した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

>！<警告 不正なレベルアップが確認されました、現時点よりA
エリアに？削除人？を配置します。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

立ち塞がるように現れたその巨大なウィンドウには無機質な文字で
そんな短い一文が

カチューシャは目の前のそれを冷たく鋭い目で睨みつけ、そして一言

「……………御託はいい、さっさと出てきてはどつだ？」

次の瞬間、まるでその言葉に応えるようにウィンドウに一筋の亀裂
が入る。

ウィンドウを走る亀裂は徐々に分岐を始め、更に分岐、分岐、分岐
の連鎖

やがてその細かい亀裂はぴびしと音を鳴らしながら、ウィンドウ
全体に広がった。

それからすぐの事だ

ウィンドウが中央から砕け散り、その向こう側から黒髪を揺らしな
がら一人の少女が飛び出す。

腰まで届いた艶のかかった黒髪、夜の闇に溶け込む黒を基調とした
制服、鷹のように鋭い眼光、極めつけには一点の曇りもない純粹な
殺意

削除人だ

「……………貴様ぐらいなものだ、私の事を知っていて尚逃げようとしな
い者は」

削除人は軽やかな動きでタイルの床に着地し、カチューシャにその鋭い眼光を向けて言う

しかしカチューシャは、削除人の刃物のようなその視線に臆することせず、あるうことが鼻で軽く笑って口を開いた。

「自惚れが過ぎるぞ削除人、そうやってルールに違反した者を消しに来るだけの縛られた者が私の前で偉そうな口をきくな」

「……相変わらず口の減らない奴だ」

カチューシャの挑発的な言動にも削除人は眉一つ顰めずに、淡々とした足取りでカチューシャの後方

すなわち力なくその場にうつ伏せになり気を失う八伏恭介の元へと歩を進める。

しかし削除人はすぐに歩みを止めた。

何故か、それは他でもないカチューシャが削除人と八伏恭介の間に割って入り、削除人の前に悠然と立ちはだかつたからだ

「……どういっつもりだエカテリーナ」

自らよりも若干背丈の大きいカチューシャに対し、削除人は見上げるような形でまたしても鋭い眼光を突き付ける。

だがそれでもカチューシャは動じない

「削除対象は八伏恭介のみ、貴様にとっても八伏恭介は敵のはずだ、そこを退け」

削除人は冷たく声音でカチューシャにそう告げる。

するとカチューシャは口元を釣り上げ紅玉のような目を光らせると、

嘲笑つような口調で言った。

「八伏恭介が敵？ 何を呆けた事を言っている？」

「なに……？」

削除人は訝しげな表情でその言葉の意味を問い返す。
するとカチューシャは不敵な笑みを浮かべ、語り始めた。

「我が帝国？ インペリア？ は私の我儘だけで成り立っている。障害になる者は排除もするし、必要ならば殺しもする。だがな」

カチューシャはそこで一区切りして、息を一つ吸い込む

「私には敵が一人しかいないのだ」

カチューシャがその言葉を吐き出して、すぐの事だった
タイルの床に亀裂が入り、床が音を立って砕け、拳を天に突き出した船坂くるみが現れたのは

「姉御！ 加勢に来たよ！」

相も変わらずの満面の笑みで威勢のいい声を上げ、下の階から分厚いタイルの床を突き破って現れた船坂くるみ
それをいち早く察知した削除人は間一髪でその場から飛びのき、床の上を滑る。

そして削除人が素早く体勢を立て直し、顔を見上げたと同時に削除人の足元へ無数の弾丸が雨のように降り注いだ

「っー！」

削除人はその体勢から素早くバク転
風を切つて繰り返されるバク転により放たれた銃弾は床を跳ね、削除人は遙か後方でブレーキをかける。
それと同時にくるみの腰に提げた無線機からノイズ音混じりに落ちていた少女の声が発せられた。

『こちらも準備完了です。いつでも蜂の巣を作れますよ』

片手を地面につけ、屈んだ姿勢のまま削除人は顔を上げてカチューシャたちを睨みつける。

「貴様ら……！」

「ようやく堅物の君にも理解できたようだな、そう、我儘で自分勝手な私の目的は初めからこの世界のルールとなる者、すなわち削除人を潰す事、それだけだ」

カチューシャは割れた窓から覗く満月を背にロシア帽から零れた雪のような銀髪で月光を鈍く反射させる。
それからカチューシャは辺りを漂う冷たく張り詰めた空気に一石を投じる凜とした声で、高らかに宣言した。

「これより作戦を開始する。作戦内容は削除人の追跡を振り切り？八伏恭介？をエリア外まで運び出す事
船坂軍曹は八伏恭介の運搬、私は削除人の足止めを、アリシア曹長は狙撃による後方支援　では開始だ」

「あいあいさー！」

船坂くるみはそう威勢のいい返事を返し、力なく倒れた八伏恭介を
いとも容易く抱え上げる。

そしてあるうことか、気絶した八伏恭介を抱えたまま割れた窓ガラ
スから地上に飛び降りた。

一応言っておくがここは二階だ

確かにそれほどの高さはないが、されど二階

着地の仕方が悪ければ簡単に骨も折れるそんな高さ

しかしそこはくるみと言ったところだろうか

くるみは一般的な男子高生と同じ八伏恭介を抱えたまま飛び降り着地
そしてそのまま何事も無かったかのように膝のバネで全衝撃を吸収
し、次の瞬間には駆け出していたのだ

「ッ」

削除人もそれに合わせて駆け出す。

しかしそれはタイルの床を抉るアリシアの銃撃により阻止され、削
除人はそこで踏みとどまる。

「ハラシヨー、いい仕事だアリシア」

怯む削除人を前に、カチューシャは天に手をかざす。

するとカチューシャの頭上の空間は揺らめき、捻じれ、そしてある
物を吐き出した。

まるでバズーカ砲のようなソレの名はRPG-7 カチューシャ
お気に入りの無反動砲だ

「我がインペリアはこれからも戦力を拡大し続ける」

カチューシャはそう言って降ってきたRPG-7を掴み取り、それ
を削除人に照準を合わせて構える。

「いつか我がインペリアは唯一無二の帝国となり、この世界そのものを破壊する。せいぜいその日まで楽しみに待っているといいでは、また会おう、世界に縛られた哀れな少女よ」

そう言つてカチューシャは何の躊躇いもなく引き金を引いた。

直後RPGから激しい爆音とともに弾頭が発射される。

放たれた弾頭は固体燃料ロケットから火を噴き、加速を続けながら狭い廊下を一直線に突き進む

直線上、そこには言わずもがな削除人の姿が

「っ……!!」

直後、凄まじい爆音と爆風がこの狭い空間を蹂躪した。

凄まじい爆風が窓という窓全てを叩き割り、瓦礫を吹き飛ばす。

轟音が大地を揺るがし、爆炎が焼き尽くす。

そしてすべてが終わった時、立ち込めた煙が割れた窓から排出され、ようやく視界が開けてきたのは数分後の事。

生暖かく埃っぽい煙とは対称的な冷たい夜風が入れ替わりに流れ込む

「……行つたか」

最早誰の影もなくなったその場所で煙をかき分け現れたのは、腰まで届く黒髪を揺らしながら一点を見つめる少女……削除人だった。

「……いつまで経つても慣れないものだな、弱く振る舞うというのは」

体はあちこちが埃で汚れているものの、傷は一つもない

そして削除人は体についた埃を払おうともせずぽっかりと穴の空い

た窓から月を見上げ、誰に言つてもなく呟く

「　　まだ貴様らは本当の意味での削除人がどういうものか分かっていない、しかもその時がきたならば……花束くらいは送つてやるっ」

イベント？46 「ヒギニング・ウェイ」

深夜2時、ロスト学園サーバーエリアB、国道。

天蓋を塗り潰す漆黒の黒雲は天上の月や数多の星をも呑み込み、街灯や無人の建造物から漏れる無機質な明かりだけが辺りを照らし上げる。

その人工的な照明と暗晦の織りなすコントラストは、より一層周囲の闇を際立たせる。

不気味な静寂が辺りを包むこの空間……だが、その静寂はいとも簡単に、そこへ現れた者たちによって破られた。

「くっ……！」

スーツを身に纏ったOL風の女性が苦悶の声を漏らし、街灯に照らし上げられたアスファルトの道路の上を滑った。

結い上げた髪は乱れ息も荒く、顔には粒になった汗が滲み出ている。

女性の身に纏ったスーツはところどころが破けており、それによって露出した彼女の右腕にはプレイヤーの証である数字の紋様が刻まれていた。

「な……何をしてる！ 怯むな！ 攻撃の手を休めるな！」

スーツを身に纏ったサラリーマン風の男性が声を荒げて呼びかける。

よく見ると女性の周りには闇に紛れ、共に戦う者達がいた。

ある者は本来命を持たぬ物を操り、それを武器として戦う。

ある者は自らの力で武器を創り出し、それを手に取って戦う。

またある者は普通では想像もつかないような力を行使し、それを使って戦う。

プレートのレベルこそ1や2の比較的低レベルなプレイヤーだけで構成されてはいるが、彼らにはそれを補うほどのあるものがあった。

それはレベル1は勿論、作戦次第ではレベル2のルーザーさえも倒せてしまう圧倒的兵力。

彼らはこの世界に来てから比較的話の合う人間たちを集め、一種の勢力を成していたのだ。

……実際、彼らは負けなしかった。

端から見て目立つような行動はせず、油断しているプレイヤーは多勢で囲み、または言葉巧みに言いくるめ、それから殺害した。

途中メンバーの中に無暗な殺生を嫌う者もいたが、それですら彼らは容赦なく殺害した。

全て自分たちが生き残るため、自分たちの身を守る盾を失くしたくなかったがため、この群れを崩したくなかったがため……

しかし今日、そんな彼らの群れは終わりの時を迎えようとしていた

「フハハハハハ！ 平伏せ！ 愚民共！」

唐突に響き渡る夜の闇を切り裂く高笑い、そして高圧的な口調。

こういう時、いつも通りの彼らならば一言二言悪態をつけて鬱憤を晴らした後、集団でその声の主をリンチにして解決していたことだろう。

……だが、彼らにそれは出来なかった。

何故なら彼らには出会い、そして知ってしまったから。

本物の強者の存在を

「くっ……そおおおおおー！」

唐突に、彼らの中の一人が半ば自暴自棄に手に持った鈍器を振り回して、遠く離れた場所に立つ声の主へと特攻を仕掛けた。

……しかし彼が、声の主の元まで辿り着くことはない。

戦闘が始まった直後、勇み足で突っ込んでいったあの男のように。敵討ちと称し、怒り心頭で突っ込んでいったあの女のように……結局は皆等しくヤツに触れることもなく散っていく。

ヤツの？道？の前では、人は津波と対峙する蟻が如く、ちっぽけで無意味な存在。

そして最後まで臆病風に吹かれ前に出ることをしなかった彼ら蟻の行列も、じきに同じ道を辿る。

天災。

ヤツの存在を一言で表すとすれば、これしかないだろう。

「愚民共が！ 例え何人たりとも我がキングスウェイを汚す事は許されない！ それを知った上で尚王である我に刃を向ける不屈き者は その血を以て我が？道？を彩るがいい！」

声の主は天を仰ぎ、心底楽しそうに叫ぶ。

敵の力量も測れずに戦いを挑んだ愚かな蟻の集団 結局は彼らもヤツの進む？道？に過ぎなかつたのだ。

女軍人カチユーシャ率いるインペリアとの戦闘から早二ヶ月

俺たちがインペリアとの戦いで負った深手も癒え、新しく仲間に加わった尾羽梨真紀も大分2 - 1の風景に馴染んできた頃。

そんな俺たちを今、新たな危機が襲っていた。

「あ……見てください八伏先輩……部屋の中にてふてふが飛んでますよ……面白いですね……あははは……」

「……舞、千尋がとうとうヤバくなってきた」

「千尋さん、無理せずとも休んでいいですよ、……あれ、私の紅茶が紫色に」

「……」

現在の2 - 1教室の様子を一言で表すなら死屍累々、……まさにそんな感じだった。

虚ろな目で天井を見上げながら明らかにアレな笑い声をあげる高島千尋。

上半身をゆらゆらと揺らしながらティーカップの中身を覗き込む畝畑舞。

椅子に腰をかけ、右手に紙パックの林檎ジュースを握ったまま白目を剥く尾羽梨真紀。

早々に耐え切れず机の上で力尽きてしまった伊勢圭吾。

皆一様に目の下に酷い隈を作っており、一目で寝不足だということが窺えた。

「てふてふ！ てふてふ！ てふてふ！ てふてふ！」

……幼児体型なせいなのかは分からないが、千尋が一番重症であ

る。

尾羽梨と圭吾はすでにダウン、かろうじて理性を保っているのは俺と舞くらいだ。

「知ってますか八伏さん、紅茶には生卵を入れるとまるやかさが増すんですよ」

……訂正、舞ももう限界らしい。

「どうしてこんなことに……」

この燦々たる現状に思わず溜息と同時にそう吐き出す。

それから俺は視線をずらし、教室の隅に置かれたソファに目をやった。

「……」

そこにはソファの上で頭の上から布団をすっぽりと被り、俺たちよりも数倍酷い隈を作った美波の姿。

何かに怯えるように体をがちがちと震わせ、健康的だった顔色は今や病人のごとく白い。

事の発端は2日前の深夜。

なかなか寝付けなかった俺たちが2・1教室で暇を潰したところ、美波が途中でコンビニへ買い出しに出かけた。

美波はそれから数十分で帰って来たのだが、その時の美波は明らかに様子がおかしかった。

いつもクールな美波が、珍しく血相を変えて息を乱しながら2・1教室に駆け込むと、今のようにソファの上で布団にくるまって震え出したのだ。

……それからというもの、美波は一睡もしていない。
その身を案じた舞が部屋で寝ることを勧めたが、美波は激しく首
を横に振るだけで、ここから動こうとしないのだ。
さすがに心配に思った俺たちは、その日から全員寝ずに2・1教
室で美波を看病している……というのがこの事件の顛末なのだが、
やはり2日丸々不眠と言うのには無理があつたらしい。

「てふてふ！ てふてふ！」

「いつぬーのー尾羽梨さん、困ってしまったてわんわんわーん、わ
んわんわわーん」

ヤバい、舞がグロッキー状態の尾羽梨の事を弄り出した、そろそ
ろなんとかしなければ……

俺は意を決して席から立ち上がり、多少ふらつきながらも美波の
座るソファの前まで足を運ぶ。

そしてその場でしゃがみ、美波に視線を合わせて問いかけた。

「……なあ美波、一体何があつた？」

「……」

布団をすっぽりと被った少女は、更に縮こまるだけで口を開こう
としない。

「……言わないと冗談抜きでお前死ぬぞ、ほとんど丸二日飲まず食
わずで不眠不休じゃないか、それにお前がその状態だと色々……」

そう言って舞や千尋の方を一瞥してみせる。

するとそこで初めて、美波は俯いたまま言葉を発した。

「……お……け」

「……？」

声が小さくてよく聞き取れない、俺は耳を傾けて美波の発する言葉に意識を集中させる。

「……おばけ……」

「……おばけ？」

確かにそう聞こえた。

おばけ、と

「……一昨日……飲み物を買おうと思ってコンビニまで行った時……見ちゃったのよ……私……おばけ……」

美波はたどたどしく、震える声でそう言う。
にわかには信じがたい話だが……

「見間違い　とかじゃないんだな？」

一応確認、そういった意味合いを込めて尋ねてみると、美波はふるふると首を横に振った。

……そりゃそうだ、見間違いかどうか定かでないのなら、いつも冷静なあ的美波がここまで怯えるはずがない。

「おばけ　ですか、興味深いですね」

「うわ！？ 舞！？」

いつの間にか俺の背後に立っていた舞の声に俺はビクツと体を震わせてしまう。

しかし、舞はこちらの様子など意にも介せず、顎に手を当てて唸り始めた。

「おばけなんて非科学的存在……そう断ぜられればいいんですがねえ、実際？見た？という人がいて完全に否定することが出来ない以上、そう決めつけることはできません」

舞は頭を捻り、そしてしばらく考えてから

「でも、この世界ならそれは別です。そういう事はよく知っている人に聞きましょう」

「……え？」

舞はそう言って踵を返すと、何を思ったのかくると後ろに向き直る。

そして舞の視線の先に立っていたのは

「……何か用か」

腰まで届くつややかな黒髪、俺たちの着る制服とは少し異なった黒を基調とした学生服、そして極めつけは鷹のように鋭い眼光。

そう 削除人の姿が、そこにはあった。

「！！？」

余りにも予想外な人物の登場に俺は思わず仰け反り、床に手を叩いてしまう。

「……相変わらずのオーバーアクションだな、八伏恭介」

「お、お前の登場が毎回突拍子も無さすぎるんだよ！ 今度からはSEでも付けて登場しろ！ 今日は一休何しに来た！」

「まあまあ八伏さん、こちらからルール違反をしない限りは何もしてこないわけですし、今は貴重な情報源です。ですよ、削除人さん？」

「……この世界の根幹に関わる質問、プレイヤー一人一人の情報、それ以外の質問には公平を期すため答えなければいけない義務があるのでな……ただ私とて暇ではない、手短に済ませろ」

「……さすが最古参プレイヤー、と言うべきだろうか。」

あの削除人を前にしてここまで冷静に、そして対等に会話をしている。

「では早速質問です。削除人さん、？この世界に幽霊、又はその類が存在していますか？？」

舞は要点だけを纏め、それを削除人に質問として投げかける。

「……すると、それを聞いた削除人は顔をしかめ、まるで汚物を見るような目でこちらを見下した。」

「まさかそんな下らない事を聞く為だけに私を呼んだのか……？」

「下らなかるうが何だろが答えられない質問ではないでしょう？」

削除人の鋭い眼光に、舞は微塵も臆する様子を見せず、そう返す。すると削除人は小さく一つ息を吐き出し、淡々と告げた。

「単刀直入に言えば、答えは？NO？だ。

貴様らがいた元の世界ではどうだったか知らんが、この世界では幽霊などという曖昧な物は存在しない

何故ならこの世界で死んだ人間はメンテナンス時に？モノ？と判断され、この世界から抹消されるからだ。

それが魂だろうが何だろうが例外はない、その人間の生きた痕跡全てが消えてなくなる」

「ふむ、そうですか……」

「……が、水ヶ沢美波が見たモノについて知らないわけではないな」

「な！？ 本当か！？」

俺は思わず声を荒げ、削除人に問いかけた。

しかし削除人は相も変わらずの無感情に言う。

「知ってはいるが教えられない　これが答えだ八伏恭介」

「な……！？ それはどういう」

そこまで言いかけて削除人の姿は唐突に視界から消えた。

左右上下加えて前後、どこを見渡しても削除人の姿はない。

「くっ……！！　いつも肝心なところでいなくなりやがって……！！」

「……いえ、私にはなんとなく分かってきましたよ、……八伏さん、ちよつとお願いがあります」

「あ、ああ……何だ？」

舞は俺に背を向け、その場から歩み出して廊下に出る。

一体何をお願いされるのだ……？

そう思いながら身構えていると、目の下に隈を作ったその金髪の少女は顔だけをこちらに振り向かせ、そしていつものように天使のような笑顔で……

「夜中の2時になったら起こしてくださいね」

……最後にそれだけを言い残し、舞は視界から姿を消してしまつた。

「ええー……」

「てふてふ！ てふてふ！」

壊れたラジオのように同じ単語を繰り返す千尋の声だけが、取り残された俺の頭に響き渡つた

イベント?46 「ヒギニング・ウェイ」(後書き)

てぶてぶ! てぶてぶ!

「……」

校舎3階、2-1教室。

窓の外から見える景色は黒一色に染まり、時計の針はすでに深夜の2時を過ぎて、ただただ静寂に包まれた空間を秒針の時を刻む音だけが反響する。

椅子に腰をかけたまま気絶していた尾羽梨真紀が目を覚ました時、目の前の状況を理解するにはしばらくの時間を要した。

まず初めに目に入ったのが机に突っ伏した体勢のまま荒縄で全身を椅子に縛り付けられ、それでも尚心地よさそうに寝息を立てる伊勢圭吾。

次にソファの上で布団にくるまりながら気絶している水ヶ沢美波、そして最後は……窓に寄りかかって気を失っている高島千尋だ。

ちなみに高島千尋の人差し指は曇った窓ガラスに「てふてふ」の四文字によるダイニングメッセージを記している、意味不明。

「なんだこの状況……」

アタシ、尾羽梨真紀は寝起きでこのような光景を見せられ、現在進行形で混乱中だ。

そしてしばらくしてから悟る。

「……うん、諦めよう」

これは訳の分からない状況だ。

そう自己完結することで理解することを放棄し、渴いた喉を潤す

ために右手で握り締めた紙パックの林檎ジュースを口の近くまで運ぶ。

それからストローを咥え込み、いつものように内容物を吸いだし
て……

「ブーーーーッ!？」

……勢いよく嘔き出した。

無防備だった舌を襲う圧倒的な酸味に悶え、何度も咳き込み、そして若干涙目で握り締めた紙パックを凝視する。

そこに描かれていたのはいつもの瑞々しい林檎の絵ではなく、ただ真っ黒な背景の中心に堂々と「酢」 その一文字が、全てを物語っていた。

「ッ! んな手の込んだ事すんのは舞だな!? 畜生どこから見つけてきたんだこんなの!」

握り締めたソレを思い切りテーブルに叩き付け、乱暴な言葉で捲し立てながら弄られたことに腹を立ててその場から立ち上がるうとして

「ぐえっ!？」

何か強い力で背後から首を引っ張られ、強制的に再び椅子へ座らされる。

余りの衝撃に思わず一瞬だけ視界が真っ白になったが、首に纏わりつく冷たい感触によって、すぐにこちらの世界へ引き戻される。ひとまず呼吸を整え、首に触れる。

……すると、そこにはよく犬の首に巻かれている……俗に言う? 首輪? がはめられていた。

そしてそのふざけた物に繋がれた鎖を視線で追っていくと……ソ
レは机の脚にがんじがらめになっており、ご丁寧に錠までかけてあ
る。

更にその錠には貼り紙が貼り付けられており、そこには柔らかく
そして丁寧な文字で、こう記されていた。

「おやつは机の上に置いてありますからね？」

怒りにかたかたと震える肩を抑えつけながら机の上に目をやる。

そこに置かれていたのは一枚のビーフジャーキー、しかも机の上
に直置き。

「舞——————ッ!」

セルフエコーでお楽しみください。

エリアC、校舎から十数分ほど歩いた場所にある公園にて

「やっぱり猫は可愛いです……八伏さんもそう思いますよね？」

「ああ……確かに眠いな……」

微妙に、というかもはや芸術的なまでに噛み合っていない会話。それはやたら艶々とした笑顔でベンチに腰を掛け野良猫と戯れる舞と、隣で目の下に真っ黒な隈を浮かべた俺とを見比べてくれれば一目瞭然だと思う。

結局あの後舞は自分の部屋、すなわち2-2教室まで戻ってベッドに仰向けに寝転がったと思ったら、あっという間に熟睡。

俺も自分の部屋で眠りたいのはやまやまだったが、なにせあんなラリった状態の千尋と怯える美波を放っておくわけにもいかず結局はすーすーと寝息を立てる舞に背を向け、2-1教室へと戻った。

それからは一睡もせず二人の見張り、俺は寝てるのか起きているのかも曖昧な極限の中で過ごし……気付けば深夜の2時。

するとあれほどぐっすり眠っていた舞は、俺が呼びかけた訳でもないのにぴったり深夜2時に目を覚まし、何も告げぬまま寝不足な俺の手を引いて校舎を飛び出した。

そして現在に至る……というわけである。

「つれませんねえ八伏さん、女性と二人きりで深夜に外を出歩いてるんですよ？ 舞さんの方が可愛いんです？ くらい気の利いた事言ってくれませんか」

「……すまない、もうそのポケに対する上手い返しも思いつかない、……早く帰って寝たい」

「前から思っではいましたけど八伏さんは女性の扱いがぞんざいですよね……いえ、ぞんざいですよ」

「……さすがにそれはあざといぞ、マイナス30点」

「残念です」

舞は冗談っぽくそう言っただけでクスリと微笑む。

……毎度のことながら本当に掴みどころのない人だ。

「でも確かに睡眠不足はよくありませんね、……紅茶でも飲みますか？」

「あー……あるなら欲しいな、なにかしてないとそのまま倒れそうだ」

「はい、では少し待っていてくださいね」

舞は膝の上に乗った三毛猫をゆっくりと地面に下ろしてやると、手に提げたハンドバッグから小さなお茶筒とカップを取り出し、お茶の準備を始めた。

……と言ってもお茶筒の中にはすでに出上がった紅茶が入っているらしく、舞はそれを手際よくカップに移して俺に手渡す。

「どうぞ、熱いので気を付けてください」

「どうも」

差し出されたカップを受け取り、短い感謝の言葉を終えてからそのまま口まで運ぶ。

カップに注がれた紅茶はまだほのかに白い湯気を立ち上らせており、紅茶特有の香ばしい香りが鼻孔をくすぐった。

そして存分に香りを楽しんだところで俺はカップに口をつけ、紅茶を啜る。

味の方は言わずもがな。

「……うん、やっぱり美味しいな、舞の紅茶」

「そうでしょう、伊達に紅茶好きを名乗っているわけじゃありませんからね」

いつの間にか舞も、もう一つ自分用に用意したのであろうカップを持ち、いかにもお嬢様というような感じで優雅に紅茶を啜っていた。

紅茶を飲む姿がこれほど様になっているのは、少なくとも俺はこの人しか知らない。

「ちなみにこれは畝畑舞特製のブレンド紅茶です。試験的に試してみたんですがどうでしょう?」

「どつりで、俺はそれほど紅茶に詳しくはないが、なかなか良いと思うぞ、……よし、舞には紅茶中毒テイ・ジャンキの称号を与えよう」

「褒め言葉として受け取っておきますね」

いつものようににっこりと柔和な笑みを浮かべ、舞は飲み終えて空になったカップを片付けていく。

「そういえば舞っていつも紅茶飲んでるけど……好きなのか? 紅茶」

ふと、そんな話のネタにもならないような素朴な疑問を舞に投げかける。

すると舞は意外にも少し悩むような素振りを見せ、僅かに首を傾けた。

「どつでしよう? 好き、というよりも気付いたら飲んで……」

そんな感じですね」

「……」

「さて、そんなことよりそろそろ出発しましょう、余り時間をかけすぎては夜が明けてしまいますからね」

気付けば、舞はいつも通りの完璧なまでの微笑みを浮かべていた。……俺がこの世界で暮らし始めてから早いものでもう数か月が経つ。

長いようで短いような時間……それまでの間、俺は皆の色々な表情を見てきたつもりだ、それは勿論舞とて例外ではない。

なのに何故だろう？

何故、さっきの舞が見せた表情に対して、何とも言えない違和感のようなものがこみあげてくるのだろうか。

「さあ、八伏さん行きましょう」

不意に、地面に向けていた俺の視界の中に細く白い手が差し伸べられた。

見上げてみると、そこにはいつも通りの微笑みを浮かべた舞の顔がある。

「……考え過ぎか」

舞には聞こえないようボソリと呟き、差し出された手へ添えるように右手を置いてベンチから立ち上がる。

舞の手は思ったよりも冷たく、おかげですっかり目も覚めてしまった。

俺は何も知らされていないが、舞曰く時間はあまりないらしい、

ならこんなところで道草を食っている場合は……

「お、恭介と舞じゃないか、こんな夜遅くに何やってるんだい？」

唐突に背後から名前を呼ばれる。

この声、聴き覚えがある………というか忘れるはずがない。

俺は咄嗟に声のした方向、すなわち背後に振り向いて　そして
声の主を視界に捉えた。

「久しぶりだね！」

俺の視線の直線上に立つて、まるで旧友にするような挨拶をしてくる豪快な女性。

太腿を大きく露出し活発な印象を持たせるホットパンツ、豊かなバストを浮き彫りにする見るからに安っぽい白地のTシャツ、そして極めつけは頭頂部から雑草よろしく飛び出した一本のアホ毛。

コイツは……

「……くるみか」

そう、女性の名は船坂くるみ。

あの女軍人カチューシャ率いるインペリアのメンバーであり、自身の数倍もある大きさの石塊をいとも容易くぶち抜くような人間離れした怪力を持つ冗談みたいな少女……それが彼女だ。

「あれ？　案外反応薄いねえ、アタイはてつきり「仲間の仇！」とか言っつて突っ込んでくるもんだと予想してたんだけど」

「いくら昔敵だったとしてもお互い戦意がない以上、俺にとってお

前はただの顔見知りだよ」

「なるほどねえ……うんうん！ やっぱり男はそれくらい豪快な方が好みだよ！」

豪快……とは少し違う気がするが。

そう反論する余地も与えず、くるみはにっかりと笑みを浮かべて一人納得する様に首を縦に振っている。

「……というか、さっきから気になってたんだけどソレ……何だ？」

「ん？」

くるみは俺が突き出した人差し指の示すものを目で追う。

俺の指が指していたものは、くるみの肩にもたれかかる何か。具体的にはぐったりと頂垂れ、くるみの肩を借りることと何とか大地に二本の足で立つことが出来ている小柄な軍服の少女の事だ。

「ああ、アリシアの事かい？ ……まあこつちも色々あってね」

くるみはそう言って珍しく苦笑する。

くるみに寄りかかる軍服の少女、アリシア・ハリソンは声を発することもできないらしく、いかにも満身創痍と言った感じだ。

外傷は見たところ一つもないようだ……まあ彼女らにも色々あるのだろう、余計な詮索はしないでおく。

「本当の事を言つと恭介の事をぶん殴りたくてうずうずしてるんだけど……生憎、あんまり遅くなると姉御に叱られるんでね……というわけでアタイはこのへんで！」

くるみは最後に言いたいことだけを並べ、俺たちに背を向ける。そしてそのままアリシアと共に……というよりもむしる引きずりながら、俺たちの視界から姿を消した。

「……なんか去り際とんでもない事言っただけじゃなかったか」

「ああ、あれは彼女なりの愛情表現ですよ、おそらくあの力チユーシヤさんと善戦したのが評価されているのではないのでしょうか？」

「どつちにしろ悪いわ……」

……なんだかやる気をこっそり持って行かれた気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6603v/>

終わった世界のプロタゲニスト

2012年1月5日00時47分発行